

(大町市埋蔵文化財調査報告書第14集)

長野県大町市埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書

来見原遺跡II

1988

大町市教育委員会

長野県大町市埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書

来見原遺跡 II

1988

大町市教育委員会



来見原遺跡発掘調査区全景
(南方より、中部電力株式会社
協力)

序

今回ここに報告する発掘調査は、昭和52年県営ほ場整備事業に伴う調査に初まったものであり、2次目となり、大町、来見原・大笹が平地区県営ほ場整備事業の最終対象地域に設定されたものであります。当地区の考古学的価値を理解される方々の多大なご尽力によって開始されましたが、ここにこの緊急発掘調査報告書にまとめあげることができました。

この調査は約半年の期間でありましたが、考古学的に極めて意義深い調査結果を得ることができました。調査の結果来見原遺跡からは、弥生時代～室町時代の遺産が各時代の土層ごとに重複して検出され、昭和52年1次調査の予想をはるかに上まわる大規模な遺跡の存在が確認されたわけであります。この調査は、私達に学術的・歴史的に日本人の主食である米が大町で作られ初めた時代のことなど貴重このうえない資料を提供してくれました。同時に私達大町市の歴史に貴重なる1ページを加えることができたといえます。

調査に関しては、この仕事に直接あたってくださった調査団長や先生方、さらに酷暑のなかを熱心に作業に身を投じてくださった作業員のみなさん、学生諸君の多大な御尽力によって当初の目的を達することができました。

この調査に当たり、調査団員の方々、作業員のみなさん、地主及び地元関係各位の多大な御尽力によって終始滞りなく全てを完了できましたことに重ねて感謝を申しあげ、ここに深甚なる敬意を表する次第であります。

昭和63年3月

大町市教育委員会

教育長 一 志 開 平

例 言

1. 本書は、昭和61・62年度に北安曇地方事務所長と、大町市教育委員会教育長との契約に基づいて行なわれた、県営は場整備事業に伴う緊急発掘調査「来見原遺跡Ⅱ」の報告書である。
2. 調査にあたっては、大町市教育委員会が組織した大町市埋蔵文化財調査団により実施された。
3. 本調査書は、多くの学識経験者、市民、関係機関諸氏の協力からなったものである。
4. 調査結果については、検討会で何回か協議を重ねたが、時間的・金銭的制約があり統一見解に至らなかった。基本的事項の統一はできる限り図ったが、表現方法等に多少の相違がある点は了解されたい。また、時間的制約等により遺物等がすべて提示できなかったものがあること、図中心の報告書となってしまったことを了解されたい。
5. 整理作業と原稿執筆は、関係者全員の協議により決定し、執筆分担は文末に記した。
 - 遺構の測量は、荒沢進・島田哲男・関賢司・山岸洋一・太田哲男・国村ゆかり・新井和男・横沢和子・坪井薫が分担した他、一部市川隆之氏・木村隆一氏・大町北高校生徒の協力を得た。トレースは、島田・新井・横沢・棟友美咲・北沢和子が行なった。
 - 遺跡の地形、地質、環境と出土遺物のうち炭化物等については、森義直が専ら行なった。
 - 遺物整理・復元作業は島田・新井・横沢・北沢・棟友・坪井・荒井せつ子・中村志津代・金原隆子が行なった。遺物実測は、島田が専ら行ない一部竹原学氏・山下泰永氏の協力を得た。拓本については、島田指導のもと北沢が行なった。トレースは、島田・新井・横沢・北沢が行ない、一部竹原・山下両氏の協力を得た。
 - 遺構・遺物については島田が専ら行なった。
 - 遺構写真撮影は島田が専ら行なった他、新井が一部分担し、遺物写真撮影と写真図版の作成は新井が担当した。
6. 本書の方位は座標北であらわし、測量の基準点は大町市都市計画図により求め設置した基準点A ($X = +57628.297$ ・ $Y = -56865.942$) を使用した(真北方向角 $= +0^{\circ}22'40''$.4である)。標高は国家二等水準点(4317)・ $H = 749.5081\text{m}$ から基準点Aに水準測量により移設した $H = 735.187\text{m}$ を使用した。
7. 遺跡図のうち平面図内の一点破線は、床面の堅い部分を示し、二点破線は粘土(黄色及び灰白色)のみの貼床、三点破線は粘土と他の土(黒褐色土及び暗褐色土)混合の貼床を表わしている。またドットは焼土を、点のスクリーン・トーンは粘土を表わしている。石器実測図の矢印は使用痕、点破線の矢印は敲打痕、一点破線の矢印は磨痕を表わしている。
8. 本書の編集は、全員協議のもと事務局で行ない、篠崎健一郎が総括した。
9. 本報告書関係の実測図・記録写真・遺物等は全て、大町市教育委員会が保管している。なお、関係資料については三日町来見原遺跡大笹地籍を略してMKOと注記した。

本文目次

序	
例言	
第I章 調査の経過	1
第1節 経過概要	1
1. 調査に至るまでの経過	1
2. 調査計画の変更とその後の経過	1
第2節 調査体制	3
1. 調査体制	3
2. 調査協力者	4
第3節 調査日誌	4
第4節 発掘調査と整理の方法	9
1. 発掘区の設定	9
2. 発掘調査の方法	9
3. 測量方法	14
4. 整理方法	15
第II章 遺跡の立地と環境	16
第1節 遺跡の地形と地質	16
第2節 周辺遺跡	20
第III章 遺構と遺物	28
第1節 概要	28
第2節 縄文時代晩期の遺物	30
第3節 弥生時代中期の遺構と遺物	30
1. ピット	30
2. 焼土・配石	32
3. 集石・列石	34
(1) 中期前半の集石	
(2) 中期前半の列石	
(3) 中期後半の集石	
4. 河川跡	42
5. 遺物の出土状況	43
6. 遺物	48

(1) 土器	(2) 石器	
第4節	古墳時代中・後期の遺構と遺物	62
1.	住居跡	62
(1)	10号住居跡	
2.	集石	62
3.	土器集中出土地点	70
4.	遺物の出土状況	71
5.	遺物	72
第5節	奈良・平安時代の遺構と遺物	77
(1)	11号住居跡 (2) 9号住居跡 (3) 3号住居跡 (4) 6号住居跡 (5) 12号住居跡	
(6)	13号住居跡 (7) 1号住居跡 (8) 7号住居跡 (9) 8号住居跡 (10) 2号住居跡	
(11)	4号住居跡 (12) 5号住居跡	
2.	竪穴	98
(1)	竪穴2	
3.	ピット	100
4.	集石(灰釉陶器皿単独出土地点)	100
第6節	中世の遺構と遺物	109
1.	竪穴	109
(1)	竪穴1	
2.	建物跡	109
(1)	建物跡1 (2) 建物跡2 (3) 建物跡3	
3.	柱列	113
(1)	柱列1 (2) 柱列2	
4.	集石土壙(P50)	113
5.	火葬墓(P87)	115
6.	土壙	115
第7節	河川跡・その他の遺物	117
1.	河川跡	117
2.	その他の遺物	117
第8節	炭化物・骨類について	118
第IV章	結語	119

付・来見原のむかしむかし

目 次

第 I 章

図 1	来見原遺跡付近ほ場整備事業施行計画図 (1 : 5,000)	2
図 2	来見原遺跡発掘区地形図 (1 : 800)	10
図 3	来見原遺跡発掘区割図(1) (1 : 2,500)	11
図 4	来見原遺跡発掘区割図(2) (1 : 800)	12
図 5	弥生時代層確認グリット遺物出土量図 (1 : 800)	13

第 II 章

図 6	来見原遺跡土層断面図 (1 : 800, 1 : 80)	18・19
図 7	南部トレンチ・グリット調査区土層柱状図	17
図 8	来見原遺跡周辺の遺跡 (1 : 10,000)	21・22
図 9	1977年度調査区集石 (1 : 40)	25
図 10	来見原遺跡既出遺物・周辺古墳出土遺物 (1 : 4, 1 : 2)	26

第 III 章

図 11	南部トレンチ調査区 (1 : 800)	29
図 12	縄文時代晩期末土器実測図 (1 : 4), 拓影図・土製品実測図 (1 : 3)	30
図 13	弥生時代中期前半調査区全体図 (1 : 400)	31
図 14	弥生時代中期前半ピット, P89・90 (1 : 40)	32
図 15	弥生時代確認グリット 9・14, P91・92 (1 : 80)	33
図 16	弥生時代中期前半配石・焼土 (1 : 40)	32
図 17	弥生時代中期前半集石全体図(1) (1 : 80)	35
図 18	弥生時代中期前半集石全体図(2) (1 : 80)	36
図 19	弥生時代中期前半集石全体図(3) (1 : 80)	37・38
図 20	弥生時代中期前半集石全体図(4) (1 : 80)	39・40
図 21	弥生時代中期前半集石(1) 集石 1・3・5・6・7 (1 : 40)	41
図 22	弥生時代中期前半集石(2) 集石 8 (1 : 40)	42
図 23	弥生時代中期前半列石断面図 (1 : 40)	42
図 24	弥生時代層確認グリット 5, 弥生時代中期後半集石 (1 : 60)	44
図 25	弥生時代中期前半土器出土分布図 (1 : 600)	45
図 26	弥生時代中期前半原石・剥片出土分布図 (1 : 600)	46
図 27	弥生時代中期前半石器出土分布図 (1 : 600)	47
図 28	弥生時代中期前半土器拓影図 (1 : 3)	50
図 29	弥生時代中期前半土器拓影図 (1 : 3)	51
図 30	弥生時代中期前半土器拓影図 (1 : 3)	52
図 31	弥生時代中期前半土器拓影図 (1 : 3)	53

図 32	弥生時代中期前半土器拓影図 (1 : 3)	54
図 33	弥生時代中期前半土器拓影図 (1 : 3)	55
図 34	弥生時代中期前半土器拓影図 (1 : 3)	56
図 35	弥生時代中期前半土器拓影図 (1 : 3)	57
図 36	弥生時代中期前半土器拓影図 (1 : 3)	58
図 37	弥生時代中期前半土器拓影図 (1 : 3)	59
図 38	弥生時代中期前半土器拓影図 (1 : 4)	60
図 39	弥生時代中期後半土器拓影図 (1 : 3) , 実測図 (1 : 4)	61
図 40	古墳時代調査区全体図 (1 : 400)	63・64
図 41	古墳時代集石全体図(1) (1 : 80)	65・66
図 42	古墳時代集石全体図(2) (1 : 80)	67
図 43	古墳時代集石, 集石 1・2・3・4 (1 : 40)	68
図 44	古墳時代集石, 集石 5・6・7・8 (1 : 40)	69
図 45	古墳時代列石 (1 : 40)	70
図 46	古墳時代土器集中地点 (1 : 40)	72
図 47	古墳時代土器出土分布図 (1 : 600)	72
図 48	古墳時代土器実測図 (1 : 4)	74
図 49	古墳時代須恵器実測図 (1 : 4)	73
図 50	奈良・平安時代調査区全体図 (1 : 400)	75・76
図 51	11号住居跡 (1 : 80)	78
図 52	11号住居跡炭火材・礫・遺物出土状況 (1 : 80)	78
図 53	11号住居跡カマド (1 : 40)	79
図 54	11号住居跡北側外炭化物出土状況 (1 : 2)	80
図 55	3号住居跡 (1 : 80)	81
図 56	3号住居跡礫・炭化物・遺物出土状況 (1 : 80)	81
図 57	3号住居跡カマド (1 : 40)	82
図 58	6号住居跡 (1 : 80)	83
図 59	6号住居跡礫・遺物・炭化物出土状況 (1 : 80)	84
図 60	6号住居跡カマド	85
図 61	12号住居跡 (1 : 80)	86
図 62	13号住居跡 (1 : 80)	86
図 63	13号住居跡礫・炭化物・遺物出土状況 (1 : 80)	87
図 64	13号住居跡カマド (1 : 40)	87
図 65	1号住居跡 (1 : 80)	88
図 66	1号住居跡礫・遺物・炭化物出土状況 (1 : 80)	88
図 67	1号住居跡カマド (1 : 40)	89
図 68	7号住居跡 (1 : 80)	90
図 69	7号住居跡炭火材・焼土出土状況 (1 : 80)	90

図 70	7号住居跡カマド (1 : 40)	91
図 71	8号住居跡 (1 : 80)	92
図 72	8号住居跡礫・遺物・粘土出土状況 (1 : 80)	92
図 73	8号住居跡カマド (1 : 40)	92
図 74	2号住居跡・P 1・2・31 (1 : 80)	93
図 75	2号住居跡炭化材・礫・遺物・焼土出土状況 (1 : 80)	94
図 76	2号住居跡カマド (1 : 40)	95
図 77	4・9号住居跡 (1 : 80)	96
図 78	4号住居跡礫・炭化物, 遺物出土状況 (1 : 80)	96
図 79	5・10号住居跡・P86 (1 : 80)	97
図 80	5号住居跡炭化材・焼土出土状況 (1 : 80)	97
図 81	5号住居跡カマド (1 : 40)	98
図 82	5号住居跡北西隅施設 (1 : 40)	98
図 83	竪穴 2 (1 : 80)	99
図 84	竪穴 2 大甕出土状況 (1 : 20)	99
図 85	P 2 (1 : 40)	100
図 86	P 3 (1 : 40)	100
図 87	P32・33 (1 : 40)	100
図 88	平安時代集石 (1 : 40)	101
図 89	平安時代集石周辺 (1 : 80)	101
図 90	灰釉陶器皿単独出土地点出土状況 (1 : 10)	101
図 91	平安時代土器実測図 (1 : 4)	102
図 92	平安時代土器・石器実測図 (1 : 4)	103
図 93	奈良・平安時代土器実測図 (1 : 4)	104
図 94	平安時代土器実測図 (1 : 4)	105
図 95	奈良・平安時代木器・土製品・鉄器実測図 (1 : 1, 1 : 2)	106
図 96	中世調査区全体図 (1 : 400)	107・108
図 97	竪穴 1 及び周辺ピット (1 : 80)	110
図 98	建物跡 1 及び周辺ピット (1 : 80)	111
図 99	建物跡 2 及び周辺ピット (1 : 80)	111
図 100	建物跡 3・柱列 2 及び周辺ピット (1 : 80)	112
図 101	柱列 1・P 50 及び周辺ピット (1 : 80, 1 : 40)	114
図 102	火葬墓 (P87) (1 : 40)	115
図 103	中世出土遺物 (1 : 4, 1 : 2)	110
図 104	河川跡検出状況 (1 : 600)	117

写 真 目 次

- 巻頭図版 来見原遺跡発掘調査区全景（南方より、中部電力株式会社協力）
- 写真 1 1 遠景（南方より） 2 近景（南方より） 3 遠景（発掘調査終了後、南方より）
- 写真 2 発掘区全景（古墳時代～中世面調査時、北方上空より、中部電力株式会社協力）
- 写真 3 発掘区全景（古墳時代～中世面調査時、東方上空より、中部電力株式会社協力）
- 写真 4 弥生時代中期前半調査面全景（南方より）
- 写真 5 1 土層（北部） 2 土層（南部） 3 弥生時代中期前半調査面全景（北方より）
- 写真 6 弥生時代中期前半 1 調査面全景（北方より） 2 調査面全景 3 調査面全景
（南方より）
- 写真 7 弥生時代中期前半 1 P89 2 P90 3 配石・焼土及び周辺全景（西方より）
4・5 配石検出状況 6・7 配石精査後
- 写真 8 弥生時代中期前半 1・2・3 配石周辺遺物出土状況 4 集石1 5・6 集石
1遺物出土状態 7 集石3遺物出土状態 9 集石4 10
集石5 11・12 集石5周辺遺物出土状況
- 写真 9 弥生時代中期前半 1 集石5遺物出土状態 2 集石6 3・4 集石8 5・
6 列石（西方より）
- 写真 10 弥生時代中期前半 1 列石（南方より） 2～7 列石細部
- 写真 11 弥生時代中期前半 1～9 列石遺物出土状況 10 弥生確認グリット17 P91・P92
（東方より）
- 写真 12 1 縄文晩期土器出土状態 2～8 弥生中期前半土器出土状態 9・10 弥生中期前
半石器出土状態
- 写真 13 弥生時代中期後半 1～3 集石（弥生確認グリット5、西方より）
- 写真 14 弥生時代中期後半 1 集石（弥生確認グリット5 西方より） 2～3 集石遺物出
土状態 5・6 弥生後期～古墳時代前期河川跡断面
- 写真 15 古墳時代 1 集石群全景（西方より） 2 集石群南部全景（西方より） 3 集
石群北部全景（西方より）
- 写真 16 古墳時代 1・2 古墳時代集石群北部全景 集石1・3～6 列石（北方より）
3 古墳時代列石 集石4（西方より）
- 写真 17 古墳時代 1 集石8周辺（西方より） 2 集石1 3 集石2 4 集石3
5 集石5 6 集石6 7 集石8
- 写真 18 古墳時代 1・2 土器集中 1～4 集石内土器土状態
- 写真 19 古墳時代 1～8 集石内及び周辺土器出土状態
- 写真 20 平安時代 1 古墳時代～中世面調査全景（調査風景 北方より） 2 1号住居跡礎
遺物出土状態（北方より） 3 1号住居跡（北方より）
- 写真 21 平安時代 1・2 1号住居跡カマド 3・4 1号住居跡カマド石組 5 1号住

		居跡 P 2	6	1号住居跡内 P 5	7	1号住居跡砧出土状態	8	1号住居跡土器出土状態	9	1号住居跡カヤ状炭化物出土状態							
写真 22	平安時代	1・2	2号住居跡炭化材出土状態（北方より）	3	2号住居跡カマド検出状態	4	炭化材中鉄鎌出土状態										
写真 23	平安時代	1	2号住居跡 P 1・2・30（北方より）	2	2号住居跡 P 88（北方より）	3	2号住居跡カマド石組	4	2号住居跡柱根								
写真 24	平安時代	1	3号住居跡礫・遺物出土状態（西方より）	2	3号住居跡（西方より）	3	3号住居跡カマド及び礫出土状態	4・5	3号住居跡カマド								
写真 25	平安時代	1	3号住居跡櫛出土状態	2	3号住居墨書土器出土状態	3	4号住居跡礫、遺物出土状態	4	4号住居跡（北方より）								
写真 26	平安時代	1・4	9号住居跡（北方より）														
写真 27	平安時代	1	5号住居跡遺物・礫出土状態（北方より）	2	5号住居跡・10号住居跡 P 86	3・4	5号住居跡カマド										
写真 28	平安時代	1・2	5号住居跡北西隅施設	3	5号住居跡 P 5	4	5号住居跡土器出土状態	5	10号住居跡（古墳時代）（北方より）	6	6号住居跡礫出土状況（南方より）						
写真 29	平安時代	1	6号住居跡遺物・礫出土状態（南方より）	2	6号住居跡礫細部	3	6号住居跡カマド	4	6号住居跡礫細部	5	6号住居跡炭化材出土状態						
写真 30	平安時代	1	6号住居跡	2	6号住居跡カマド	3	6号住居跡カマド及び P 6 配石	4	カマド石組	5	6号住居跡配石	6	6号住居跡土器出土状況				
写真 31	平安時代	1	7号住居跡炭化材出土状況（北方より）	2	7号住居跡（北方より）	3	7号住居カマド	4	カマド石組								
写真 32	平安時代	1	8号住居跡礫・遺物出土状況（北方より）	2	8号住居跡（北方より）	3	8号住居カマド	4	カマド石組								
写真 33	奈良時代	1	11号住居跡炭化材出土状況（西方より）	2	11号住居跡（西方より）	3	11号住居跡カマド及び礫出土状況	4	11号住居跡カマド								
写真 34	奈良時代	1	11号住居跡カマド上炭下材出土状態	2・3	11号住居跡カマド石組	4・5	11号住居跡遺物出土状況	6	11号住居跡編み物用石錘と思われる礫出土状況（P 3）	7・8	11号住居跡北西外輪上炭化物出土状況	9	11号住居跡北東外鉄鎌出土状況				
写真 35	平安時代	1	12号住居跡（西方より）	2	13号住居跡礫遺物出土状況（南方より）	3	13号住居跡（南方より）										
写真 36	平安時代	1・2	13住カマド	3	竪穴 2 礫 遺物出土状況（南方より）	4	竪穴 2（南方より）										
写真 37	平安時代	1	竪穴 2 大甕出土状況	2	P 2	3	P 3	4	P 33	5	P 88	6	集石（西方より）	7	集石	8	集石南側灰釉陶器皿単独出土状況

- 写真 38 中世 1 竪穴1及び周辺P4～6・29・30・51(西方より) 2 竪穴1(西方より)
3 竪穴1内、平石・青磁・砥石出土状況 4 P4・5・6
- 写真 39 中世 1 建物跡1(南方より) 2 建物跡1(西方より) 3 建物跡2(西方より)
- 写真 40 中世 1 建物跡3(東方より) 2 P70～75(東方より) 3 建物跡3 住列
2及び周辺ピット(南方より) 4 柱列1 P50周辺ピット(西方より)
- 写真 41 中世 1 P50集石 2 P87(火葬墓)検出状況 3 P87 4 P86 5
トレンチ調査区(7トレンチ) 6 トレンチ調査区(5トレンチ) 7 5
トレンチ土層
- 写真 42 弥生時代中期前半土器 1～5 甕 6 壺
- 写真 43 弥生時代中期前半土器 1～6・8・9 壺 7 異形土器
- 写真 44 弥生時代中期前半石器 石鏃(約1:1)
- 写真 45 弥生時代中期前半石器 1 石錐 2 石匙 3 有孔磨製石斧 4 スクレイパー
(約1:1)
- 写真 46 弥生時代中期前半石器 ピエス・エスキュー(楔形石器)(約1:1)
- 写真 47 弥生時代中期前半石器 石鏃 有肩肩状石器
- 写真 48 弥生時代中期前半石器 1 磨製石包丁 2 石鎌 3 打製石包丁 4 磨製石
斧 5 旧石器時代石刃 6 石鏃の石核 7 土製紡垂
車
- 写真 49 1 弥生時代中期前半石器・磨石 石皿 2～5 弥生時代中期前半土器底部・布圧痕
- 写真 50 1～3 弥生時代中期前半土器に残るモミ痕 古墳時代土師器・黒色土器 4 甕
5 壺 6 杯 7～10 古墳時代須恵器 7～9 竅 10 蓋
- 写真 51 古墳時代須恵器 1 蓋・杯類 2 竅類
- 写真 52 奈良平安時代土器 1 1号住居跡出土黒色土器杯 2～5 3号住居跡出土 2・3
黒色土器・杯 2 刻書土器 3 墨書土器 4 灰釉陶器皿 5
土師器小形甕 6 8号住居跡出土灰釉陶器 7 11号住居跡出
土須恵器大甕 8 13号住居跡出土土師器小形甕
- 写真 53 1 灰釉単独出土地点 灰釉陶器皿 2・3 3号住居跡出土 墨書土器墨書 2 「甲」
3 「主」 4 6号住居跡出土墨書土器墨書 5～7 刻書土器刻書 5 6号住居
跡出土「甲」 6 3号住居跡出土「川」 7 竪穴2出土「主」 8 3号住居出土
炭化木製櫛
- 写真 54 1 試掘 2 表土剥ぎ作業 3 住居跡検出 4 集石検出 5・6 弥生時代
面調査 7 現地説明会 8 作業員

第 I 章 調査の経過

第 1 節 経過概要

1. 調査に至るまでの経過

平地区県営ほ場整備事業は、昭和52年度から着手された事業であり、来見原遺跡は、当初より周知の遺跡としてその存在が確認されていたことから、昭和53年度に同事業が要因となって第一次発掘調査を実施した経過を持つ。

今回対象となった地区については、ほ場整備事業の進捗状況に合わせ、過去数次にわたり保護協議を持ち、第二次発掘調査を実施する方向を打ち出していたが、昭和61年度着手ということで開発側の事業見通しがついたことから、昭和60年9月30日、県教委を交え最終保護協議を実施し、大町市教委が主体となって調査にあたることを確認した。

市教委では、昭和61年4月4日の国庫補助金交付内定連絡を確認後、4月14日、事業主体である北安曇地方事務所長あて委託契約前発掘調査着手願いを提出し、4月21日から調査を開始した。

なお、上記の委託契約は、7月1日に交している。

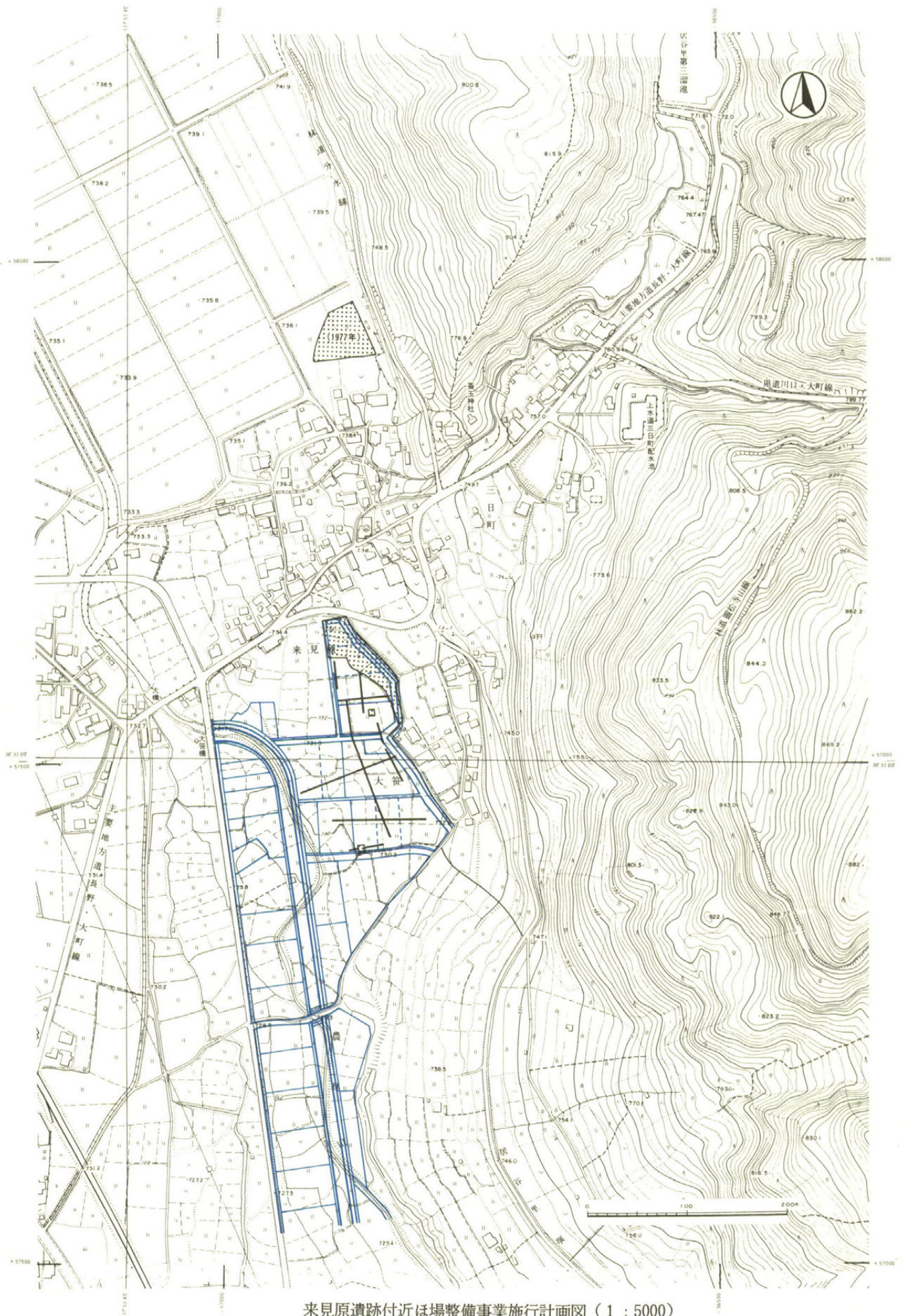
2. 調査計画の変更とその後の経過

調査は、まず、重機を導入するための土層確認グリットを手掘りで開ける作業から行われたが、この時点で遺跡の重層構造が発見された。

当初は、遺構出土の可能性の高い地区を春から夏にかけて全面発掘し、他地区については、秋の刈り入れ終了後、状況をみながら調査していくといった、2期にわたる調査工程を計画していたが、この重層構造の発見により、中世から古墳時代面を第1期、弥生時代面を第2期、刈り入れ後のトレンチ調査を第3期とする3期工程へ変更する必要が生じた。また、調査面積の大幅増という問題を抱えることとなった。このため、重機借入先、測量委託先等と調整を図るとともに、委託元である地方事務所に連絡をしたが、この時点では増額もしくは期間延長等の要求は見合わせ、苦しいながら当初予算の中で全調査を終了するよう努めることとした。

しかしながら、この遺跡が予想以上の複数の層を持っているうえ、扇状地に位置することから堆積の度合いが激しいため移動しなければならない土の量が多く、また、剥ぎ取り作業時には土層の変化の判断に苦しむなど調査は難航を窮めた。加えて、遺構は単なる集落跡に止まらず、集石群が重複して出土し、遺跡の性格を把握するのに苦慮した。また、膨大な量の遺物が出土し、これらの検出や計測に多大な時間を裂かれたことが、調査の遅滞に拍車をかけた。

慢性的な調査体制不足によるところもあるが、市教委では、現体制で単年度内に報告書刊行までの全工程を終了できる能力範囲を越えるほどの作業内容が残されてしまったと判断し、県教委に指導を求め、地方事



来見原遺跡付近ほ場整備事業施行計画図 (1 : 5000)

務所と数次にわたる再協議を実施したうえ、調査計画を下記のとおり変更し、2年継続事業として本調査に取り組むこととした。

[変更前]	[変更後]
<p>■ 作業内容 昭和61年度</p> <p style="padding-left: 40px;">発掘作業完了・整理作業完了</p> <p style="padding-left: 40px;">報告書刊行</p>	<p>昭和61年度</p> <p style="padding-left: 40px;">発掘作業完了・整理作業の一部</p> <p style="padding-left: 40px;">報告書作成作業の一部</p> <p>昭和62年度</p> <p style="padding-left: 40px;">整理作業完了・報告書刊行</p>
<p>■ 調査費 昭和61年度</p> <p style="padding-left: 40px;">総 額 8,710,000円</p> <p style="padding-left: 40px;">開発側 6,314,000円 (72.5%)</p> <p style="padding-left: 40px;">保護側 2,396,000円 (27.5%)</p>	<p>昭和61年度</p> <p style="padding-left: 40px;">総 額 7,410,000円</p> <p style="padding-left: 40px;">開発側 5,372,000円 (72.5%)</p> <p style="padding-left: 40px;">保護側 2,038,000円 (27.5%)</p> <p>昭和62年度</p> <p style="padding-left: 40px;">総 額 2,300,000円</p> <p style="padding-left: 40px;">開発側 1,667,000円 (72.5%)</p> <p style="padding-left: 40px;">保護側 633,000円 (27.5%)</p>

発掘作業は11月19日に終了した。この間、雨天による中止等を除くと170日の現場作業を実施している。調査は、金銭的・時間的制約の中で実施されたが、学術面を考慮し、できるだけ広範囲で、且つ精度の高い調査となるよう心掛けて実施したため、県の積算基準から算出した対象面積1,300㎡を大幅に上回る、約7,500㎡（各層累積概算）に及ぶ大規模な発掘調査となった。

発掘作業終了後は、事務室において整理作業及び報告書作成作業を完成し、本報告に至った。

第 2 節 調査体制

1. 調査体制

■ 大町市教育委員会（文化財担当）

教 育 長 一志開平	社会教育課長 降旗 正
社会教育係長 石原 学	同 係 主 事 新井和男
同係主事補長 島田哲男	同係臨時職員 横沢和子（s.61・62）、坪井 薫、荒井せつ子 棟友美咲（以上 s.61）、北沢和子（s.62）

㊦ 大町市埋蔵文化財調査団（市教委が組織）

団 長 篠崎健一郎（発掘担当者）

副 団 長 原田 暁

調 査 主 任 島田哲男

調 査 員 幅 具義、森 義直、荒井和比古、臼井 潤、荒沢 進、関 賢司

寺島 仁（s.61）

調査補助員 伊藤真治、太田哲夫、山岸洋一（s.61）、国村ゆかり

㊧ 発掘作業員

川上貞男／北沢和子／北沢 茂／金原隆子／窪田秋子／久保田広幸／小島深雪／武居陽子／中村志津代
／降旗くに子／降旗芳人／望月正昭／山岸弘司

2. 調査協力者

調査にあたって、多くの方々にご指導、ご尽力、ご協力を賜りました。以下、ご芳名を記し、御礼に変えさせていただきます。

㊨ 指導者・協力者・見学者

森嶋 稔／笹沢 浩／太田喜幸／小林秀夫／芦部公一／百瀬長秀／市川隆之／市沢英利／竹内 稔
石上周蔵／唐木孝雄／原 明芳／神沢昌二郎／直井雅尚／竹原 学／三村竜一／山田真一／山下泰永
平林潤郎／林 和男／武藤雄六／小林康男／設楽博己／川村浩司／寺崎裕助／田中 請／石黒立人
石川日出志／木村隆一

㊩ 地権者

窪田ち江子／窪田豊一／田中保男／嶺村和徳／峯村十二／小日向重康／窪田嘉一／峯村 弘

第 3 節 調査日誌

4月21日（月） 曇 重機導入に先立ちグリット掘りを開始。 古墳・平安の包含層を確認。	4月28日（月） 雨のち曇 中止。
4月22日（火） 曇 グリット掘り続行。弥生包含層を確認。 山光測舎による地形測量。	4月29日（火） 晴 休日（天皇誕生日）。
4月23日（水） 曇のち晴 グリット掘り続行。	4月30日（水） 晴 重機稼働。機材搬入。人手による表土剥 ぎにも一部入る。
4月24日（木） 晴 グリット掘り続行。	5月1日（木） 晴 重機稼働。表土剥ぎ続行。
4月25日（金） 晴 峯村組より重機搬入が遅れる旨連絡あり。 室内で工程打ち合わせ。	5月2日（金） 小雨 表土剥ぎ続行。重機稼働終了。鉄剣出 土。
4月26日（土） 晴 重機稼働開始。トレンチ3本、グリット 1ヶ所を開けた後、表土剥ぎ取り作業に入る。東北部分に集石確認。	5月3日（土） 曇 休日（憲法記念日）。
4月27日（日） 晴 休日。	5月4日（日） 曇 休日。
	5月5日（月） 晴 休日（こどもの日）。
	5月6日（火） 曇のち小雨 テント張り。表土剥ぎ続行。降

雨時土器洗い。

5月7日(水) 曇のち晴 集石検出。

5月8日(木) 晴 集石検出。表土剥ぎ続行。

5月9日(金) 晴 1住検出、掘り下げ。集石検出。

5月10日(土) 晴 1住掘り下げ。山光測舎による杭打ち。

午後、機材の残分を搬入。

5月11日(日) 雨 中止。

5月12日(月) 曇のち晴 2住検出、掘り下げ。

5月13日(火) 晴 3住確認。1～3住掘り下げ。1住清掃、写真撮影。

5月14日(水) 曇のち雨 4住検出。3・4住掘り下げ。午後雨により中止。

5月15日(木) 曇 集石検出。

5月16日(金) 曇 集石検出。5住検出、掘り下げ。

5月17日(土) 晴 5住掘り下げ。1住遺物実測。

5月18日(日) 晴 2・3・5住セクション実測。

5月19日(月) 曇時々小雨 1住清掃、礫及び遺物の実測。

5住ベルト外し。

5月20日(火) 雨のち曇 現場作業中止。午後、森・関両調査員に1住より出土した砧鑑定依頼。

5月21日(水) 曇一時雨 1住精査、ビットセクション実測。4住掘り下げ。

5月22日(木) 曇のち晴 1住精査、写真撮影。2住の炭取り上げ。4住を竪穴1に名称変更。その北側に新たな住居跡確認。これを4住とし検出続行。

5月23日(金) 晴 2住精査。P1・P2精査、実測。4住掘り下げ。5住掘り下げ、精査。

5月24日(土) 晴のち曇 2・5住清掃、写真撮影。4住セクション実測。

5月25日(日) 晴 1住平面、レベル取り。4住セクション実測続行。集石セクション実測。検討会。

5月26日(月) 晴 4住掘り下げ。集石セクション実測続行。1住カマド、大甕写真撮影。

5月27日(火) 晴 4住清掃、写真撮影、遺物・礫出土状態実測。大甕実測。

5月28日(水) 晴 1住カマド精査、写真撮影。1住P5精査。竪穴1のベルト外し。集石掘り下げ。弥生層確認のため部分的試掘。

5月29日(木) 曇のち雨 P1・P2精査。4住実測続行。テント南の集石掘り下げ。午後雨により中止。

5月30日(金) 雨のち曇 中止。室内作業。

5月31日(土) 曇 集石掘り下げ。4住東の遺構掘り下げ。弥生層確認グリット遺物出土状態写真撮影。

6月1日(日) 晴 5住遺物出土状態実測、レベル読み、遺物取り上げ。4住実測。検討会。

6月2日(月) 曇 テント南の集石、6住に名称変更、掘り下げ。5住レベル実測。4住精査。

6月3日(火) 曇 4住精査、写真撮影。6住掘り下げ、写真撮影。7住検出、掘り下げ。集石掘り下げ。松川村高齢者学級45名見学。

6月4日(水) 晴 竪穴遺構実測。7住掘り下げ。集石内土器出土状態写真撮影。

6月5日(木) 晴 集石掘り下げ。7住掘り下げ。4住、4

住カマド実測。集石内土器出土状態実測。集石写真撮影。

6月6日(金) 曇 7住清掃、写真撮影、実測。竪穴1、4住レベル読み。集石掘り下げ。8住検出。山光測舎による標高設置作業。

6月7日(土) 曇一時雨 集石掘り下げ。8住掘り下げ。降雨時は土器洗い。

6月8日(日) 曇一時雨のち晴 集石内土器実測。7住実測。検討会。

6月9日(月) 晴 8住掘り下げ。5住床面精査、写真撮影。集石掘り下げ。

6月10日(火) 晴 8住清掃、写真撮影。7住レベル読み、遺物取り上げ、精査。5住実測。

6月11日(水) 晴 5住実測。7住床面精査、写真撮影。集石掘り下げ。9住掘り下げ、精査、清掃、写真撮影。弥生層確認。

6月12日(木) 晴 5住、5住カマド、5住西北隅施設セクション。6住遺物・礫出土状態実測。集石掘り下げ。弥生層確認。竪穴1及び3住周辺のビット検出、掘り下げ。

6月13日(金) 晴 5住レベル読み。6住実測。集石掘り下げ。P3掘り下げ、精査、写真撮影。3住精査、炭化した櫛発見。3住周辺のビット掘り下げ、精査。竪穴1南側ビット群の検出、掘り下げ。竪穴1及び周辺の中世遺構面の写真撮影。

6月14日(土) 晴のち曇 6住実測、中世ビット群検出、掘り下げ、セクション実測。10住検出、掘り下げ。

6月15日(日) 晴 6住実測、遺物レベル読み、取り上げ。中世遺構面セクション実測。

6月16日(月) 曇一時雨 6住礫断面。11住検出、掘り下げ。10住掘り下げ、精査、清掃、写真撮影。

6月17日(火) 雨 中止。室内作業。

6月18日(水) 晴 P3平面、断面、見通し図作成。P2平面。11住掘り下げ。集石清掃、写真撮影。

6月19日(木) 晴 9住及び弥生層検出グリット実測。中世ビット群精査、清掃、写真撮影。集石清掃。P2写真撮影。3住拡張。

6月20日(金) 晴 9住及び弥生層検出グリット実測、レベル。竪穴1ビット群実測。集石清掃。大甕出土地点を竪穴2とし掘り下げ。3住拡張。11住精査。弥生面確認。

6月21日(土) 晴 竪穴1ビット群実測。竪穴2精査、清掃、写真撮影。集石清掃。大町西小6年4組見学。

6月22日(日) 晴 現地説明会開催(一般向け、約50名参加)。竪穴1レベル。5住北西隅施設セクション。集石土器集中区の断面。弥生層土器出土状態断面。

6月23日(月) 曇時々小雨 現地説明会開催(子供向け、約50名参加)。6住礫断面。中世ビット群実測。

6月24日(火) 雨 中止。室内作業。

6月25日(水) 曇のち雨 集石精査。弥生層確認グリットの土器集中区実測完了。午後中止。

6月26日(木) 雨 中止。室内作業。

6月27日(金) 晴 P1断面、見通し図作成、レベル。中世ビット群実測。集石周辺精査。弥生層確認グリット掘り下げ。3住拡張。

6月28日(土) 晴 中世ビット群レベル。12住精査、清掃、写真撮影、実測。3住拡張。

6月29日(日) 雨 中止。

6月30日(月) 雨のち曇 中止。室内作業。
 7月1日(火) 曇のち晴一時雨 12住実測、レベル。
 7月2日(水) 曇 弥生層確認3ヶ所。3住精査、清掃、遺物出土状態写真撮影。11住及び周辺精査。11住確認面より出土の炭化物実測。
 7月3日(木) 曇 3住実測。弥生層確認。11住確認面より出土の炭化物写真撮影。大町西小6年2組見学。
 7月4日(金) 曇のち晴 3住実測。11住確認面より出土の炭化物実測、写真撮影。弥生層確認。11住清掃、写真撮影。
 7月5日(土) 曇のち雨 6住断面。弥生層確認。
 7月6日(日) 晴 7住実測、炭取り上げ、レベル。古墳時代土器集中区実測。
 7月7日(月) 曇 6住断面、レベル。弥生層確認。7住補足測量、清掃。中世の集石及びピット掘り下げ。
 7月8日(火) 晴 6住レベル、補足測量。3住断面。弥生層確認。7住写真撮影。中世集石の精査、清掃、写真撮影。弥生(栗林)層精査、清掃、写真撮影。6住精査。
 7月9日(水) 曇のち雨 6住精査。弥生層確認。午後中止。
 7月10日(木) 曇時々雨 層位ごとのセクション作成。3住断面、レベル。
 7月11日(金) 曇のち雨 3住断面。竪穴2実測。6住精査、清掃、写真撮影。古墳時代層精査。弥生層確認。
 7月12日(土) 曇のち雨 3住断面。層位ごとのセクション作成。弥生層確認。
 7月13日(日) 曇のち雨 層位ごとのセクション作成。
 7月14日(月) 晴 3住断面。10住及びその西側のピット実測。明日が航空写真撮影の予定日であるので調査区全体の清掃作業。
 7月15日(火) 雨 中止。室内作業。航空写真撮影は延期。
 7月16日(水) 雨 中止。室内作業。航空写真撮影は延期。
 7月17日(木) 曇一時雨 中部電力による航空写真撮影。8住及び8住東側古墳時代面出土遺物実測。層位ごとのセクション。集石ベルト外し。
 7月18日(金) 晴 8住及び周辺古墳時代層実測。6住精査後の実測。層位ごとのセクション。集石精査。集石周辺弥生層の確認。
 7月19日(土) 曇 集石精査。集石周辺下層弥生層の確認。層位ごとのセクション。竪穴2実測、レベル。6住レベル。
 7月20日(日) 雨 中止。
 7月21日(月) 曇のち雨 11住実測。3住礫・遺物出土状態レベル読み、遺物・炭・焼土取り上げ。10住及びその西側のピ



調査風景

トのレベル。集石ベルト外し。弥生層確認。
 7月22日(火) 雨 中止。室内作業。
 7月23日(水) 曇 11住実測。弥生層確認。2住北側のピット掘り下げ。6住張り床トレンチ掘り。3住精査。1・4・6・7各住居のカマド精査。
 7月24日(木) 晴 調査員、担当者不在のため中止。
 7月25日(金) 晴 11住礫出土状態実測、断面、レベル。8住及び周辺の礫・遺物取り上げ、8住精査。弥生面集石実測に入るため水糸張り。3住精査。弥生面確認。7住北側のピット検出。平安面集石実測。
 7月26日(土) 晴 11住礫・遺物のレベル計測及び取り上げ。11住炭レベル計測。3住清掃及び写真撮影。古墳時代集石清掃。弥生面集石実測。北側弥生グリット内集石の写真撮影。竪穴2床面精査。平安面集石実測。
 7月27日(日) 晴 11住炭取り上げ。3住最終実測。弥生集石実測。平安集石実測。検討会。
 7月28日(月) 晴 3住カマドの断面、見通し図作成。11住精査。竪穴2床面精査。平安時代集石下層、古墳時代集石面精査。弥生面集石実測。11住鉄器付着炭化材実測、取り上げ。
 7月29日(火) 晴 3住カマド見通し図作成。8住精査後の実測。11住清掃、写真撮影。竪穴2清掃、写真撮影。古墳時代集石の精査。
 7月30日(水) 晴 3住カマド見通し図作成。竪穴2精査後の実測、レベル。3住精査後のレベル。8住精査後の補足実測、レベル。11住精査後の実測。古墳時代集石実測。弥生時代集石実測。5住カマド断面。集石面のセクション。
 7月31日(木) 晴 集石精査。5住カマド断面補足、及び精査。集石面最南端のセクション。集石面上層灰釉陶器検出、実測。古墳時代集石実測。弥生時代集石実測。
 8月1日(金) 晴 古墳時代集石精査。古墳時代集石実測。5住カマド及び北西隅施設精査。弥生グリットセクション。3住東北隅弥生層確認グリット掘り下げ。弥生集石実測、断面。7住・1住カマド断面。
 8月2日(土) 晴 5住カマド精査。古墳集石精査、清掃、写真撮影、実測。弥生確認グリット5の実測、遺物取り上げ。
 8月3日(日) 晴 2住炭化材実測。古墳集石全体写真撮影、実測。弥生確認グリット内集石実測、セクション。
 8月4日(月) 雨 中止。室内作業。
 8月5日(火) 晴 弥生(栗林)面の礫取り上げ、精査。弥生集石礫下の遺物精査。11住実測。
 8月6日(水) 晴 古墳時代集石実測。弥生面実測、精査。弥生(栗林)面の礫下遺物精査、写真撮影、実測、取り上げ。2住炭化材実測。
 8月7日(木) 晴 2住炭化材実測。弥生(栗林)面下層精査。11住実測、レベル。骨出土状態写真撮影。
 8月8日(金) 晴 5住北西施設・P3のセクション。古墳時代集石実測。北部弥生確認グリット内集石実測。1住カマドセクション。11住・4住カマド粘土取り外し。弥生(栗林)下層精査。
 8月9日(土) 晴 1・4・5・6・7・8住カマド精査、清掃、写真撮影。弥生確認グリット及び11住の集石実測、断面図作成。古墳時代集石実測。3住カマドセクション。6住カマド実測。
 8月10日(日) 晴 1・4・5・6・7・8住カマド実測。2住炭化材実測。古墳時代集石実測。

- 8月11日(月) 晴 3・6・11住カマド精査、清掃、写真撮影。1住カマド火床の精査、セクション。南部ビット群掘り下げ。6・7住カマド実測。2住炭化材実測、取り上げ。
- 8月12日(火) 晴 南部ビット群掘り下げ、精査、清掃、写真撮影。2住炭化材レベル、取り上げ、一部精査。3住カマド実測。古墳時代集石実測。
- 8月13日(水) 晴 2住炭化材レベル、取り上げ。古墳時代集石実測。
- 8月14日(木) 晴 2住炭化材レベル、取り上げ、補足実測。古墳時代集石実測、及び集石に伴う遺物レベル計測、取り上げ。
- 8月15日(金) 晴 成人式開催のため現場中止。
- 8月16日(土) 晴 盆休みとし、現場中止。
- 8月17日(日) 晴 盆休みとし、現場中止。
- 8月18日(月) 曇時々晴 弥生層の確認。2住炭化材レベル、取り上げ、補足実測。
- 8月19日(火) 晴 2住炭化材取り上げ、補足実測。弥生層確認。
- 8月20日(水) 晴 2住精査、清掃、写真撮影、カマド精査。2住北側ビット掘り下げ。中央部ビット群実測。古墳時代集石実測。弥生層確認。
- 8月21日(木) 晴 調査主任不在のため現場は中止し、室内で土器洗い、図面整理。
- 8月22日(金) 晴 調査主任不在のため現場は中止し、室内で土器洗い。
- 8月23日(土) 晴 2住精査、写真撮影。2住周辺ビット写真撮影。2住実測。3住カマド実測。古墳時代集石実測。中央部ビット群写真撮影。弥生層確認。
- 8月24日(日) 曇一時雨のち晴 2住実測。3住カマド実測。弥生層確認グリット1のセクション。古墳時代集石実測。
- 8月25日(月) 晴 2住実測。3住カマド実測。11住カマド実測。弥生層確認グリット1・9拡張。
- 8月26日(火) 晴 2住実測レベル。11住カマド実測、カマド内の炭レベル。中央部ビット群レベル。弥生層確認グリット拡張。
- 8月27日(水) 晴 3住カマド実測。古墳時代集石実測。11住カマド内の炭取り上げ、精査清掃、写真撮影。弥生層確認グリット拡張。
- 8月28日(木) 晴 昨夜の雷雨により発掘区の3分の1以上が水没する。カマドの中には崩れるものもあり。住居跡、弥生層確認グリットには全て水が漬く。部分的に水が引いた部分を選び弥生層確認。古墳時代集石実測。3住カマド実測。
- 8月29日(金) 晴のち雨 古墳時代集石実測、断面。3住カマド実測。弥生層確認グリット拡張。更に拡張グリットを1・2住間に新設。八坂村老人学級45名見学。
- 8月30日(土) 晴 弥生層確認グリット拡張。古墳時代集石実測、断面。3住カマド実測。
- 8月31日(日) 晴 古墳時代集石実測、断面。3・5住カマド実測。弥生層確認グリットセクション。長野県考古学会会長森嶋稔氏来訪。
- 9月1日(月) 晴 弥生層確認グリット拡張。拡張区の一部精査、清掃、写真撮影。古墳時代集石実測、断面。3・11住カマド実測。
- 9月2日(火) 曇 古墳時代集石実測、断面、伴う遺物取り上げ。11住カマド実測。北側弥生層確認グリット拡張。
- 9月3日(水) 雨時々曇 午前、雨により現場作業を見合わせる。午後、古墳時代集石断面。平安・古墳面全測図(地形測量)。
- 9月4日(木) 晴 古墳時代集石断面。平安・古墳面全測図(地形測量)。弥生層確認。古墳時代集石内の土器検出。明日より重機が入るため、平安・古墳面の全体片付け。機材片付け。5住北西隅施設写真撮影。
- 9月5日(金) 晴 今日から重機再投入。弥生面調査に入る。2・4住カマドのレベル計測。古墳時代集石断面。
- 9月6日(土) 曇のち雨 重機による中間層剥ぎ取り。弥生層確認グリットのレベル計測の残分。1住カマド見通し図作成。
- 9月7日(日) 晴 休日。
- 9月8日(月) 晴 平安・古墳面調査時に検出できなかった13住が、重機による中間層剥ぎ取り作業時に確認される。13住掘り下げとセクション。残土整理。P50の平面、断面。重機はオペレーターの都合により本日は稼働せず。
- 9月9日(火) 晴のち曇 13住掘り下げ、精査、清掃、写真撮影。P50の見通し図作成。午前を以て重機による剥ぎ取り作業終了。残土整理。遺構遺物検出。
- 9月10日(水) 曇のち雨 残土整理。遺構遺物検出。P50の見通し図作成。午後雨により中止。
- 9月11日(木) 晴 残土整理。遺構遺物検出。P50見通し図完了、隙下精査。
- 9月12日(金) 曇 残土整理。遺構遺物検出。13住実測。
- 9月13日(土) 曇時々晴のち雨 残土整理。遺構遺物検出。13住実測。
- 9月14日(日) 晴 E5・F5弥生土器集中出土地点清掃、写真撮影。13住実測。
- 9月15日(月) 晴 休日(敬老の日)。
- 9月16日(火) 曇 残土整理。遺構遺物検出。南部ビット群実測、レベル。
- 9月17日(水) 雨 中止。室内作業。午後、原田副団長来庁。遺物について検討。
- 9月18日(木) 晴 残土整理。遺構遺物検出。山光測舎による基準杭設置。
- 9月19日(金) 晴のち曇 残土整理。遺構遺物検出。13住実測。
- 9月20日(土) 雨 中止。室内作業。午後、小雨時に森・関両調査員と地質調査。
- 9月21日(日) 晴 遺物出土状態実測。
- 9月22日(月) 晴 残土整理。遺構遺物検出。南側ビット群実測。遺物出土状態実測、取り上げ、写真撮影。
- 9月23日(火) 晴 休日(秋分の日)。
- 9月24日(水) 晴のち曇 南側ビット群レベル。遺物出土状態実測、レベル(E5・F5)。同実測、写真撮影(C3)。13住内礫断面。残土整理。遺構遺物検出。
- 9月25日(木) 晴 残土整理。遺構遺物検出。13住内礫断面。午前中來年度発掘調査実施予定の一律遺跡の保護協議。一律現地協議終了後、米見原遺跡に立ち寄り、県文化課担当官に調査の現状を説明。
- 9月26日(金) 晴 C2・C3・D3実測、遺物のレベル計測と取り上げ、更に断面に入る。中央部セクション実測、写真撮影。13住精査、清掃。残土整理。遺構遺物検出。
- 9月27日(土) 晴 遺構遺物検出。13住床面精査、清掃、写

真撮影、実測。D 3・D 4 遺物出土状態写真撮影、実測、取り上げ。
C 3 集石レベル計測。

9月28日(日) 晴 休日。

9月29日(月) 曇 弥生集石精査。D 3・D 4 集石写真撮影、及び遺物出土状態実測、取り上げ。

9月30日(火) 晴 集石 E 4 より南精査、清掃。集石内出土遺物写真撮影、実測、取り上げ。

10月1日(水) 雨 中止。

10月2日(木) 雨のち晴 昨夜来の雨によりぬかるむため中止。

10月3日(金) 晴 集石精査、清掃。集石全体及び個々の写真撮影。B 1・B 2 遺物検出。土層観察のため北側土手精査清掃。

10月4日(土) 曇時々雨 河川跡裁ち割り。遺構遺物検出(D 4・D 5 河川跡西側)。北端・南端土手精査。焼土・骨・木炭を伴う土壌精査。

10月5日(日) 晴 焼土・骨・木炭を伴う土壌は中世の火葬墓と考えられる。この火葬墓の清掃、写真撮影、実測。C 3・D 4 集石実測。

10月6日(月) 晴 F 6・F 7・B 2・B 3 遺構遺物検出。火葬墓レベル。C 3・D 4 集石実測。B 2・B 3 の中間地点の黒色層下層と礫層下部より氷式土器出土。全面調査はしないが、氷包含層の存在は確認。

10月7日(火) 晴のち曇 B 2・B 3 遺構遺物検出(弥生層下層の確認)。火葬墓の骨・焼土・炭取り上げ、精査、清掃、及び精査後の写真撮影、実測。C 3・D 4 集石実測。北部集石写真撮影。一部土器洗い。

10月8日(水) 雨のち晴 中止。

10月9日(木) 晴 昨日の雨によりぬかるむため土器洗いを実施。

10月10日(金) 晴 集石実測。

10月11日(土) 雨 中止。

10月12日(日) 曇のち雨 休日。

10月13日(月) 晴 集石実測。全体写真撮影。縄文晩期出土グリット清掃、写真撮影。

10月14日(火) 晴 13住レベル、及びカマド断面、見通し図作成。B 2 遺物及び礫レベル。E 4・E 5・F 5 集石実測。土器洗浄。機材一部撤収。

10月15日(水) 晴 B 2 集石断面。E 4・E 5・F 5 集石実測。土器洗浄。

10月16日(木) 晴 土器洗浄。集石実測。

10月17日(金) 曇 F 6 集石実測。E 5・F 5 集石断面。機材撤収準備。全地区清掃。

10月18日(土) 晴 機材一部を残し撤収。F 5 集石断面。F 6・G 6 実測。G 6・G 7・H 7 にかけて基準杭打ち。本日を以てトレンチ開け実施時まで作業員一時帰休とする。

10月19日(日) 晴 F 6 集石断面。H 6・H 7 集石実測。

10月20日(月) 晴 F 6・G 6 集石実測。

10月21日(火) 晴 F 6・G 6 集石実測。

10月22日(水) 曇時々雨 中止。

10月23日(木) 曇時々晴 午後、集石実測。最終地形測量。

10月24日(金) 晴 分布調査実施のため現場中止。

10月25日(土) 晴 F 6・G 6 集石実測。

10月26日(日) 晴 F 6 集石断面。

10月27日(月) 雨のち晴 G 6・G 7・H 6・H 7 実測。

10月28日(火) 晴 G 6・G 7・H 6・H 7 実測。

10月29日(水) 曇時々晴 山光測舎による地形測量。G 6・G 7・H 6・H 7 実測。

10月30日(木) 曇 G 6・G 7・H 6・H 7 実測。

10月31日(金) 晴 G 6・G 7・H 6・H 7 実測。

11月1日(土) 晴 G 6・G 7・H 6・H 7 実測。

11月2日(日) 晴 休日。

11月3日(月) 晴 文化の日だが実施。G 6・G 7・H 6・H 7 実測。

11月4日(火) 雨のち晴 午後、G 6・G 7・H 6・H 7 断面。

11月5日(水) 曇のち晴 G 6・G 7・H 6・H 7 断面。

11月6日(木) 晴 本日よりトレンチ開け開始。重機入る。

11月7日(金) 晴 重機によるトレンチ掘削本日で終了。

11月8日(土) 晴 トレンチ掘り下げ。森調査員と地質調査。

11月9日(日) 晴 休日。

11月10日(月) 曇 山光測舎によるトレンチ全体測量。トレンチ掘り下げ。トレンチセクション。トレンチ全体写真撮影。

11月11日(火) 雪 中止。

11月12日(水) 晴 午後、トレンチセクション。

11月13日(木) 曇のち雨 午前、トレンチセクション。午後は室内。

11月14日(金) 晴 トレンチセクション。

11月15日(土) 雨のち曇 午後、トレンチセクション。機材一部撤収。

11月16日(日) 曇 休日。

11月17日(月) 晴 午前、トレンチセクション。

11月18日(火) 晴 分布調査実施により中止。

11月19日(水) 晴 午後、トレンチセクション完了。機材残分撤収。清掃。本日で発掘作業の全工程終了する。



調査風景

第4節 発掘調査と整理の方法

1. 発掘区の設定

来見原遺跡についての資料は1977年（昭和52年）度実施の北部の発掘調査の資料があるものの、調査が北部に限られていたために、今回調査した大笹地籍部分までの遺跡範囲を知るための参考とはならなかった。このため、この地区がほ場整備されることとなった1982（昭和57年）に市単独予算の調査費で分布調査を実施し、大笹地籍まで遺跡範囲が広がっていること、東部にある山の神・大笹遺跡も範囲に含む広範囲な遺跡であることが判明し、すべてを一括し来見原遺跡とした（今回の発掘調査と同時に国庫補助金を受けて実施した大町市内遺跡分布調査においても同様の結果が得られている）。この結果から、ほ場整備対象地区内の13,000㎡が対象となると予想された。1985（昭和60）年県文化課、中信土地改良事務所、市教育委員会で保護協議のため現地を踏査した結果、集落存在が予想され、工事で掘削部分が多い、傾斜地中央部の調査対照土地北側は全面調査、表面採集遺物が僅少で遺構の存在がはっきりせず、掘削部分が少ない調査対照地南側についてはトレンチ調査を行ない遺構の存在があった場合は調査を実施することで、1,300㎡以上を発掘調査することにした。しかし、全面発掘計画部分を事業開始時に、人力により3箇所の試掘坑をあけたところ、弥生時代～中世の生活面が層位ごとに存在することが判明し、各層位で調査することとなり、各時代生活面計約7,500㎡を調査に当たった。

2. 発掘調査の方法

農業基盤整備事業による緊急発掘調査では、ほとんどの遺跡が全面破壊からのがれられないため、工事着工前に記録保存を目的として行なうものであり、できるかぎり精密な記録化が望まれるが、金銭的・時間的制約の中では力は延ばない点があることは了承されたい。

調査は、全面発掘調査部分とトレンチ調査部分の2箇所に分けて行なった。トレンチ調査部分の大半は、農作物の取り入れ後、調査することになっていた為、全面発掘調査に隣接するトレンチ調査部分に遺構・遺物の存在があるか確かめるために、バックフォアによりトレンチ1～3・グリットを掘り、土層等を調査したが、遺物も少なく、遺構の存在も確認できなかったため、全面発掘区の排土地とした。トレンチ4～8についてもバックフォアを使用しトレンチを掘り、土層、遺構有無の調査を行なった。

全面発掘区は、現状を記録しておくため地形測量を行ない、地表下のどの位置に包含層・生活面があるか確認するため、人力で3箇所に試掘坑を掘った。その結果、弥生時代～中世の生活面が地層ごとに確認できることが判明し、層位ごとに発掘調査を行なうこととした。しかし、この層位ごとの全面調査については、時間的・金銭的制約や調査員・発掘作業員の不足など諸事情から、ブルドーザーにより20～30cm前後の表土除去作業を行ない、その後、中世生活面については平面的に確認するのは難しいこと（中世生活面は後の土層断面調査により確認。）から、平安時代遺構検出面直上まで中世遺構検出面を一部残しながら、バックフォアにより土を除去した。部分的に土層の見誤りにより古墳時代層まで削平面が達してしまった部分もこの時出てしまった。遺構検出作業は従来通りの方法でジョレンにより上土を削り検出に努めた。平安時代の遺構の

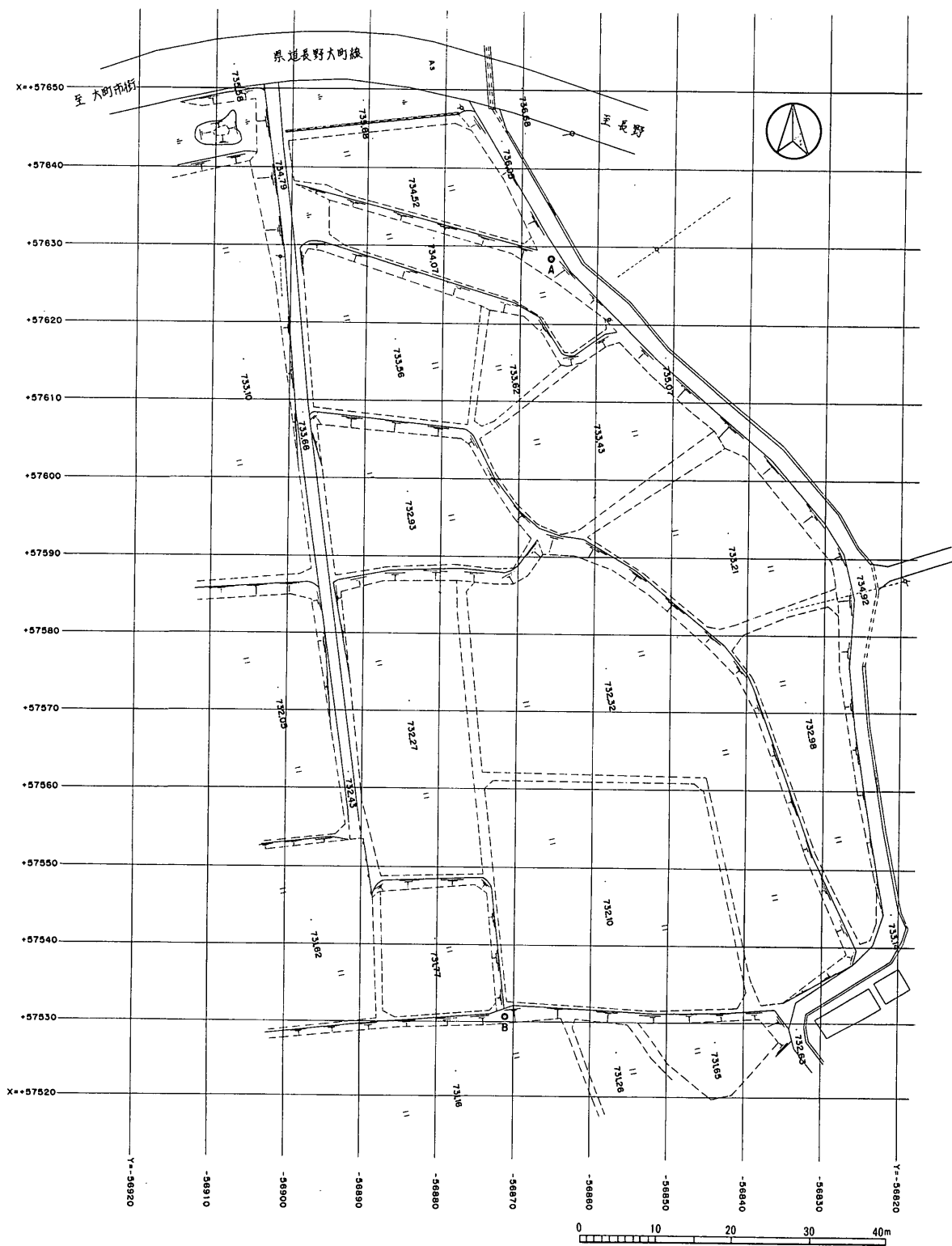


図2 来見原遺跡発掘区地形図(1:800)

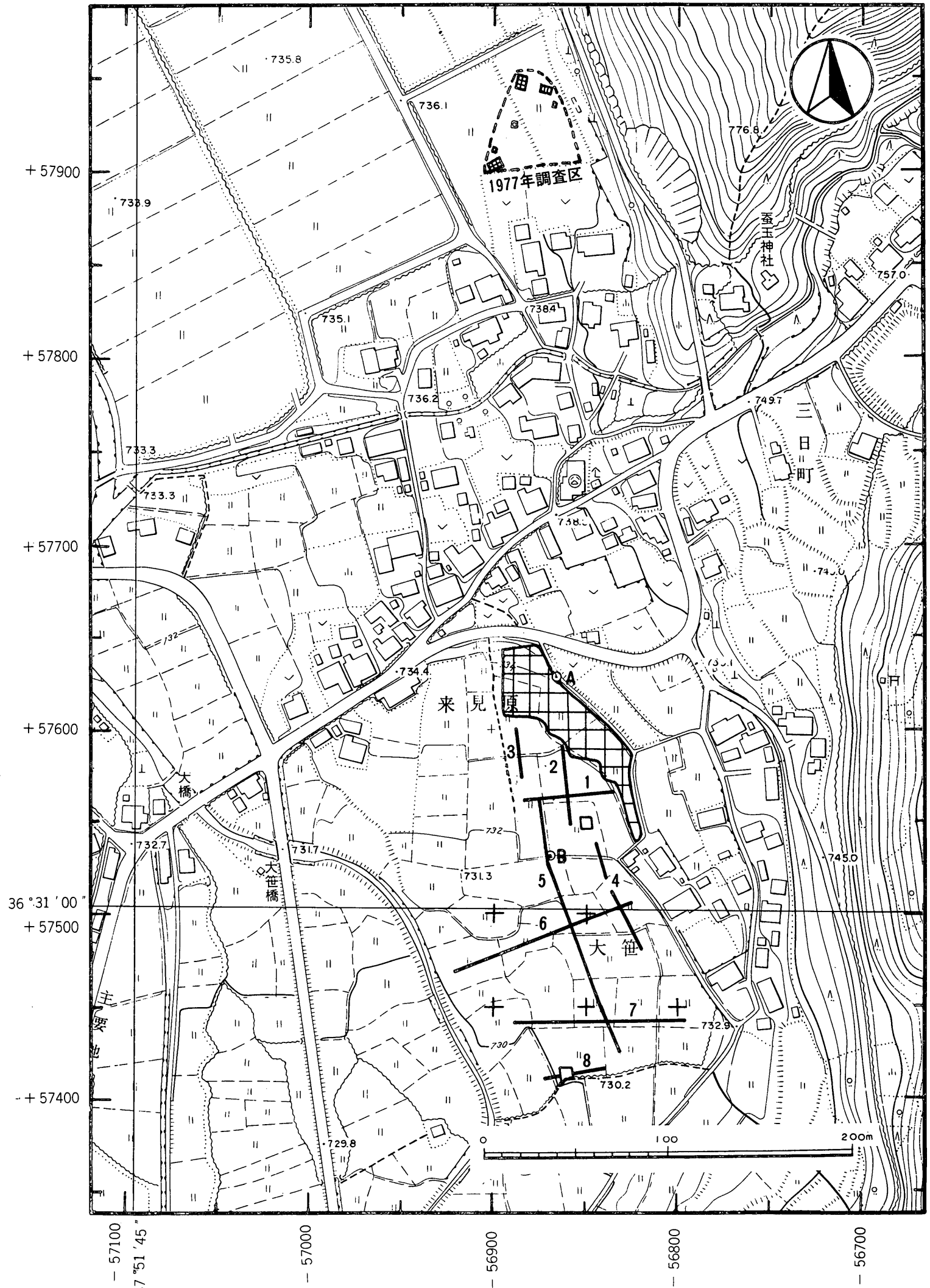
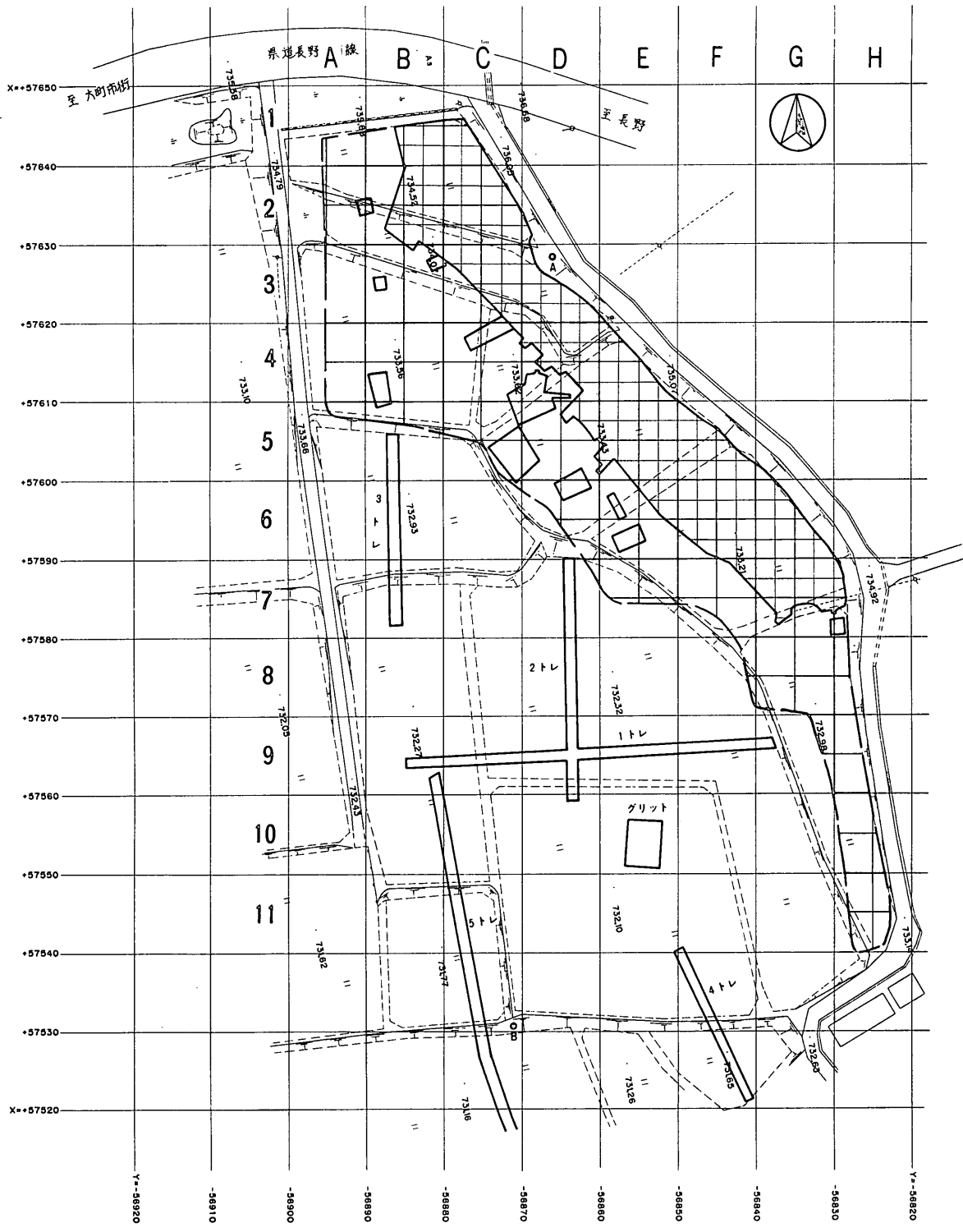
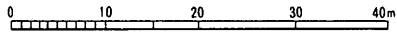


図3 来見原遺跡発掘区割図(1) (1 : 2500)



- - - - - 中世～古墳時代発掘調査区
 _____ 弥生時代発掘調査区



01	02
03	04

中世～古墳時代グリット区画

a	b	a	b
c	d	c	d
a	b	a	b
c	d	c	d

弥生時代グリット区画図

図4 来見原遺跡発掘区割図(2) (1:800)

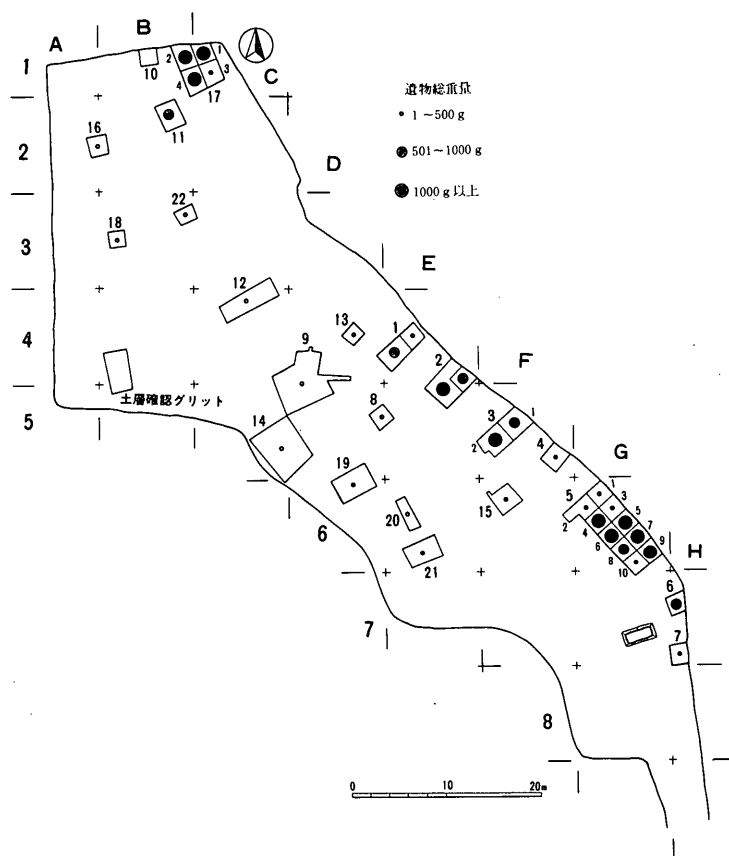


図5 弥生時代層確認グリット遺物出土量図（1：800）

500g以上の遺物が出土したグリットを選び弥生時代調査区を設定した。

存在がない場合は一機に古墳時代層まで下げて古墳時代の遺構・遺物検出に努めた。発掘区内は座標に応じて $X = +57650$ 、 $Y = -56900$ を基点に10m区画で東西方向 $Y = -56900$ 軸を基線に東へA～H、南北方向を $X = +57650$ を基線に南へ1～10で分け、古墳時代～中世の遺物取り上げは、10m区画内を4等分し5mグリットの01～04に分け、たとえばA-1-01といった具合に区画番号をつけ取り上げた（古墳～中世の区画は、測点の手違いにより南北方向で65cm南へ区画がずれるという失敗が弥生時代面区画時にわかった）。

古墳時代～中世面（以下、上層面と呼ぶ。）調査時に遺構調査が終了したごとに弥生時代中期面の確認グリットを22箇所掘り弥生時代層の確認に努めた。弥生時代中期後半面調査については確認グリット5で遺物が多く集石が検出されたのみで他からは、極少量であったことから、確認グリット5を人力で拡張するのみで終了した。上層面調査終了後、確認グリットのうち、遺物が多いグリットを選び、弥生時代中期前半面（以下下層面と呼ぶ。）の調査区を設定し、上層面と下層面の間には、約50cmの無遺物層である砂礫層が設定する調査区の大半に堆積していることから、再度バックフォーを入れ、それを除去し、下層面900㎡の遺構・遺物検出を上層面と同じ方法により努めた。この時、P87（中世火葬墓）、13号住居跡が、上層面での検出の見落としから検出された。下層面終了時にこの一層下より縄文時代晩期末の遺物が出土したが、工事掘削が及ばないために確認グリットをひとつ掘り確認したにとどめた。下層面の遺物の取り下げは、上層面の5mグリットをさらに細かく分け、2.5mグリットのa～dに分け、たとえばC-1-03-aといった具合に区画し取り上げた（この区画は前記したごとく上層の区画が南へ65cmのずれがある）。

遺構についてはできるかぎり断面図を作成することにし、ピット・土壇・集石ピット及び土壇・集石等は2分割を原則としたが必要に応じて多分割による立ち割りをおこない、一部については見通し図を作成した。住居跡の調査は平面的観察以外に土層観察を重視し、重複関係を明らかにした。土層観察は、統一性を持たせるため土層の観察を担当する調査員を決め確認した。従って住居跡中央に幅50cm～1mのサブトレンチを入れ、土層観察および床面の状況を一部確認しながら、次第に全面発掘に切り替えていった。床面で検出された支柱穴等については、2分割を原則として立割を行ない、分層できるものについては土層図を作成した。住居跡の多くには白色及び黄色の粘土の貼床が多くみられ、床下ピットの存在も予想されたことから調査終了時には床面立ち割りを行ない貼床の観察を行ない、貼床の厚さを記録した。建物跡の柱穴については、平面観察により柱痕の確認できないものについては5～10cm柱穴内を掘り下げ柱痕の確認につとめたが、掘り込み土層が似たような暗褐色土であり多くの場合は確認できず、2分割を原則として立ち割りをおこなった。遺物の出土状態の記録はすべての遺構・グリットごとに行ない層位ごとにまとめて取り上げることを原則とした。住居跡床面直上出土遺物やグリット出土完形・半完形また計測復原が可能な土器・石器については必要に応じて実測図と点で記録した。遺構番号は遺構の種類ごとに検出順につけた。炭化材・炭火物は極力原位に残して、出土状態図作成後、一部をサンプルとして採集した。

3. 測量の方法

本遺跡の測量方法は、座標の方眼を設定し使用する方法を踏襲し、徇山光測舎に委託して大町市都市計画図（1:2500）から求めた基準点A（ $X = +57628.297$ ・ $Y = -56865.942$ ・ $H = 735.184$ m（B（北緯）= $36^{\circ}31'03''.936$ ・L（東緯）= $137^{\circ}51'53''.971$ 、真北方向角= $+0^{\circ}22'40''.4$ ）、B（ $X = +57530.624$ ・ $Y = -56871.077$ ）を設置し、表土除去作業が終了した範囲から基準点より10m間隔のメッシュ坑を設置した（A～H・1～10のグリット区画もこれを基準とし、上層面は5m方眼に区切り、下層面では2.5m方眼に区切り

グリットを設定した。上層と下層のメッシュ及びグリット設定では、上層面の設置時にX軸が南へ65cmの誤差を生じて設置してしまったが、グリット配置では修正できずそのまま使用したが、遺構図においては、トレース時において誤差修正を行なった。標高は国家二等水準点749.5081mから水準測量によりA基準点に移設した735.184mを使用した。

発掘調査区内における測量作業は、設置した10m間隔の地区割用のメッシュ坑に基づき、簡易遣り方実測により水系を張り1mm方眼紙の実測用紙に測量した。遺構実測図にあつては、遺物の出土状況や集石・炭火物などを記録するものと、各遺構全体を記録するものとに分け、必要に応じて部分的な実測図の作成を行ない、遺構の実測図は20分の1、カマド・墓石の実測図や遺物の集中して出土した状況を記録するものについては10分の1を原則とした。カマドについて石組の遺存状態の良好なものはできるかぎり10分の1の見通し図を作成した。

発掘区内の全景図、等高線は、スタジア測量により100分の1の図を作成した。

4. 整理の方法

遺構図等の整理方法は、発掘調査において遺構ごとに作成した実測図をトレースした後、4分の1に縮小して、竪穴住跡・建物跡・竪穴・集石全体図等は80分の1、カマド部分・集石等は40分の1を原則にして報告書の図版とした。発掘調査全体図は、4分の1に縮小した400分の1のものを報告書の図版とした。

住居跡平面図で、一点破線は床面の堅い部分、二点線は白色及び黄色粘土の貼床、三点破線は粘土と他の土の混合した貼床を表している。また、ドットは焼土を、点のスクリーントーンは粘土を表わしている。

遺物の整理方法は、手順として、洗浄―遺構・出土地点・層位・発掘時は取り上げ番号などの記入―接合補修―分類―実測（図化）―写真という順序を原則として行なった。遺物の実測は手作業で行ない、基本的に実測可能なものはできるだけ図化するよう努め、文様のある破片や圧痕の見られる底部などは拓影図を用いた。実測図はすべての原寸のままにトレースを行ない、土器は実測図の4分の1、拓影図3分の1、石器は石鏃小形石器1分の1、石鏃等の中型石器3分の1、磨石・砥石等4分の1、石皿等6分の1、鉄製器等2分の1を原則として報告書の図版とした。

土器で、ロクロ成形しているものは、一点破線がロクロナデ、破線が回転ヘラケズリ及び土器の稜線を表わしている。石器の使用痕に関しては、磨痕←――→ ・敲打痕←……→ ・その他使用痕← → を使用した。

第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

第1節 遺跡の地形と地質

1. 地形と地質

本遺跡は大町市の東部山地の山麓で、居谷里湿原から流出する沢により押し出された扇状地の中腹にあり、海拔は734m～735mで南西に緩く傾斜している。

この付近一帯の地形の形成は、西山の後立山連峰から東流する鹿島川と高瀬川の複合扇状地の扇端と、それを覆うように東部山地から西へ流出する沢による小扇状地や崖錐が押し出し、その境を木崎湖に源を発する農具川が南流し小段丘をつくっている。

本遺跡付近もおよそ1.5m以下は西山の砂礫と東山の石英安山を主とした砂礫が混成した黄褐色の堆積物となっており、両者の混成は農具川の働きによるものと推定される。

次に地史的に見れば、この付近一帯は松本盆地が沈降する以前は、一連の平坦面で西から東へ緩やかに傾斜しており、西部山岳地帯からの河川により砂礫が堆積〔旧河床礫〕していた地域である。

その後洪積世中頃の地殻変動により大町市付近（松本盆地）は沈降し東部は隆起して、1500m以下の東部山地ができあがり幼年期の地形を呈している。

地質的に見れば、この三日町から大町市の水源地である居谷里湿原に至る東部山地は、新生代才三紀末期頃のフォッサマグナの海に堆積した大峰累層と呼ばれる亜炭を含む砂岩や礫岩と石英安山岩や凝灰岩の互層が基盤をなし、その上に前記の旧河床礫（山砂利）の砂礫とローム（2次的に移動したものも含む）が混在し、層理をなして乗っている。

居谷里の谷を流下する沢は浅く、隆水の多い時は洪水性の出水となり、上記の基盤岩とその風化粘土及び旧河床礫とローム質などの概してふい分けの悪い堆積物が本遺跡付近に間欠的に堆積し小扇状地を形成している。

したがって堆積物は、出水時の状況や流路の首振りなどにより層理の不明瞭な部分や明瞭に認められる部分などが混在している。

2. 本遺跡の土層について

縄文時代から現代までの各時代の包含層が見られる。先ず下から順に見ると、縄文以前の原地形の起伏と居谷里沢の首振りにより土層の深浅の差は大きく、また土質にも多少の差異はみられるが、およそ1.5m以下は黄褐色の基盤の砂礫で鹿島川系と東山系の砂礫が農具川の働きにより2次的に混成したものであり、遺物は包含せず沖積世前期の土層とみられる。

この上に薄く暗褐色の縄文晩期の砂土層が乗り、次の弥生の黒色土層に漸移している。

弥生の土層は厚く本遺跡の中心的な意味を持つものであり、黒色～黒褐色を呈している。この黒色土は腐

植物が多く含礫粘土質である。当時は湿地性で植生に恵まれた肥沃な土壌であり、土器片の靱痕に見るように一部水田化されておった可能性は十分にある。

黒色土の土質は、東部山地のオ三紀層の風化物とローム質の混成より成り粘性が強い、この中に含まれる礫はオ三紀の石英安山岩の礫と西山から運ばれた旧河床礫（山砂利）で花こう岩を主とする酸性火成岩類である。

(1) 弥生時代の列石について

扇状地を横切る形でφ20~40cmを主とする巨礫の列が十数米続くが弥生人が目的に列石としたもので、縄文期の配石によく見られる割石、破石などの人工的な加工の痕は殆んど見られない。岩質は石英安山岩と花こう岩がほぼ半々でその他の酸性火成岩類も多少含まれている。中でも特大のφ70cmの巨礫は花こう岩礫であり、これは鹿島川や高瀬川などから運ばれたものではなく、東部山地に乗る山砂利が洪水時に押し出されてきた上記堆積物中のものを利用したとみられる。

(2) 弥生層に存在する小河川

弥生層上部には列石とほぼ平行に扇状地を横切るかたちで人工的と考えられる用水路状のものがあり途中分枝している。この水路は農具川の分流なのか居谷里沢を引いているのか不明であるが両者共可能な位置にある。

(3) 弥生層の終焉

弥生層の上を灰褐色の砂礫層が一面に乗り上記の川もこの砂礫で埋没している。時代は弥生末から古墳時代にかけて居谷里沢の首振りの結果流水路となり、粘土分は流出し砂礫はふるい分けられて砂層礫層など層理がみられる。なお現在はこの砂礫層が帯水層となり湧水がみられる。

これから上の層は定常的な流路となったことはなく、間欠的に押し出される洪水性のふるい分けの悪い堆積物が上流で供給される土砂の質の違いによりそれぞれ多少異なった堆積物として乗っている。但し現在の水田面は、開田時に高い東側を削り低い西側に埋立てるなど上部の層序は乱れている。

以上発掘地点だけに限定すれば、現代を除けば一番の安定期は弥生時代の黒色土帯であった。

(森 義直)

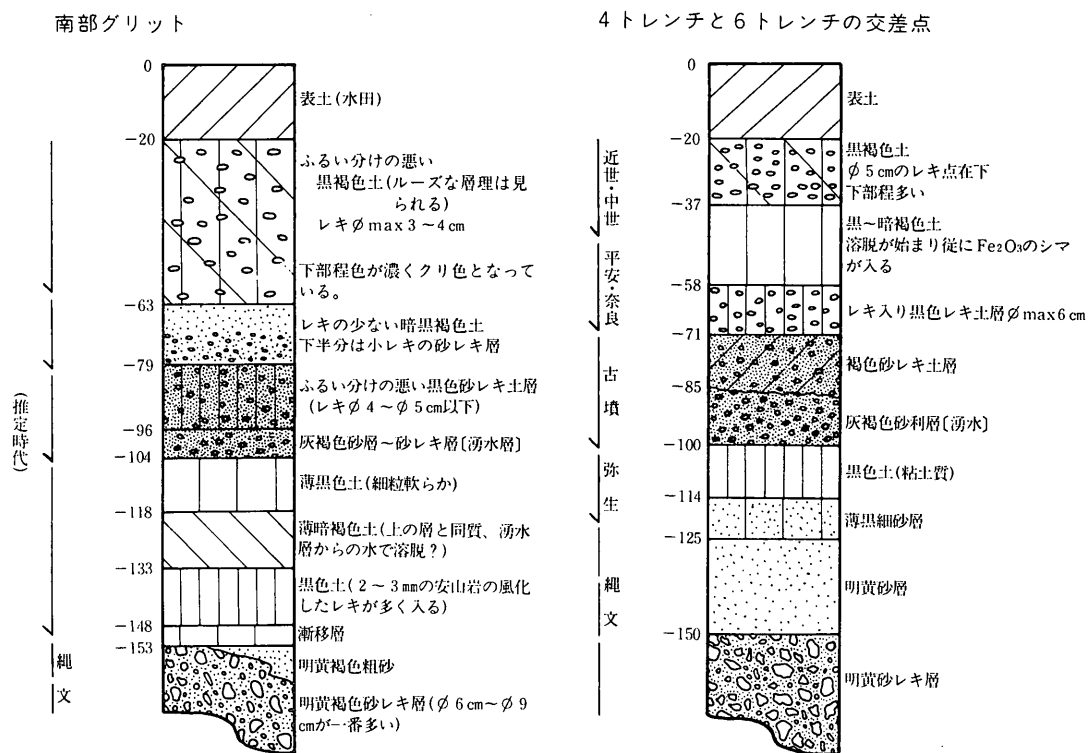
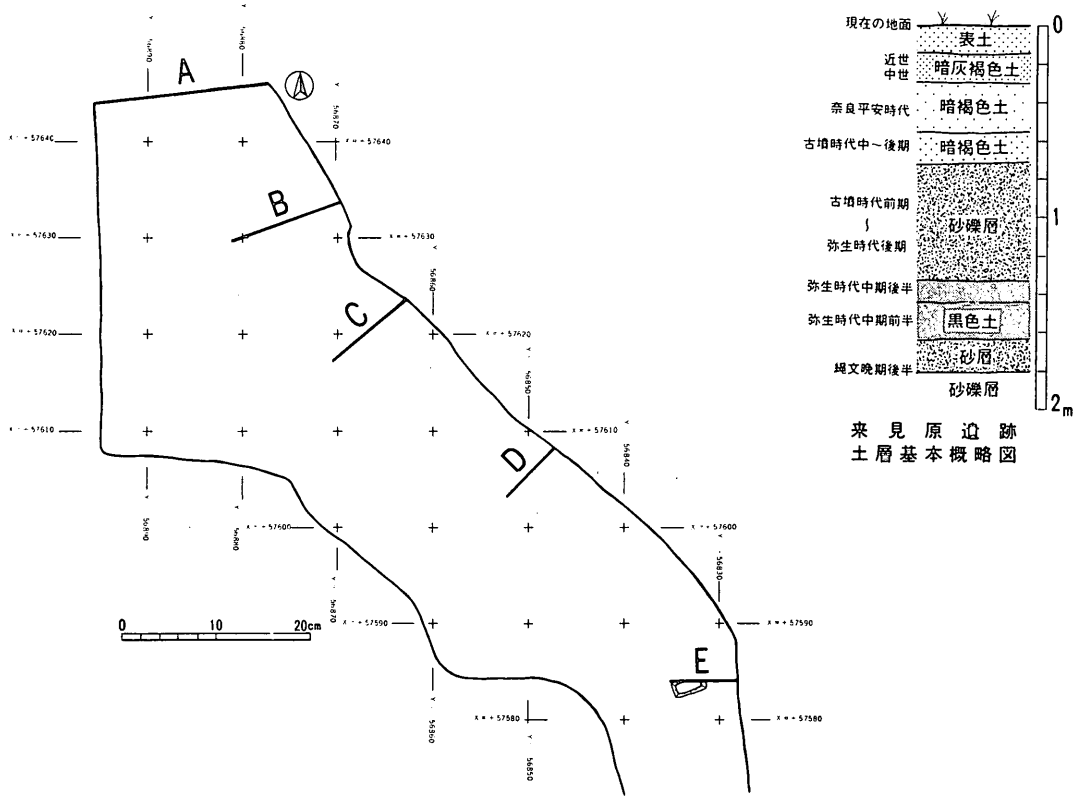
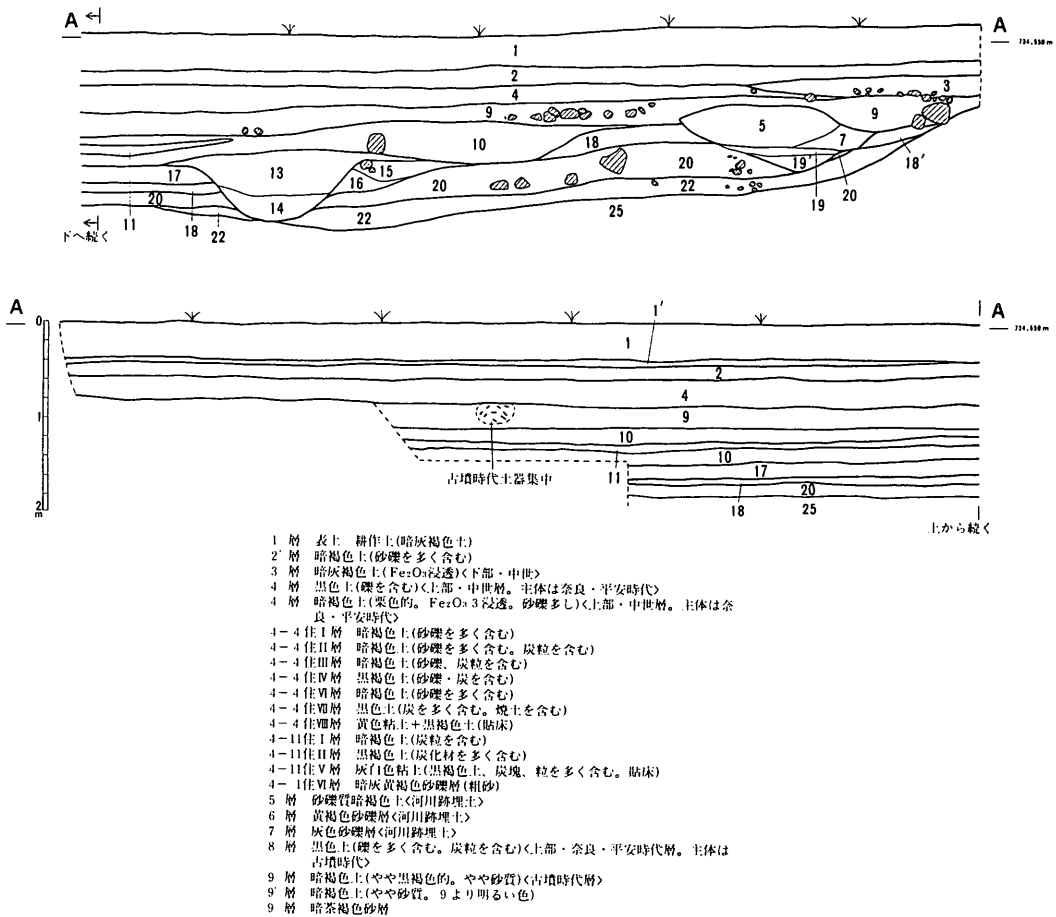


図7 南部トレンチ調査区土層柱状図

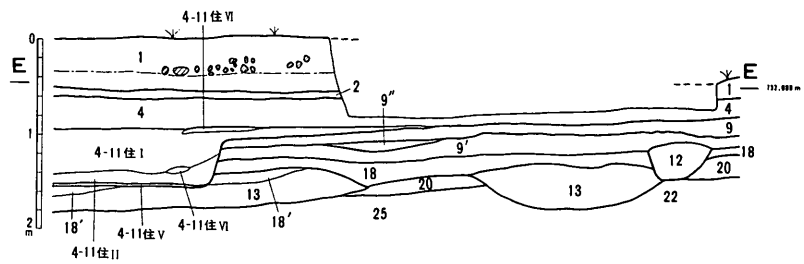
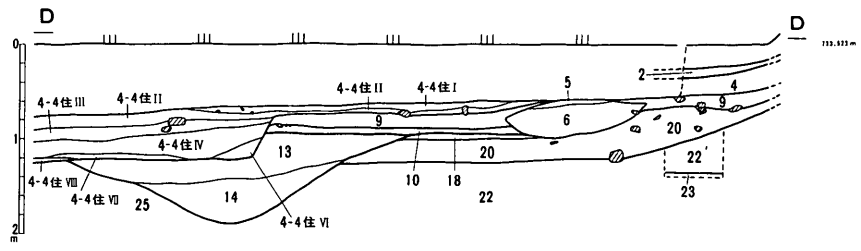
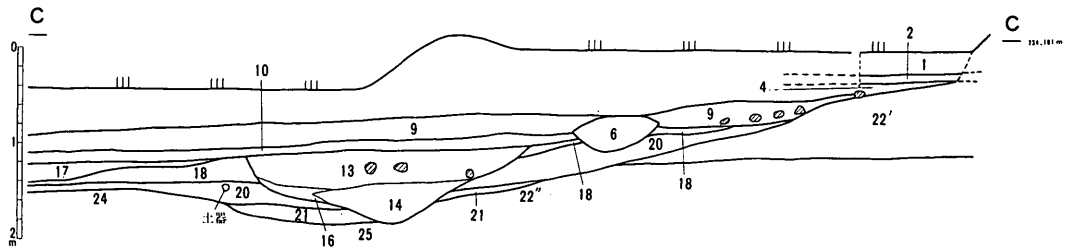
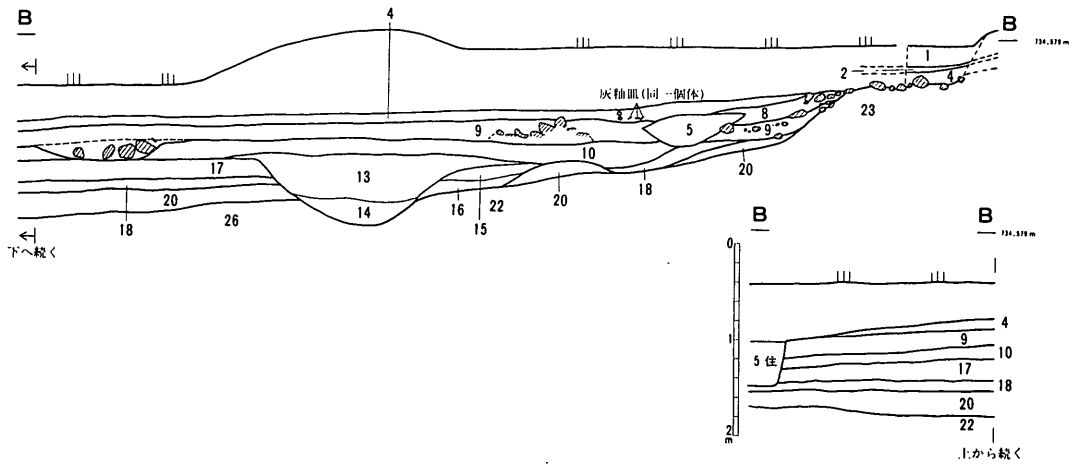


土層観察壁の位置図(1 : 800)



- 1 層 表土 耕作土(暗灰褐色土)
- 2 層 暗褐色土(砂礫を多く含む)
- 3 層 暗灰褐色土(Fe₂O₃浸透)下部・中世
- 4 層 黒色土(礫を含む)上部・中世層。主体は奈良・平安時代
- 4 層 暗褐色土(栗色の。Fe₂O₃浸透。砂礫多し)上部・中世層。主体は奈良・平安時代
- 4-4 住I層 暗褐色土(砂礫を多く含む)
- 4-4 住II層 暗褐色土(砂礫を多く含む。炭粒を含む)
- 4-4 住III層 暗褐色土(砂礫。炭粒を含む)
- 4-4 住IV層 黒褐色土(砂礫・炭を含む)
- 4-4 住V層 暗褐色土(砂礫を多く含む)
- 4-4 住VI層 黒色土(炭を多く含む。焼土を含む)
- 4-4 住VII層 黄色粘土+黒褐色土(貼床)
- 4-11住I層 暗褐色土(炭粒を含む)
- 4-11住II層 黒褐色土(炭化材を多く含む)
- 4-11住V層 灰白色粘土(黒褐色土。炭塊。粒を多く含む。貼床)
- 4-1住VI層 暗灰黄褐色砂礫層(粗砂)
- 5 層 砂礫質暗褐色土(河川跡埋土)
- 6 層 黄褐色砂礫層(河川跡埋土)
- 7 層 灰褐色砂礫層(河川跡埋土)
- 8 層 黒色土(礫を多く含む。炭粒を含む)上部・奈良・平安時代層。主体は古墳時代
- 9 層 暗褐色土(やや黒褐色的。やや砂質)古墳時代層
- 9 層 暗褐色土(やや砂質。9より明るい色)
- 9 層 暗茶褐色砂層

図6 来見原遺跡土層断面図(1 : 80)



- 10 層 灰色砂礫(粗砂礫質, Fe₂O₃が部分的に浸透)
- 11 層 暗褐色土(微細砂質, Fe₂O₃がわずかに浸透)
- 12 層 灰色砂礫(細砂多し)〈河川跡埋土〉
- 13 層 灰色砂礫(部分的に暗灰色・暗灰黄色)〈河川跡埋土〉
- 14 層 灰黄褐色砂礫(細砂多し)〈河川跡埋土〉
- 15 層 暗黄褐色砂(微細砂多し)〈河川跡埋土〉
- 16 層 灰黄褐色砂礫〈河川跡埋土〉
- 17 層 灰褐色砂礫
- 18 層 砂質暗褐色土
- 19 層 暗褐色土(砂礫を多く含む)
- 20 層 灰褐色砂礫(Fe₂O₃浸透, やや細粒)〈河川跡埋土〉
- 21 層 灰黄褐色砂礫(粗砂+小礫)〈河川跡埋土〉
- 22 層 黒色土(AからEに向かうに連れて漆黒的になる)〈上部・弥生時代中期後半層。中～下部・弥生時代中期前半層〉
- 23 層 黒色土(明褐色砂を含む)
- 24 層 黄褐色砂(細砂主体)〈下部より縄文時代晩期末の遺物出土〉
- 25 層 明褐色砂礫(頭大～拳大の礫多く含む)
- 26 層 明褐色砂層(細粒砂質)
- 27 層 暗褐色土
- 28 層 灰褐色砂礫
- 29 層 黄褐色砂礫

第2節 周辺の遺跡

来見原遺跡の西側を流れる農具川は、青木湖に源を発し、木崎湖から流出して大町市の東部を南流し、社地区で高瀬川に合流する。水温は高く、水流も四季を通じて変化が少く、その水は、灌漑用水として大いに利用され、流域の広い水田をうるおしてきた。この川の流域に住んだ人たちの生活跡である遺跡が、次第に明らかになってきており、旧石器・縄文時代から、中世にいたる遺物が検出されて、現市街地の成立以前、農具川流域から東山々麓一帯にかけて点々と村があったことがわかってきている。

農具川の流域には、湿地帯に名づけられることの多い「花見」という地名が大町地区三日町から社地区にまで広がっていることが示すように、かつてはこのあたり一帯は湿地や、それに近い状態のところが多かったと思われる。このような地域は、弥生時代の人々が先ず開拓して水田とした場所と予想される。そして、段丘の縁に近い微高地などは、居住地として利用されていることが多かったと思われる。今回の調査地もこのような条件下で営まれた場所の一部として考えられる。そして、弥生時代の遺跡は農具川に沿った地区に集中しているのは大町市における特徴でもある。このような場所では、弥生時代の遺物ばかりでなく、その後の土師器や須恵器も出土するところが多く、さらに中世にまで及んでいる。

本遺跡の背後及び借馬の東山尾根上に数基の古墳が群となって存在する。すべて高さの低い円墳である。採土のために破壊された来見原1号古墳の所見によれば、無石郭の木棺直葬が主体と思われる。

古墳・奈良・平安時代・中世の遺跡は段丘全面及び平地に広がっており、この時代の人口の増加や集落の発展があったものと考えられる。以下、本遺跡の周辺遺跡を概述する。(図8)

1. コボレ沢遺跡

木崎集落の東方、農具川左岸山中の西向きの谷一帯にある。旧石器時代の石刃が1点出土している他、縄文時代草創期～中近世に及ぶ遺物が出土しており、小さい谷ながら各時代の各時期に渡る長期間、継続した遺跡である。

2. トチガ原遺跡

コボレ沢遺跡の南、農具川左岸の山麓段丘・谷・テラス地形などの地形上に見られる遺跡群。A・栃の木原遺跡・羽黒山遺跡、C・茶臼山遺跡・羽黒山遺跡、その他B・D・Eの各地区に分けられると思われるが、各所から遺物の出土が見られる。縄文時代早～晩期、弥生時代中期、平安時代の遺跡である。A地区の段丘下は1980年、ほ場整備事業に伴う農具川の河川改修時に立ち合い調査が行なわれ、縄文時代晩期後半氷式の時期の住居跡1軒と多量の土器、石器が出土した。また、B地区では山道を作る時に縄文時代早期押型文土器とともに、焼けた石が固まった遺構(集石炉)があったという。

3. 狐久保1号古墳・2号古墳

木崎集落の南東方、農具川左岸の尾根上に約20mの間隔をあけて築かれている。2基とも円墳で、石室は確認できないことから、木棺直葬と思われる。1号古墳は、尾根の先端にあり、径15m、高さ1.3m。

2号古墳は、尾根のやや後方にあり、径10m、高さ1.3m。

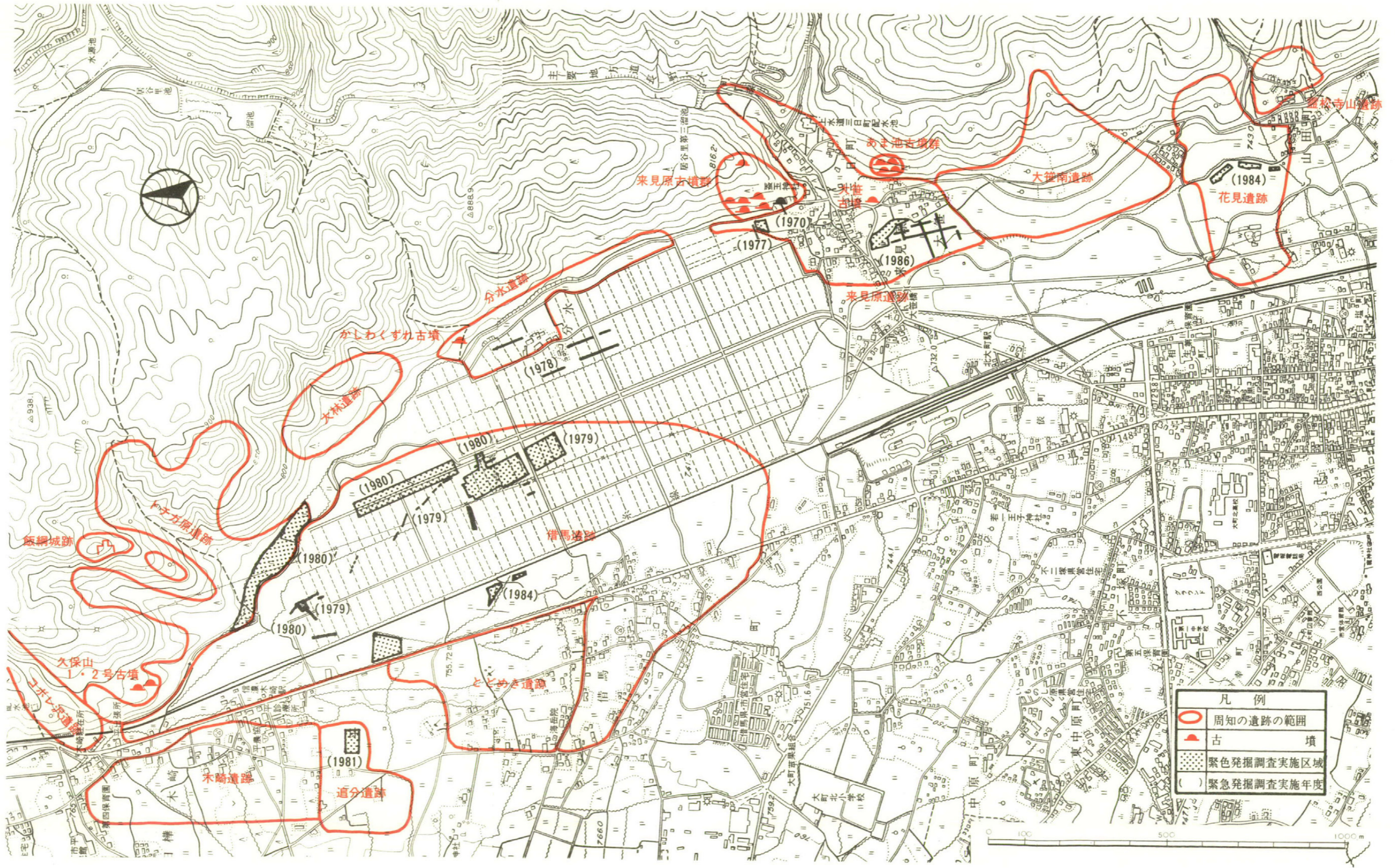


図8 来見原遺跡周辺の遺跡 (1 : 10,000)

4. 飯網城跡

借馬地籍の北東端、木崎集落の東方にある尾根先、独立丘状のピークに築かれた中世山城である。曲輪が二箇所には造られている。また、尾根の下方にもこれに関連した施設があったと考えられる。

5. 木崎遺跡

鹿島川扇状地の末端、森城跡の南側にある。平安時代と思われる土器片、中近世の陶器片が出土している。木崎駅の南西、大北農協平支所の裏手に大法寺（大沢寺の前身の寺といわれる）という寺があったといわれる伝承が残る。

6. 追分遺跡

鹿島川扇状地末端、借馬集落と木崎集落の間にある。古墳時代～平安時代・中近世の遺物が出土している。1981年（昭和56年）は場整備事業の事前調査として緊急発掘調査がなされ、中世頃と思われる。集石をもつ土壙や柱穴が検出された。また、この遺跡は、借馬遺跡と一体となるとも考えられる。

7. とどめき遺跡

借馬集落の西部、鹿島川扇状地末端にある。平安時代の土器が出土している。この遺跡も追分遺跡と同様に借馬遺跡と一体となる可能性が考えられる。

8. 借馬遺跡

鹿島川扇状地末端に広がる低地性の弥生時代後期～平安時代・中近世にかけての大集落遺跡。1979～81年（昭和54年～56年）・1984年には場整備事業の事前調査として北～東部が調査され、住居跡87軒、建物跡39棟などが検出された。この遺跡はかなり広範囲であるが、端から端まですべて住んでいたのではなく、砂地の土地の良好な場所を選び集落を造っていたらしい。調査した場所からも農具川が分水した河川跡や鹿島川から流れてきた河川跡が所々から検出されている。おそらく調査しない場所も調査範囲内と同じく分水した河川と水害のありそうな場所を避け、点々と集落を成していると予想される。この遺跡は出土住居や建物跡の数から村上郷（大北地方の奈良・平安時代の呼び名）の中心として考えられている。

9. 大林遺跡

大町地区分水集落の北方、借馬遺跡の東方の東山中腹のテラス地形上にある。かつて土地の人が炭を焼くために穴を掘ったところ、縄文時代早期の楕円押型文土器が出土している。

10. 分水遺跡

来見原遺跡の北方、東山山麓にある。従来、下分水遺跡、清水遺跡、あれば遺跡、かしわくずれ遺跡とされていたが、山麓の地続き、同じ性格の遺跡であることから一括した。縄文時代早・前期、平安時代、中・近世の遺跡である。小遺跡がいくつか重なっているとも考えられる。

11. かしわくずれ古墳

かしわくずれ古墳は山際よりやや上った小テラス地形上にある。径9m、高1mのやや楕円の円墳である。

12. 来見原遺跡

今回調査対照となった遺跡で、東山から流れ出る居谷里沢の出口、沢が形成した小扇状地上にある。従来は来見原遺跡、大笹遺跡、山の神遺跡に分けられていたが、同じ小扇状地上にあり、同じような性格の遺跡であることから一括した。旧石器時代、縄文・弥生・古墳・奈良・平安時代、中近世まで通しての長期間続いた大規模な遺跡である。ほ場整備事業に伴って1977年（昭和52年）と今回、南北の両端を緊急発掘調査が行なわれた。1977年の北側調査で、遺構は平安時代の集石（図9）しかなかったものの、弥生時代、平安時代の遺物が得られ、今回の調査では、弥生時代中期の集石、古墳時代の集石、古墳時代住居跡1軒、奈良・平安時代住居跡12軒、中世の建物跡・火葬墓などが検出され、弥生時代～中世の多量の遺物が出土し、大遺跡である一端を覗かせた。

図10、4は1977年度調査の確認調査時に出土した弥生時代後半期末か、古墳時代初めの東海地方欠山式系統の高杯である。5は以前に借馬・故丸山好一氏により採集された平安時代須恵器の把手付壺である。

13. 大笹古墳

大笹古墳は、居谷里沢左岸扇状地扇端の段丘上端、来見原遺跡範囲の中央やや南にある。径11m、高さ2mの円墳で、上部には道祖神が建てられている。墳丘は、墓地、道路などにより崩れて半壊している。昭和17年横にあった木の根を掘った時、剣が1本出土した（図10、1）。剣の形から見て古墳時代中期（5世紀後半頃）のものと考えられる。

14. 来見原古墳群（来見原1～6号古墳、山の神古墳）

来見原集落の東方、山腹のテラス地形から山頂にある。現在、円墳が7基確認されているが、まだ他にもあるという話があるが確認できなかった。しかし、周囲にあることが期待される。このうち1号古墳は土採り工事により破壊された（1970年（昭和45年）緊急発掘調査）。

1号古墳は、現在ほぼ全壊しているが、径15m・高さ2mの大きさと、刀子（図10、3）が出土した。また周囲から直刀が出土したという話も聞かれる。石室及び埋葬施設も確認されておらず、木棺直葬と考えられた。2号古墳は、1号古墳の北にあり径8m・高さ1m。3号古墳はその北側にあり径13m・高さ1mで、直下の堰から直刀（図10、2）が出土している。4号古墳は2号墳の上部にあり径6m・高さ1m。5号古墳はその北側にあり径5.5m・高さ1m。6号古墳は3号古墳上方にあり径10m・高さ2m。山の神古墳は1～6号古墳のある上方、ほぼ山頂にあり、7基中最大で、径13m・高さ2mである。山の神古墳は立地などから見て、7基の中でも最も古いタイプのものと考えられる。これらの古墳は、1号古墳同様に石室は確認されず、あま池古墳群同様に木棺直葬と考えられる。また古墳群は、1号古墳の刀子、3号古墳の直下出土の直刀、山の神古墳の立地などから見て、古墳時代中期～後期はじめに造られたと考えられる。

15. あま池古墳群（あま池1～4号古墳）

大笹古墳の東側、山際のテラス地形上で、現在、白山社の祠が祀られている周辺にいる。小規模な古墳群で、現在円墳が4基確認されている。

1号古墳は、4基中で最も大きく、径7m、高さ2.5m。2号古墳は、径7m、高さ1m。3号古墳は径7.5m、高さ1.5m。4号古墳は径7m、高さ1m。4基の古墳とも石室をもたない、埋葬者を棺に入れその

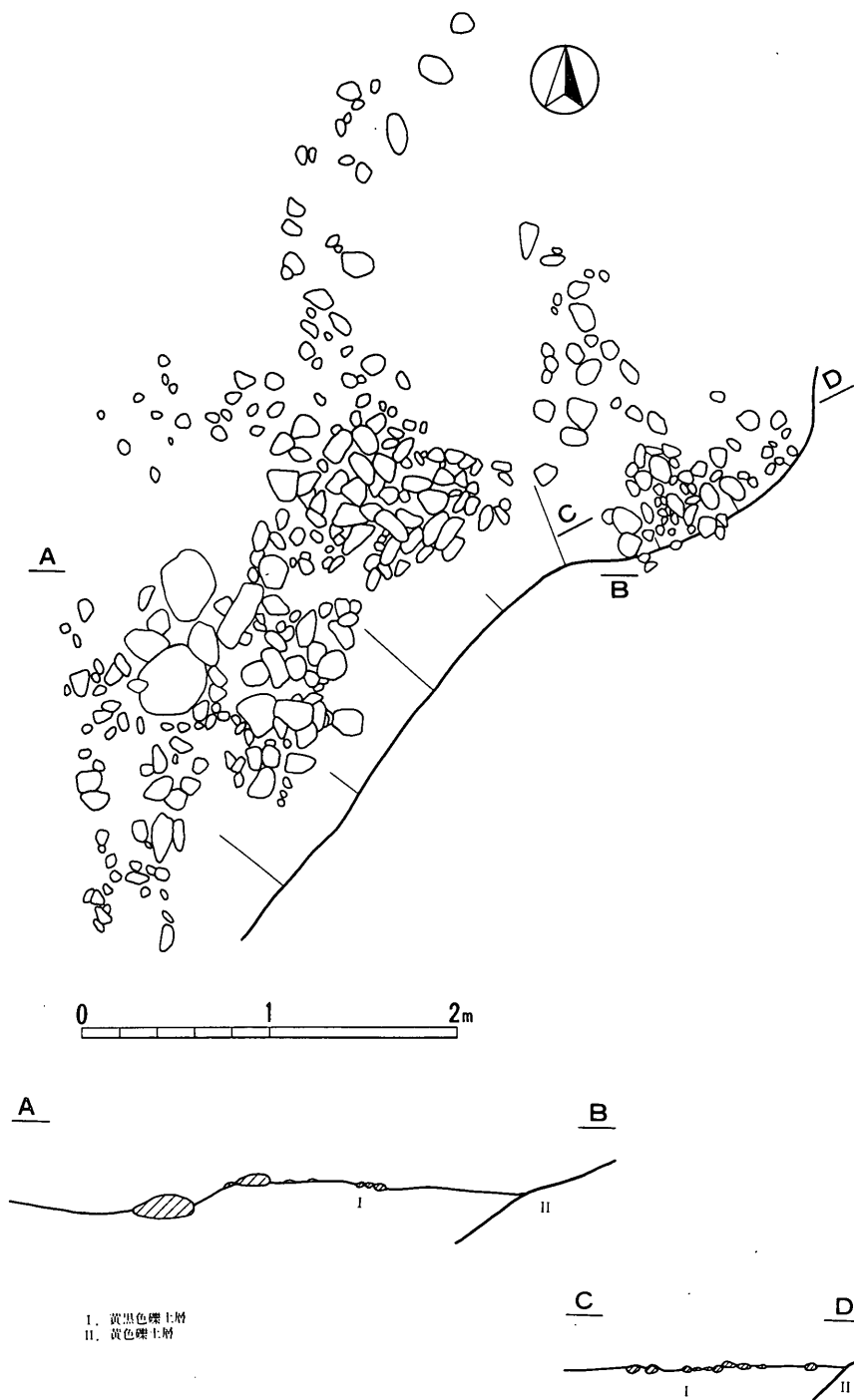


図9 1977年度調査区内集石（1：40）

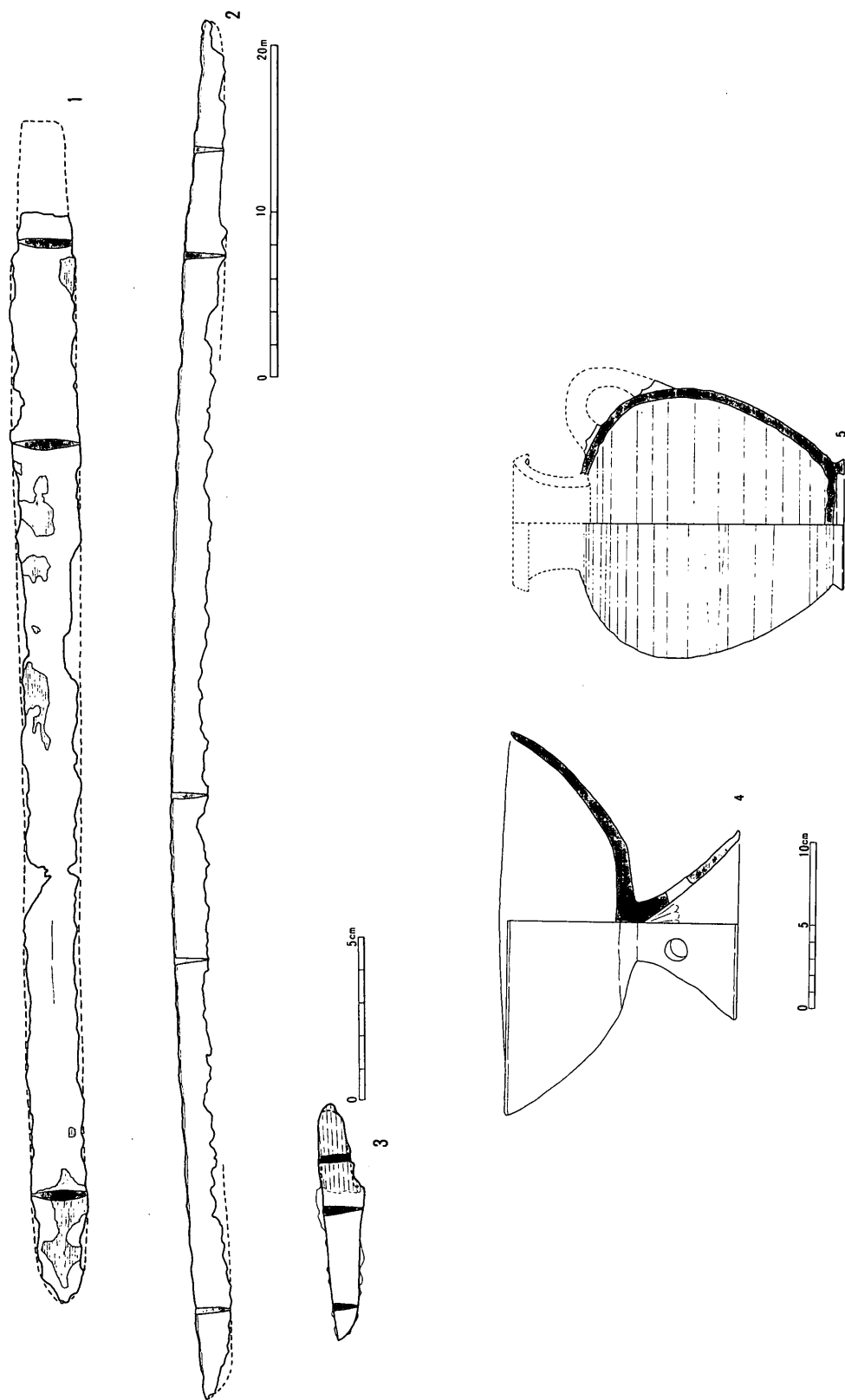


図10 来見原遺跡既出遺物及び周辺古墳既出遺物（1・2・4・5—1：1、3—1：2）

まま埋め、土を盛った木棺直葬と考えられる。

16. 大笹南遺跡

霊松寺山麓、農具川左岸の段丘上にある。平安時代・中近世の遺物が出土している。また縄文時代の遺物が出土したことがあるというのが詳細は不明である。

17. 花見遺跡

市街地の東側、農具川に沿った地域である。農具川をはさんで右左両側から遺物の出土が見られることから右岸と左岸に分かれ、遺跡があるものと推定される。1984年（昭和59年）には場整備事業に伴って、左岸の段丘下が緊急発掘調査され、平安時代の住居か作業小屋と思われる竪穴1軒と水田に係ると思われる堰のような溝跡1本、遺物が集中する場所が2ヶ所検出された。

18. 霊松寺山遺跡

霊松寺山の山麓から上った西向きのテラス地形上にある。すぐ北側には、八徳沢が深い谷を形成して流れる。越遺跡・山田町遺跡とも呼ばれたこともある縄文時代早強～中期・晩期の遺跡である。

（島田哲男）

第三章 遺構と遺物

第1節 調査の概要

来原遺跡は、東山から流れ出す居谷里沢の扇状地上の緩斜面上に立地する旧石器時代～中近世まで通した長期間に亙る遺跡である。今回の調査対照地は、この南東部にいたり、縄文時代晩期末～中近世の遺物包含層が重複し、各時代の生活面がほぼ分けることができる重層構造となった遺跡で、各種の遺構とそれらに伴う多数の遺物を検出した。

表土層下の暗褐色土上部は、中世の生活面層が確認でき、部分的に開田時に破壊されているが、村の西端部分と思われる竪穴、建物跡、柱列、火葬墓、土壇、ピットなどに伴ない、土師器・青磁等の遺物が検出された。その下層の暗褐色土層下部は、奈良・平安時代の生活面層で、あまり鮮明には線引きできないものの奈良時代と平安時代が遺構面で分けることができ、竪穴住居跡12軒と土壇・ピット・集石などの遺構に伴う遺物が検出された。特に焼失住居・それと思われる住居が半数あることは注目され、平安時代末の資料の存在は、社地区五十畑遺跡に次ぎ大北地方の古代～中世への変化を知る上で重要と思われる。この下層の暗褐色土は古墳時代層であり、祭祀的と思われる集石・列石とともに多量の土師器それに伴った古式須恵器の存在は重視され、須恵器跡などの存在、発掘区東側が高くなっていることなどから、古墳が削平されてしまったものとも想定できる。この下層は、弥生時代後期～古墳時代前期の河川堆積により形成された砂礫層であり、扇状地上を横切るように流れた河川跡検出され、この河川が何らかの理由により人為的に造られたものと想定できるものであった。この下層黒色土は、弥生時代中期の包含層で、上部が後半、中～下部が前半と生活面が分けられた。この黒色土層は南部に至るほど漆黒色が強くなり、南部は湿地であった傾向が強く、北部は生活面の一部で、本来の集落は東側上部にあったと予想される。遺構としては集石・列石・ピットが検出されたものの、その性格ははっきりとしないが、焼土を伴った配石の存在は生活跡としての一面を覗かせてくれた。出土遺物は多量であり、これら遺物は廃棄されたものが主でと思われるが、弥生中期前半の資料は松本平でも屈指の資料であろう。また、この下層の砂層には縄文時代晩期末の資料が確認された。また、トレンチ調査区(図11)からは、何箇所もの小河川跡と湿地に形成されたとと思われる黒色土・黒褐色土の存在があり、水田跡は検出できなかったものの、その可能性を思わせた。

第1次調査(1977(昭和52)年)の北端調査結果を考え合わせれば、弥生時代中期前半においては、南北端の両側に生活を営み、中期後半になると南側が中心となり、後期には北側にその中心が移り、古墳時代には、周辺及びここに古墳やそれに関係した祭祀場が設けられ、それを造営する集団が遺跡内のどこかに集落を営み、奈良時代になると集落が南側部分から再び造られるようになり、平安時代には遺跡全体にわたって集落が形成され、中世に入ると文献に登場するような「胡桃原」「大さゝ」の村々が形造られたものと想定される。

今回の調査の遺物で特に注目されるのは、弥生時代中期前半の遺物群と古墳時代の古式須恵器(5世紀後半～6世紀初頭)を伴う土器群で、この地方の様相を探るのに良好な資料を提供したといえよう。

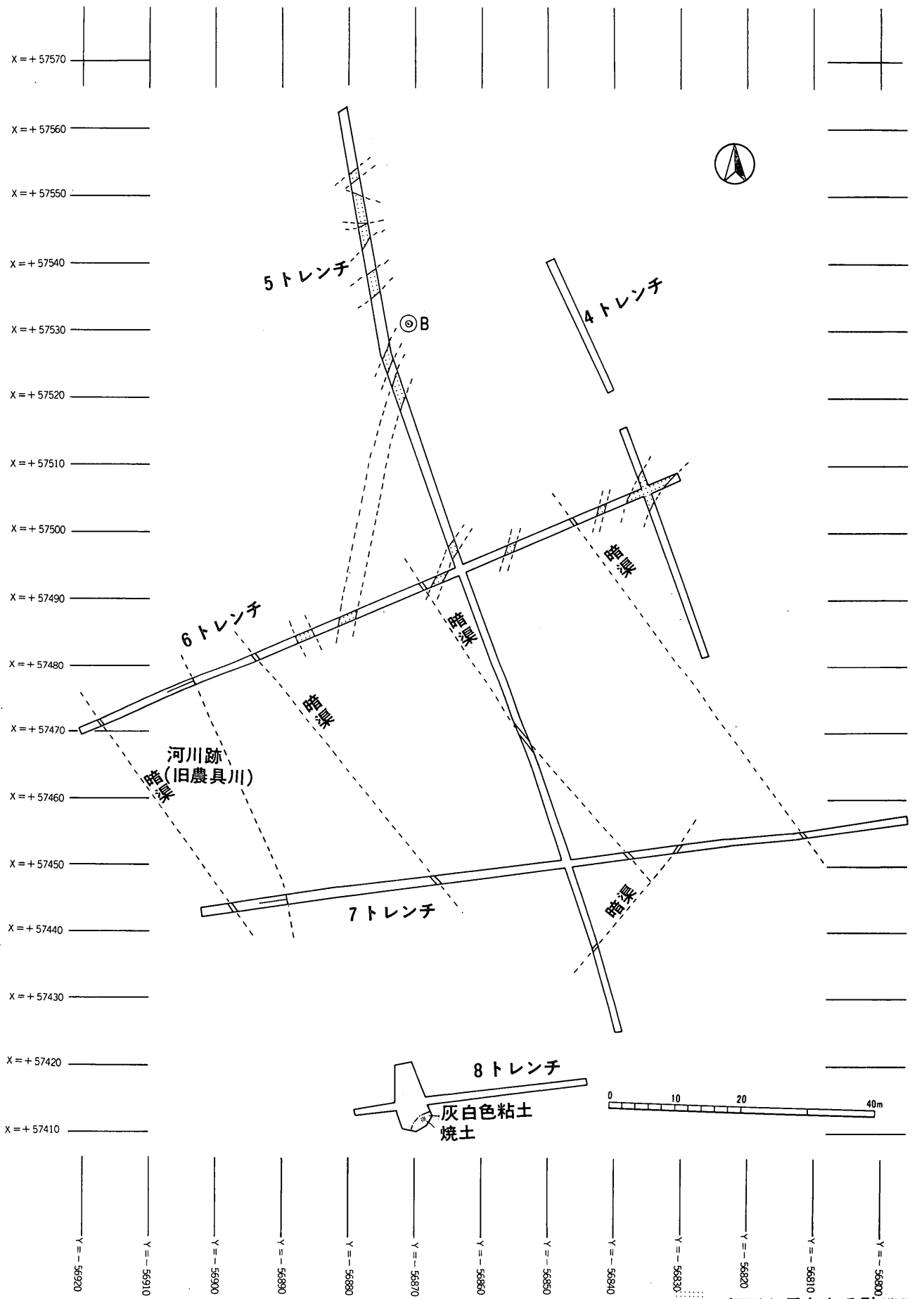


図11 南部トレンチ調査区 (1 : 800)

—河川と思われる砂礫層

第 2 節 縄文時代晩期の遺物 (図12)

弥生時代中期前半面終了時に、縄文時代晩期の土器片が数点検出された。確認グリットを入れ包含層を確認したところ、弥生時代中期前半面下10～25cmの黄褐色砂層中で量的にはさほど多くない包含層が確認された。この包含層は工事掘削範囲外となっており確認するにとどめた。

1は口縁部に3条の浮線を施し、胴上半部に浮線工字文を施した壺形土器である。2は深鉢の口縁部、3は東海地方壺王式系統と思われる壺形土器で、口縁端部に押圧をもつ降帯を、それ以下に条痕を施した大粒の砂粒がめだつ固い焼きである。3は胴下半に斜位の細かい条痕を施した深鉢片、4は撚糸文を施した深鉢片、5は縦位の条痕を地に曲線的な雷文を施した深鉢片、6は土製円板である。

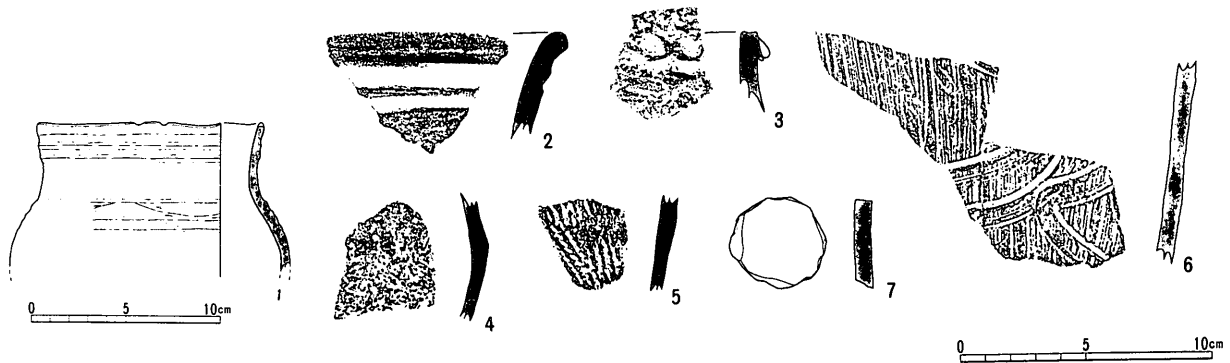


図12 縄文時代晩期末土器実測図(1:4)、拓影図(1:3)、土製品実測図(1:3)

第 3 節 弥生時代中期の遺構と遺物

弥生時代中期の生活面は弥生時代後期～古墳時代前期に流れたと思われる河川により所々削られたり、切られたりした状態で検出された。中期前半面についてはその河川跡に包含層が削られた部分は残して調査し、後半面については、上層調査時に掘った確認グリット5以外には遺構の存在、遺物の集中が認められず、確認グリット5を拡張して調査するにとどめた。前半・後半ともに遺物分布の主体が調査区東側にあることから、生活の主体は調査以外の東側にあるものと考えられる。

1. ピット (図14・15, 写真7・11)

礫を伴うP89(94×74cm・深さ30cm)・P90(80×52cm・深さ25cm)と、弥生確認グリット14で柱穴状のP91(24×24cm・深さ30cm)、P92(24×22cm・深さ30cm)が検出されており、いずれも中期前半に伴うものである。すべて、埋土は黒褐色土であった。

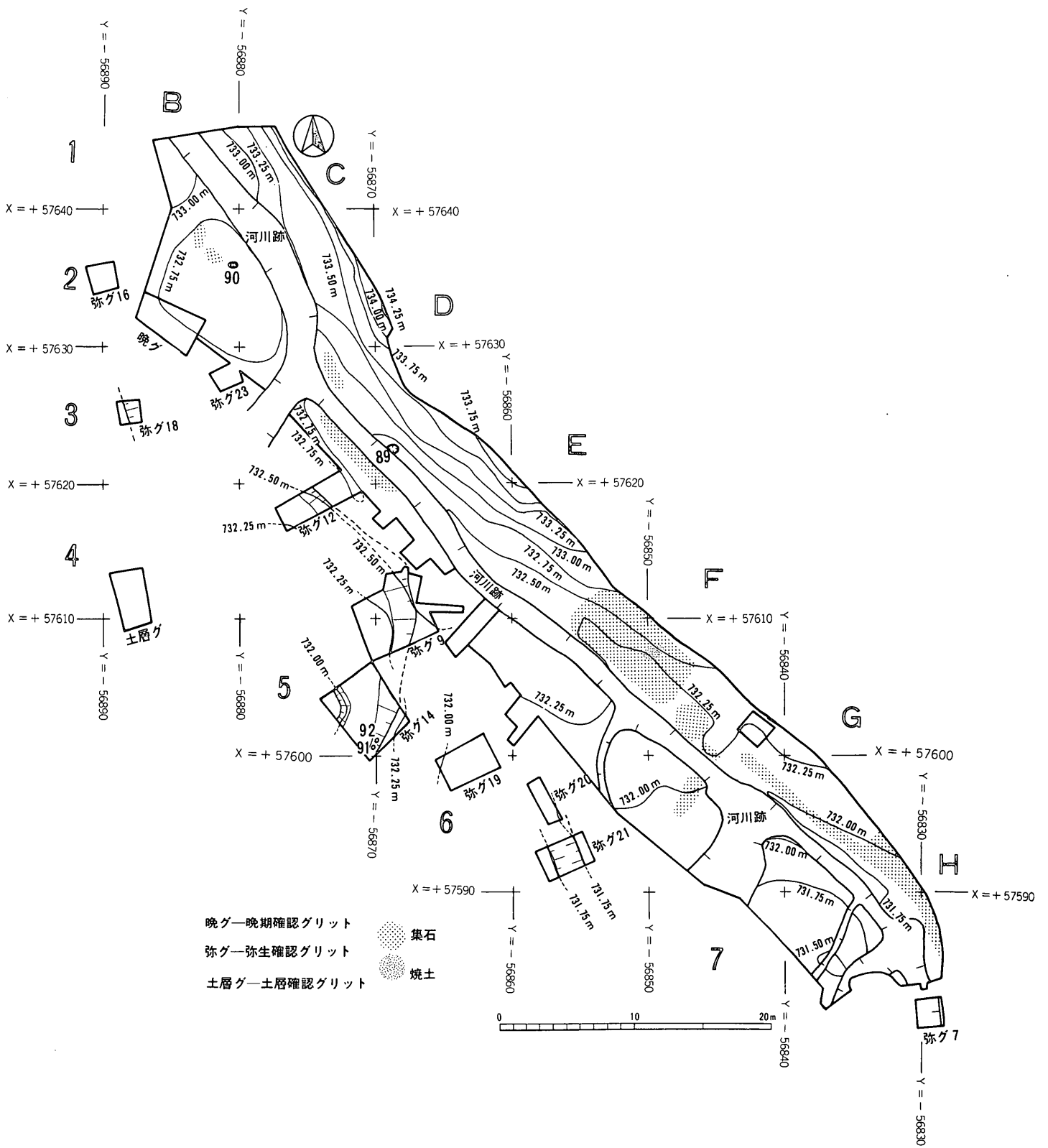


図13 弥生時代中期前半調査区全体図（1：400）

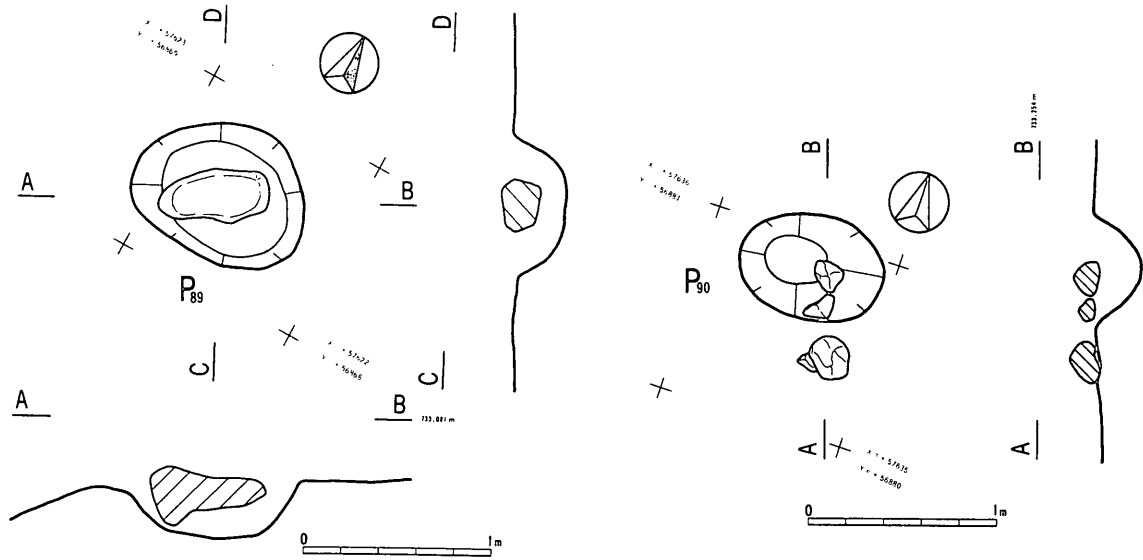


図14 弥生時代中期前半ピット P89・P90 (1 : 40)

2. 焼土・配石 (図16, 写真7・8)

E-5、F-5区の境、北側で検出された。配石は、1.9×1.25mの大きさで30ヶの人頭大前後の礫が比較的平坦面を上にして、不整形な弧状に並ぶ、その南端に接して1.6×1cmの範囲で焼土・炭を多く含んだ暗褐色土層が広がり、その中央附近に焼土が2箇所見られる。周囲には遺物が多く集中して見られた。周囲を精査したが柱穴等の施設は検出できなかった。この性格については不明であるが、生活の主体が調査区の東側と予想されることから、居住に関わる一施設と考えられる。

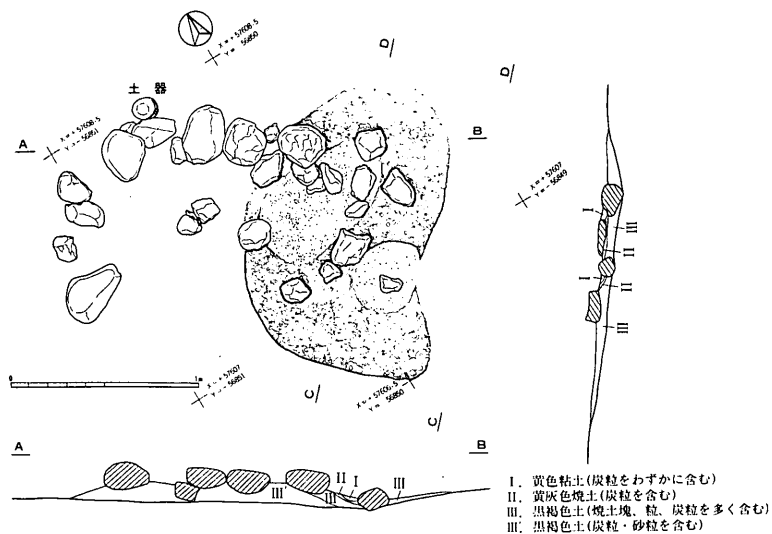


図16 弥生時代中期前焼土・配石 (1 : 40)

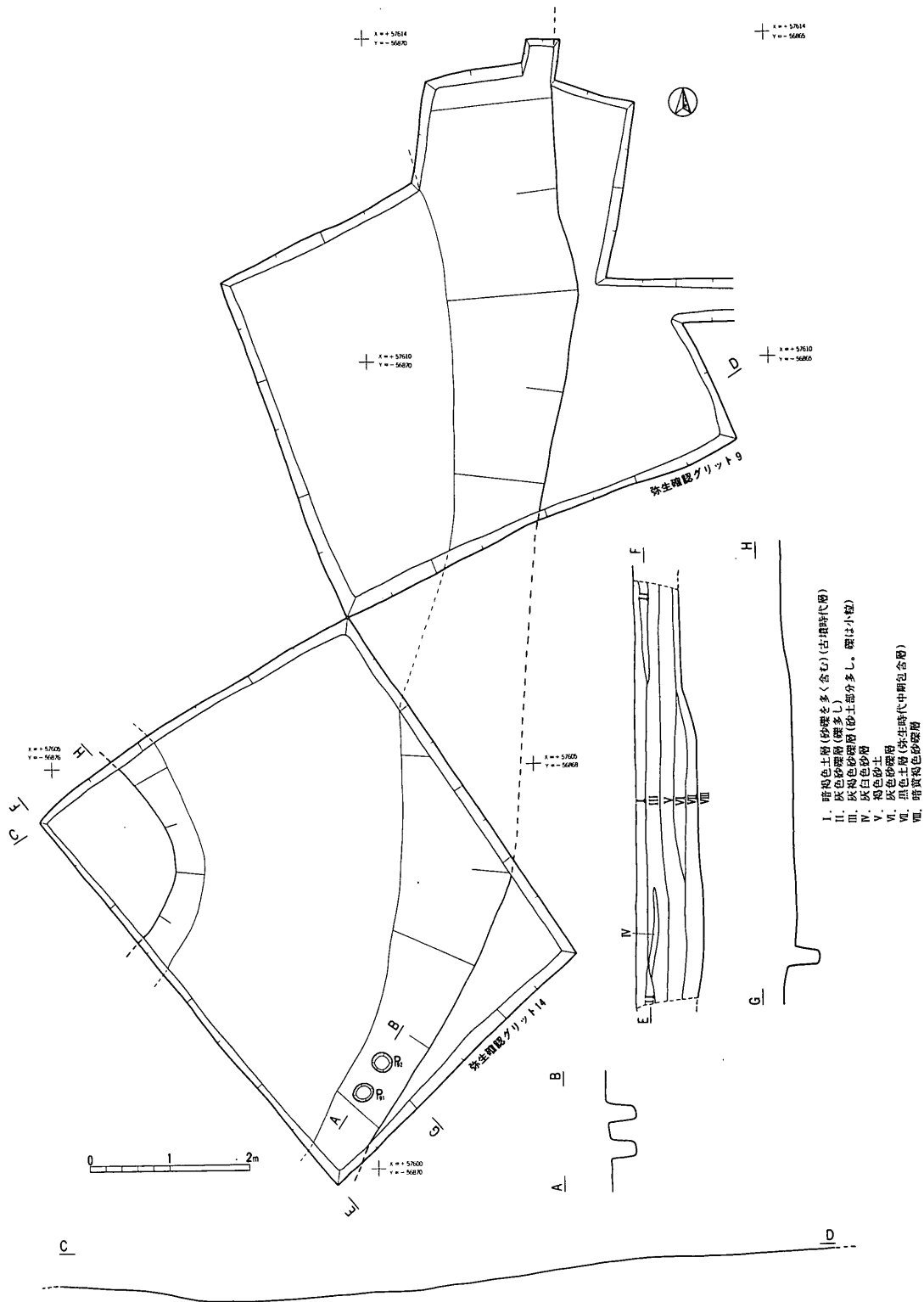


図15 弥生時代層確認グリット9・14 P91・P92 (1:80)

3. 集石・列石

(1) 中期前半の集石(図17~20, 写真8~11)

集石1~8までに大まかに分けられるが、礫が周囲に散在する部分もあるのですべてを含め群として捉えられると思われる。集石1~8まですべて、整った形のは少なく、掘り込みを伴うものは集石6のみであった。遺物は、包含層内といった形の散在したものが多く、集石1は礫とともに石皿が見られ、集石5の礫下部には壺の口縁へ頸部の完形品・集石8には炭火材が出土した。また、焼けたと思われるやや赤変化した礫が各集石に1~3ケ程度見られ、周囲に散在した礫にも焼けた礫が所々に見られた。性格については特殊な遺物も少なく、土器・石器が包含層と同様な形で出土しており、生活に関するものか、祭祀的なものかは不明である。

1) 集石1(図21, 写真8)

B-2区北側で検出され、150×70cmの楕円形に36ケの挙大~人頭大前後の礫が集められている。礫中には石皿も有り、無頸壺・甕の大破片が出土している。

2) 集石2

集石1とP90の中間にあり、100×80cmのほぼ円形に17ケの挙大~人頭大前後の礫が散在する。特に遺物は見られなかった。

3) 集石3(図20, 写真8)

C-3区北東側で検出され、300×90cmの長楕円形に50ケの挙大~人頭大前後の礫が散在する。甕の大破片が中央部附近より出土している。

4) 集石4(写真8)

C-3区南東側で検出され、250×80cmの範囲に26ケの礫が散在する。礫の集中度はまばらであるが、南側の集石5にかけて礫が散在しており、集石5までいくつかの集石が続いていた可能性がある。礫の中には磨石が見られた他は、特に遺物は伴出していないが、検出面北側に甕・壺の大破片が見られた。

5) 集石5(図21, 写真8・9)

C-3・4、D-3・4区の接点南側で検出された。径64cmの円形に20ケの挙大~人頭大の礫が集められている。東端の礫下から壺の口縁へ頸部の完形品が出土している。また東側には、人頭大の大礫、遺物が多く集中して見られ本跡に関係するものとも考えられる。

6) 集石6(図21, 写真9)

F-5区の南東側で西部を河川跡に切られた状態で検出された3.5×2.7mの楕円形に180ケの挙大~人頭大の礫が散在する状態で、深さ30cmの掘り込みが下部に見られる。掘り込み内の埋土は、炭粒を含む黒褐色土の単層であった。

7) 集石7(図21)

集石6の南側で検出され、80×70cmの範囲に15ケの挙大~人頭大の礫が集められている。伴出遺物は特に見られなかった。

8) 集石8(図22, 写真9)

集石5・6の西側、F-6区北側で検出され、3×1mの範囲に78ケの挙大~人頭大の礫が帯状に集められている。帯状の東側部分に礫が組み合うような部分が見られる。東端近くには20×6cm、厚さ3cmの炭火材が出土した。南東約5mにある列石にはほぼ直角に交わるような位置にあり、礫の状態も列石に近似しており、列石に関係する集石とも思われる。

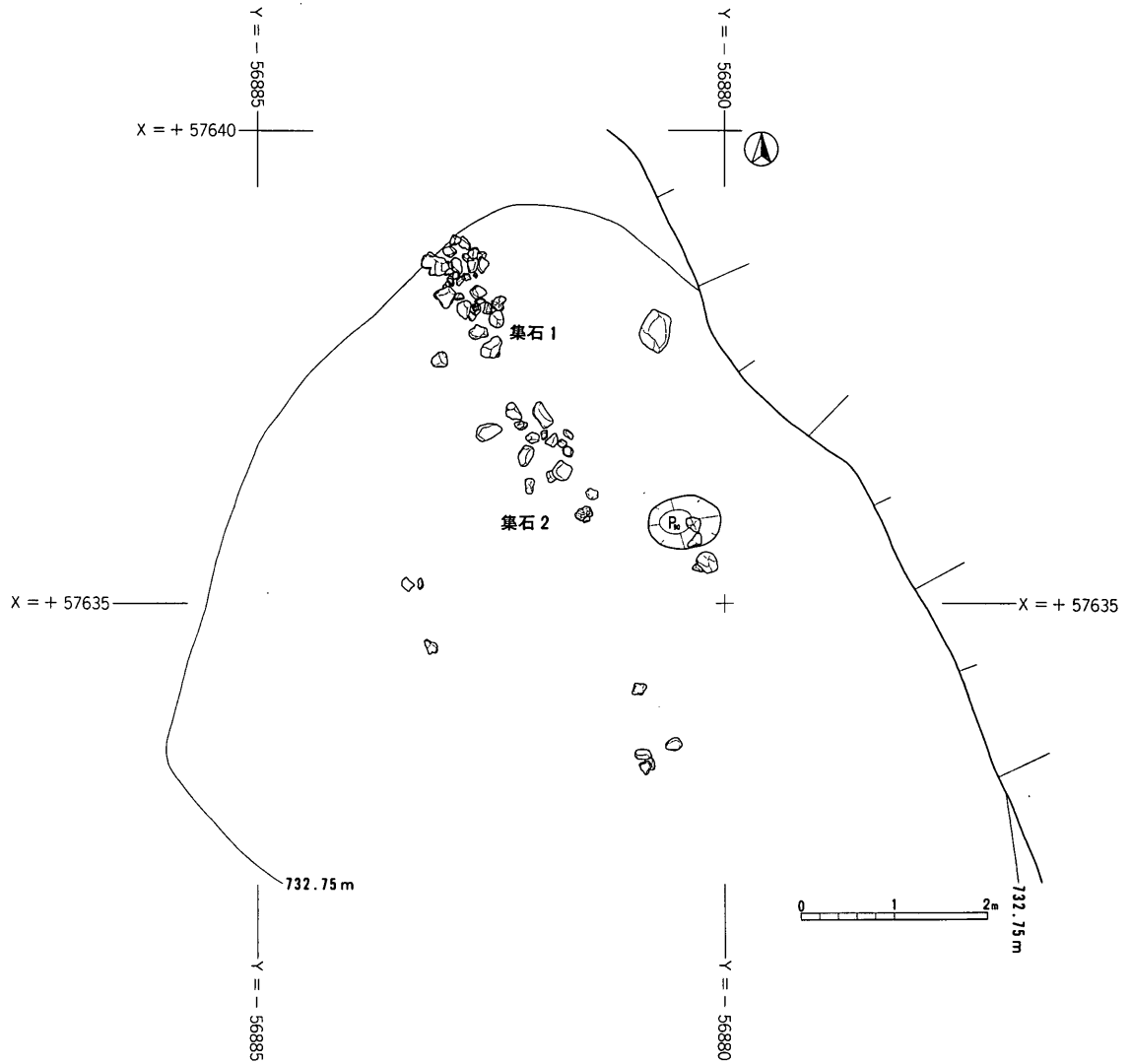


図17 弥生時代中期前半集石全体図(1) (1 : 80)

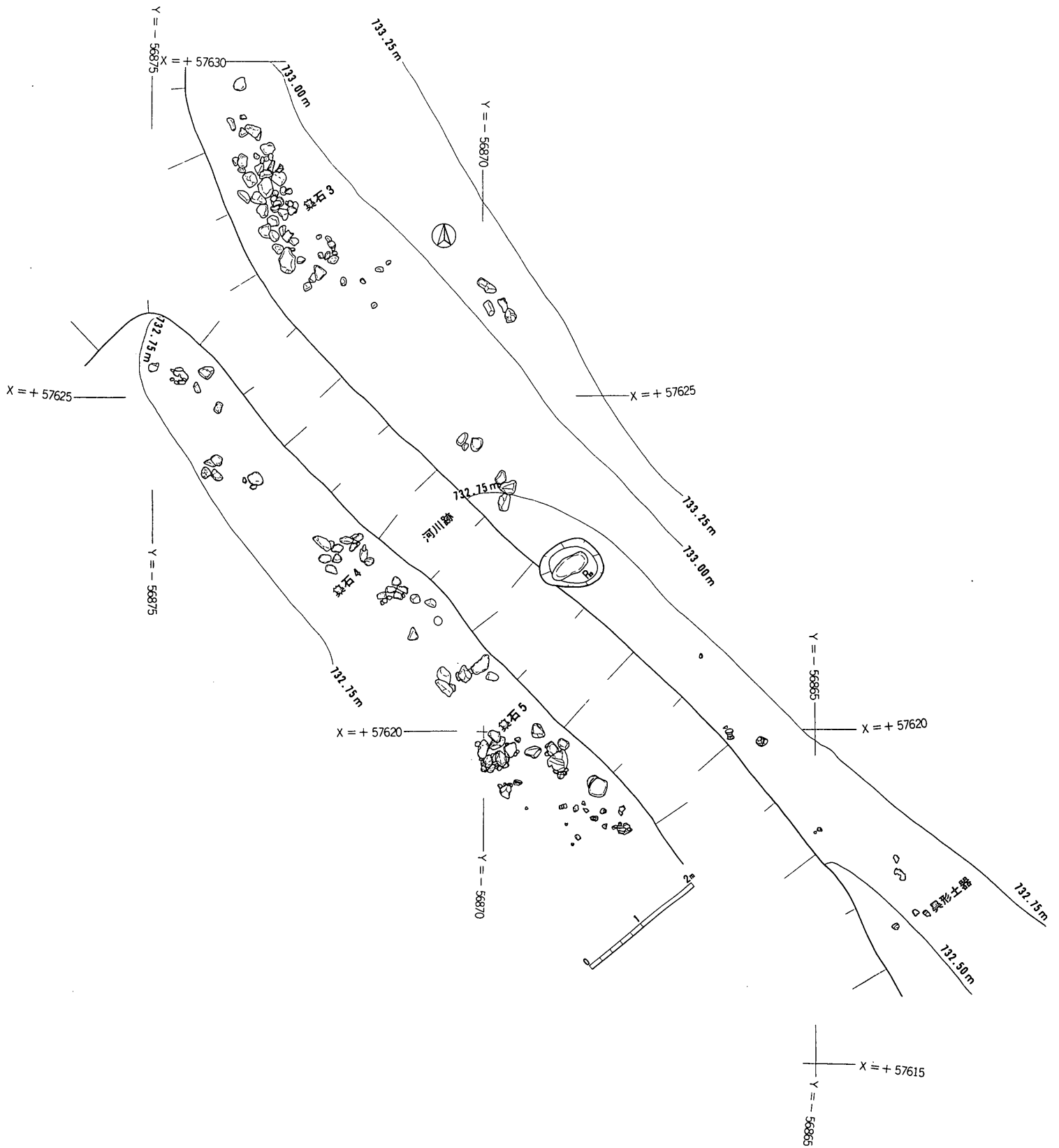


図18 弥生時代中期前半集石全体図(2) (1 : 80)

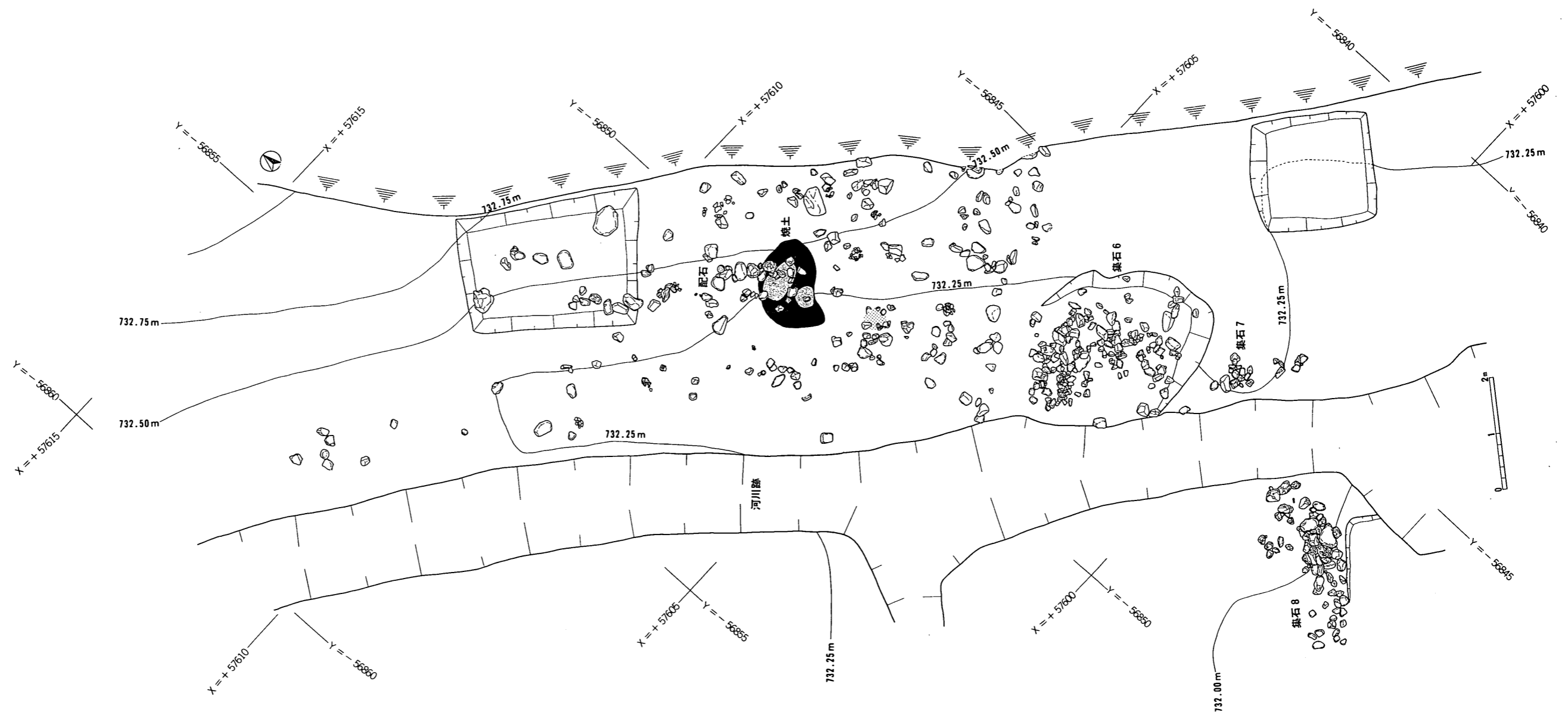


图19 弥生時代中期前半集石全体图(3) (1 : 80)



图20 弥生時代中期前半集石全体图(4) (1 : 80)

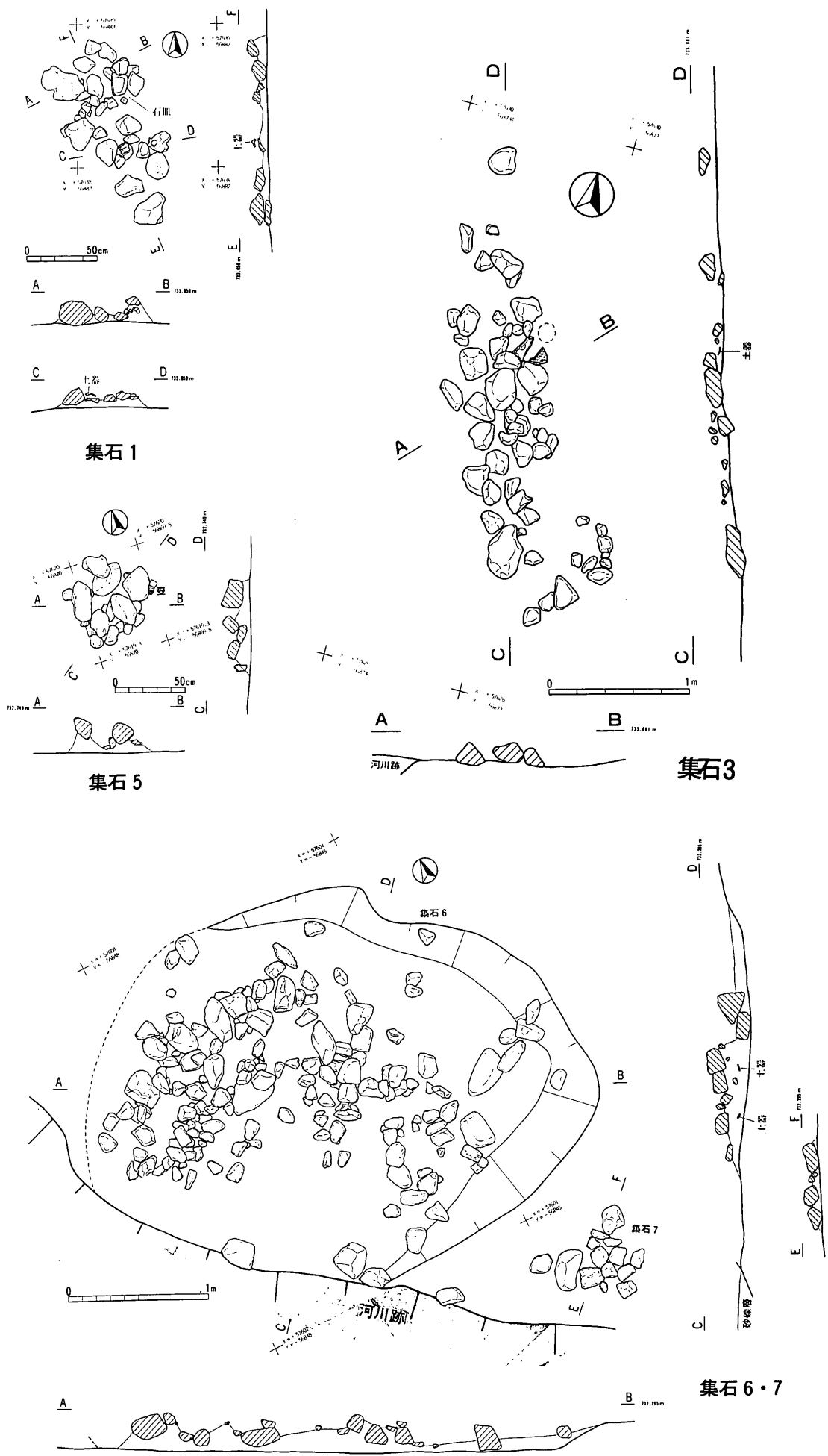


図21 弥生時代中期前半集石(1) 集石 1・3・5・6・7 (1:40)

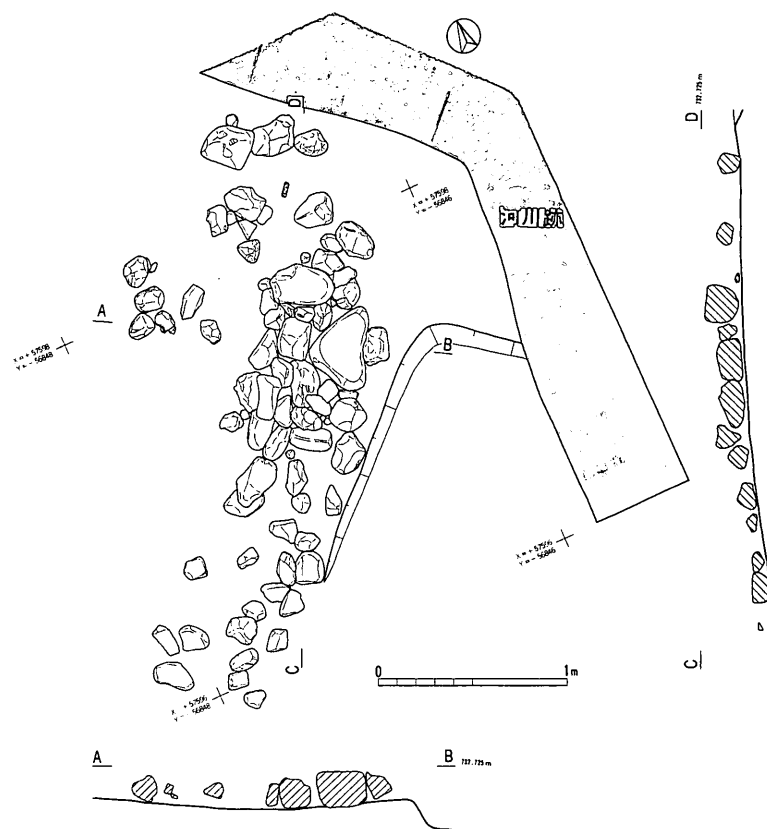


図22 弥生時代中期前半集石 集石8 (1:40)

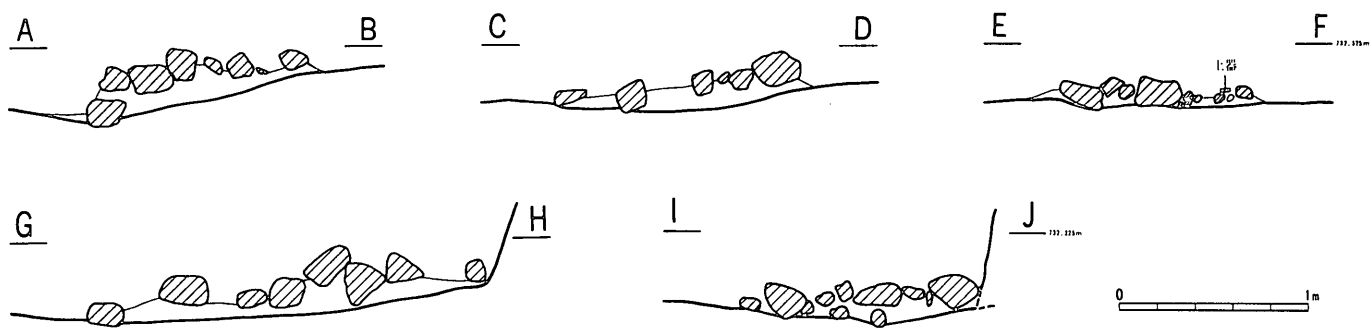


図23 弥生時代中期前半列石断面図 (1:40)

(2) 列石 (図19・23, 写真9～11)

F-6区東端、G-6、H-7にかけて、長さ18m、幅1～2mの範囲で検出され、調査区外、南東側へ続いていくものと考えられる。礫は拳大～人頭大のものが多く、大きいものでは40cm大のものも有る。石の積み方は、平均的に整のっておらず、集めてただ積んだといった形であるが、南側へ向うほど幅が広く、礫の集中度が増す。中央部附近の礫間には灰白色粘土が部分的に見られ、鹿の骨片が集中する部分も見られ、周辺及び、集石を覆う黒色土、集石上や内部からは多量の遺物が得られた。しかし、集石を覆う黒色土は礫表面が黒くなるほどの漆黒色土層で当時は湿地であった可能性が高い。この性格については不明であるが、湿地に造られた何らかの施設と考えられ、遺物についてのほとんどは、ここへ廃棄されたものと考えられる。本跡周辺の等高線は調査区外に入り込むような形になっており、浅い小さな谷的な地形であったと予想される。土層が湿地的な漆黒色土であり、本跡と集石8はほぼ直角に交わる形で、あることから、列石西側は後世の河川により大半が荒らされた状態であり、はっきりとしなかったが、当時の水田に関わる区画的なものとも推定することもできる。

(3) 中期後半の集石 (図24, 写真13・14)

弥生時代確認グリット5 (拡張時に2m区画で、1～10に分けた。) で検出された。下層20～30cmには中期前半の列石検出面がある。礫が集中する箇所は南北2つのブロックに分けられ、この東側調査区外に続く可能性もある。集石の礫内には、焼け石もいくつか見られた。北側ブロックは礫が浮くものが多く、礫下部に土器が多く見られたが、南側ブロックのものは生活面と思われる面に比較的貼り付いた様な状態で、遺物も礫上面に多く見られた。両者とも下部に掘り方等は確認できなかった。この集石のある黒色土層は、下層の漆黒色土とはっきりとは区別できなかったがやや黒みが薄い感じであり、この集石が造られた時点では湿地的な状態がある程度、治まっていたと考えられる。この集石の性格ははっきりとしないが、出土遺物は一般的なものが多く、生活に関係した何らかの施設であったと考えられる。

4. 河川跡 (図15, 写真11)

弥生確認グリット9・14・18、21で検出され、河川内の黒色土層下部より弥生時代中期の摩滅の少ない土器片等遺物が出土した。砂粒も少なく、湿地の黒色土といった感じであり、比較的緩やかな流れであったと思われる。グリット14では河川東側にP91・92の柱穴状のピットが検出されており、これに関係したピットと思われる。河川の幅はグリット14で3.8～4.5m、グリット21で2mであり、深さは15～30cmとなだらかな底の断面形である。黒色土上には灰色砂礫層がレンズ状に見られるが、これはこの河川が埋まった後に凹を流れた河川の堆積物と思われる。

5. 遺物出土状況 (図25～27)

中期の遺物は、下層黒色土が包含層となっており、上部が後半、下部が前半となっている。この黒色土は前半と後半であり差は認められず、上部に至るほどやや黒みが薄くなる程度であったが、弥生時代確認グリットにおいて遺構面 (集石と列石) が2面検出することができ、どうにか分層が可能となった。平均して黒色土層は30～50cmであったが、上部の10～20cmは中期後半 (粟林式期層)、下部20～30cmは前半層 (寺所・阿島式ないし新諏訪町式期層) と判断された。しかし、東側に向かってだんだんと地形が高くなっており調査

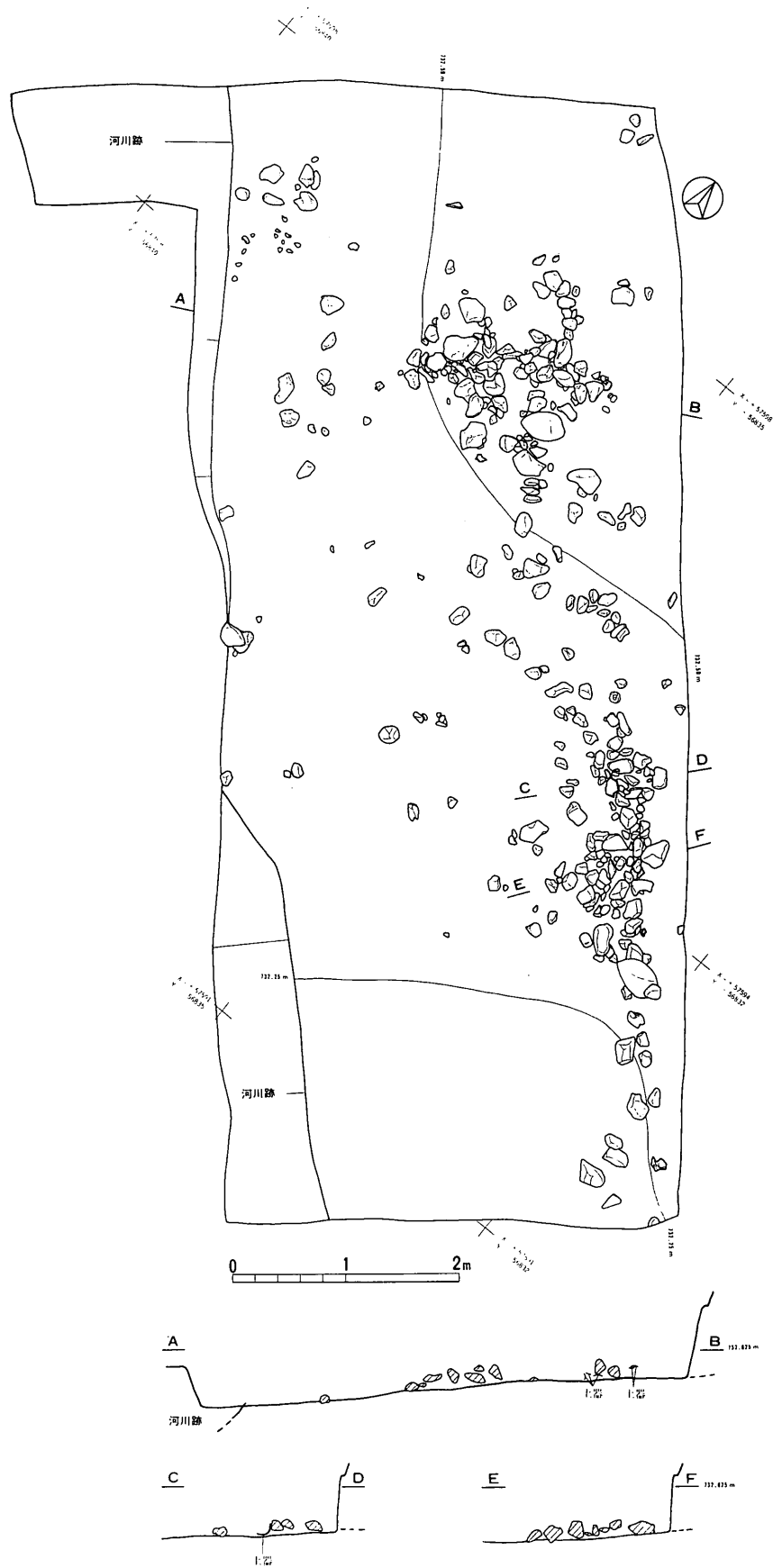


図24 弥生時代層確認グリット5、弥生時代中期後半集石(1:60)

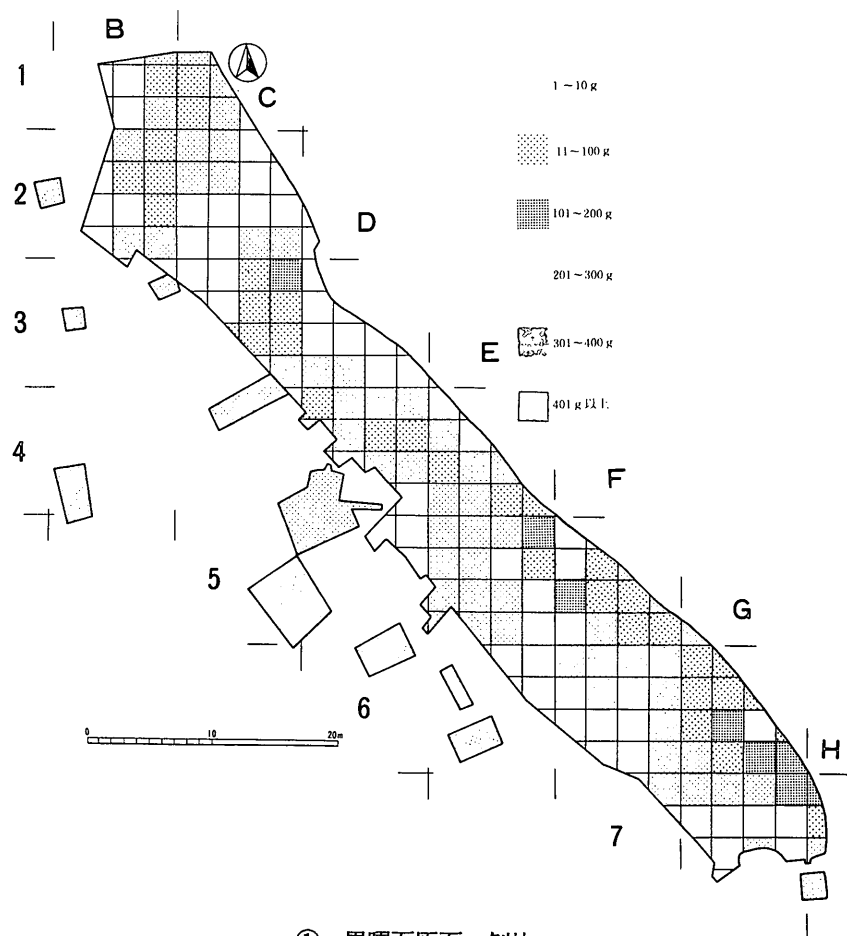
区の北半分の東端では包含層がだんだんと薄くなり、中世～弥生時代まで同一化し初めており、おそらく1段高い調査区外東側では包含層が同一層となっているものと考えられる。また、遺物出土量が調査区東側で少なくなっているのも包含層が薄く同一化しているからと考えられる。

前半層の遺構としては、前記した、ピット、配石・焼土、集石が検出されている。土器、剝片（黒曜石、硅質頁岩・その他）、石器の出土量及び分布を見て見ると調査区内で出土量の多い箇所が、①B-1・C-1、②C-3・D-3南西部・D-4北部、③E-4南東部・E-5東部・F-5、④F-6東部・G-6・H-7北部の4グループに分けることができる。そして、①には集石1・2、P90が、②には集石3～5、P89が、③では配石・焼土が、④では列石が検出されており、それぞれに遺構と関係しているものと思われる。特に④は、焼土の存在と多くの遺物の存在から居住圏の一部施設と予想される。しかし、包含層遺物は、斜面を降りた位置にあること、湿地性の漆黒色土が堆積する（特に調査区南側、④グループ）ことなどの条件から、その多くは廃棄された遺物と考えられる。そして、調査区東側に地形が高い線に沿って遺物の散布が多いことから、居住圏は、すぐ東側の高い地形上にあると予想される。

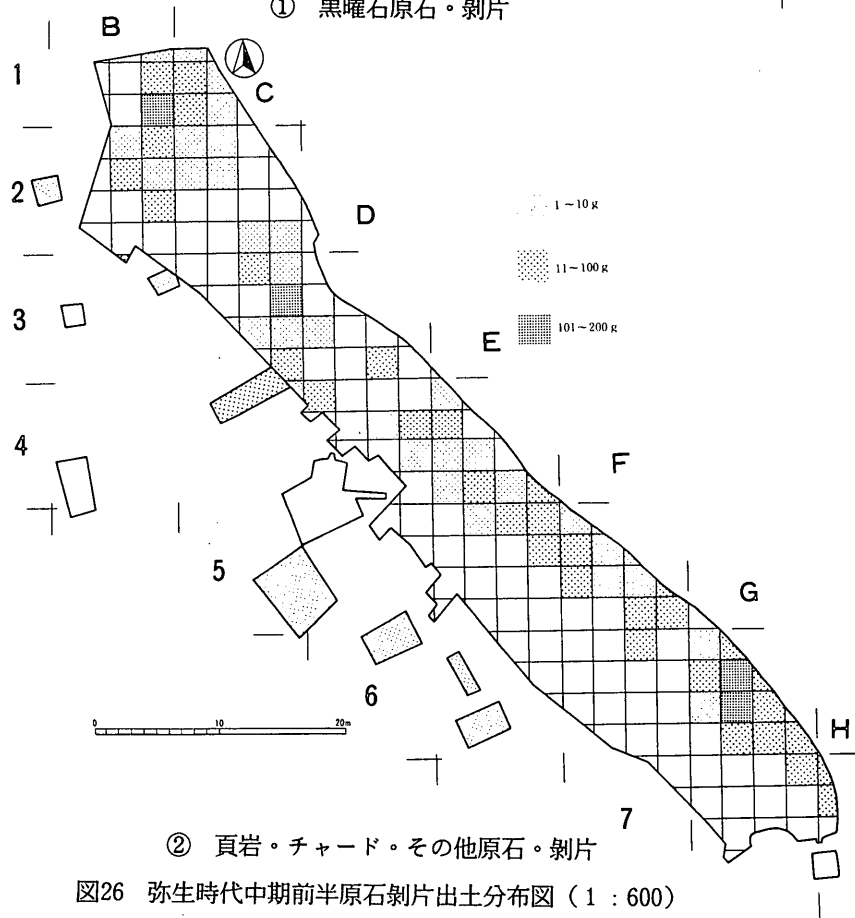
後半層の遺構としては、前記した集石のみであったり、集石が検出された確認グリット5で遺物の集中が認められた他は、包含層がなかったわけではないが、数点の遺物が検出されるのみでごく少量の遺物であった。確認グリット5は調査区の東端に設定したグリットで、前半と同様に主体は東側にあると思われる。



図25 弥生時代中期前半土器出土分布図（1：600）



① 黒曜石原石・剥片



② 頁岩・チャード・その他原石・剥片

図26 弥生時代中期前半原石剥片出土分布図 (1 : 600)

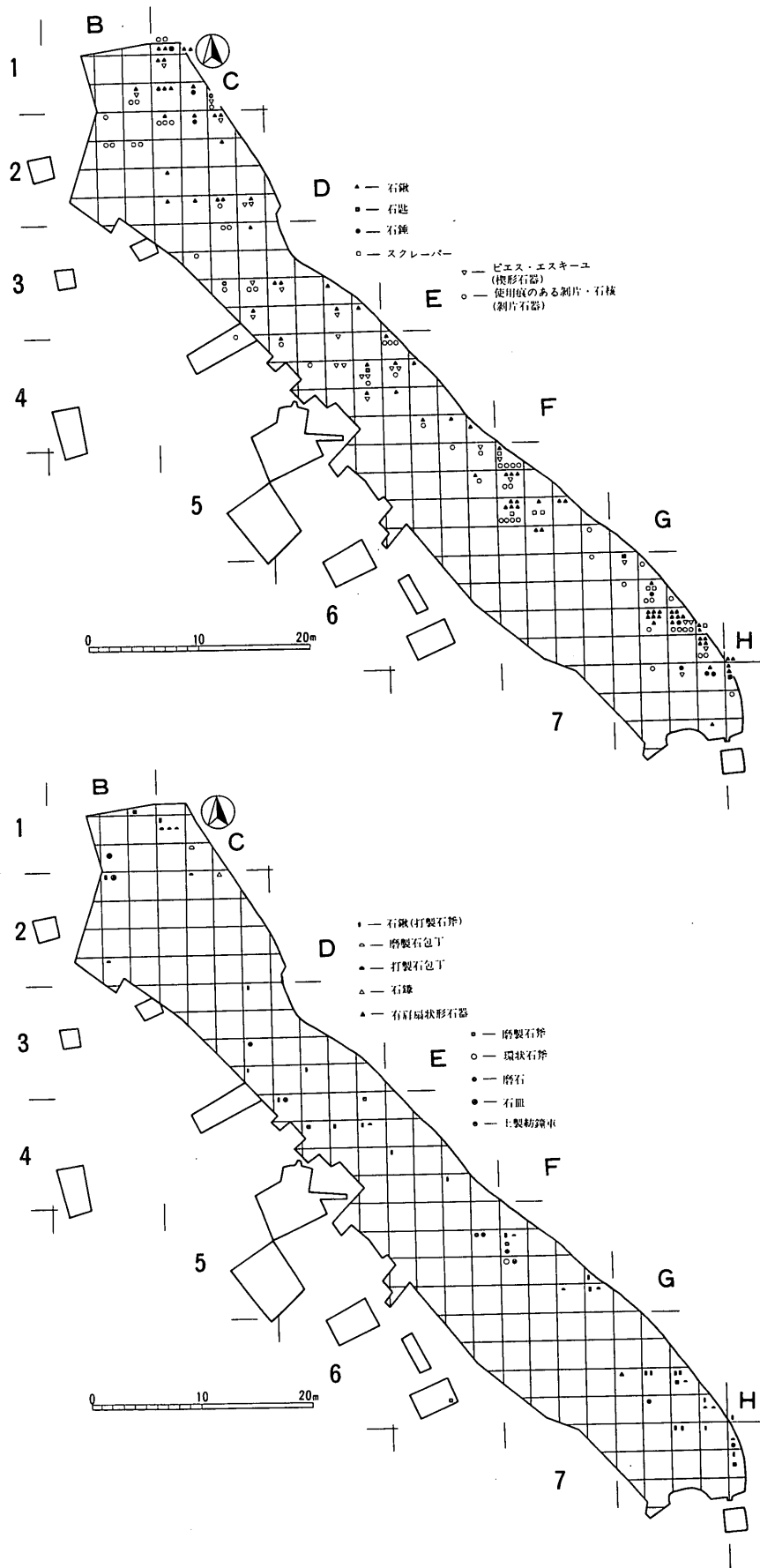


図27 弥生時代中期前半出土石器分布図(1:600)

6. 遺物

出土遺物は多量に有り、時間的制約等の種々の制約の中で、すべてを提示することが難かしく、土器はごく一部のみ、石器はまったく提示できず分析できなかったことをお詫びし、了解願いたい。これら遺物については、いずれ機会を見て、報告・提示したいと思う。

(1) 土器

1) 中期前半の土器 (図28~38, 写真42・43)

今回出土の弥生式土器はおよそコンテナに20箱前後有る。器種は甕、壺 (細頸、広口、無頸)、異形土器があり、主体は甕・壺で、異形土器は特殊な土器である。

甕 (図28~34, 写真42)

口縁部文様帯と胴部文様帯が分けられるものと分けられないものがある。主体となる文様としては、条痕文系 [縦位・横位・斜位] (1~61、67~81、83~86、422)、条痕文系 [縦・横羽状] (87~132、423)、櫛描文系 [直な波状・曲線的な波状] (133~223、425~429)、櫛描文系 [縦・横位の直線] (62~66、82、424)、刺突文 [櫛・竹管] の土器 (224~233)、沈線文系 (234~244)、縄文系 (245~249)、八ケ目のみの土器 (250~251)、無文 (252) に分けられ、253~265の条痕文系、266・267の八ケ目の施された土器であるが胴下半部片であり、上部に何が施されるのか不明であるので一応分けた。

甕で特徴的に多いのは口縁端部に見られる押圧文、櫛、竹管による刺突文で、約80%ぐらいのものはこれらを施したり、口縁を波状的にしたりしている。そして、施文工具としては太い櫛状工具が多く条痕の工具もほとんど櫛状工具を使用している。

壺 (図34~37, 写真42・43)

細頸壺・広口壺・無頸壺に分けられるが、器形の細分は、口縁部のあるもののみとし、主体的文様で分けた。268・269は細頸壺、270~273、は広口壺、274・275は無頸壺である。

主体となる文様で分けると、縄文系 [沈線・刺突文・条痕文・櫛描文等の文様が組み合わさる。] (268・270~273・276~343)、条痕文系 [櫛的なものも有る。部分的に縦羽状になる。] (344~363)、条痕文系 [櫛状工具による横羽状文] (370~372)、櫛描文系 [縦羽状文及び、波状的な羽状文] (364~366・368・369)、沈線文系 [羽状文373~377・変形工字文386~394・その他に分けられる] (373~394)、無文が主体で一部に沈線、降帯を施す土器 (367・395~397、393は浅鉢の可能性もある。)、刺突文を伴う土器 (398~408)、櫛描文系 [沈線等が組み合わさる] (410・412~415)、櫛描文系 [横・縦位、波状文] (409・411・416~421) に分けられる。

異形土器 (写真43)

楕円形の湾曲した筒形で、口縁及び底部がなく全体形は不明である。地文は縄文で、沈線文を施している。他に図示していないが1点異形土器の破片がある。

2) 中期後半の土器

器種は壺・甕・鉢がある。

甕 (図39、1~16・23)

櫛描文が主体で、口縁端部に縄文が施されるものはLRの縄文が施されるものが多く、口縁に端部を押圧ないしは削り出し、波状口縁風にしたものが見られる。櫛描文は波状文、羽状になるものが多く、波状文を縦位の櫛描文で区画するものも (2・4~8・10・12・13) もある。また、胴部に櫛による列

点文（刺突文）が施されたもの（7～9・12）、口縁部が受け口状になり縄文が施される土器（15・16）も見られる。

壺（図39、17～21・28～31）

縄文・沈線が施されるものが多い。器形は、朝顔状の口縁部とややソロバン王状の球状胴部のものが主体と思われる。○は無文で、口縁端部に四ヶの突起をもつ、赤色塗彩された壺である。

鉢（図39、32）

口縁部は欠損しており不明であるが、口縁部が外に開く鉢で内外が赤色塗彩されている。

3）弥生時代後期の土器（図39・22）

弥生時代中期調査区の中央を流した河川跡礫層内から出土した。櫛描波状文を施し、口縁をヘラで刻んだ甕の破片である。

(2) 石器（写真44～49）

打製石器として、石鏃（96点）、石錐（10点）、石匙（3点）、スクレイパー（10点）、ピエス・エスキーユ（楔形石器）（30点）、石鍬（打製石斧）（25点）、石包丁（16点）、石鎌（1点）、有肩扇状形石器（1点）が、磨製石器として、磨製石斧（太形蛤刃石斧、柱状片刃石斧等）（6点）、石包丁（1点）、環状石斧（1点）、石皿（1点）、磨石（6点）があり、この他に使用痕のある剥片・石核（剥片石器）（55点）が出土している。石器としては縄文時代的なものと弥生時代的なものが半々である。特徴的なことを1・2点記しておく、石鏃は、縄文時代のものとは比べ、製作が簡略したものが多く、使用する剥片の縁辺だけを加工し形作るもの、剥片の片面のみを加工し、片面はほとんど加工せずそのままといったものが多く見られる。石鍬、石包丁では大、小の二種が見られ、石包丁は剥片をあまり加工せずそのまま用いているものが見られる。

出土石器のほとんどは、中期前半層からのものが主体で、中期後半のものは石鏃（3点）、磨製石斧し太形蛤刃石斧・有孔石斧）（2点）のみであった。

(3) 土製品（写真48）

土製紡錘車片が2点出土した。1は沈線文を施し、2は刺突文を施している。

(4) 布目圧痕、モミ痕の残る土器（写真49）

土器底部に布目圧痕の残るものが約50点出土し、土器器壁にモミ痕が残るものが15点見られた。

（島田哲男）

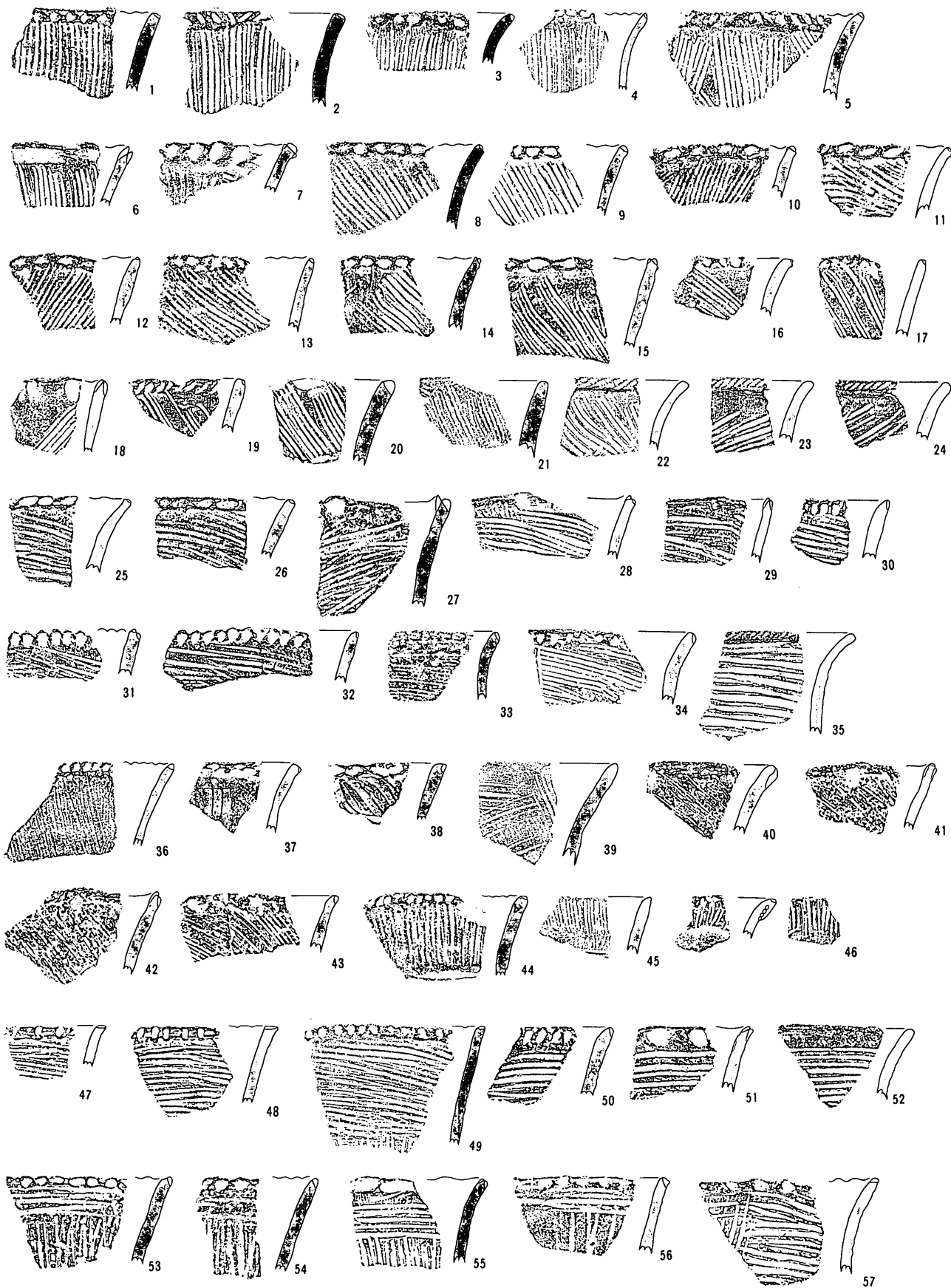


图28 弥生時代中期前半土器拓影图 (1 : 3)

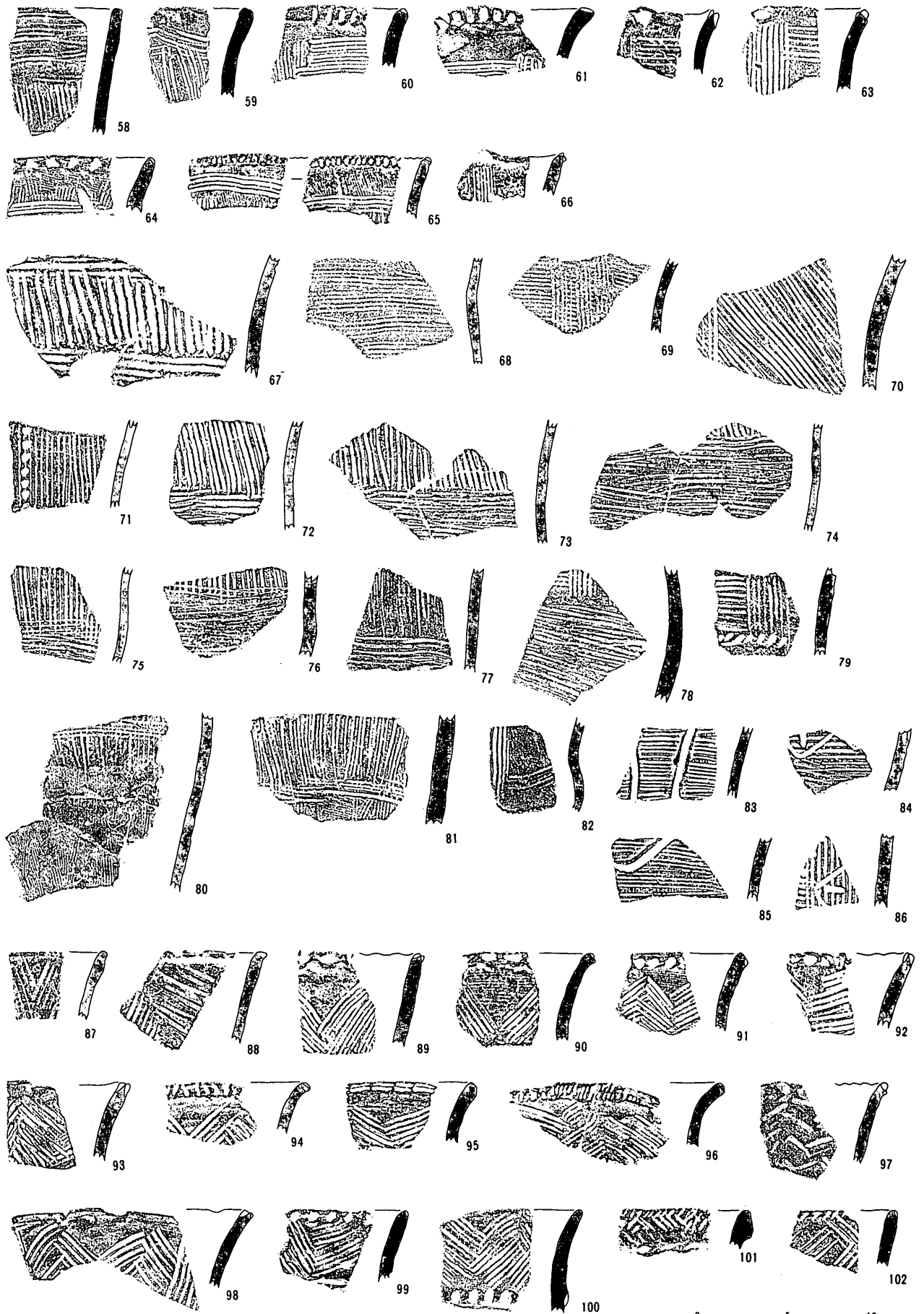


図29 弥生時代中期前半土器拓影图 (1 : 3)

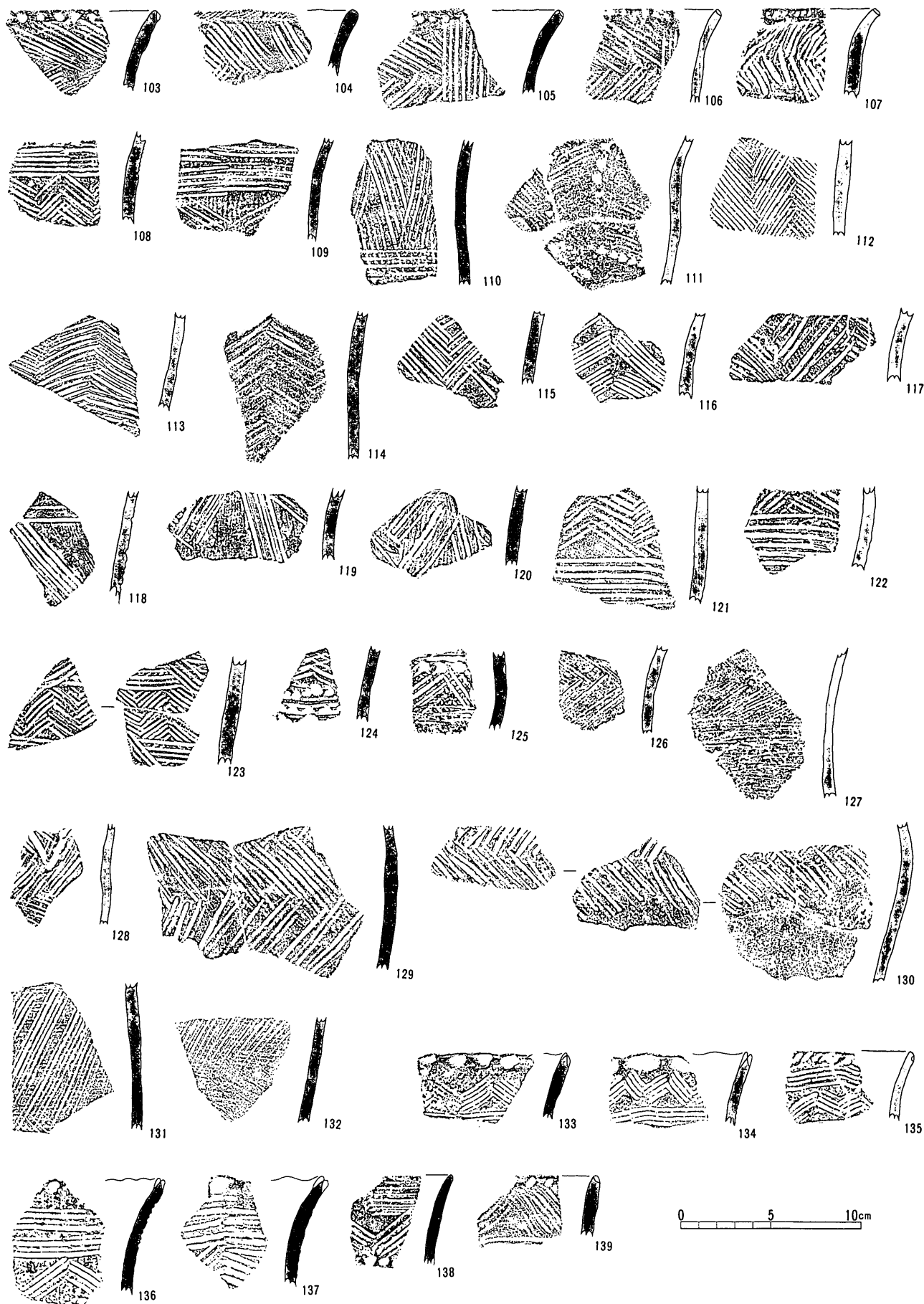


図30 弥生時代中期前半土器拓影図（1：3）

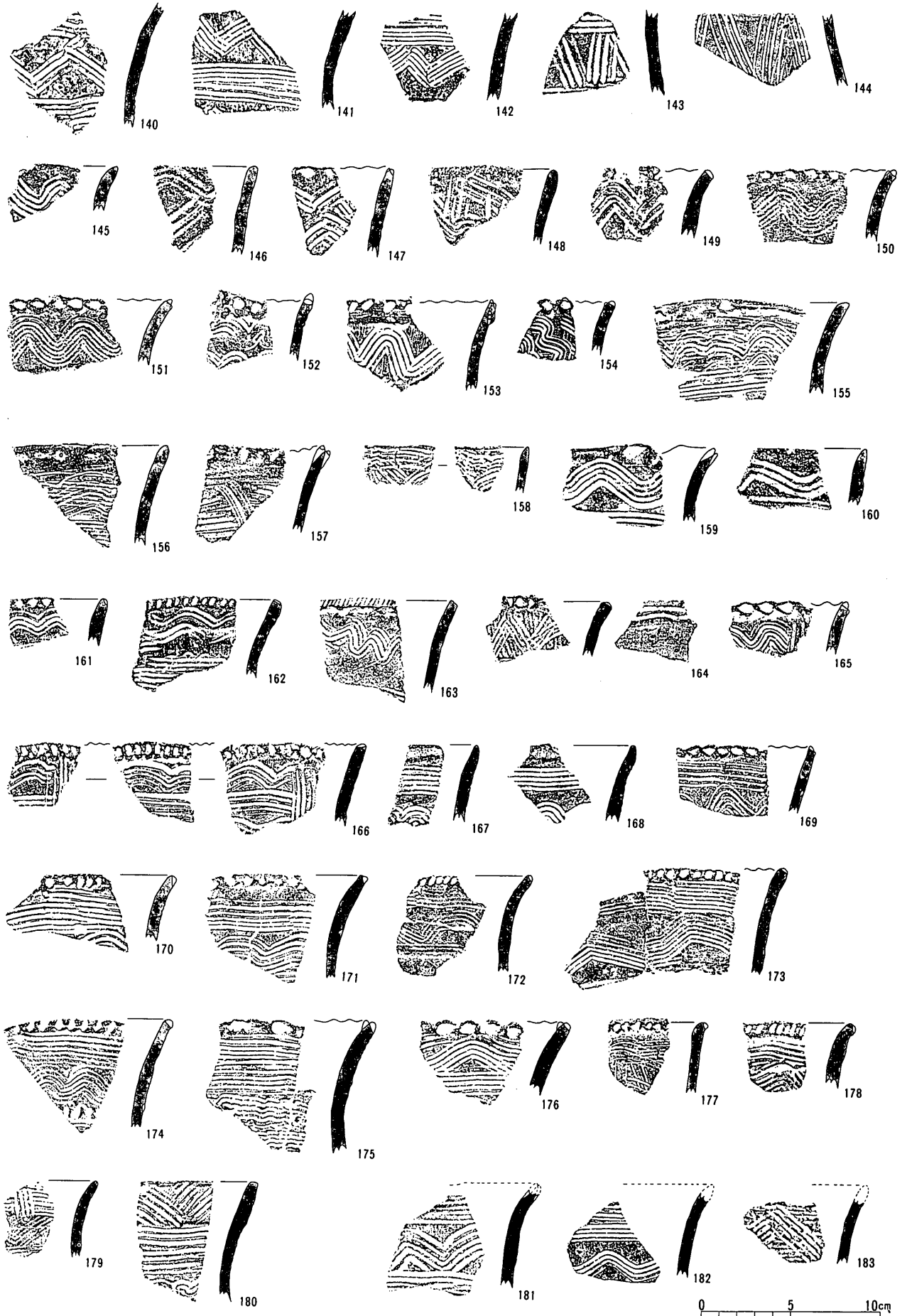


図31 弥生時代中期前半土器拓影図（1：3）

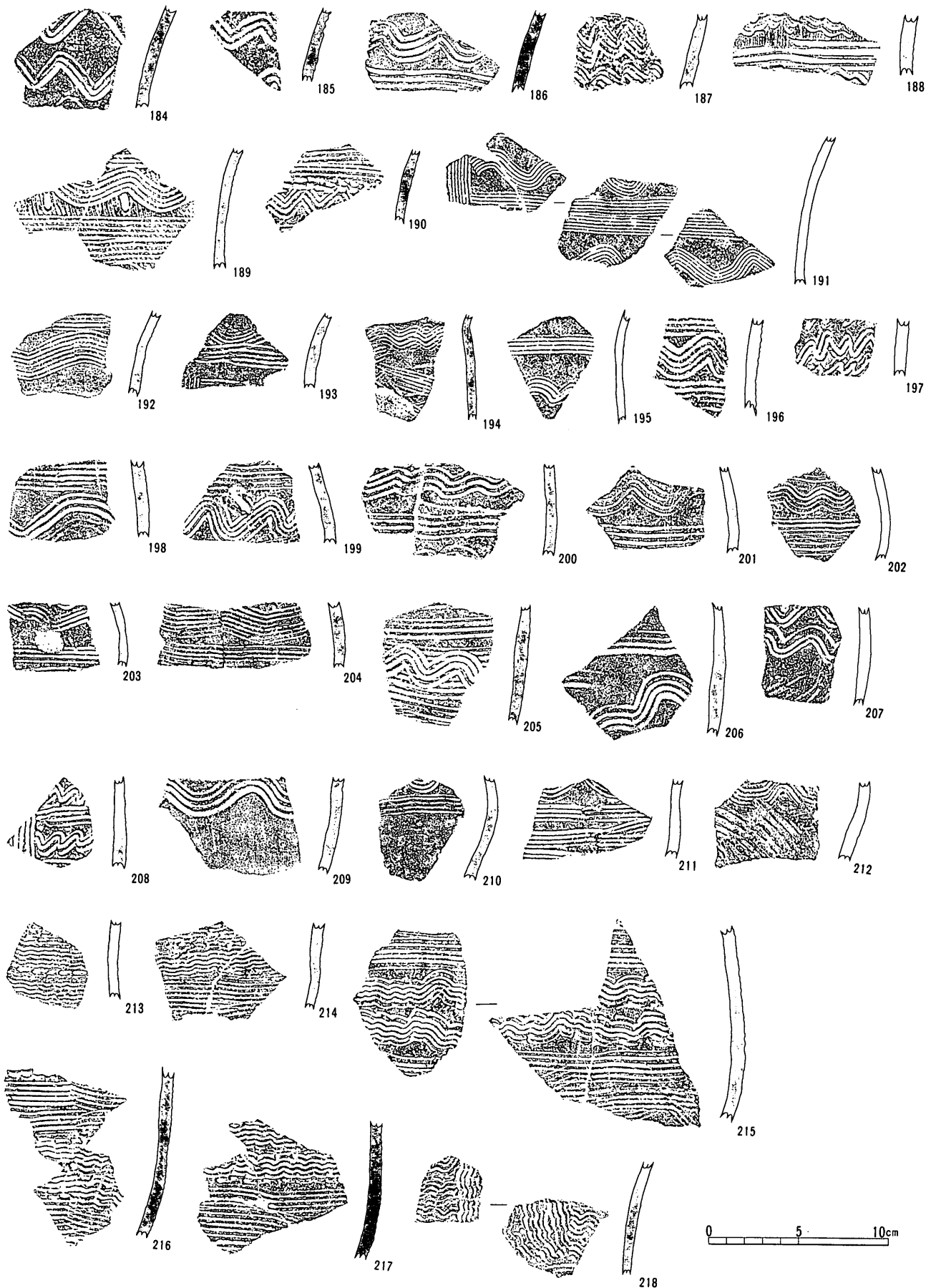


図32 弥生時代中期前半土器拓影図(1:3)

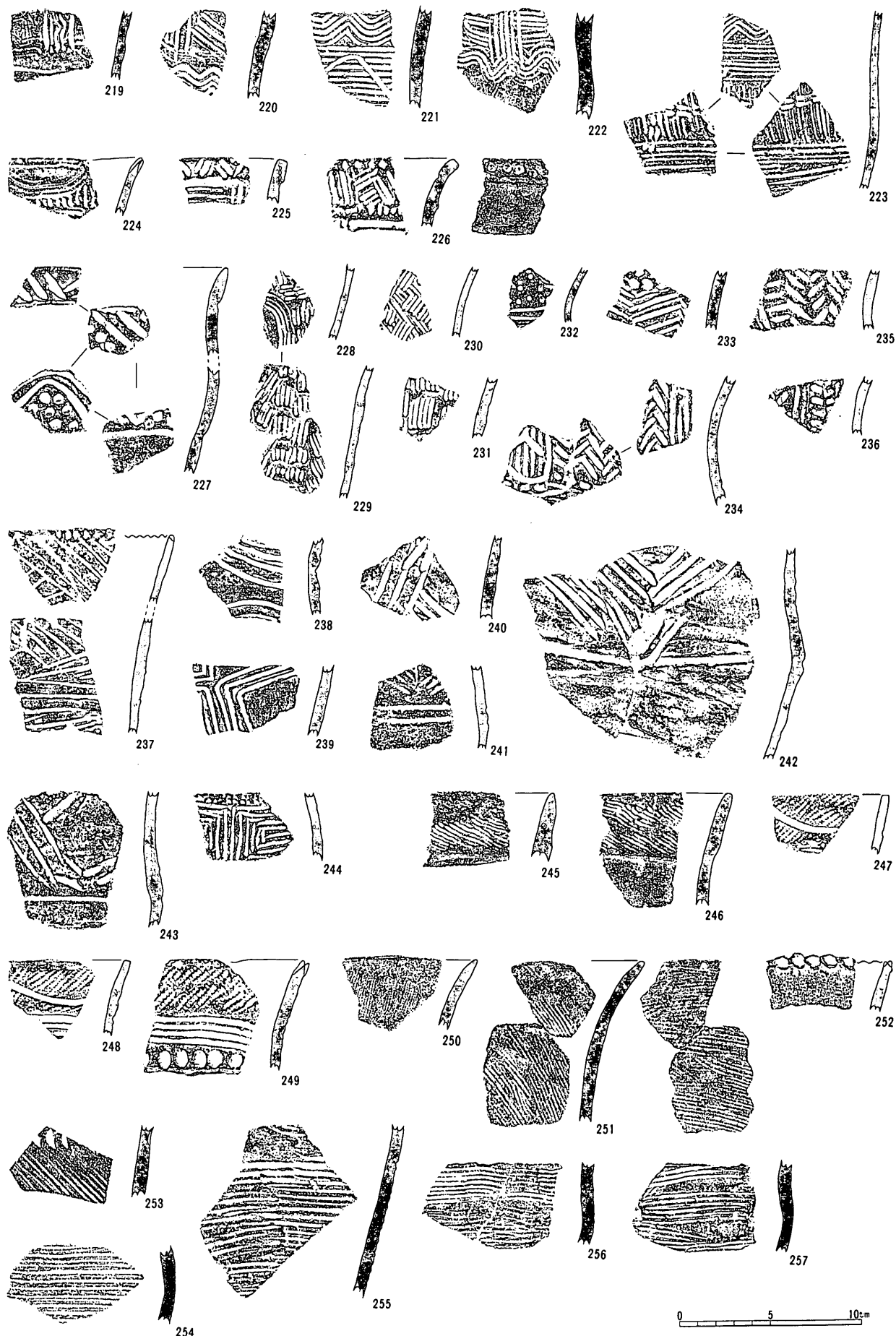


図33 弥生時代中期前半土器拓影图 (1 : 3)

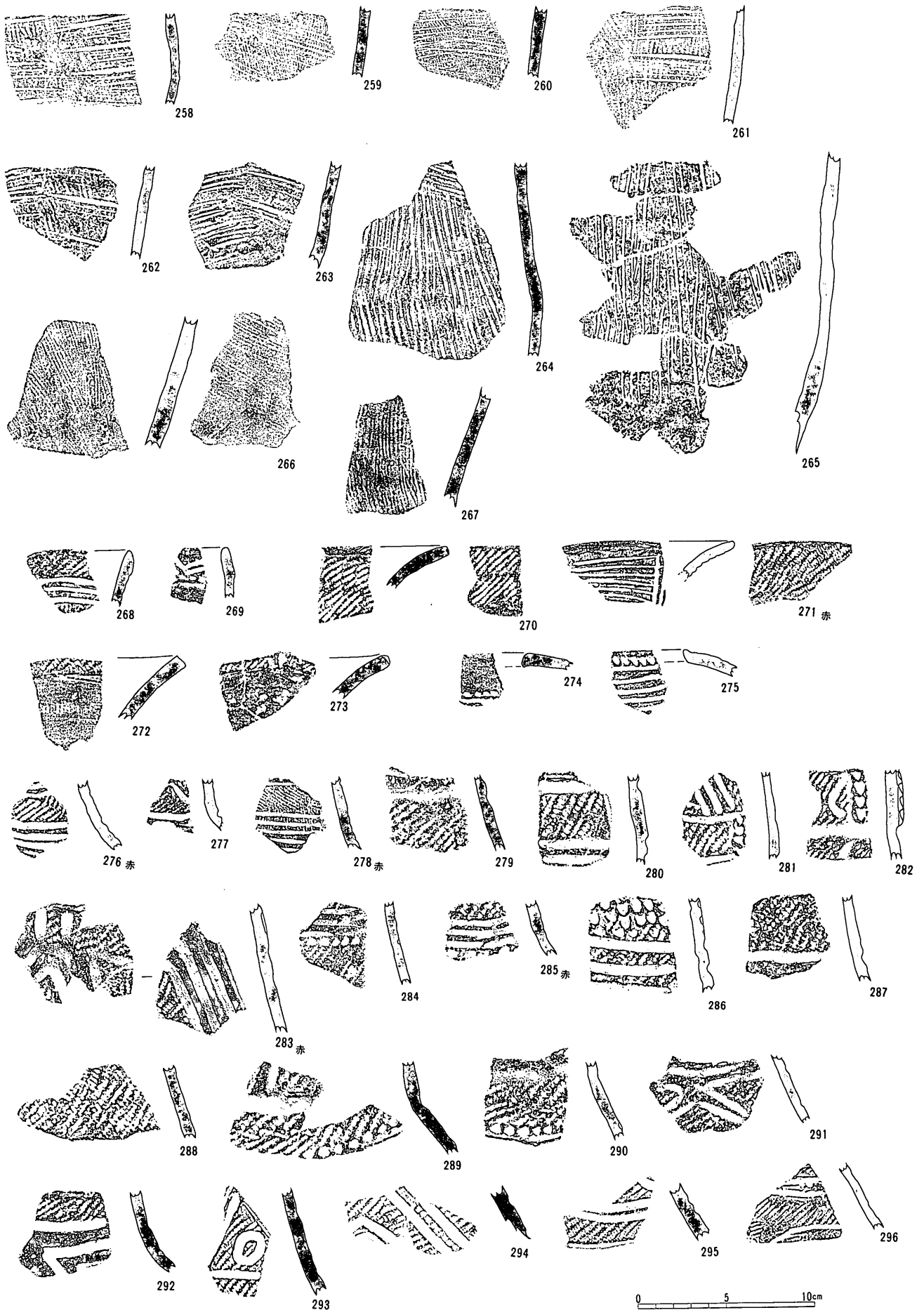


図34 弥生時代中期前半土器拓影図（1：3）（赤は赤色塗彩された土器）

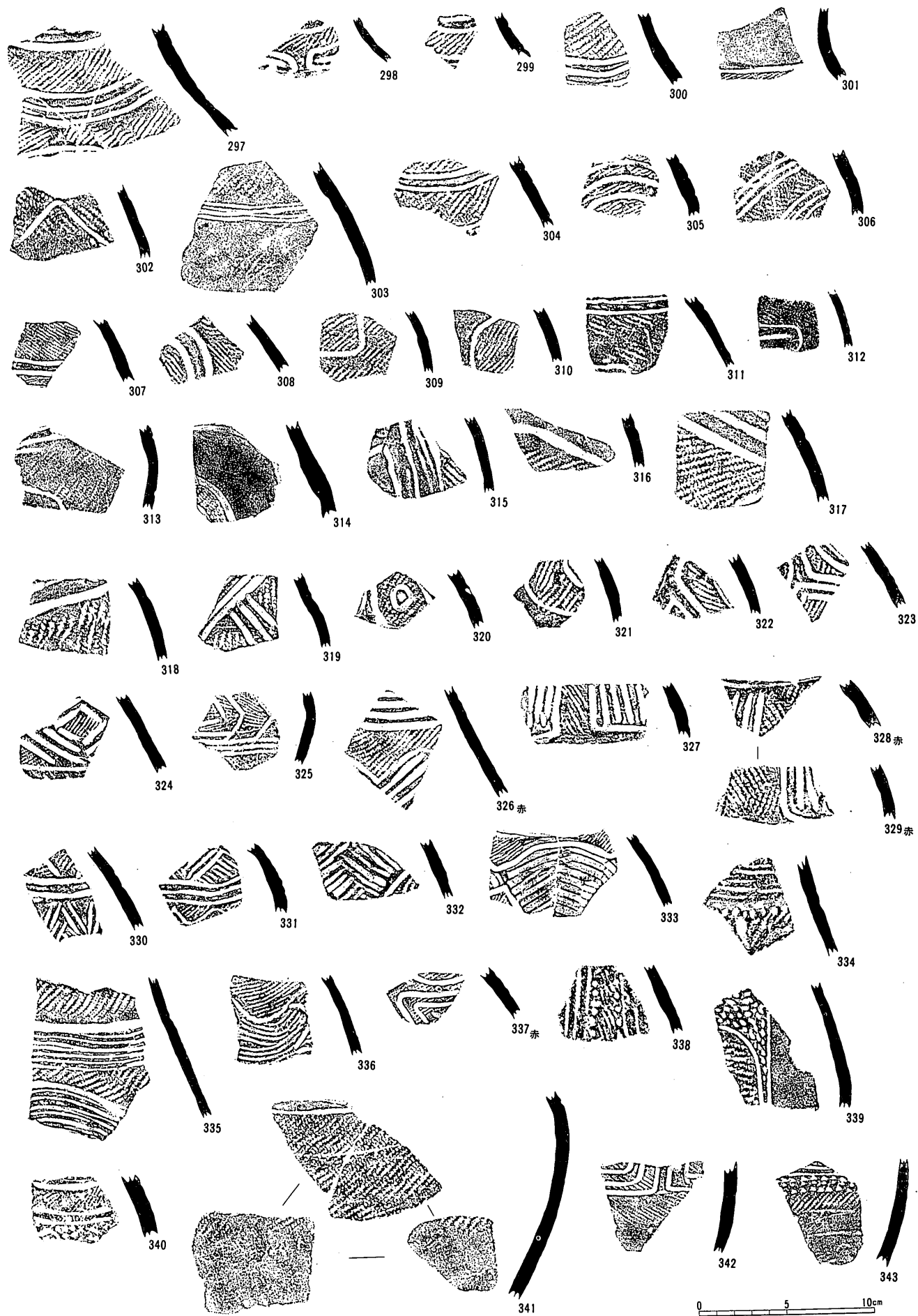


図35 弥生時代中期前半土器拓影図（1：3）（赤は赤色塗彩された土器）

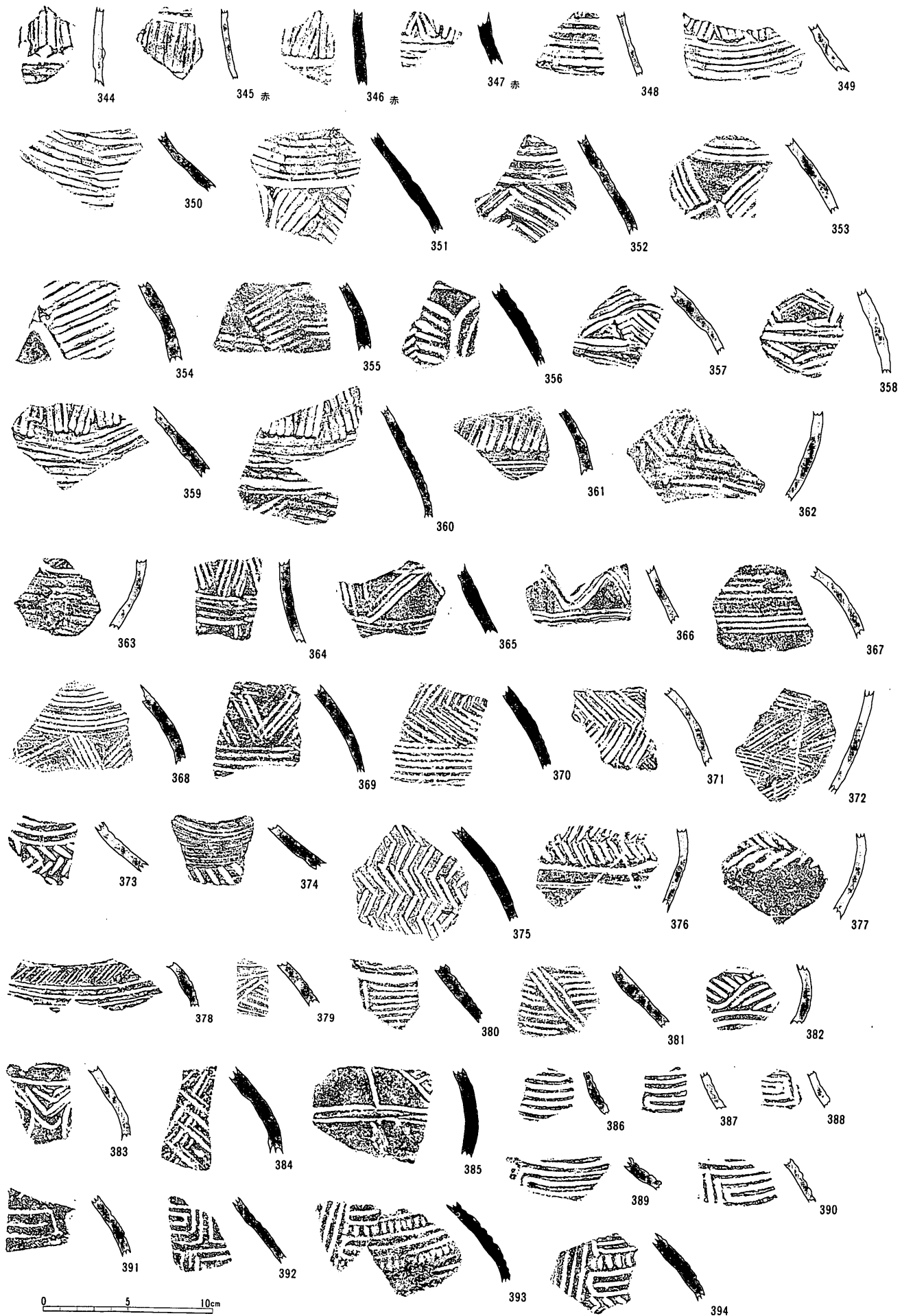


图36 弥生時代中期前半土器拓影图(1:3)(赤は赤色塗彩された土器)

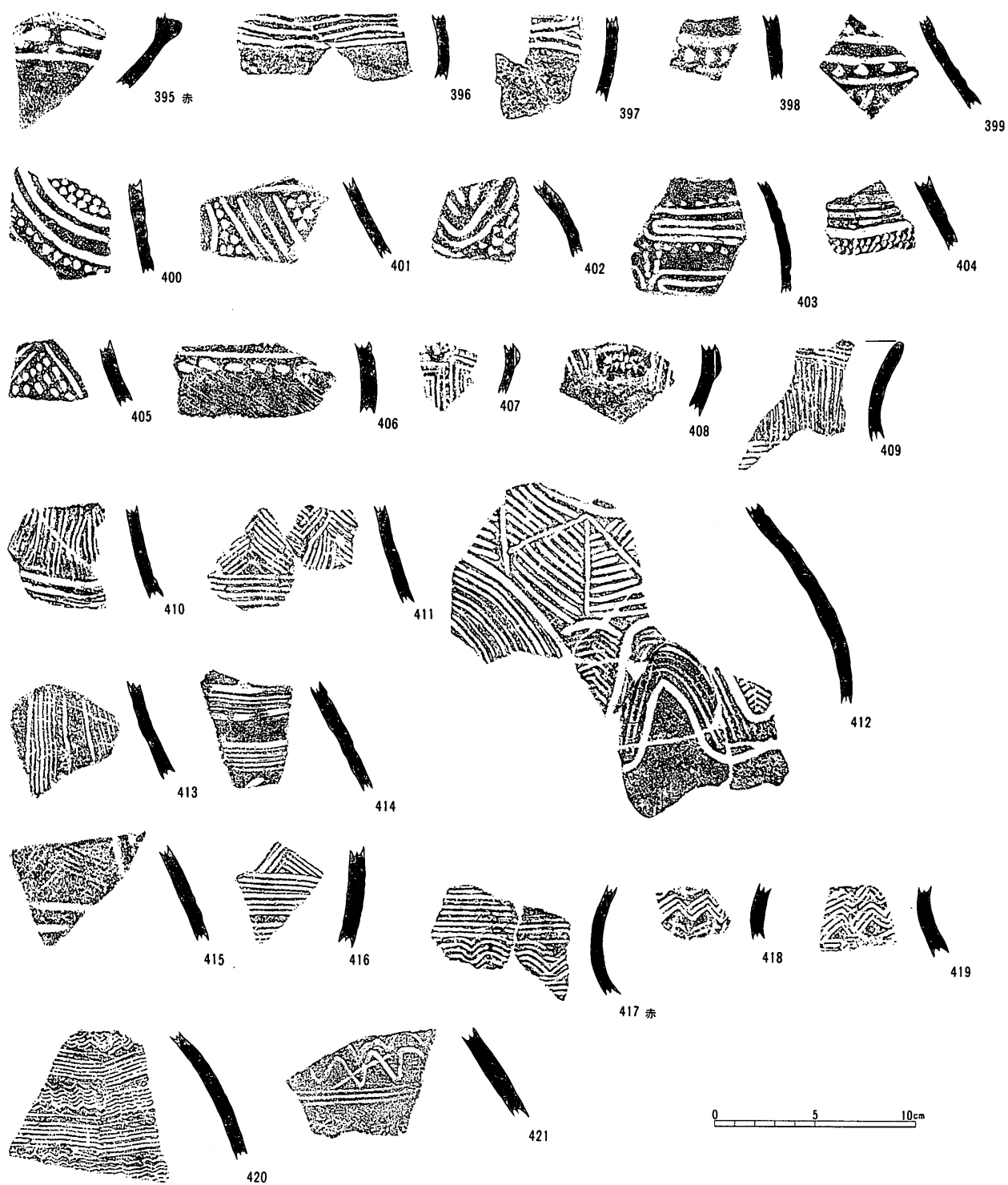


図37 弥生時代中期前半土器拓影図（1：3）（赤は赤色塗彩された土器）

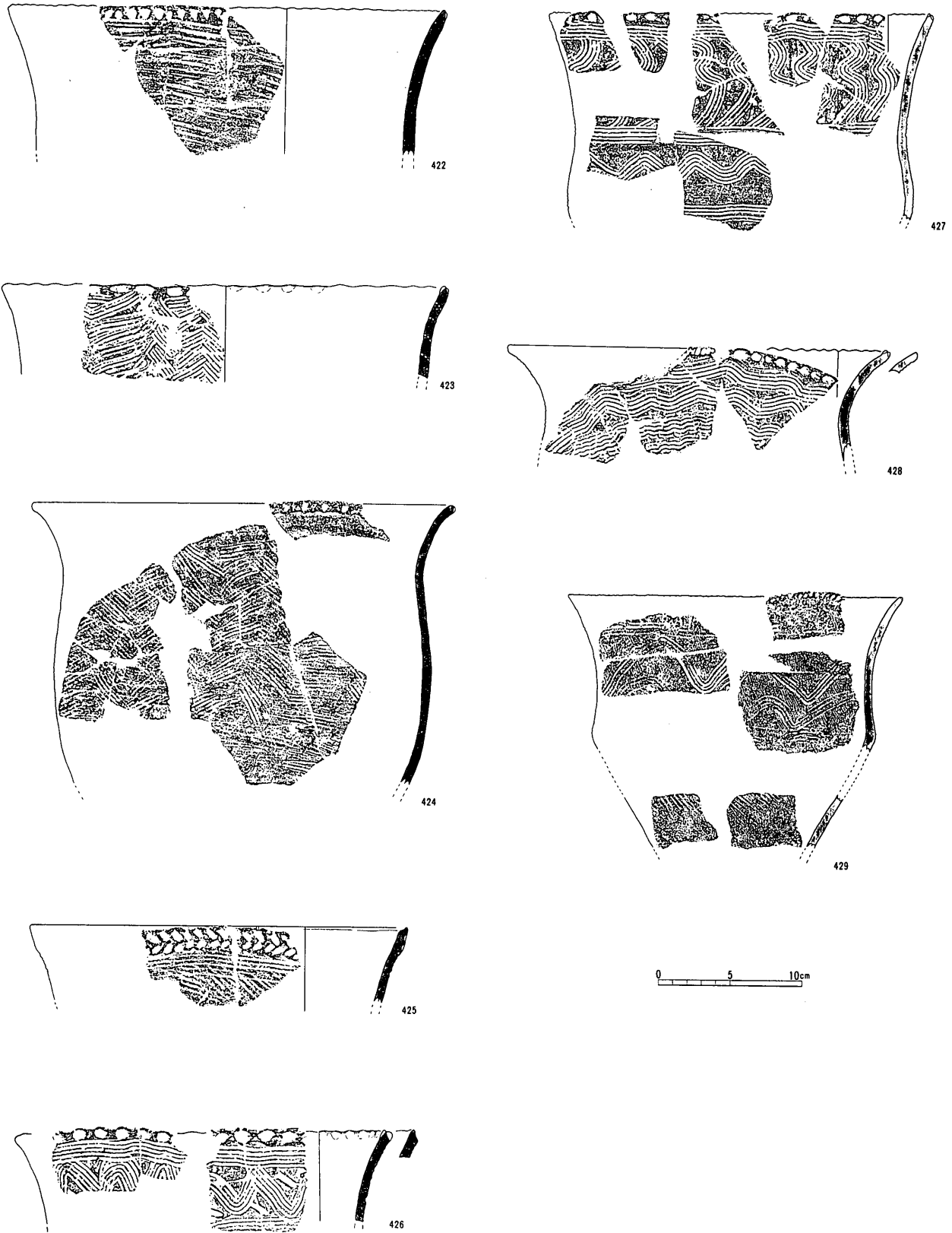


図38 弥生時代中期前半土器拓影図（1：3）（赤は赤色塗彩された土器）

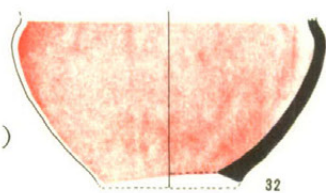
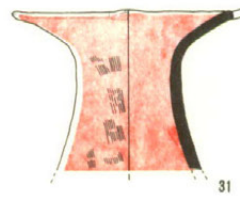
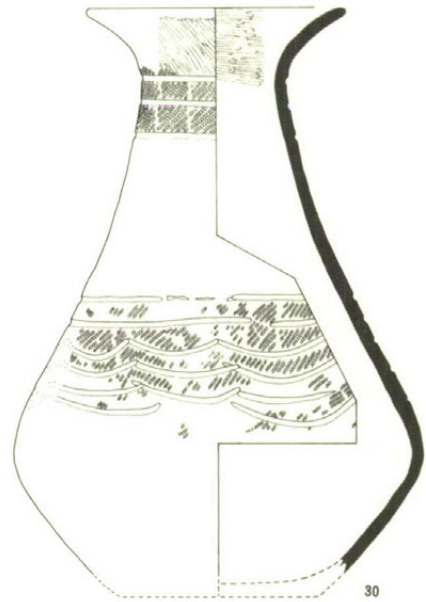
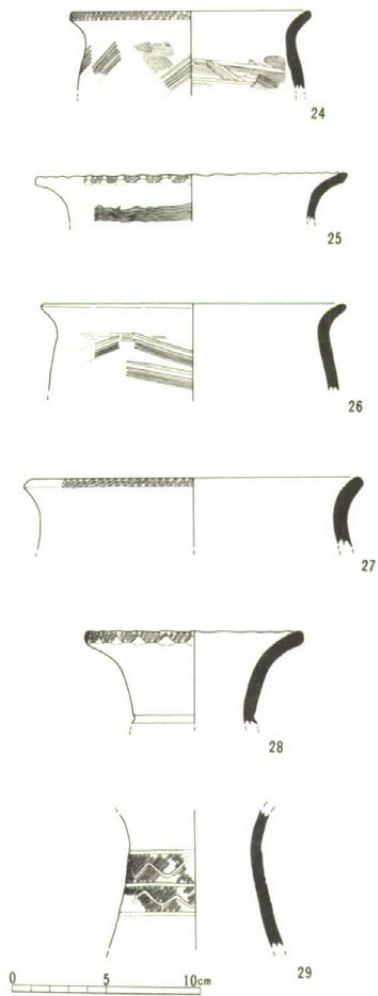
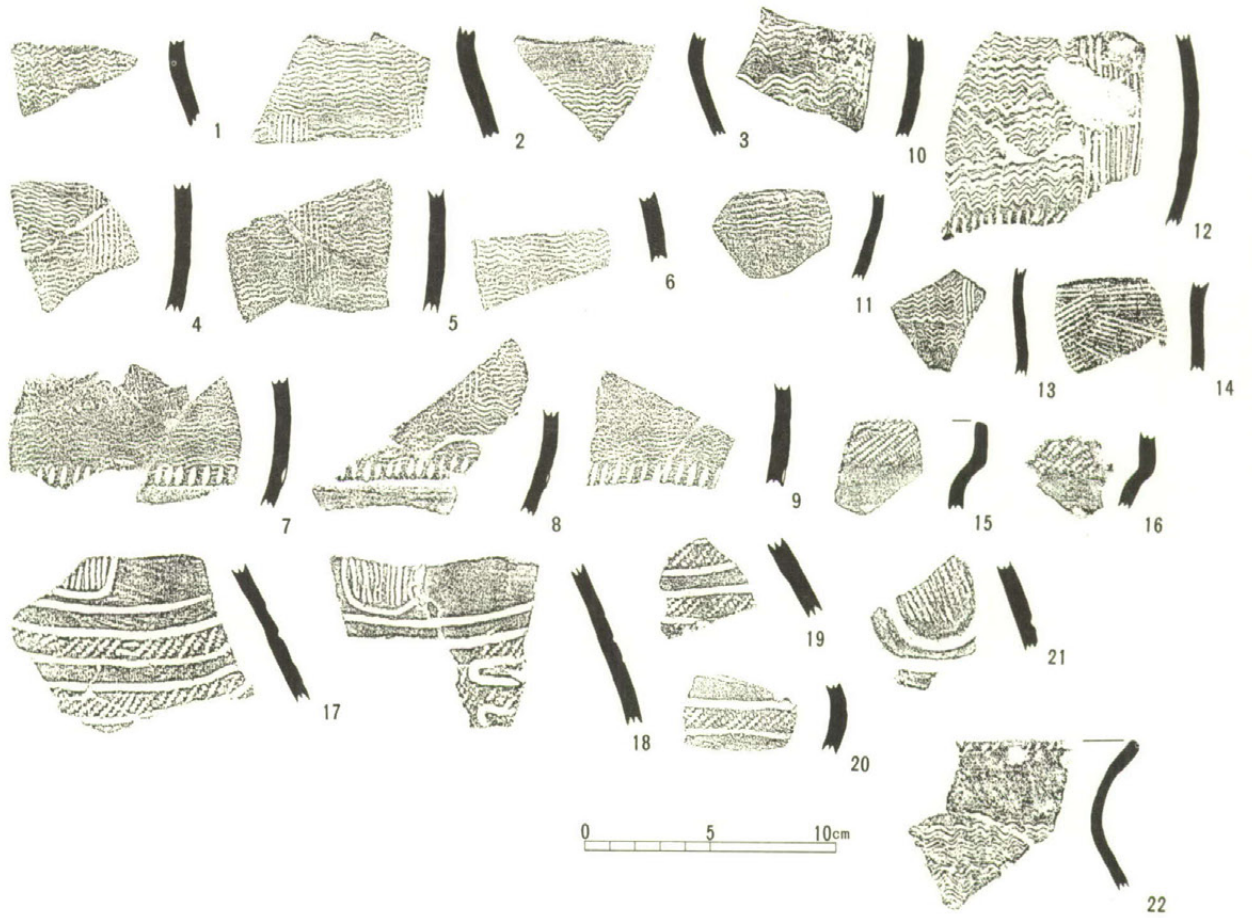


图39 弥生时代中期後半土器拓影图 (1:3), 实测图 (1:4)

第4節 古墳時代中・後期の遺構と遺物

古墳時代面は地表下平均50～70cmのやや黒っぽい暗褐色土層が包含層・生活面となっており、住居跡1軒と集石・列石、土器集中出土地点等が検出された。古墳時代の遺物分布等の主体は調査区東及び北側にあることから、この主体は、調査区外の東側から北側にあり、調査区はこの南西端にあたるものと考えられる。

1. 住居跡

(1) 10号住居跡(図79, 写真28)

遺構 B-3区のほぼ中央で、平安時代末の5号住居跡に約半分を掘り込まれ、切られる形で検出された。プランは、半分が切られており全体は不明であるが、一辺2.8mの方形を呈すると思われる。壁高は、7～15cmを測る。床面は、平坦であるが、東から西へやや傾斜をもち、軟弱である。床面を精査したが柱穴等の施設は検出できなかった。また、カマド等の施設もなく、カマドはあったとして切られて残存しない北半分にあったと思われる。

遺物 遺物は少なく土器片のみであった。1は黒色の有段の杯か高杯の杯部である。2は、須恵器蓋の天井片である。須恵器から見て本跡は5世紀後半～6世紀初頭の住居跡と考えられる。

2. 集石・列石(図41・45, 写真15～19)

(1) 集石

上層調査区の北東側、B-1、C-1～3、D-2～4、E-3・4区にかけて検出された。大まかに集石1～8、列石に分けられるが、周囲に礫が多く散在しており、すべてを含めて一群として捉えられると思われる。また、調査区北東側東端には、一段高くなった部分があり、この部分が古墳墳丘の1部であり、古墳が削平されてしまったものとも予想され、これに伴う一施設とも考えられる。集石周辺からは多量の土師器が出土し、特に高杯が量的に多く見られ、古式の須恵器(罌、蓋付杯の身、蓋)がこれらに伴ない出土しており、祭祀的な性格を感じさせる。下部に掘り方が見られるのは集石1のみであった。礫の集積状態が整っているものは少ない。

1) 集石1(図43, 写真17)

C-2・3区の境で検出された。1.9×1.4mの規模で、人頭大の礫を22ヶ集めている。楕円形の掘り方が下部に見られ、深さは18cmを測る。

2) 集石2(図43, 写真17)

C-1区で検出され、西側には土器集中地点がある。1.9×1mの楕円形で人頭大よりやや小さめな礫を多く使用している。周辺からは土師器の高杯が多く出土した。

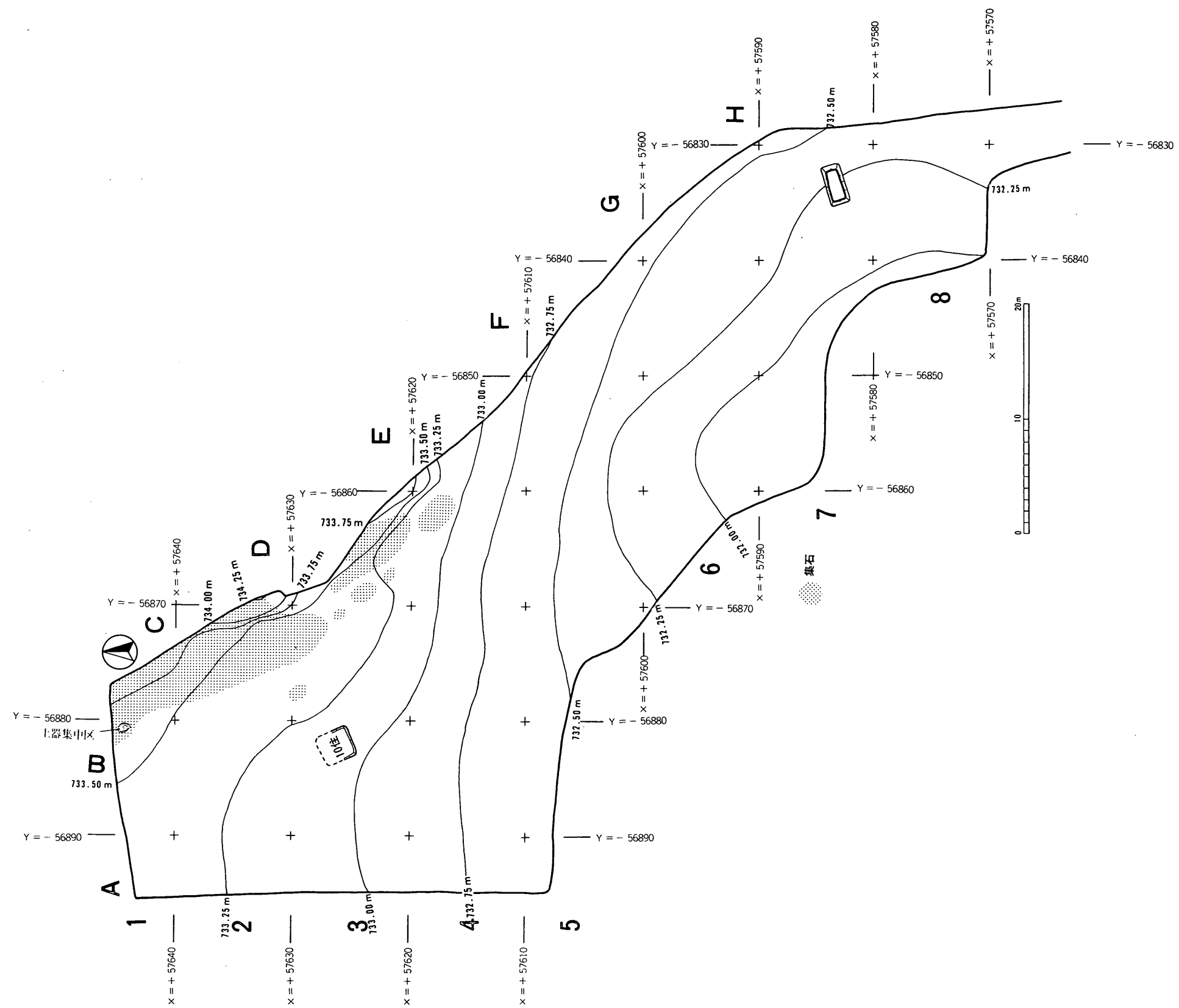


図40 古墳時代調査区全体図(1:400)

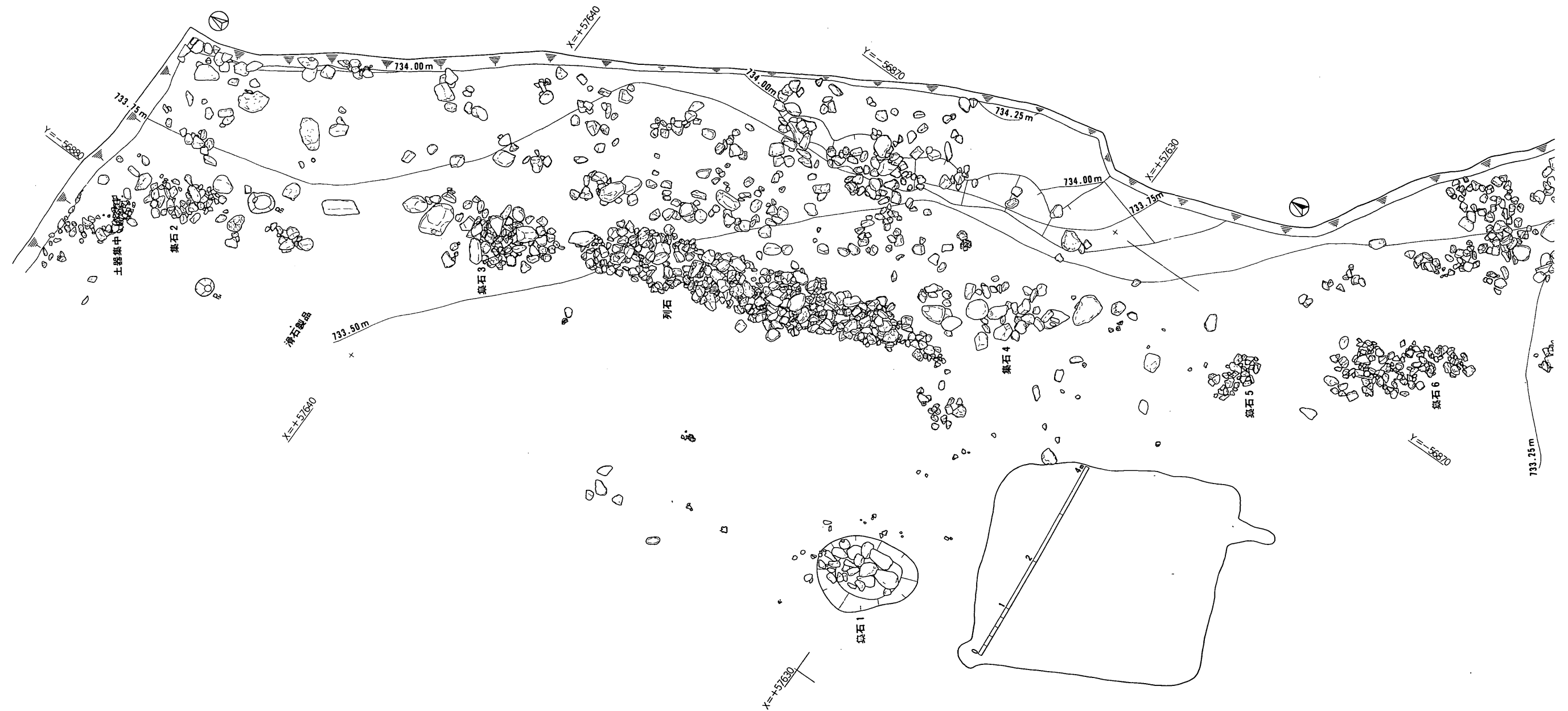
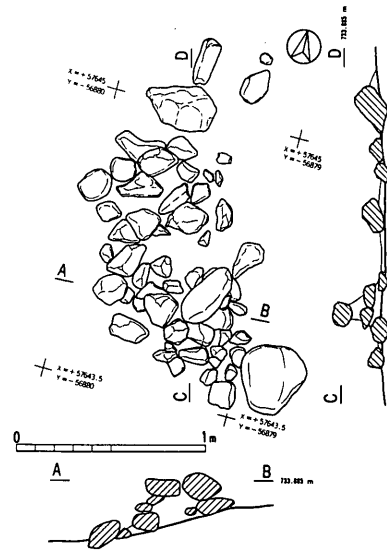
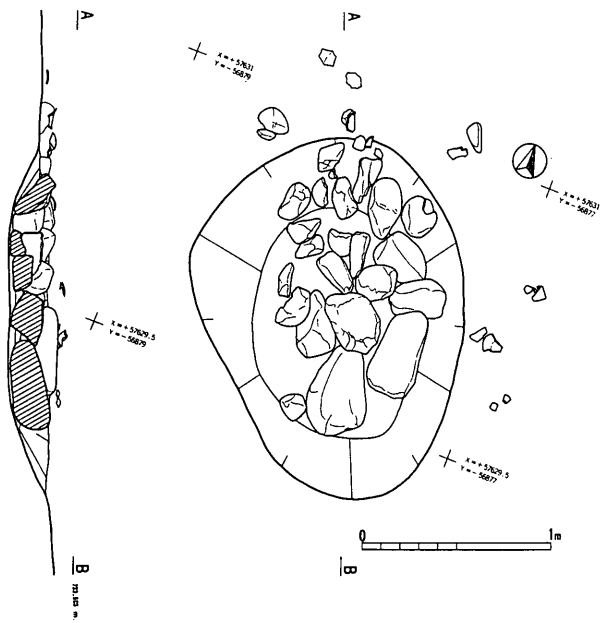


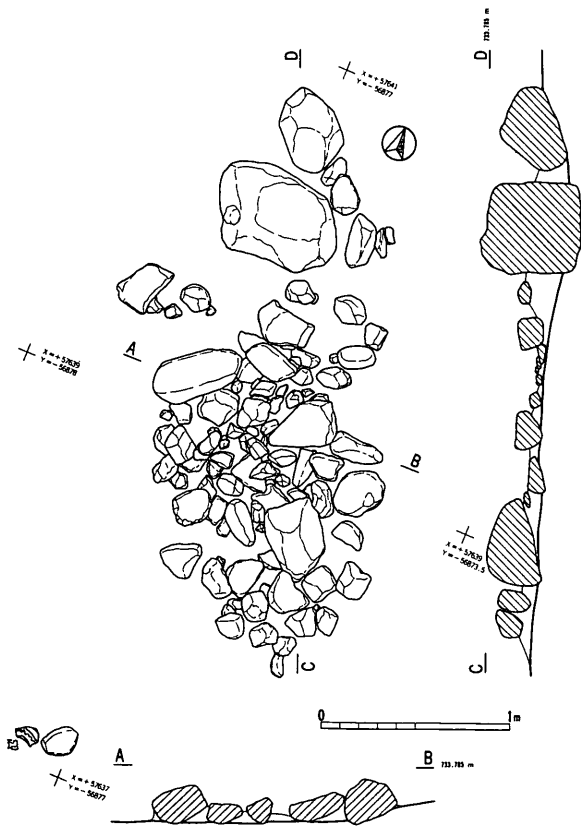
图41 古墳時代集石全体図(1) (1 : 80)



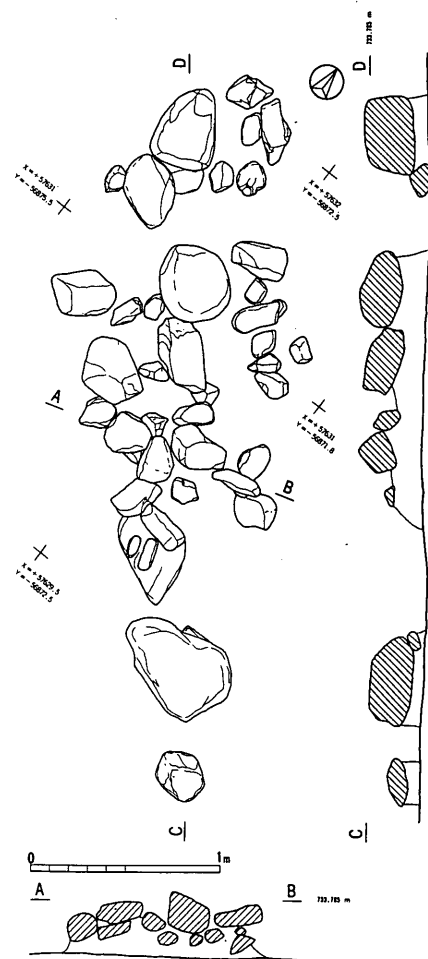
图42 古墳時代集石全体図(2) (1 : 80)



集石 2

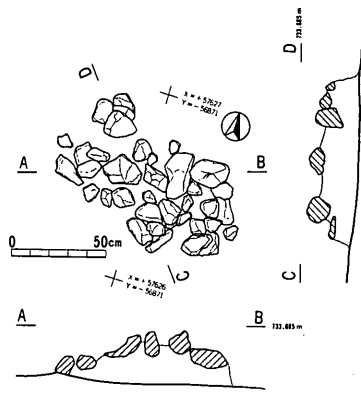


集石 3

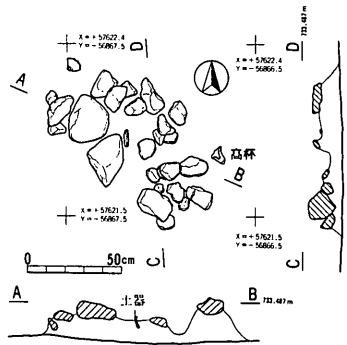


集石 4

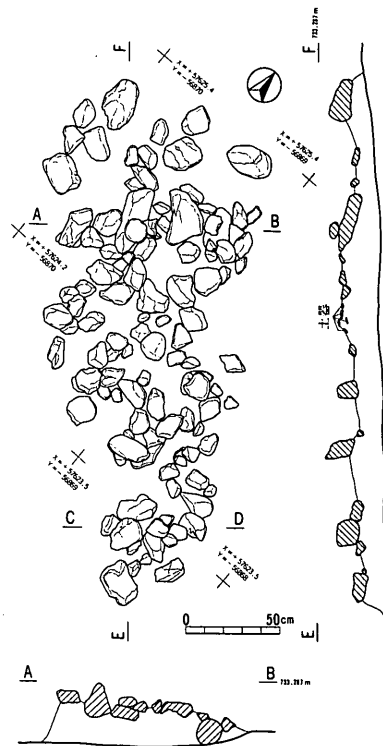
図43 古墳時代 集石 集石 1~4 (1:40)



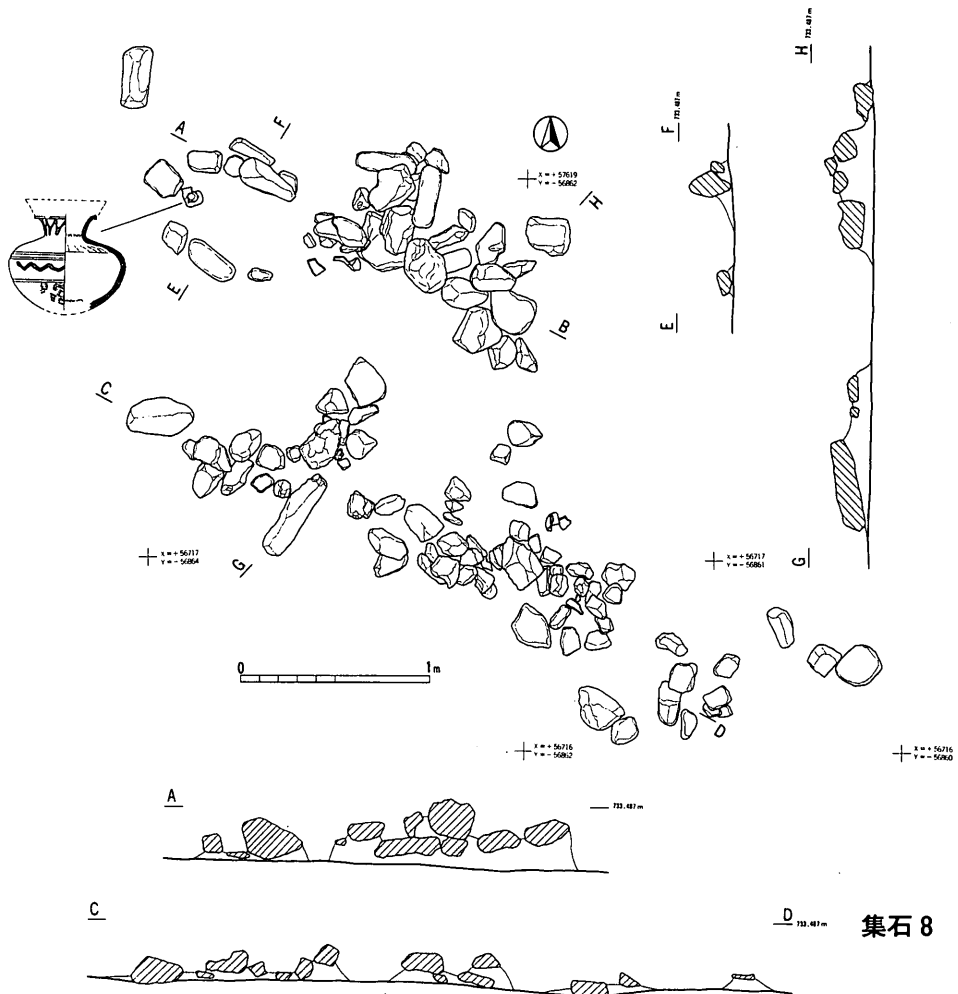
集石 5



集石 7



集石 6



集石 8

図44 古墳時代 集石 集石 5~8 (1:40)

3) 集石 3 (図43, 写真17)

C-2区北側で検出され、南側には列石がある。3×1.4mの規模で、拳大～人頭大の礫が集められている。北側には、65×50cmの巨礫がある。南西1mで須恵器大形罫が出土した。

4) 集石 4 (図43, 写真17)

列石の南側、C-2～3区にかけて検出された。30～40大の礫を中心に列状に集石されている。南の列石の一部とも考えられる。

5) 集石 5 (図44, 写真17)

C-3区東側で検出され、1×0.7mの範囲に拳大の礫を中心に集積している。

6) 集石 6 (図44, 写真17)

D-3区西側で検出され、2.7×1.1mの範囲に拳大の礫を中心に集積している。

7) 集石 7 (図44, 写真17)

D-3区南西側で検出され、1×0.6mの範囲に拳大～人頭大の礫25ヶを集積している。周辺には土師器高杯が多く出土している。

8) 集石 8 (図44, 写真17)

D-4区北側で検出され、人頭大の礫を中心に集積している。柱状の礫が多く見られるのは特徴的で、北東部には石囲いの石の並びが見られ、そこから須恵器罫が出土している。

(2) 列石 (図45, 写真15～16)

C-2中央部付近で検出され、7×1.2mの帯状の範囲に拳大～人頭大の礫を集積している。礫の集積状態は集石と同じくあまり整っていない。この列石より西側に礫はあまり散在せず、東側には多く散在している。南北西側には集石3・4があり、北端の西側1mで須恵器大形罫が出土している。下部に掘り方等の施設は見られない。

3. 土器集中地点 (図46, 写真18)

B-1区東側で検出された。土師器甕2個体と小形の壺1個体が、つぶれた状態で検出された。集石に近接しており、集石・列石に関係したものと思われる。

4. 遺物出土状況 (図47)

遺物は土器が中心であり、集石周辺B-1、C-1～3、D-2～4、E-4区において集中して出土した。出土土器の約半数は、土師器高杯であった。土師器の他に須恵器罫、蓋付杯があり、集石の祭祀的な性格を暗示させる。集石周辺の他にやや離れて、A-1区北端、G-6、H-7区に遺物の集中が見られる。

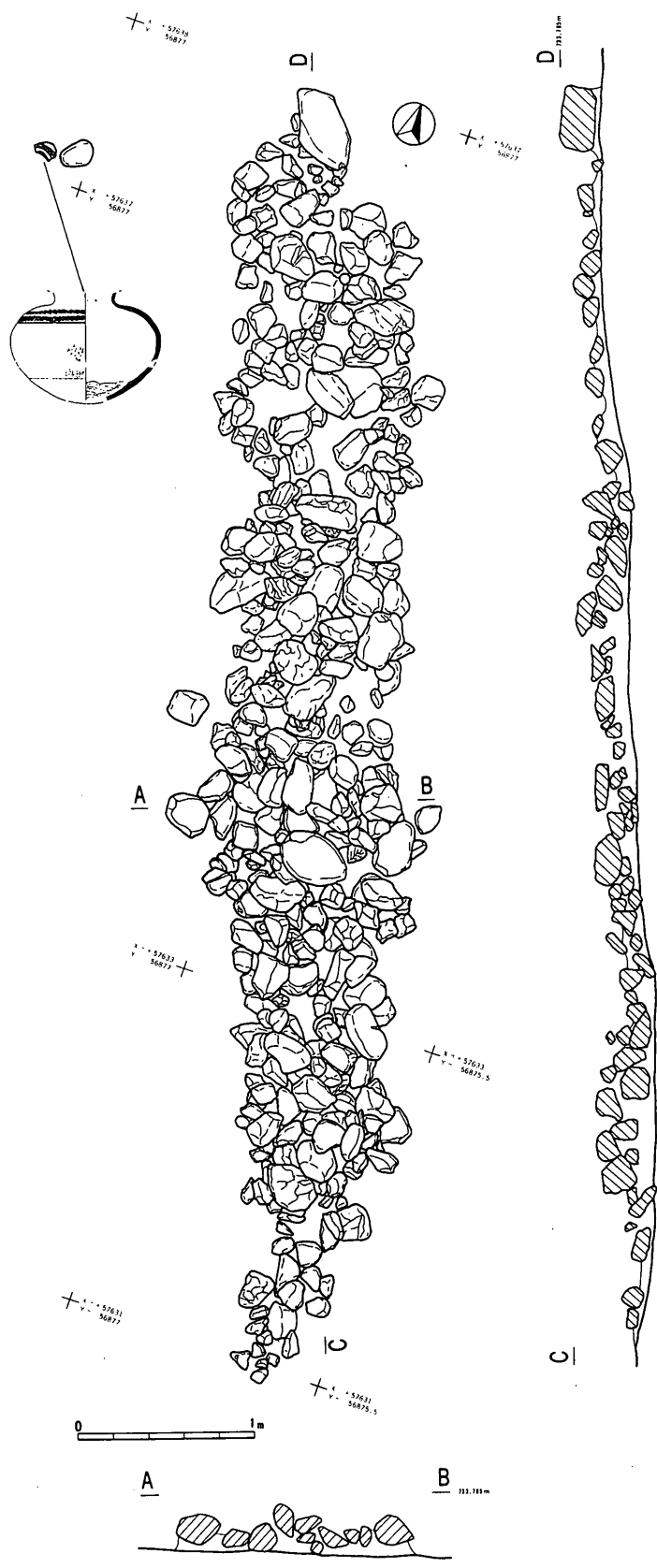


図45 古墳時代列石 (1 : 40)



図46 古墳時代 土器集中地点 (1 : 20)

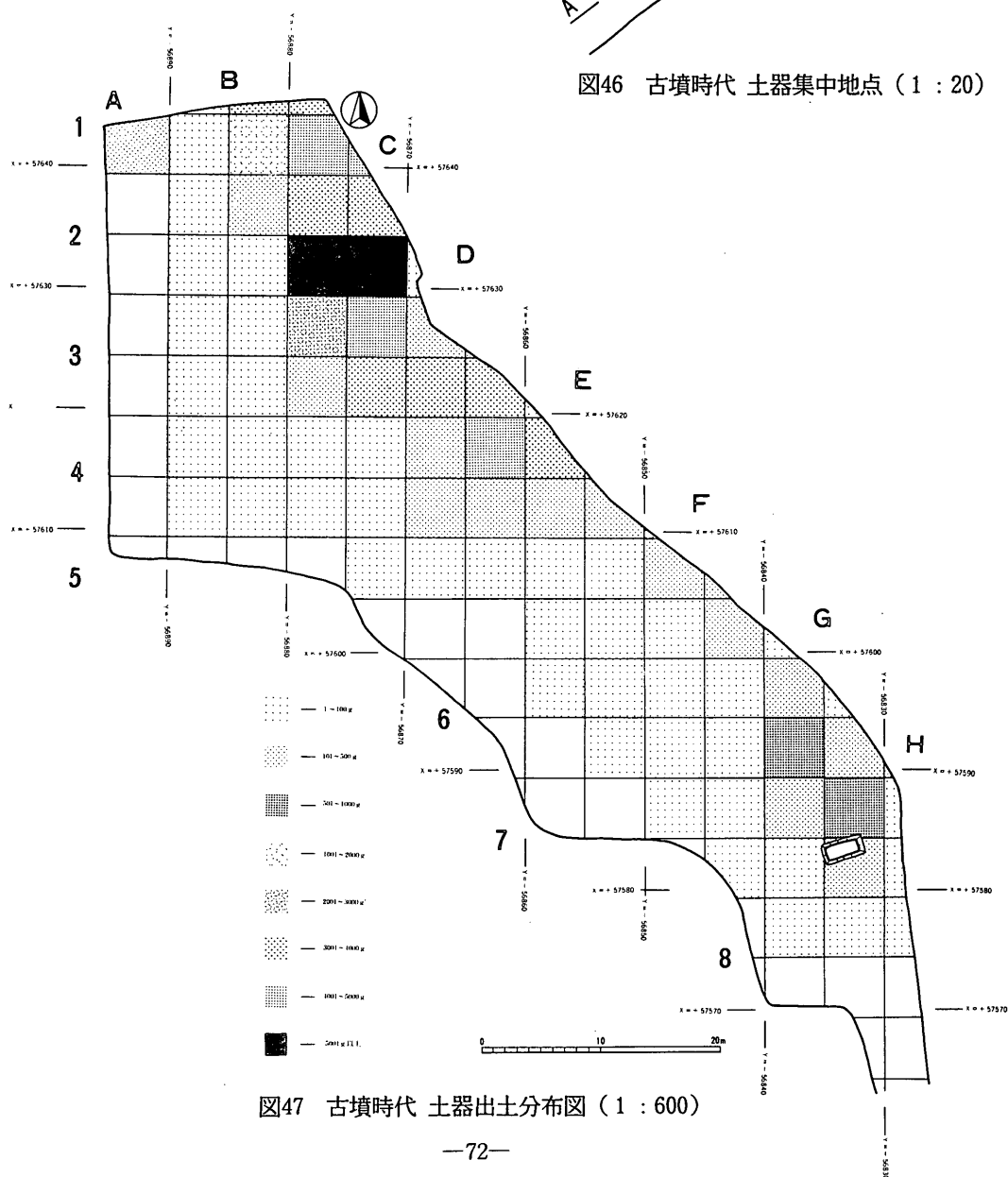


図47 古墳時代 土器出土分布図 (1 : 600)

5. 遺物

土器（土師器・須恵器）、石器（滑石製品、砥石）、鉄器片が出土している。すべて資料提示できず、いずれ機会を見て発表したいと思う。

(1) 土器

コンテナに約15箱近く出土している。土師器・黒色土器・須恵器がある。

1) 土師器・黒色土器（図48, 写真50）

甕、壺、小形壺、杯、高杯が出土している。黒色土器は内面黒色のもので、供膳形能の杯、高杯に限られている。これらは、形態から見て、関東地方の和泉式後半から鬼高式前半期に併行するものと考えられる。

2) 須恵器（図48・49, 写真50・51）

古式タイプのもものが主体で、釅・蓋付杯の身・蓋が出土している。陶邑編年TKに208～47型式にあたりとされるものである。

3) 滑石製品

赤褐色の滑石で、滑石模造品の一部と思われる。

（島田 哲男）

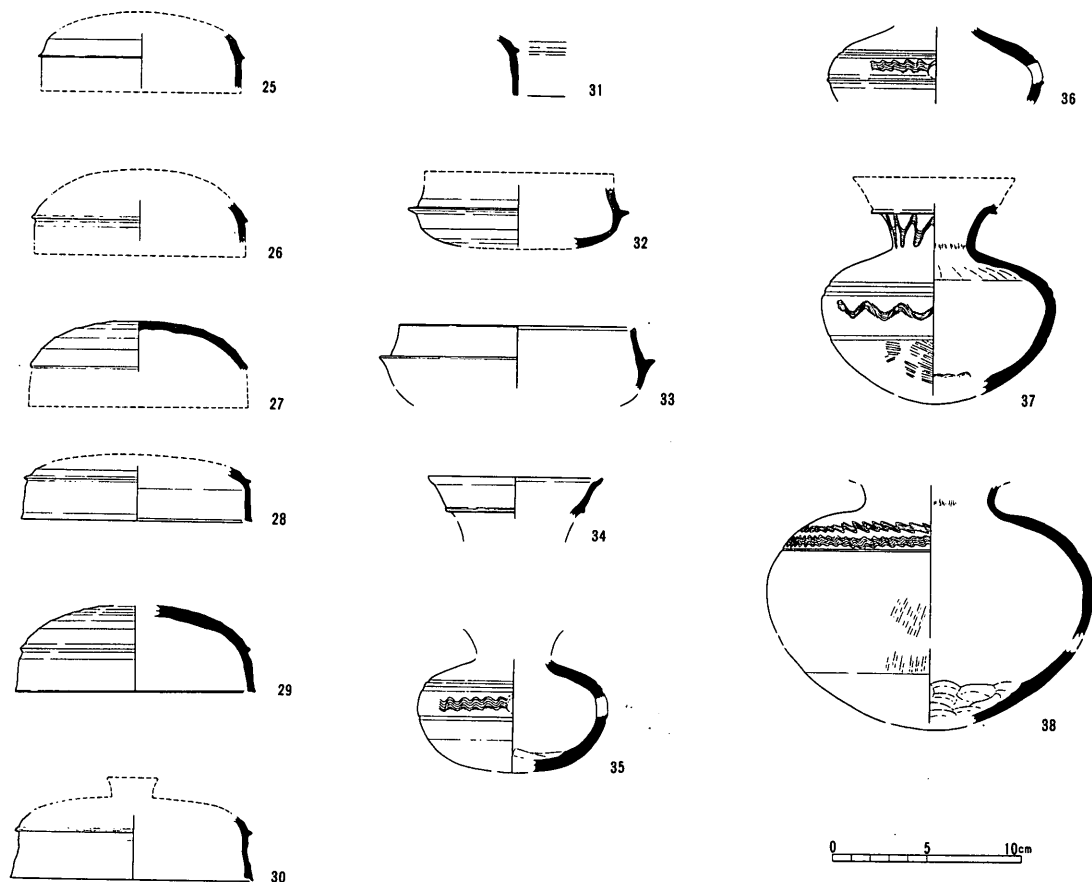


図49 古墳時代 須恵器実測図（1：4）

10号住居跡

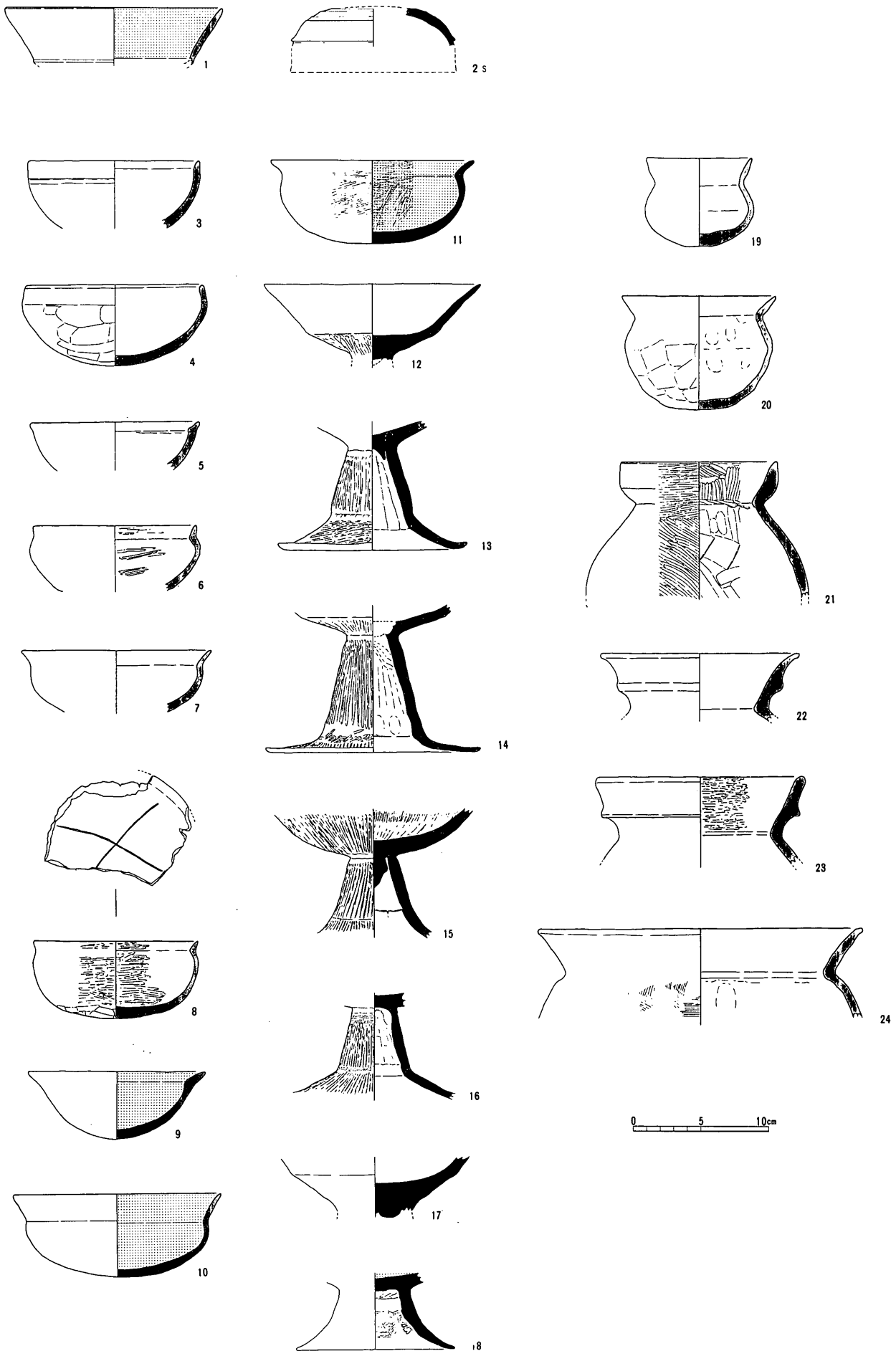


図48 古墳時代 土器実測図 (1 : 4) (Sは須恵器)

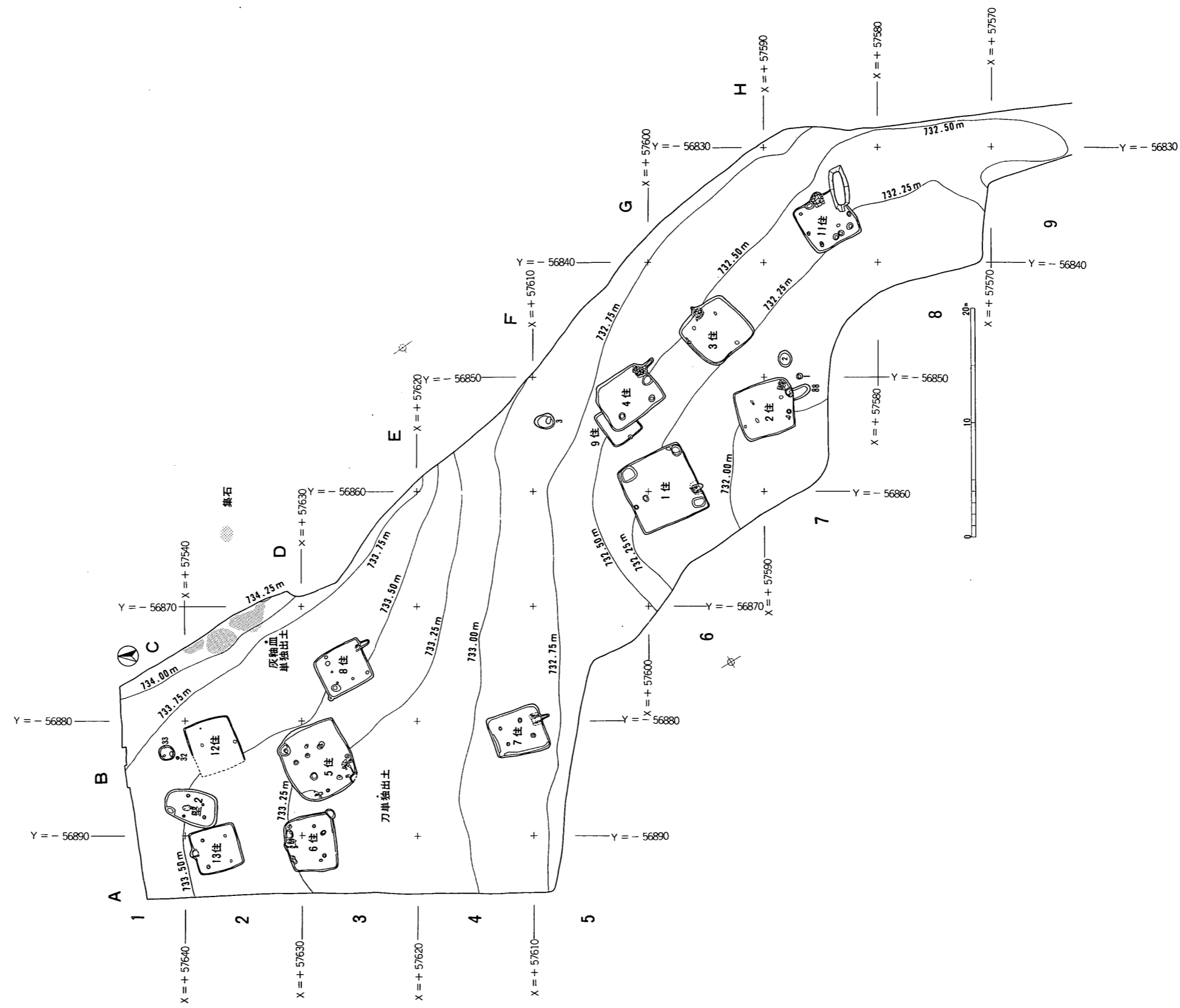


図50 奈良・平安時代調査区全体図 (1 : 400)

第5節 奈良・平安時代

奈良時代竪穴住居跡1軒、平安時代竪穴住居跡11軒・竪穴1軒・ピット・集石が検出されている。

1. 竪穴住居跡

11号住居跡が奈良時代、9号住居跡が9世紀前半、3・6号住居跡が9世紀末～10世紀前半、12・13号住居跡が10世紀前半、1・7号住居跡が11世紀前半、8号住居跡が11世紀前半～後半、2・4号住居跡が11世紀中頃～後半、5号住居跡が11世紀後半～12世紀前半の住居跡で、4住に切られる9号住を除きすべて、カマドが検出され、カマドはすべて石組み粘土カマドで、3・12号住居跡が東壁のほぼ中央、6・13号住居跡が北壁ほぼ中央、1・2・4・7・8号住居跡が南壁の東か西側に寄った部分、5号住居跡が西壁の南端に構築されていた。カマド粘土は3・6・13号住居跡の10世紀代の住居跡が灰白色粘土を使用しているのに対し、1・2・4・5・7・8号住居跡の11世紀代の住居跡は黄色粘土を使用しており、カマドの位置もこれと同じくして10世紀代と11世紀代では、10世紀代が東か北であるのに対し、11世紀代は南というような傾向が見られた。

検出住居跡のうち、2・5・7・11号住居跡は、炭化材・焼土等がしっかりと残る焼失住居、3・4・6・13号住居跡は、炭化材・焼土等が部分的や粉状に残る焼失住居と思われる住居跡であった。また、3・4・11・13号住居跡にはカマドの前など、部分的に集石が見られ、6号住居跡は住居内のほぼ全面に集石が見られた。

(1) 11号住居跡 (図51～54, 写真33・34)

遺構 H-7区で検出された。4.4×4.6mの隅丸方形プランを呈する。東壁のほぼ中央に石組み粘土カマドをもつ。カマドは、天井部が落ちたのみで完存していた。焼失住居で炭化材・焼土の集積が見られ、カマド天井部上にも多くの炭化材片が見られた。北壁外には、炭化材と一緒に、何であるかははっきりしないが細くした材を丸めた炭化した曲物が検出された。床面は白色粘土で貼床され、全体的に堅いタタキ床となっていた。壁高は30～55cmを測る。カマド前にはどのような性格かは不明であるが人頭大の礫の集積が見られた。

床面からはP1～8のピットが検出された。P2・4・7は支柱穴と思われ、調査できなかった電柱の支え線の埋設部分にもう1ヶの支柱穴があると推定され4本支柱であったと考えられる。P3・8は補助的な柱穴と考えられる。P1は、カマド横の貯蔵穴、P5・6はどのような性格のピットかははっきりしないが、P6上部には、編物用石錘と思われる、10cm内外の柱状の礫が5ヶ検出されている。P5の東側には、楕円形の平石が置かれている。

遺物 底部ヘラ切りの須恵器杯が出土している。この他に須恵器大甕、不明の鉄器、北壁外から鉄鎌、図示できなかったが輪状の曲物などが出土している。

本跡は検出土層、遺物から見て奈良時代中頃に属するものと考えられる。

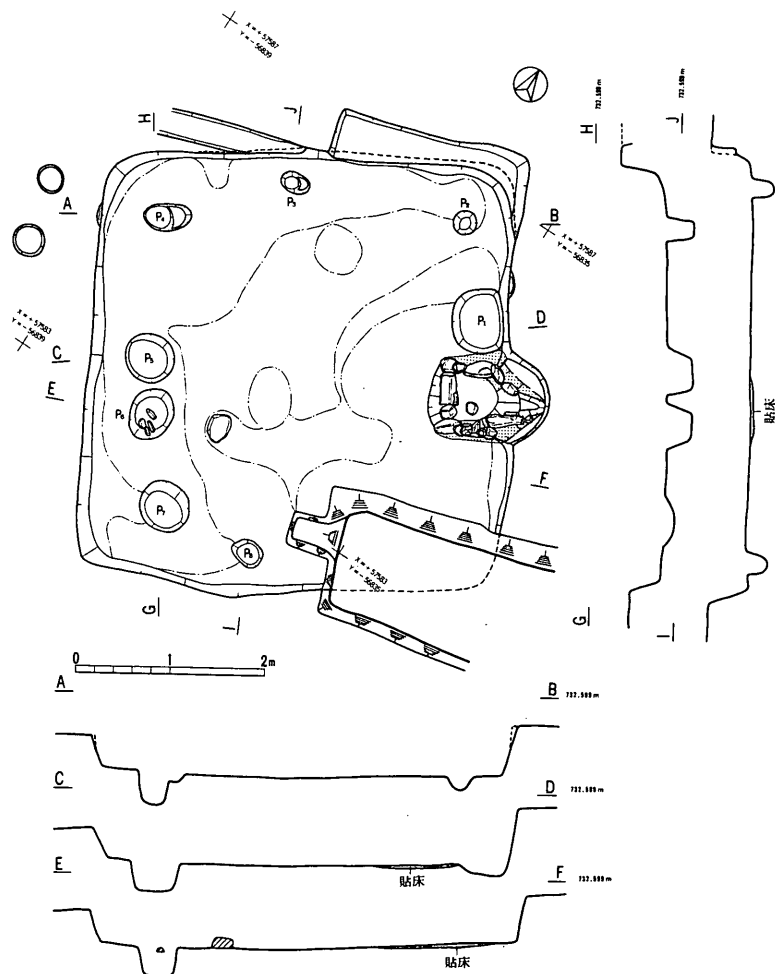
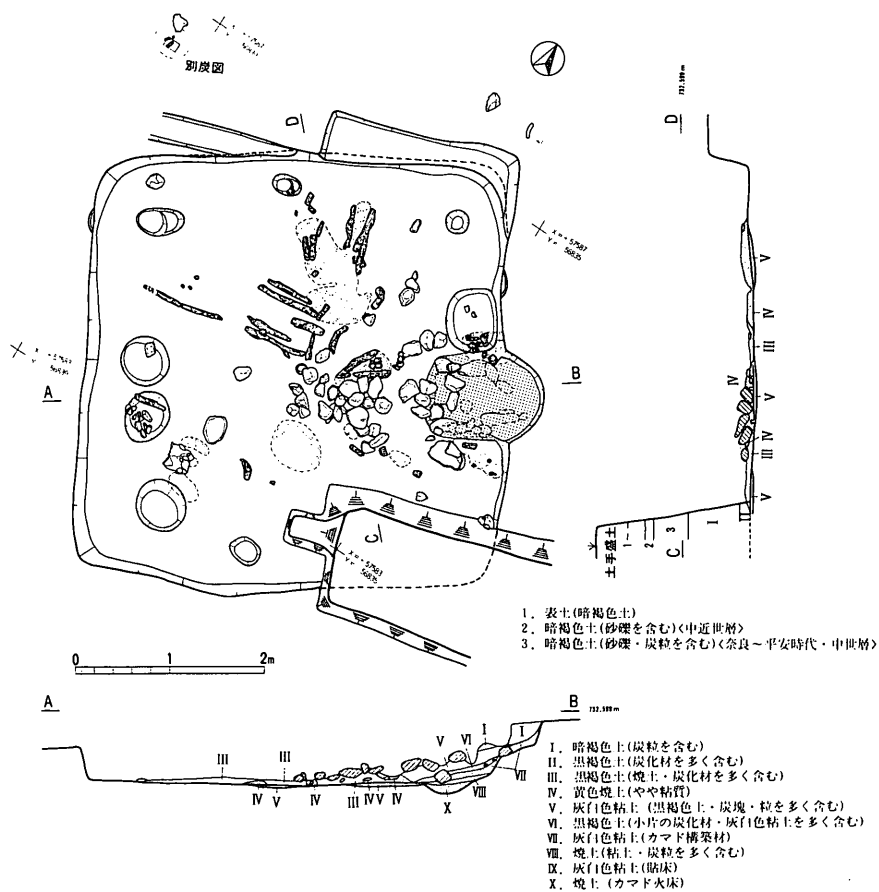


図51 11号住居跡 (1 : 80)



1. 表土(暗褐色土)
2. 暗褐色土(砂礫を含む)(中近世層)
3. 暗褐色土(砂礫・炭粒を含む)(奈良～平安時代・中世層)

- I. 暗褐色土(炭粒を含む)
- II. 黒褐色土(炭化材を多く含む)
- III. 黒褐色土(焼土・炭化材を多く含む)
- IV. 黄色焼土(やや粘質)
- V. 灰白色粘土(黒褐色土・炭塊・粒を多く含む)
- VI. 黒褐色土(小片の炭化材・灰白色粘土を多く含む)
- VII. 灰白色粘土(カマド構築材)
- VIII. 焼土(粘土・炭粒を多く含む)
- IX. 灰白色粘土(貼床)
- X. 焼土(カマド火床)

図52 11号住居跡炭化材・礫・遺物出土状況 (1 : 80)

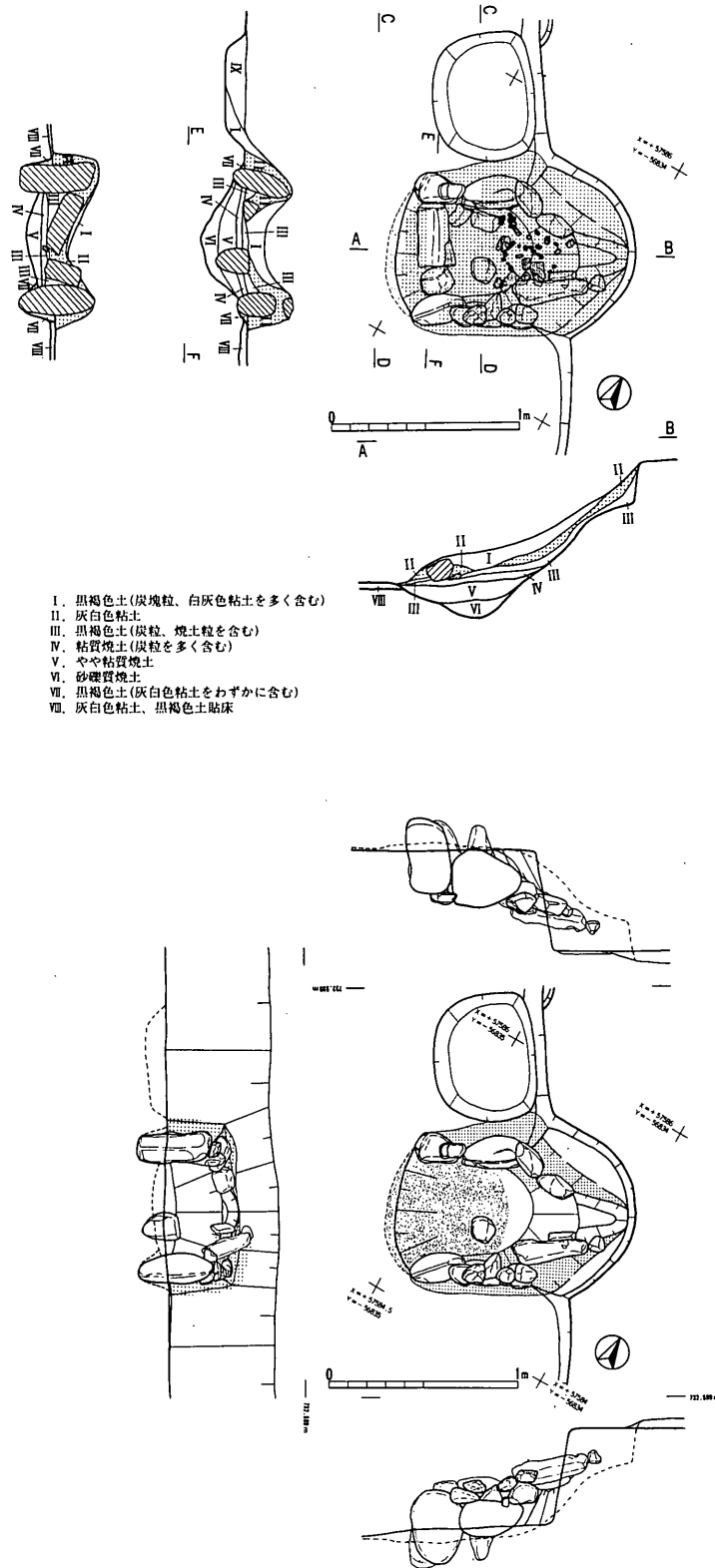


図53 11号住居跡カマド (1 : 40)

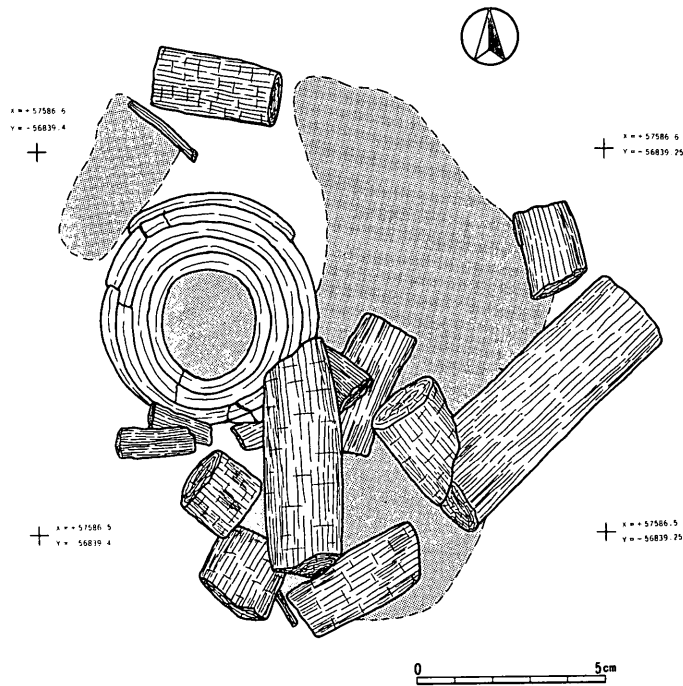


図54 11号住居跡北側炭化物出土状況（1：2）

(2) 9号住居跡（図77、写真26）

遺構 E-5の中央南側で、4号住居跡に切られて検出された。3.4×3mの方形プランでカマドは切られた部分にあっらしく見られない。床面はほぼ平坦であるが軟弱である。壁高は30～40cmを測る。西壁のほぼ中央に1ケのピットが検出された他は何の施設も検出できなかった。

遺物 出土遺物は少なく、回転糸切り底の須恵器杯のみである。

検出層位、遺物より見て9世紀前半～中頃に属すると考えられる。

(3) 3号住居跡（図55～57、写真24・25）

遺構 F-6区中央で検出された。中世の竪穴1と切り合い、約半分の壁上面を削られている。5×5.2mの隅丸方形プランを呈し、東壁のほぼ中央に石組み粘土カマドをもつ。カマドは一部石組みが崩れていた。床面は白灰色粘土と黒褐色土を混合し貼床され、全体的に堅い。壁高は30～60cmを測る。床面に柱穴等のピットは検出できなかったが、平石が3箇所、柱穴が普通存在すると思われる位置に有り、これが礎石的役割をしていたと考えられる。他に北壁から西壁にかけて壁際に幅10～20、深さ2～10cmの周溝が検出された。

本跡は焼失住居と思われるもので、カヤ状炭化物、炭化材小片、粉状の炭ブロック、焼土等が検出されている。また、カマド前には人頭大の礫を集めた、集石が見られた。この性格については不明である。

遺物 底部回転糸切り底の黒色土器、土師器（須恵器的）、焼の悪い軟質の須恵器の杯、土師器小形甕、光ヶ丘及び大原窯式の灰釉陶器皿・碗が出土している。この他に炭化木製品として櫛が出土している。また、杯に墨書、刻字などが多く見られる。

検出層位、遺物より見て9世紀末～10世紀前半に属すると考えられる。

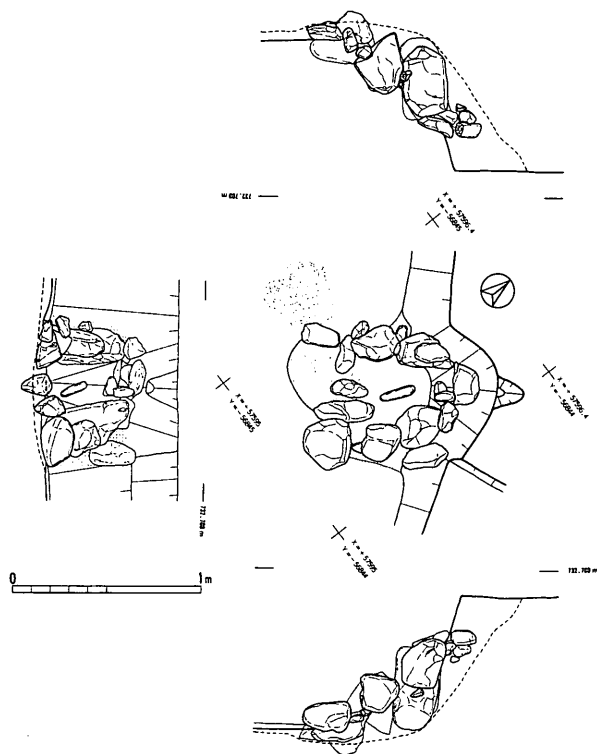
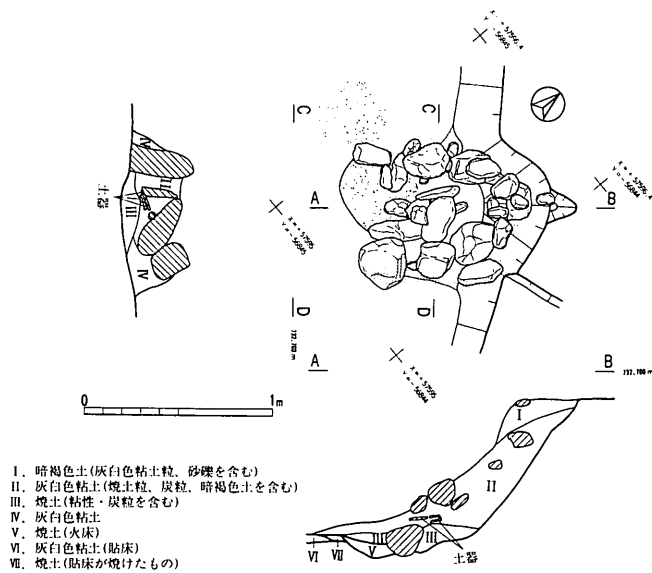


図57 3号住居跡カマド(1:40)

(4) 6号住居跡 (図58~60, 写真28~30)

遺構 A・B-3の北部で検出された。4.4×5.1mの隅丸方形プランを呈し、北壁のほぼ中央に石組み粘土カマドをもつ。カマドは石組みが半分程度崩れていた。床面は白灰色粘土で貼床され、カマド全面を中心に堅い。壁高は10~30cmを測る。床面及び壁際からはP1~P7のピットが検出された。P2.3.5は柱穴状である。P1.6.7は位置等から貯蔵穴的なものと思われる。P6には隅に平石が置かれ、周辺を灰白色粘土で固めている。また、東隣には平石3枚の配石がある。P4には楕円形の平石が入っている。支柱穴は、はっきりとしないが、柱穴状のピットとP4の平石、その対面の床面にある平石が礎石的役割であった可能性もあり、柱穴と礎石を組み合わせた主体であったと考えられる。4本柱であったと思われるが北東の1本ははっきりとしない。他施設として東壁際から南壁の東側にかけて、幅10~15cm、深さ4~12cmの周溝が検出された。また、西側中央の床面、70×60cmの範囲で焼土が検出された。本跡内のほぼ全面には拳大~人頭大の礫の集石が見られたが、性格ははっきりとしない。埋土には白灰色粘土が多く含まれていたことから、屋根に灰白色粘土が載せられていた可能性もあり、礫も屋根上に載せられていた可能性もある。また、焼失住居である可能性もあり、P4周辺からカヤ状炭化物、粉状の炭化材等が検出されている。

遺物 底部回転糸切り底の黒色土器、焼きの悪い軟質の須恵器杯、土師器小形甕、光ヶ丘窯式の灰釉陶器皿等が出土している。3号住居と同じく、墨書、刻字などが見られる。

検出層位、遺物より見て、9世紀末~10世紀前半に属すると考えられる。

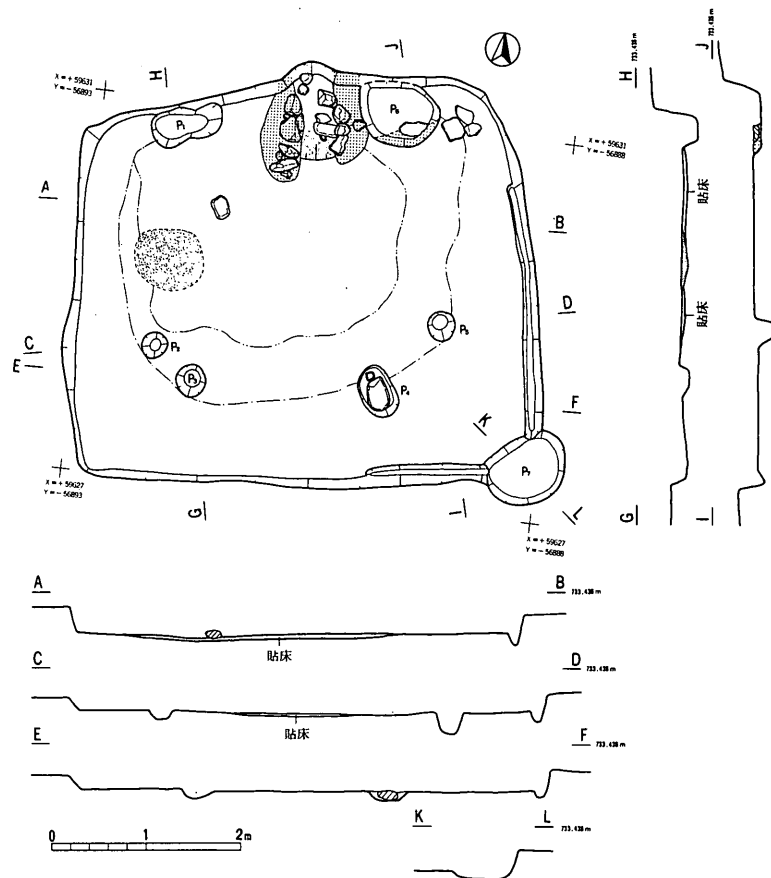


図58 6号住居跡 (1:80)

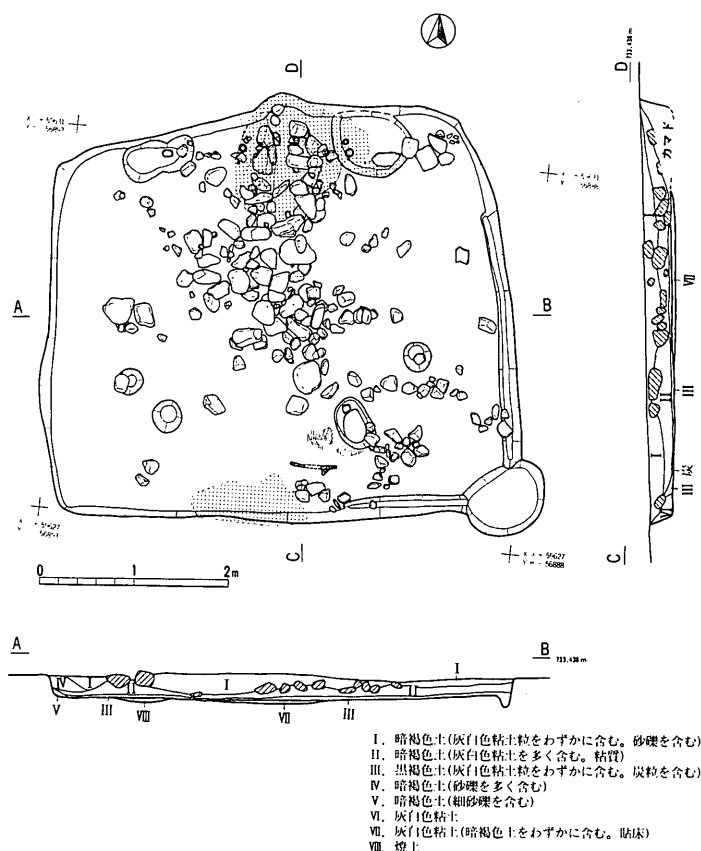


図59 6号居住居跡・磔・遺物・炭化材出土状況(1:80)

(5) 12号住居跡(図61, 写真35)

遺構 B-2区北東側で検出された。4.5×4.2mの方形プランを呈する。検出時にはなかなか検出できず床面近くでやっと検出された。カマドは、東壁ほぼ中央に焼土が見られるのみである。焼土のみであるが石組み及び粘土が取り壊された、石組み粘土カマドであったと考えられる。床面は全体的に平坦で、やや堅い。壁高は10~15cmを測る。床面からピット等の施設は検出できなかった。北部の床面中央に平石が1ヶ、と南壁中央に壁に接して30cm大の磔が見られた。

遺物 出土遺跡は少なく、大原窯式と思われる灰釉陶器皿・碗の底部、須恵器長頸瓶底部がある。

(6) 13号住居跡(図62~64, 写真35・36)

遺構 A-2区で、竪穴2に接して検出された。上層調査時には検出できず、下層調査に入る時点で検出され、東半分の壁上面は削り取ってしまった。4.1×4mの方形プランで、北壁ほぼ中央に石組み粘土カマドがある。

カマドは、両袖石組みともほぼ残存していた。床面はほぼ平坦で、中央部付近を中心に堅い面となっている。壁はほぼ垂直で30cmの高さを測る。床面からはP1.2の2ヶの柱穴が検出された。これら2本の柱穴は支柱穴と考えられ、これと対になるように平石が2箇所に見られ、北側は柱穴で、南側は礎石状の平石で支柱が支えられ4本支柱であったと考えられる。他に施設は検出できなかった。

本跡内の中央部には磔の集石が見られた。性格ははっきりとしない。また、焼失家屋である可能性があり、短い炭化材、粉状になった炭、カヤ状炭化物等が検出されている。

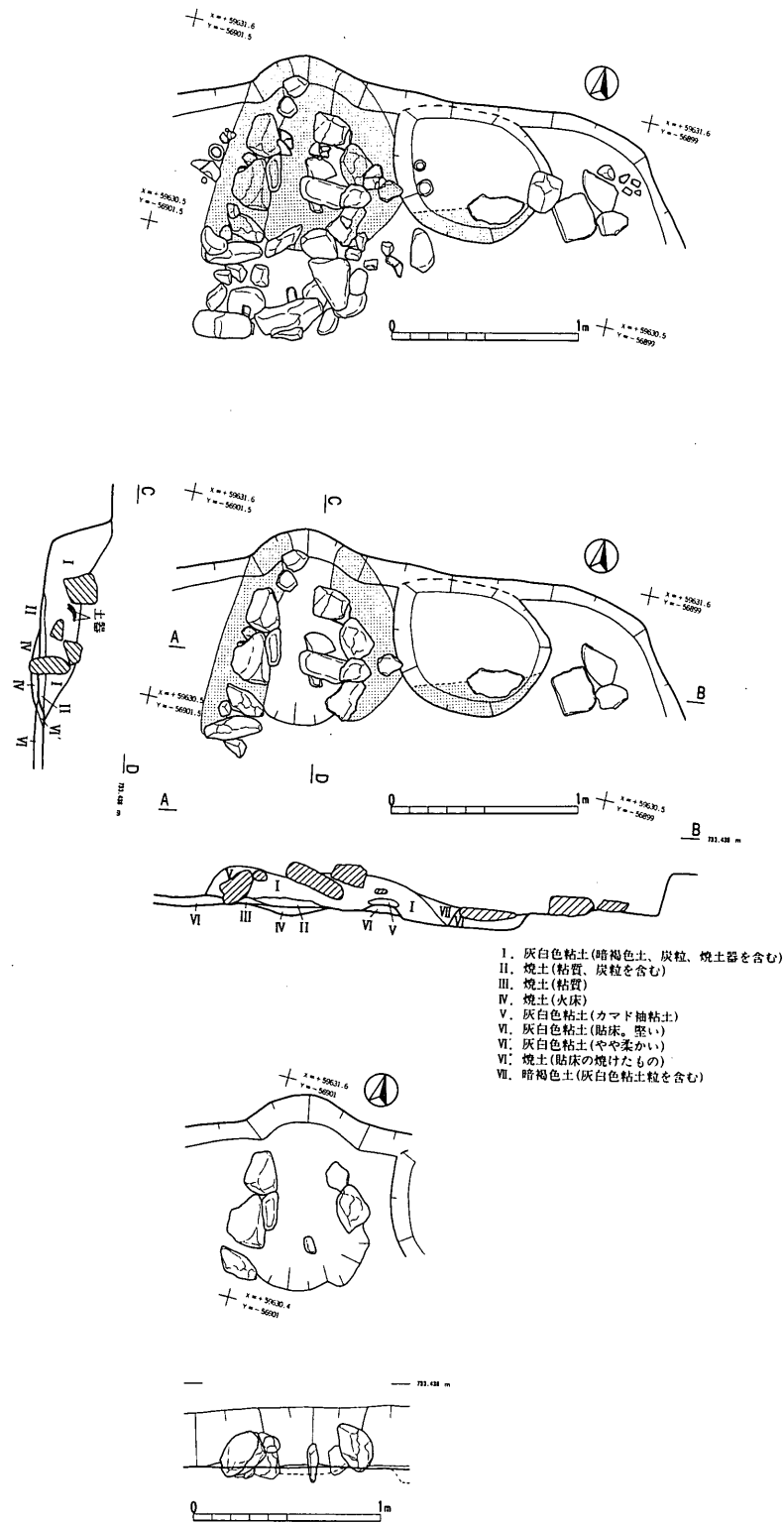


図60 6号住居跡カマド(1:40)

遺物 底部回転糸切り底の黒色土器の杯・鉢、土師器小形甕、大原窯式の灰釉陶器碗が出土している。この他に製鉄窯か、須恵器窯の窯壁が出土している。

本跡は、検出層位、出土遺物等から10世紀前半に属すると考えられる。

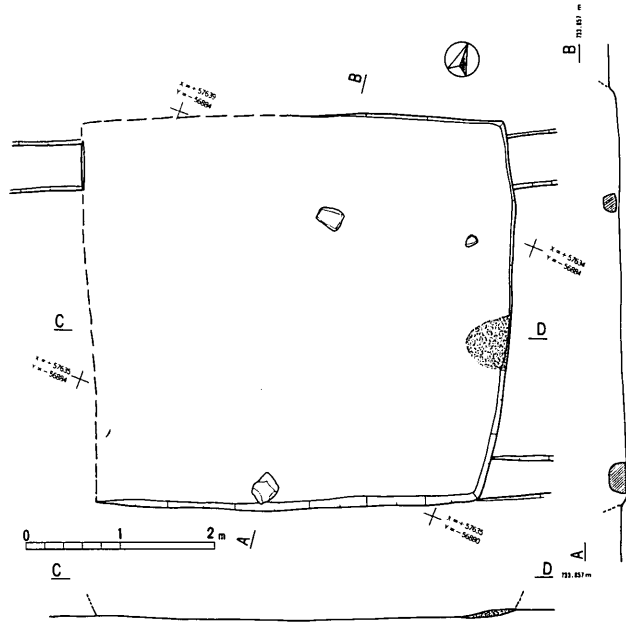


図61 12号住居跡 (1 : 80)

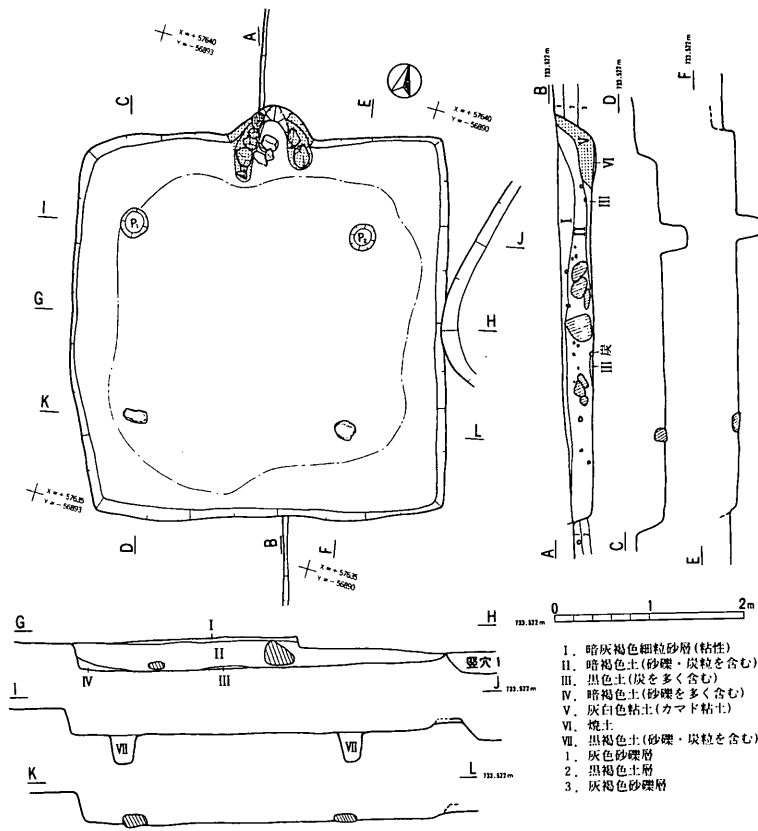


図62 13号住居跡 (1 : 80)

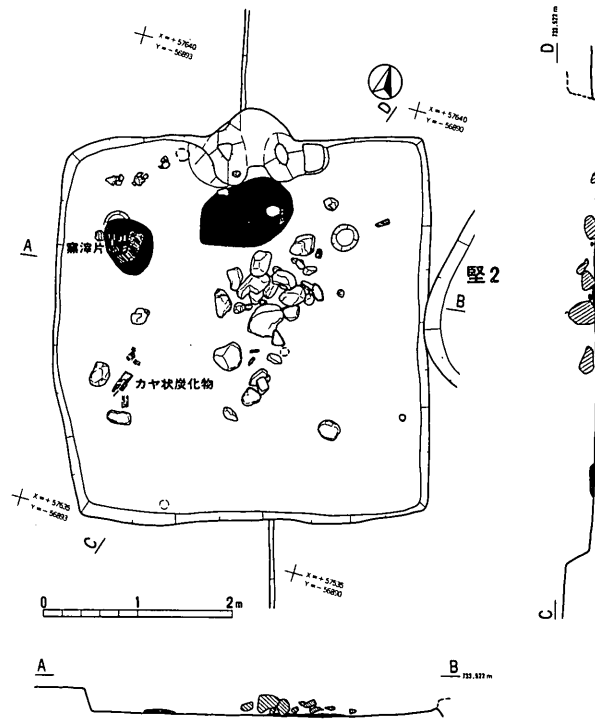


図63 13号住居跡 礫・遺物・炭化物出土状況 (1 : 80)

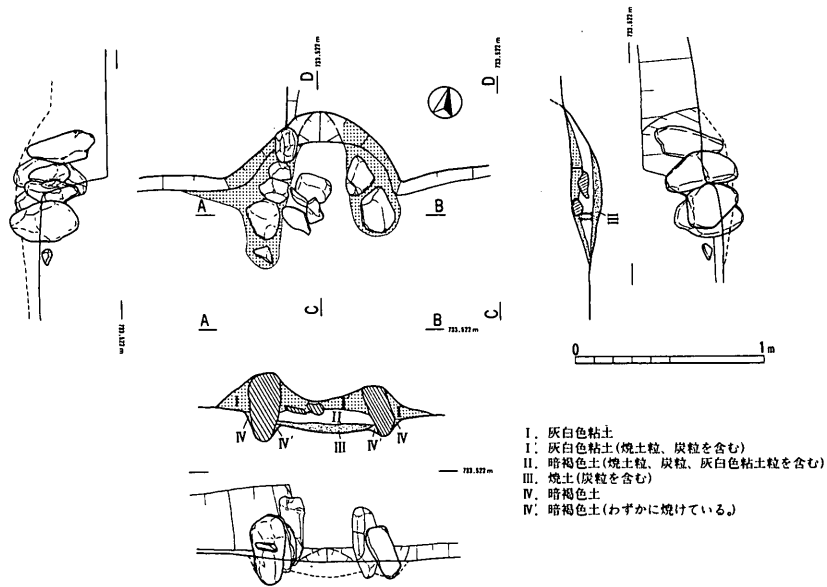


図64 13号住居跡カマド (1 : 40)

(7) 1号住居跡 (図65~67, 写真20・21)

遺構 D・E-5・6区の接する地点で検出された。6.2×6.3mの方形プランを呈し、南壁東側に石組み粘土カマドが検出されている。カマドは袖石が内側に倒れかかっていたもののほぼ残り、カマド内には遺物が多く入れられていた。おそらく、住居廃棄時にカマドを壊して、遺物を入れていったものと思われる。床面はほぼ平坦で、中央部付近に堅い面が見られ、黄色粘土と黒褐色土の混合土で貼床している。床面からはP 1~5のピットが検出された。壁隅にあるP 1, 2, 5は位置の大きさから見て、貯蔵穴的性格と思われる。P 2, 5内には焼土が見られ、P 5内には炭化材及びカヤ状炭化物等も見られた。他の施設は検出できなかった。

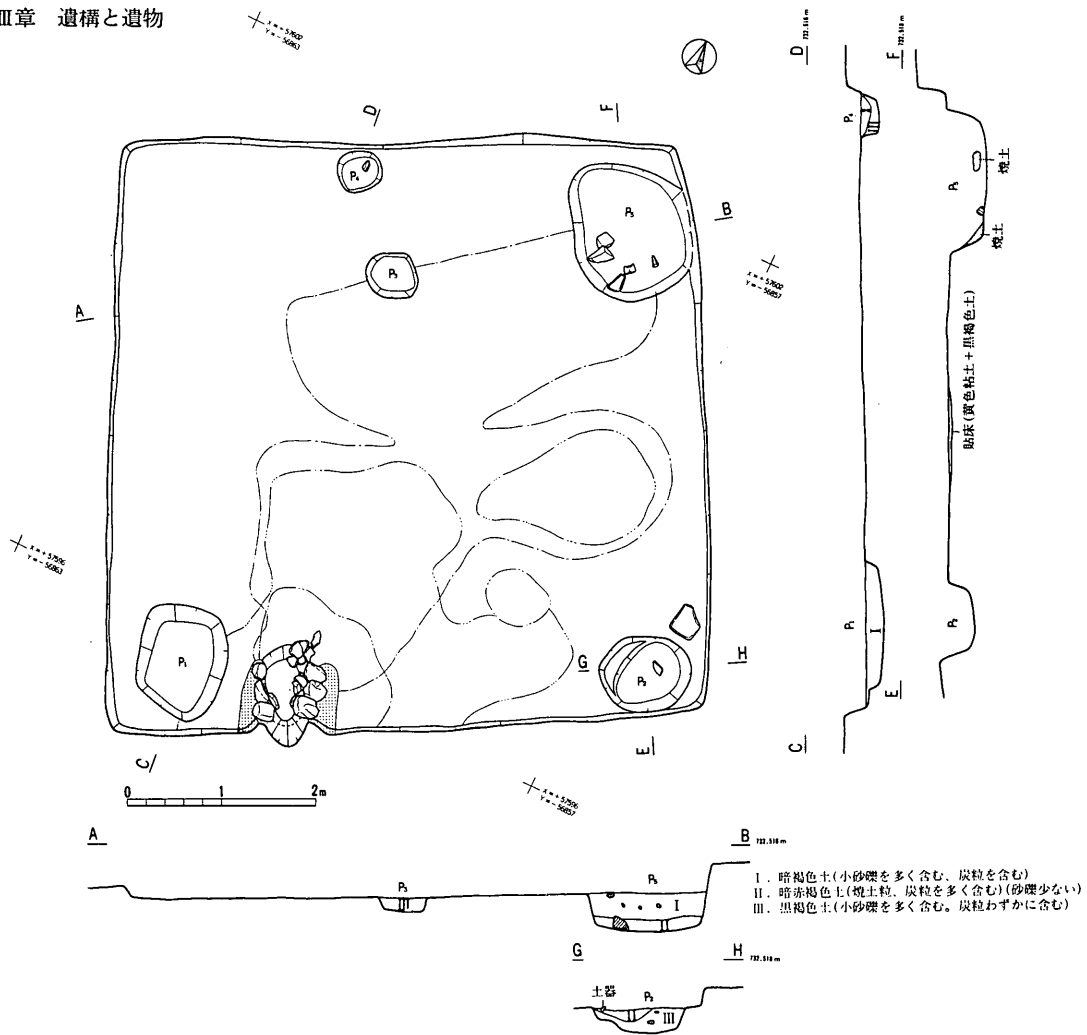


図65 1号住居跡 (1 : 80)

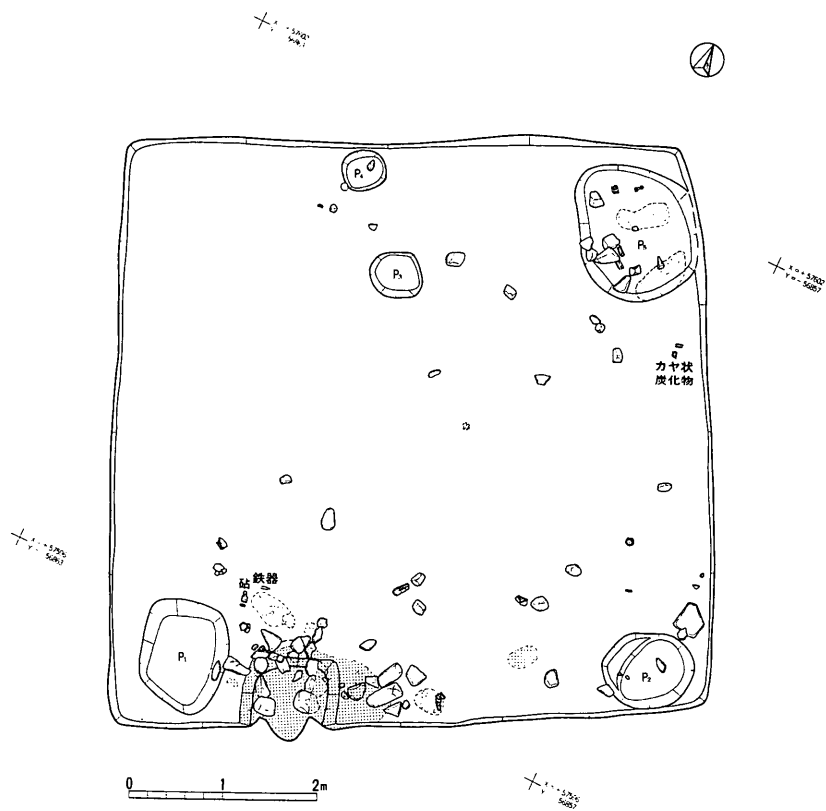


図66 1号住居跡 礫・遺物・炭化物出土状況 (1 : 80)

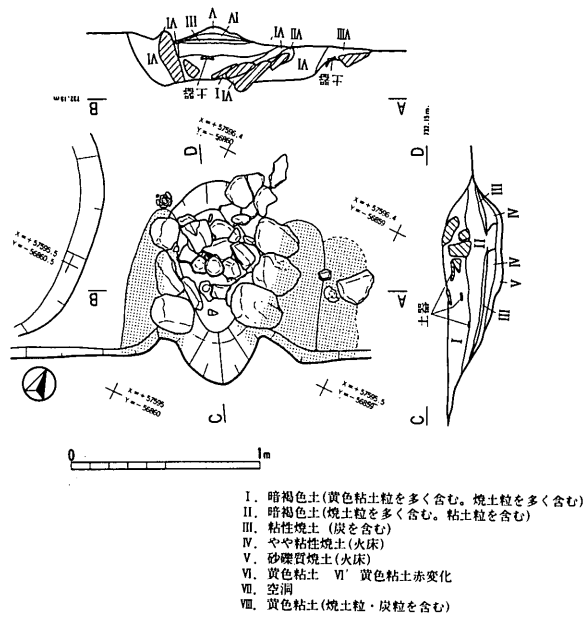


図67 1号住居跡カマド (1:40)

た。

本跡は焼失住居と思われる住居跡で、炭化材片、カヤ状炭化物、焼土等が住居内に見られる。

遺物 底部回転糸切りの小形の杯が多く、小皿も1点見られる。共伴する灰釉陶器壺は、虎溪山・丸石窯式のものである。他にU字状の鉄器、図示できなかったが炭化砧がある。

本跡は、検出層位・出土遺物から10世紀末から11世紀前半に属すると思われる。

(8) 7号住居跡 (図68~70, 写真31)

遺構 B・C-4・5区接点北側で検出された。4.7×4mの方形プランを呈する。南壁東側寄りに石組み粘土カマドがあり、天井部が失われているのみで浅いが煙道も外側に残る。カマド内には廃棄時に遺物を入れていったらしく、数は多くないが遺物が重なって見られた。床面は、ほぼ平坦で、全体的に堅く、部分的に黄色粘土の貼床がなされていた。床面からはP1~4の柱穴が方形に並び検出された。これは支柱穴であろう。北壁・西壁際では、幅10~20cm、深さ4~10cmの周溝が検出された。

本跡は、焼失家屋で、炭化材・焼土の散布が見られた。炭化材、焼土は住居内西側に多く集中している。

遺物、回転糸切り底の土師器杯、土師器羽釜、虎溪山窯式と思われる灰釉陶器壺が出土している。79の羽

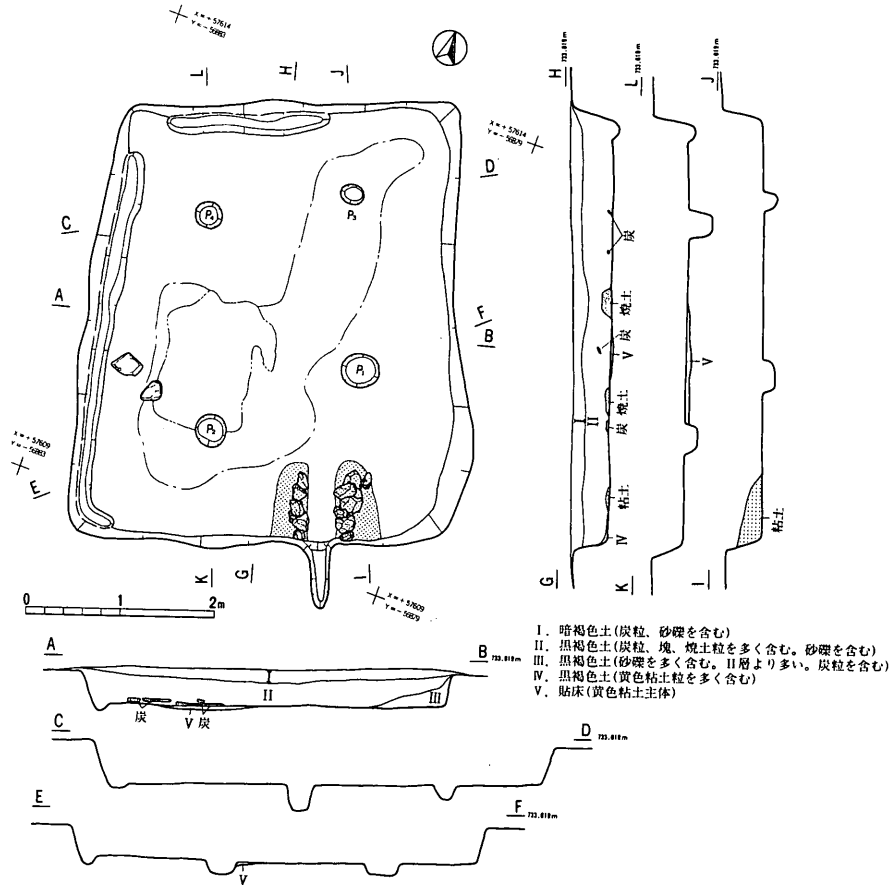


図68 7号住居跡 (1 : 80)

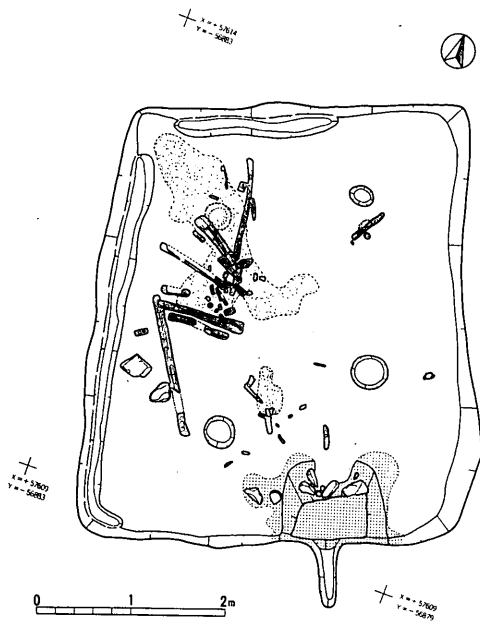


図69 7号住居跡 炭化材・焼土出土状況 (1 : 80)

釜は底部がなく、きれいにヘラケズリがなされ、おそらく、飢餓的に使用されたと思われる。

本跡は、検出層位・出土遺物から10世紀末から11世紀前半に属すると思われる。

(9) 8号住居跡 (図71~73, 写真32)

遺構 C-3区で検出された。4.4×4mの方形プランを呈する。南壁東側寄りに石組み粘土カマドがあり、半壊しており片袖のみが残存している。床面は、ほぼ平坦で全体的に堅く、黄色粘土、黄色粘土と黒褐色土の混合土で貼床がなされている。床面からはP1~8のピットが検出されているが主柱穴ははっきりとしな

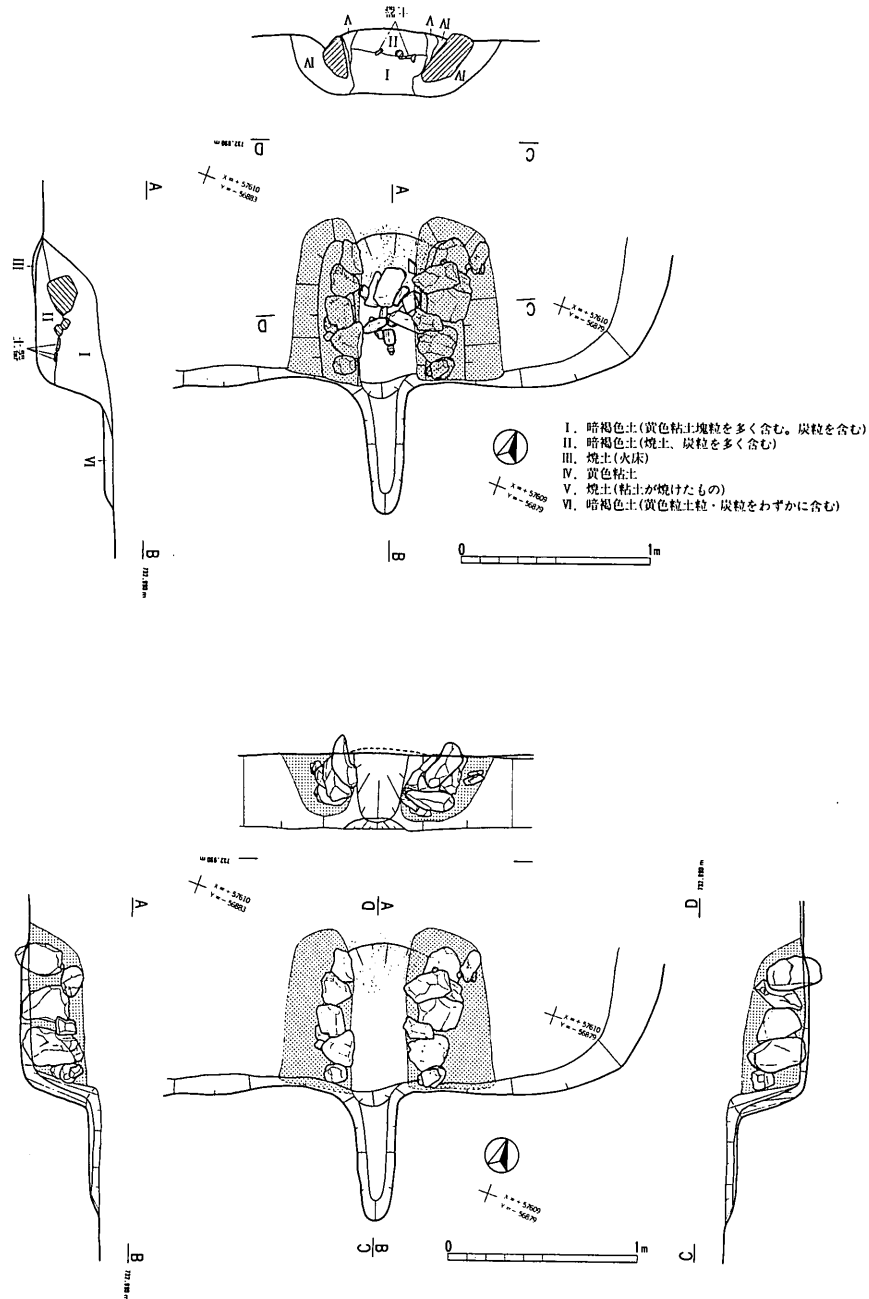


図70 7号住居跡 カマド (1:40)

い。その他に施設は何も検出できなかったが、東側際の中央部附近に黄色粘土が固まり、床面より一段高くなった部分が見られた。

遺物 回転糸切り底の土師器杯が主体である。出土灰釉陶器碗は丸石窯式主体である。他に鉄滓が8点見られた。

本跡は、検出層位・出土遺物から11世紀前半～後半に属する。

(10) 2号住居跡 (図74～76, 写真22・23)

遺構 E-6・7区で検出された。5.2×4.7mの方形プランを呈する。南壁東端に石組み粘土カマドがあり、一部袖石を残り倒れていた。床面は、ほぼ平坦で全体的に堅く、黄色粘土と黒褐色の混合土で貼床なされている。床面からはP1・2が検出された。P2は位置等から貯蔵穴と考えられる。P1は柱穴と思われ、対角

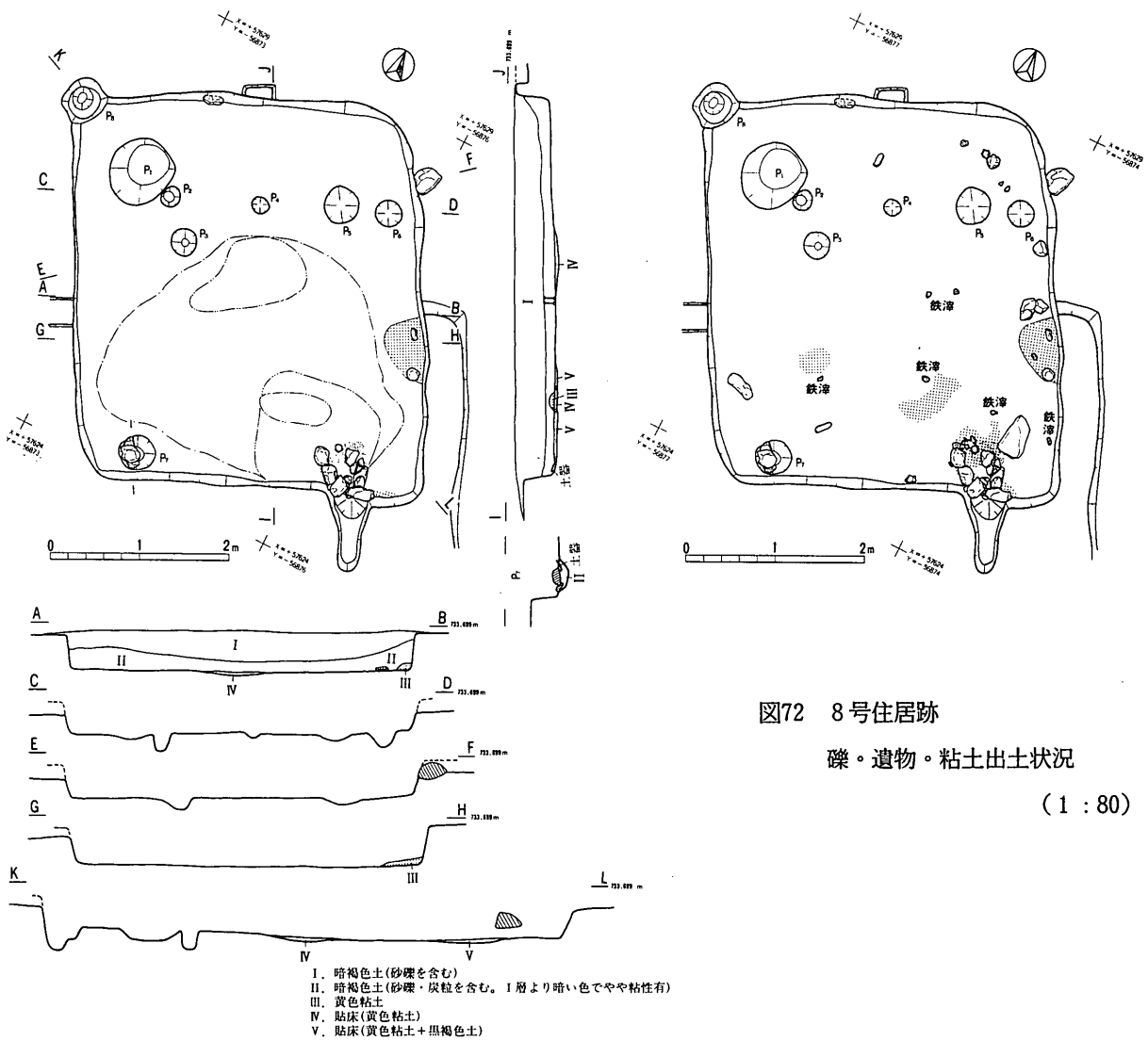


図71 8号住居跡 (1:80)

図72 8号住居跡

礫・遺物。粘土出土状況

(1:80)

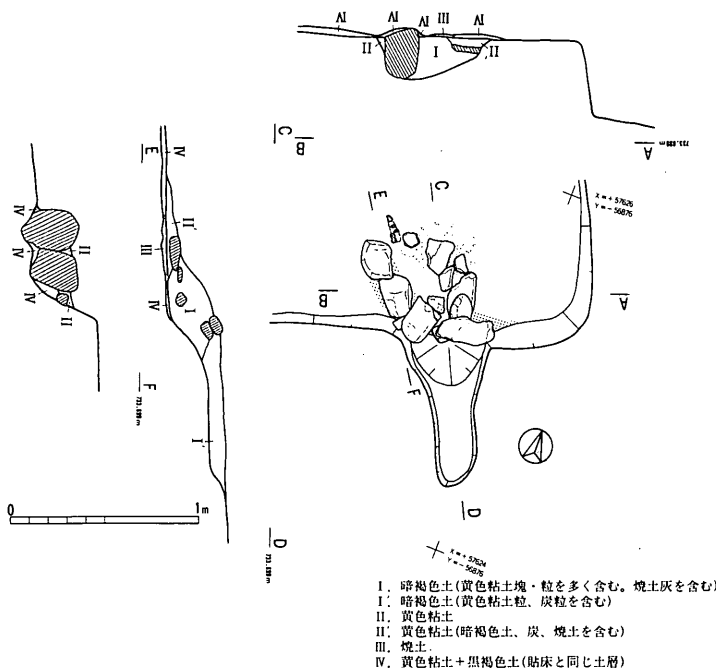


図73 8号住居跡カマド (1:40)

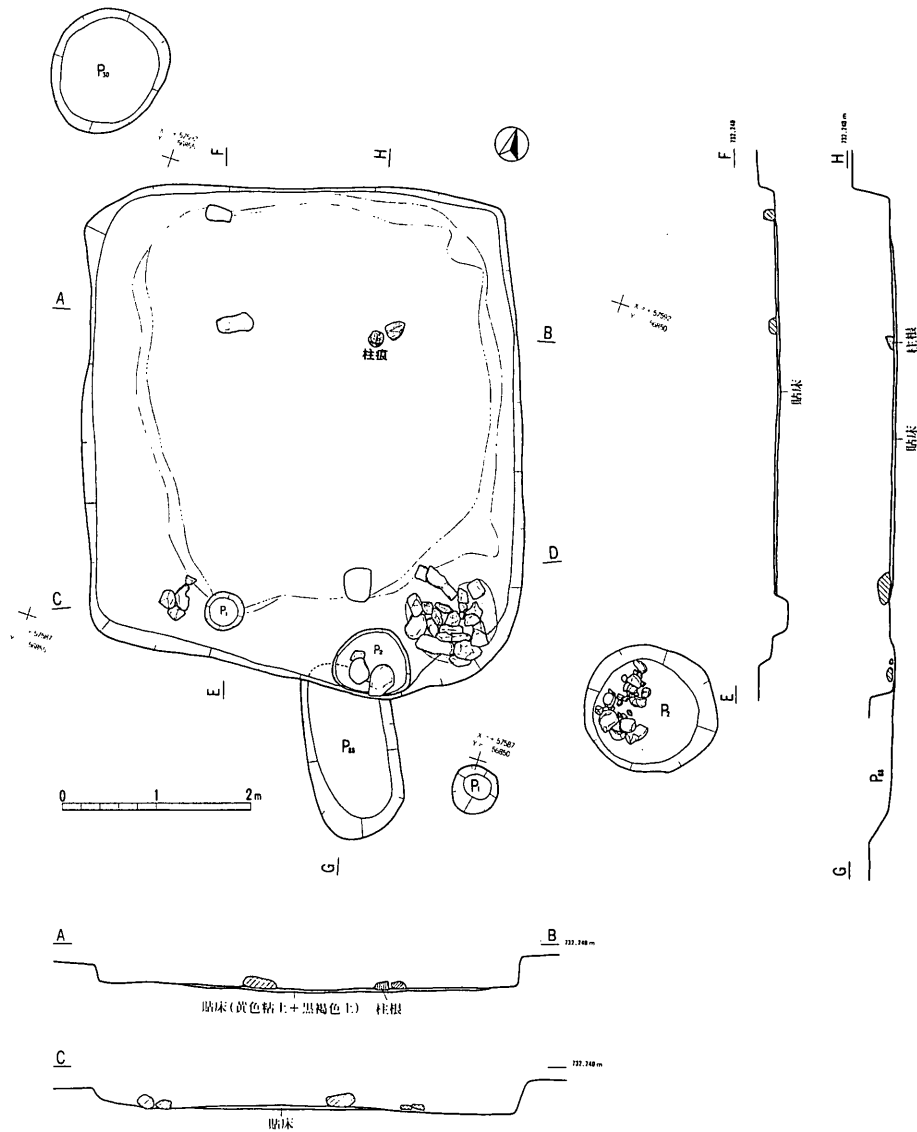


図74号 2号住居跡 P1・2・33・88 (1:80)

する位置には径14cmの炭化柱が床面に立てられた状態で残り、これが主柱の一部と考えられ、他には何も無いが、平石が床面上にあり、主柱は、柱穴で支えたもの、礎石上に置いたもの、床面上にそのまま立てたものの4本柱だったと推定される。

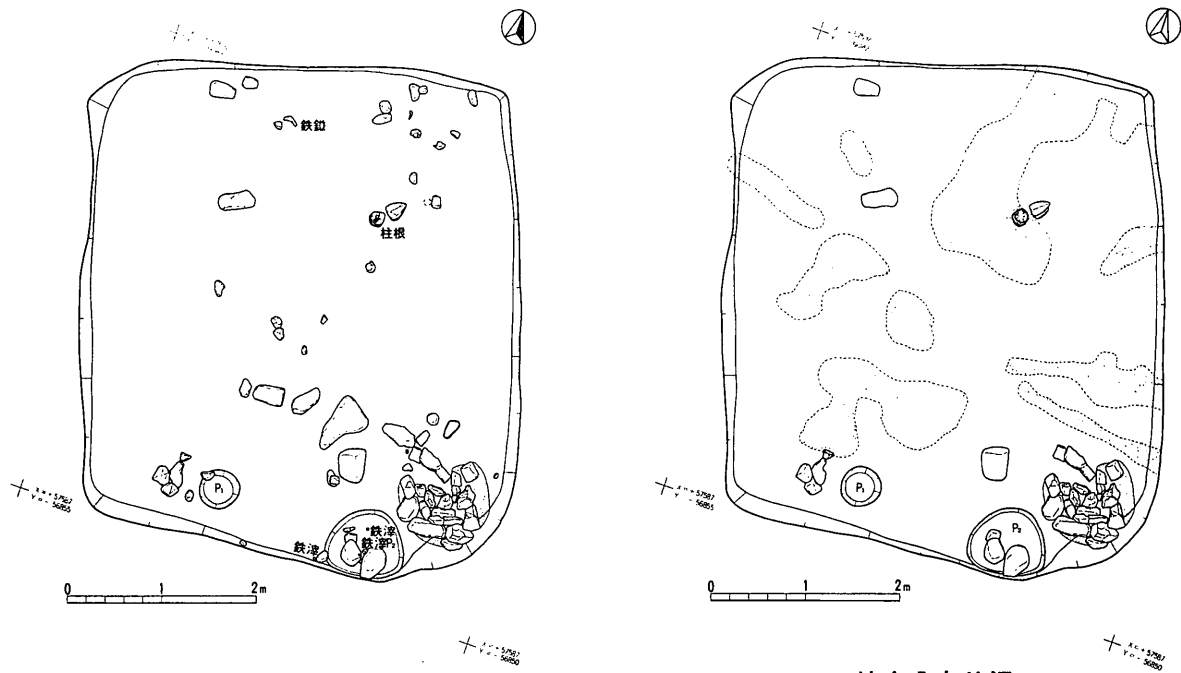
本跡は焼失家屋で、炭化材、焼土等が住居内より重なって検出された。

遺物 回転糸切り底の小皿が多く出土している。その他に土師器杯、黒色土器碗、丸石窯式の灰釉陶器碗と緑釉陶器皿がある。また鉄鎌とP2内から鉄滓が5ヶ出土している。

検出層位・出土遺物等から11世紀後半に属すると思われる。

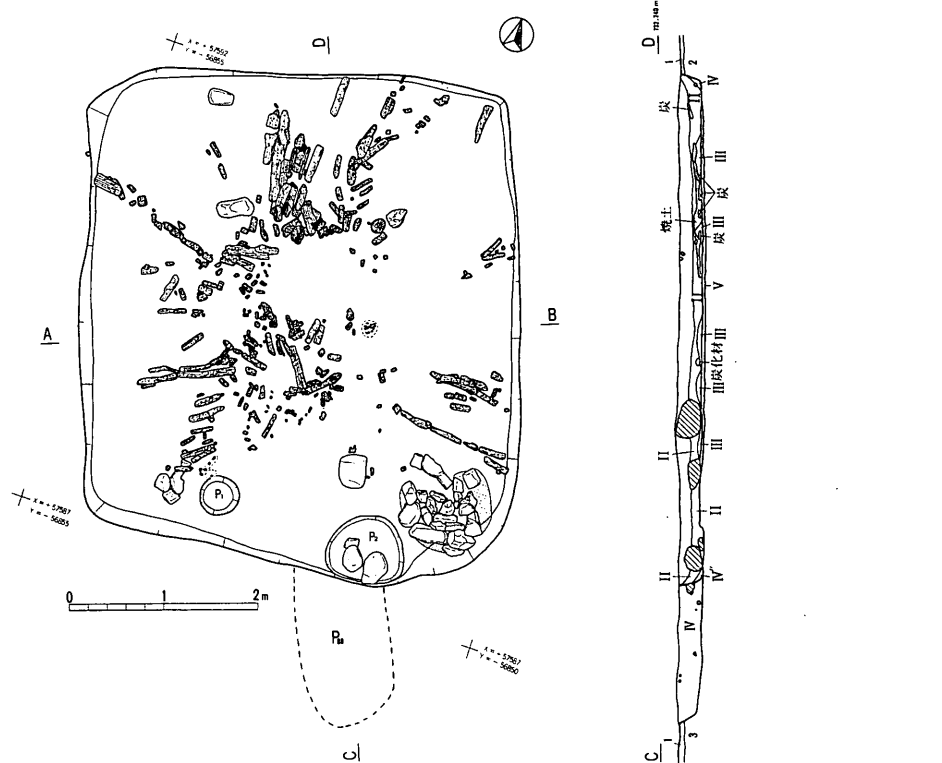
(1) 4号住居跡 (図77・78, 写真25・26)

遺構 E-5区の東南側で検出された。5.4×4.3mの長方形プランを呈する。南壁東端に石組み粘土カマドがあり、ほぼ完存する。外側には長さ1m、幅40cm、深さ10~20cmの煙道が残り、煙道内には一部粘土も残っていた。床面は平坦で南半分が堅く、黄色粘土と黒褐色土の混合土により貼床が見られる。床面からは、P1~3のピットが検出された。P3はカマド横側にあり貯蔵穴と思われ、他は柱穴と思われる。主柱穴は2



礫・遺物出土状況

焼土分布状況



炭化材出土状況

- 1. 暗褐色土(砂礫をやや多く含む。炭粒、焼土粒を含む)
- II. 黒褐色土(砂礫小なし。炭粒、焼土粒を多く含む)
- III. 黒褐色土(炭塊、粒・焼土粒を多く含む)
- IV. 暗褐色砂土(小礫小なし。炭粒をわずかに含む)
- IV. 暗褐色砂土(小礫多し。炭粒をわずかに含む)
- IV. 暗褐色砂土(小礫多し。炭粒をわずかに含む)
- V. 暗床(黄色粘土+黒褐色土)
- VI. 暗褐色土(砂礫多く含む。炭粒をわずかに含む。P88埋土)
- 1. 暗褐色土(砂礫多く含む)〈古墳時代層〉
- 2. 灰黄色砂(礫をわずかに含む)
- 3. 灰色砂礫層

図75 2号住居跡炭化材・礫・遺物・焼土出土状況(1:80)

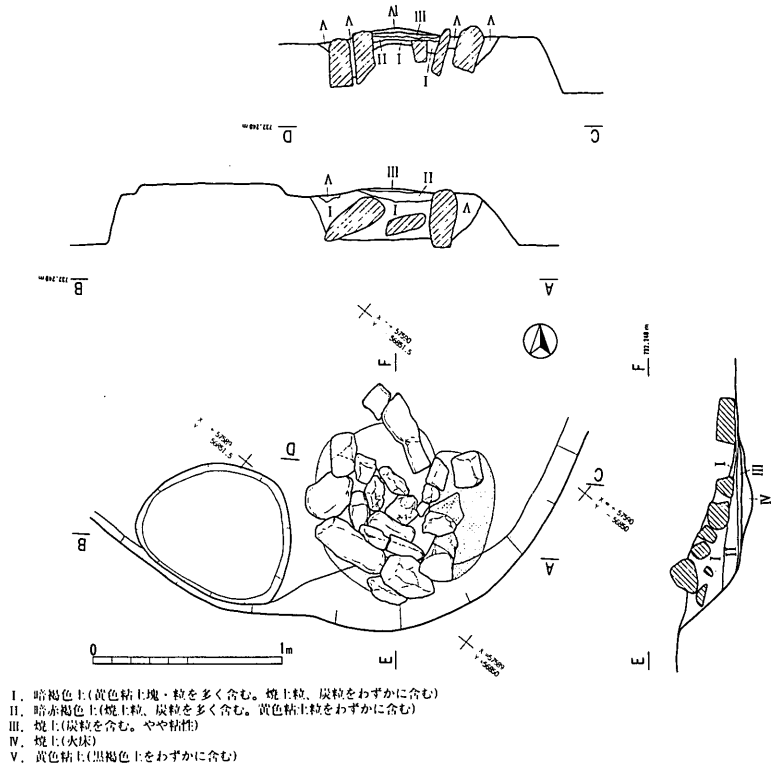


図76 2号住居跡カマド (1:40)

筒の柱穴があたると推定されるが他は、2号住居跡にあつたとく床面にそのまま建てられた可能性もあるがはっきりしない。

本跡は焼失住居の可能性があり、小さめであったが、炭化材や焼土の散布が見られた。また、性格ははっきりとしないが住居内に集石が見られた。

遺物 さほどに多くなく、土器で図示できるものは、回転糸切りの小皿2点のみであった。他に鉄器（刀子と思われる。）が出土している。

検出層位、出土遺物から11世紀後半に属するものと思われる。

(12) 5号住居跡 (図79~82, 写真27・28)

遺構 B2~3区でP86に南西隅を掘り込まれ、検出された。6.6×5.9mの隅丸方形プランを呈する。西壁南側で石組み粘土カマドが検出された。カマドの主体は約1.6mほど住居内に入っている。煙道と思われる部

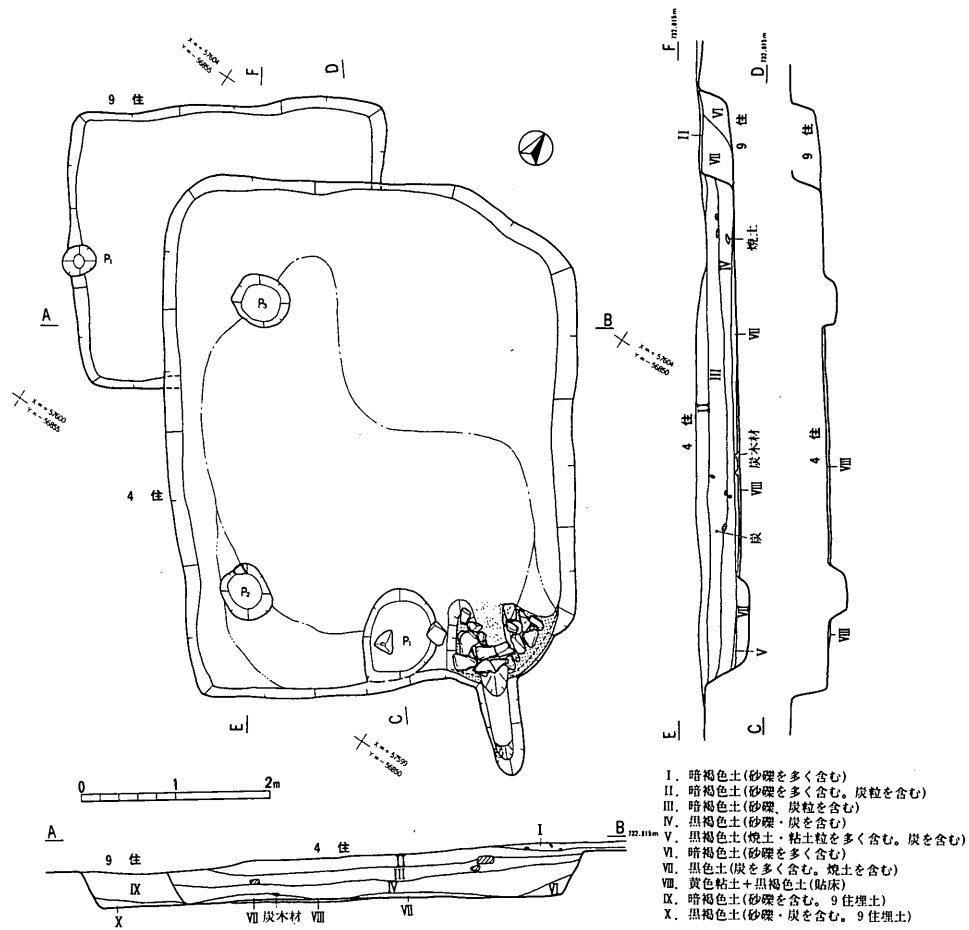


図77 4・9号住居跡(1:80)

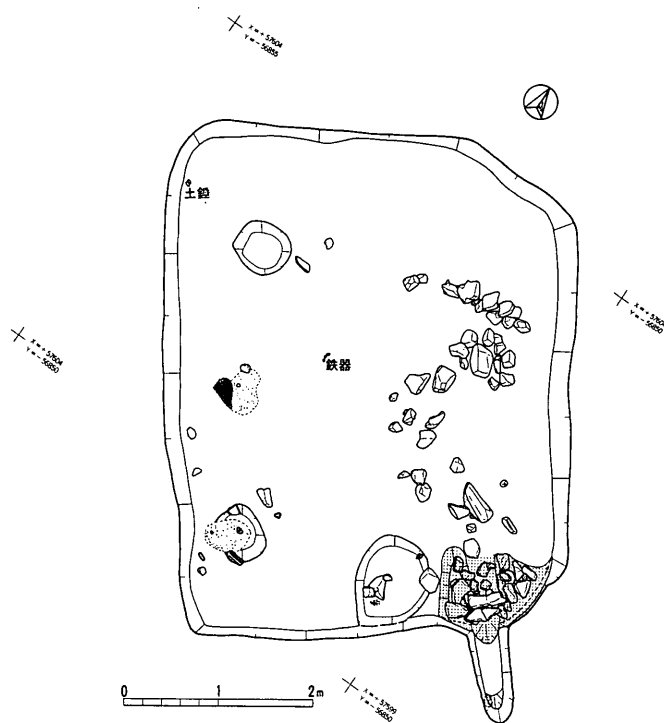


図78 4号住居跡 礫・炭化物・遺物出土状況(1:80)

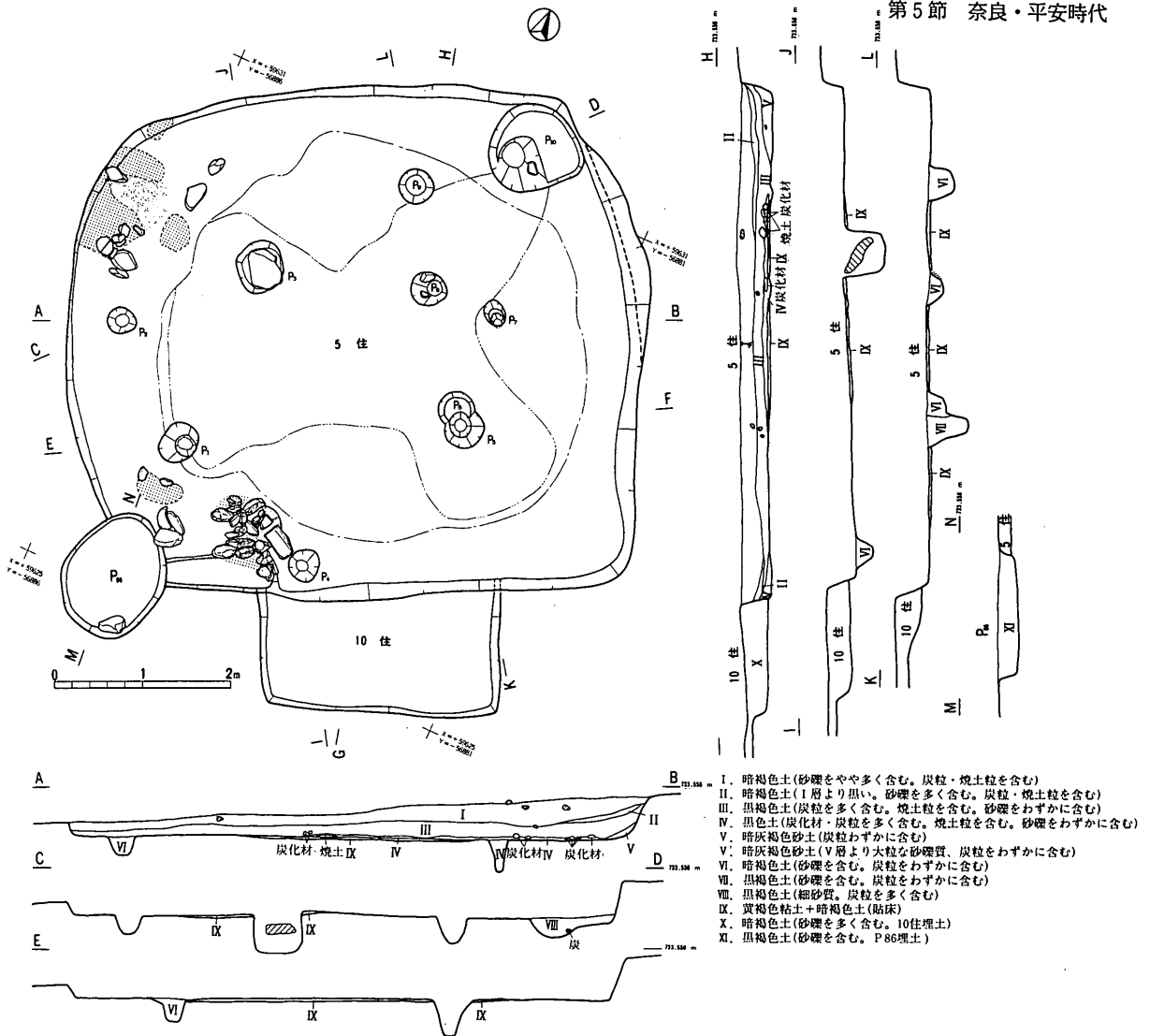


図79 5・10号住居跡 P86 (1 : 80)

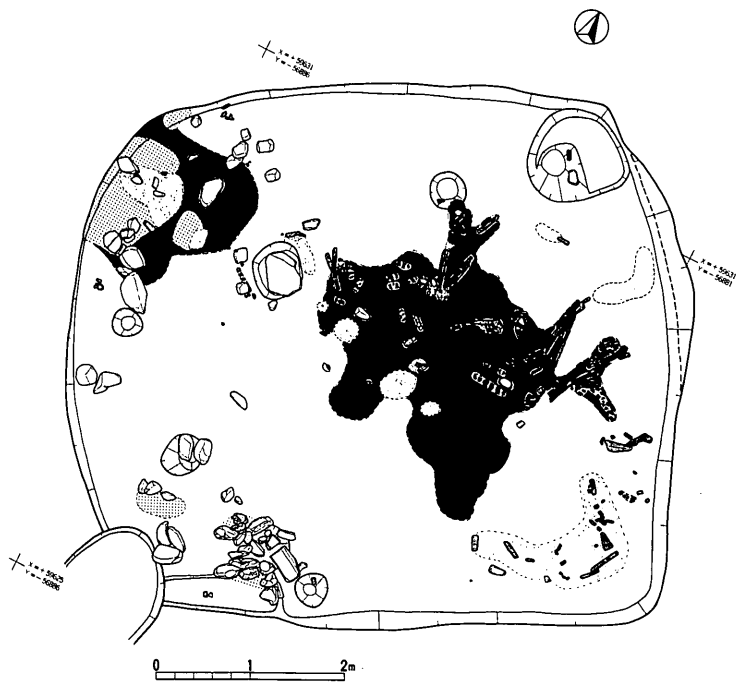


図80 5号住居跡炭化材・焼土・遺物
 出土状況 (1 : 80)

分はP86により掘り込まれたり、崩れたりしておりどのようなものであったか不明である。床面はほぼ平坦で全体的に堅く、黄色粘土と黒褐色土の混合土で貼床されていた。床面からは、P1~P10のピットが検出された。P3・10は貯蔵穴と思われる、他はすべて柱穴と思われる。P3には平石が見られ中に落ち込んでいた。P1・2・5・9の4本柱と思われる、他は主柱を支える補助的な柱穴と思われる。北西隅には粘土で囲い、焼土が見られる施設がある。カマドと違い、火床がなく、どのような施設か性格は不明である。

本跡は焼失住居で炭化材、焼土等が多

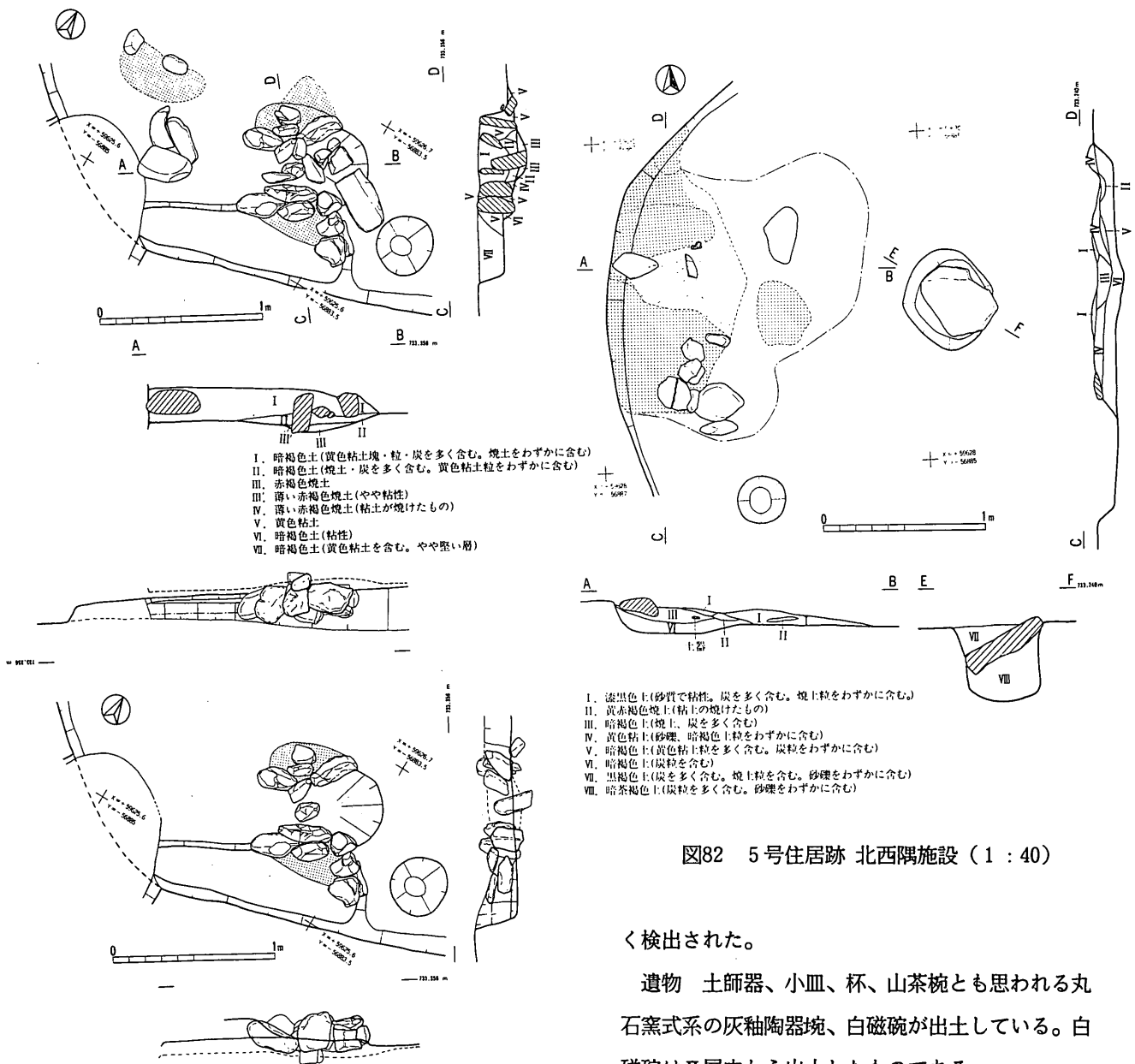


図81 5号住居跡カマド (1:40)

図82 5号住居跡 北西隅施設 (1:40)

く検出された。

遺物 土師器、小皿、杯、山茶碗とも思われる丸石窯式系の灰釉陶器碗、白磁碗が出土している。白磁碗はII層内から出土したものである。

本跡は、検出層位、出土遺物から11世紀後半～12世紀前半に属すると思われる。

2. 竪穴

(1) 竪穴2 (図83・84, 写真36・37)

遺構 B-1～2区で、13号住居跡に接して検出された。4.7×3mの北側が狭く、南側が広い長方形を呈する。壁はほぼ垂直に掘られ壁高は、20～30cmを測る。床面はほぼ平坦で、軟弱である。床面からは、P1～6の5ヶが検出された。P1～5は柱穴と思われる、P6は壁際にあり貯蔵穴的性格と思われる。中央付近からは須恵器、大甕胴上半の3分の1の破片が出土している。

遺物 土師器(須恵器的)・焼きの悪い軟質の須恵器の回転糸切り底の杯、光ヶ丘窯式の灰釉陶器皿、須恵器大甕、鉄鏝、釣針状鉄製品が出土している。鉄鏝は検出面からの出土である。

本跡は検出層位・出土遺物から9世紀末～10世紀前半に属すると思われる。

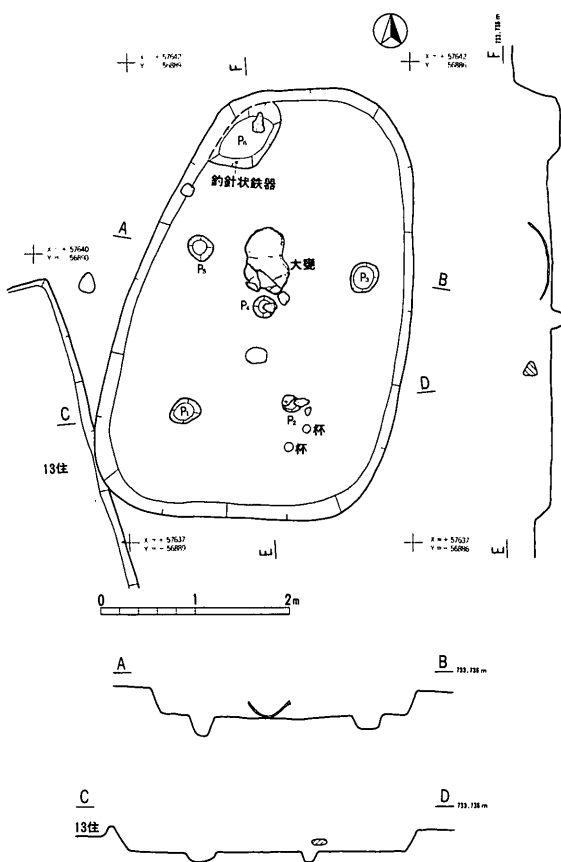


図83 竪穴2 (1 : 80)

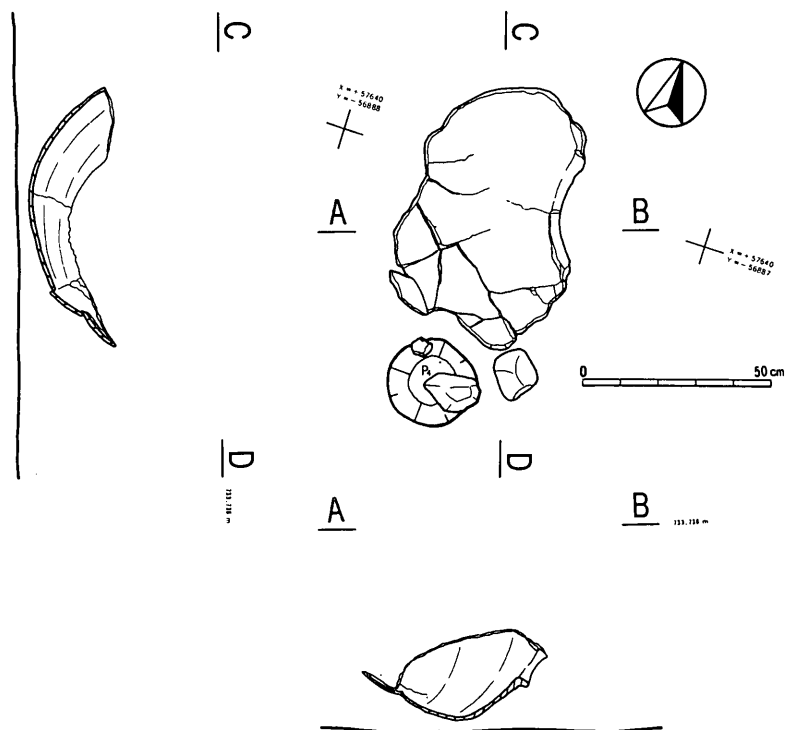


図84 竪穴2 内大甕出土状況 (1 : 20)

3. ピット (土坑) (図74・85~57, 写真37)

P 1. 2. 3. 32. 33. 88の6基ピットが検出されている。P 1. 32の2基は柱穴状で、柱穴的な性格と思われる。P 2. 33はタライ形、P 3は楕円形、P 88は長楕円形を呈し、礫が入れていること等から墓墳的性格と考えられる。

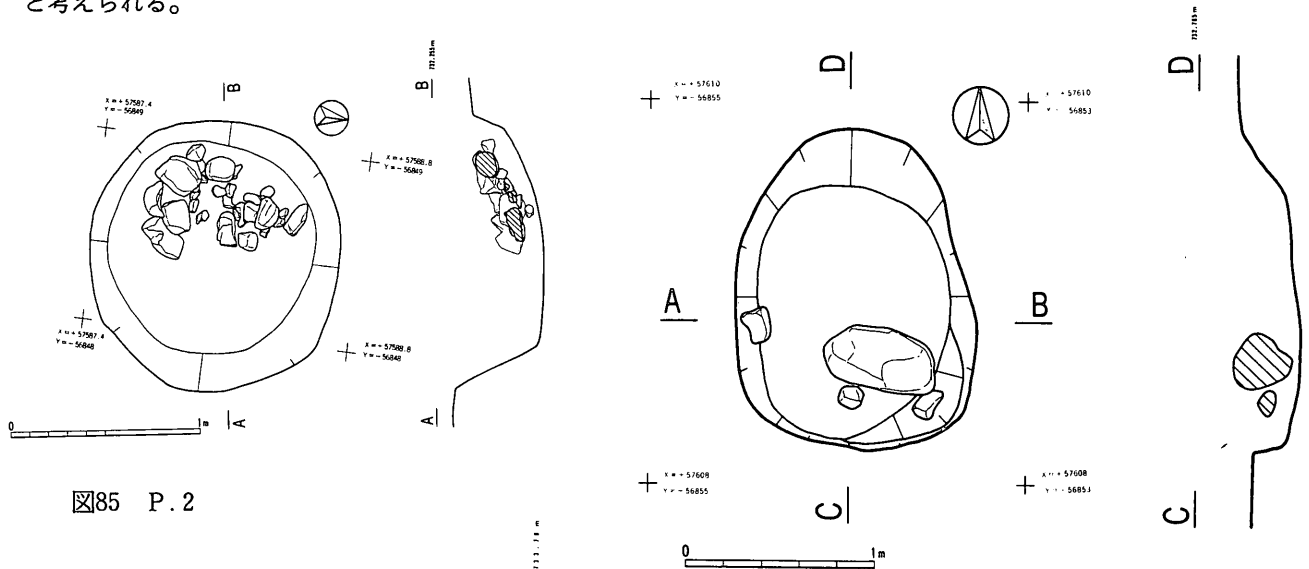


図85 P. 2

図86 P. 3

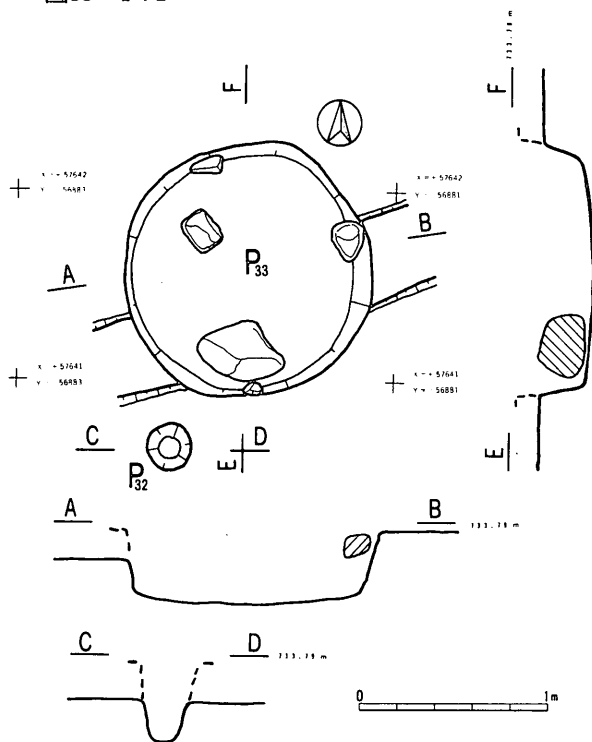


図87 P. 32・33

4. 集石 (灰釉陶器皿単独出土地点) (図88~90, 写真37)

C-2 東端で検出され、50cm大の巨礫を中心に拳大~人頭大の礫を径2mの範囲に並べている。この周辺にも礫が散在し、平石が置かれたような状態で見られる部分もある。南約3mからは灰釉陶器皿(光ヶ丘窯式)(いろ)が単独で出土している。また周囲に鉄滓も見られた。集石南側からは、鉄鏃が出土している。集石下にはゆるい傾斜の掘り方が見られ、底面に炭化材が見られた。(島田哲男)

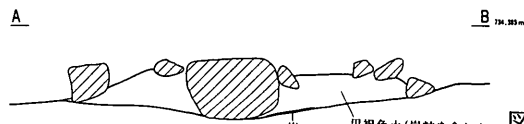
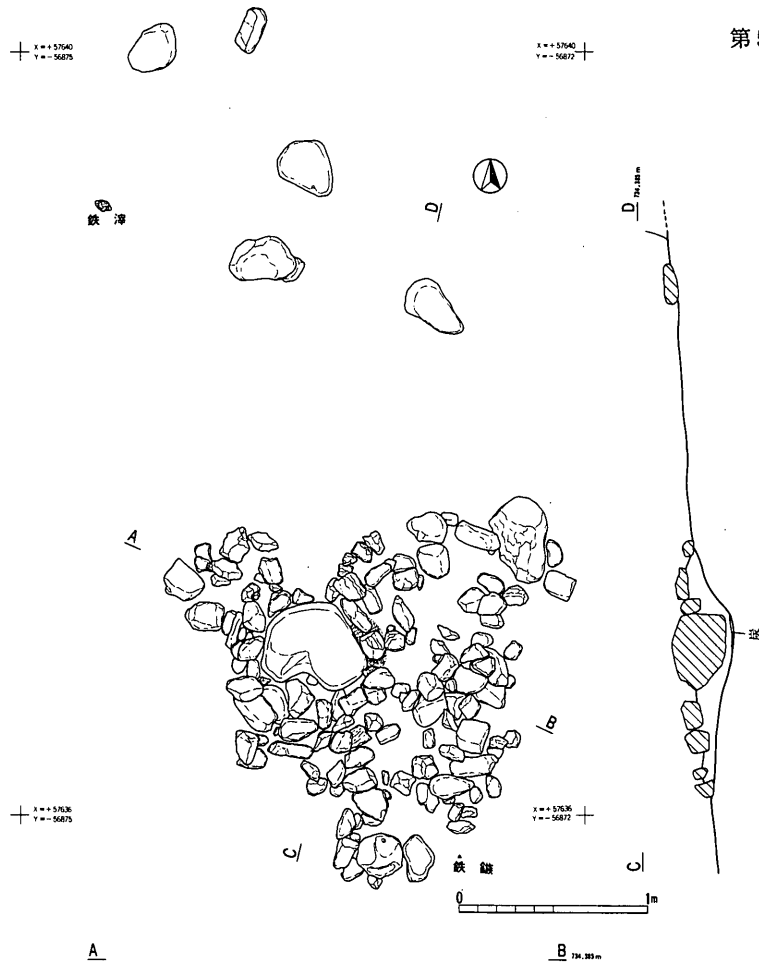


図88 平安時代集石 (1:40)

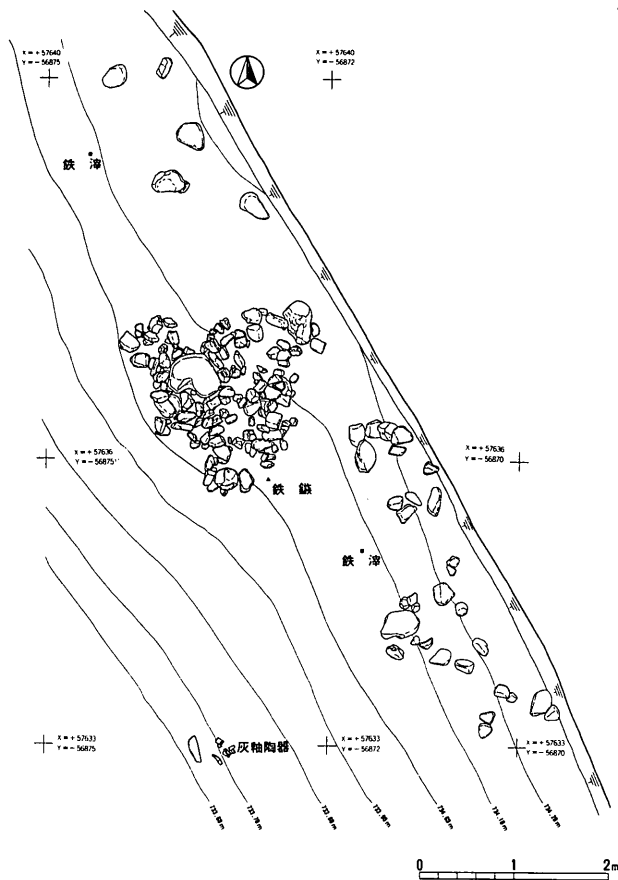


図89 平安時代集石及び周辺 (1:80)

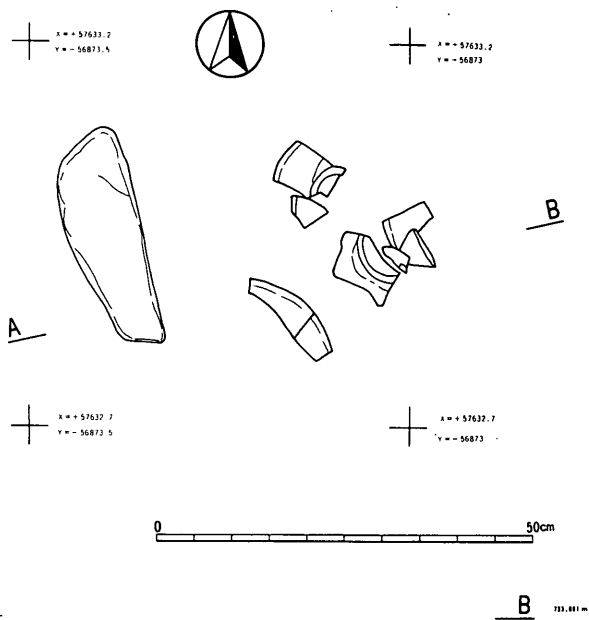
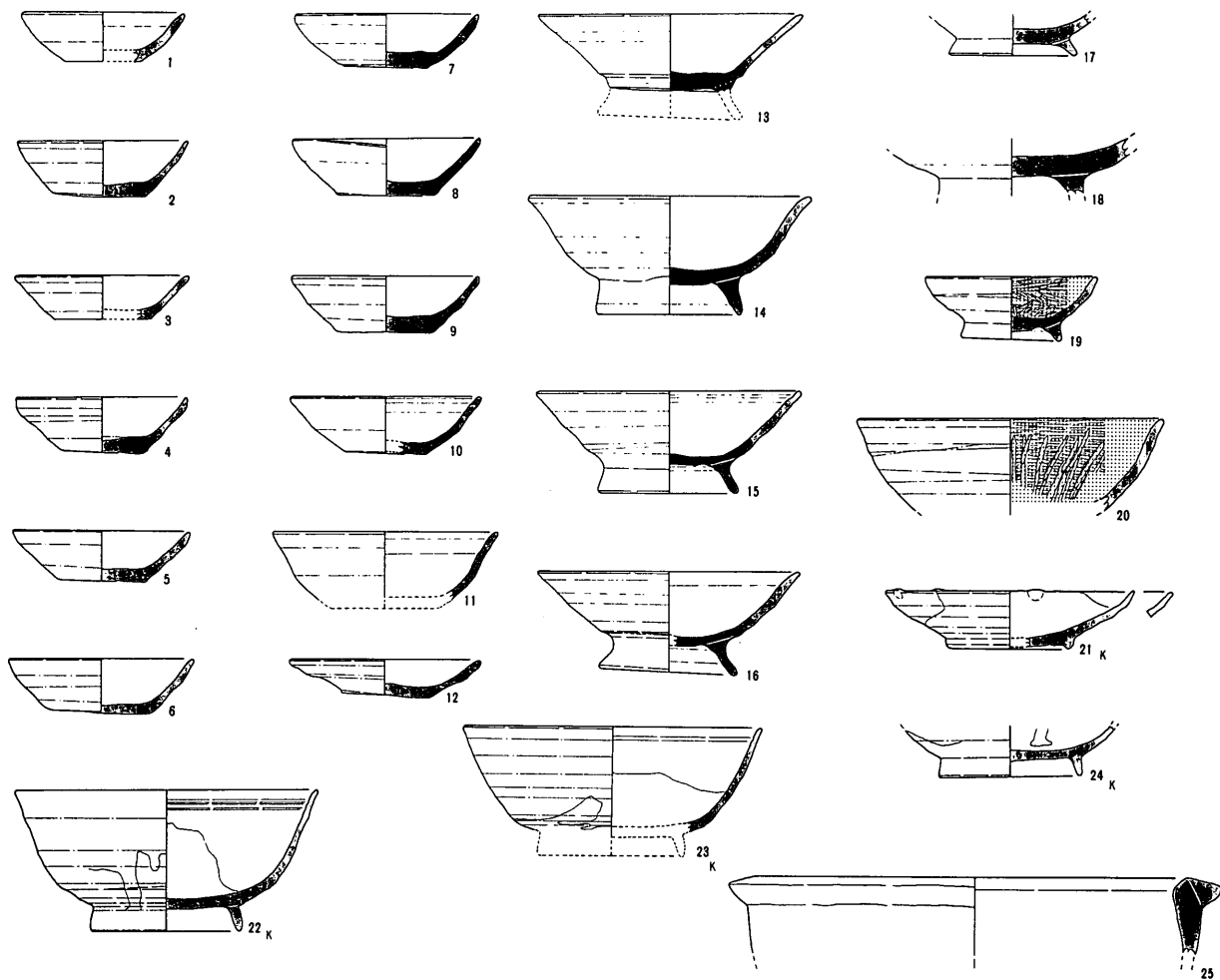


図90 灰釉陶器皿单独出土地点
出土状況 (1:10)

1号住居跡



2号住居跡

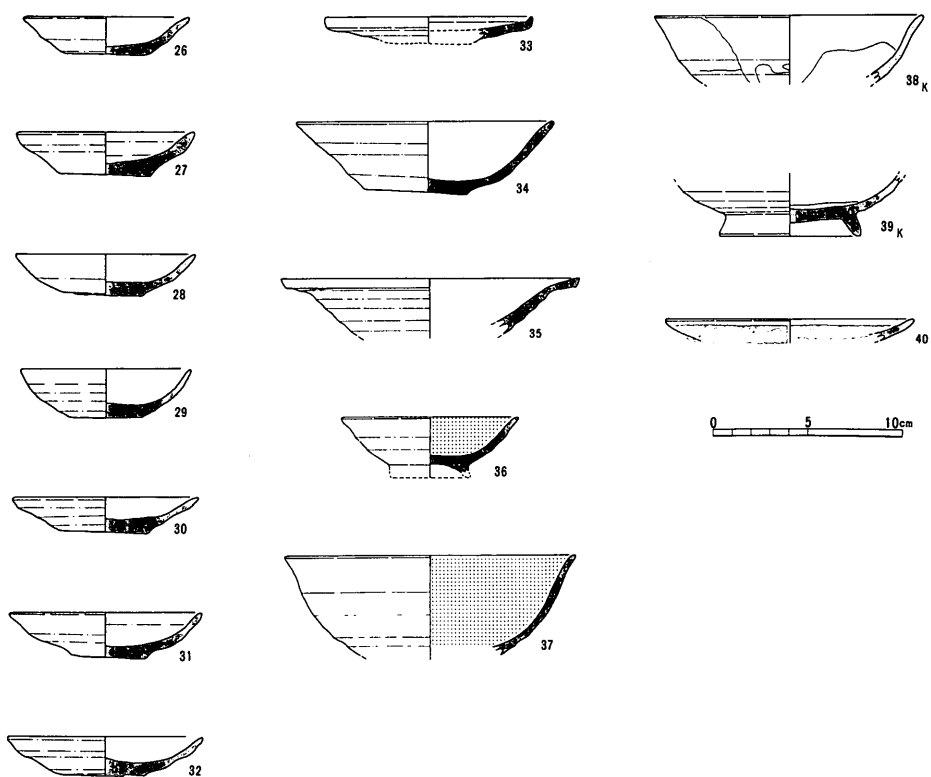
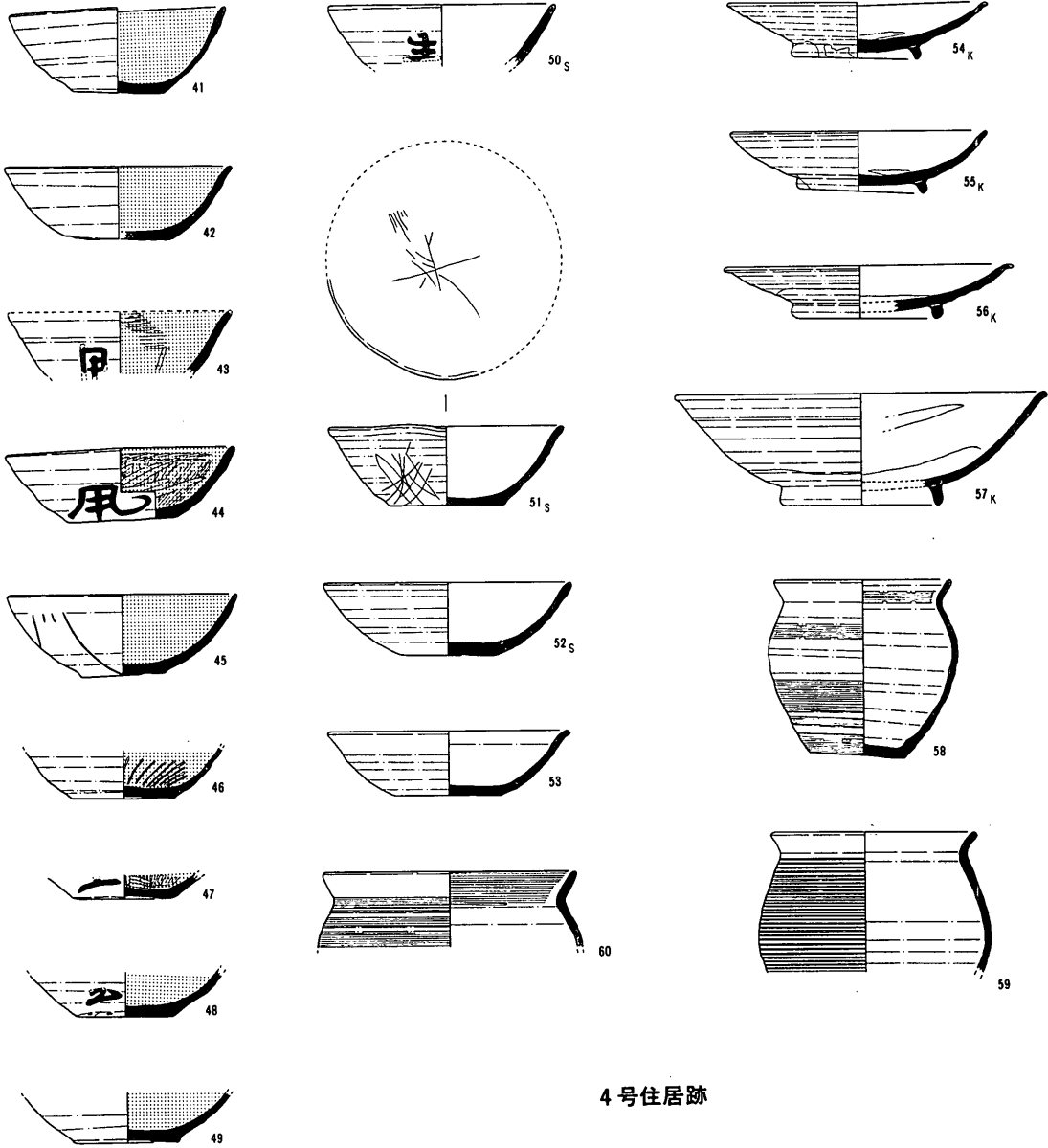


図91 平安時代土器実測図(14) (Kは灰釉陶器・40は緑釉陶器)

3号住居跡



4号住居跡



5号住居跡

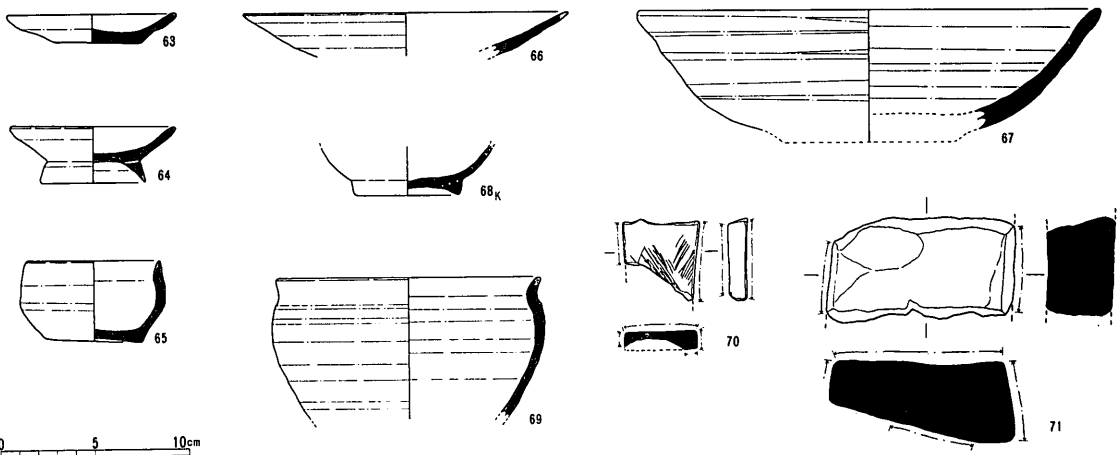
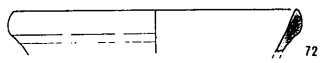
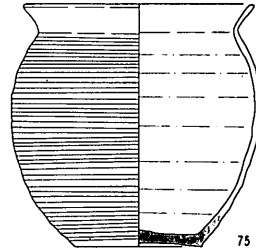
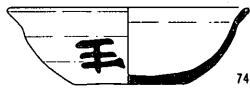
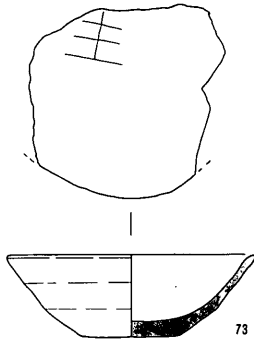


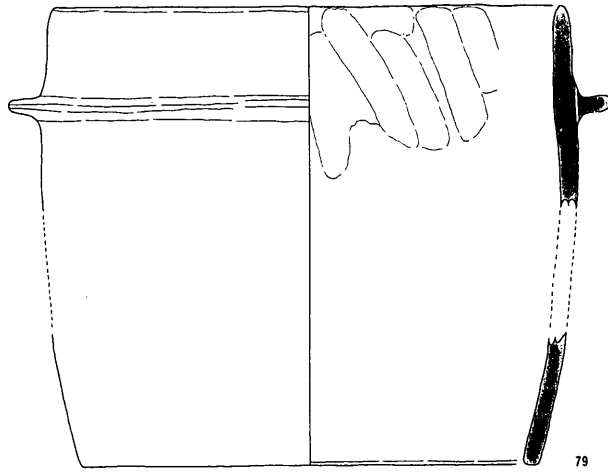
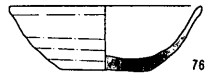
図92 平安時代土器・石器実測図(1:4) (Kは灰釉陶器・Sは須恵器)



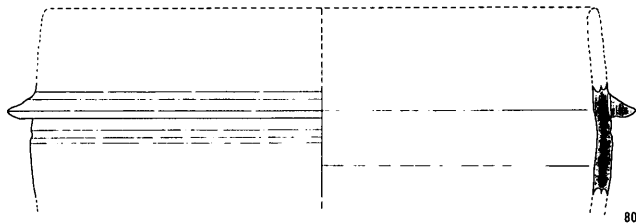
6号住居跡



7号住居跡



9号住居跡



11号住居跡



P. 2

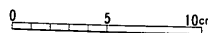
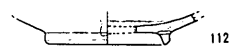
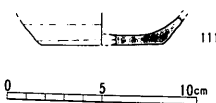
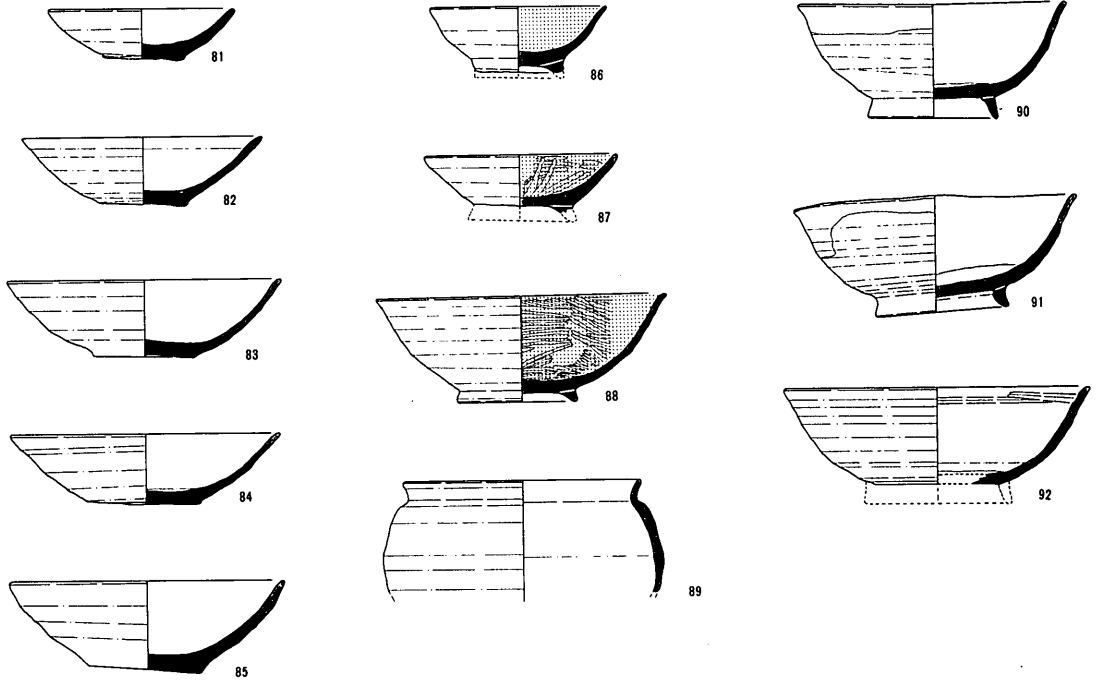


図93 奈良。平安時代土器実測図（1：4）（Kは灰釉陶器。Sは須恵器。72は白磁）

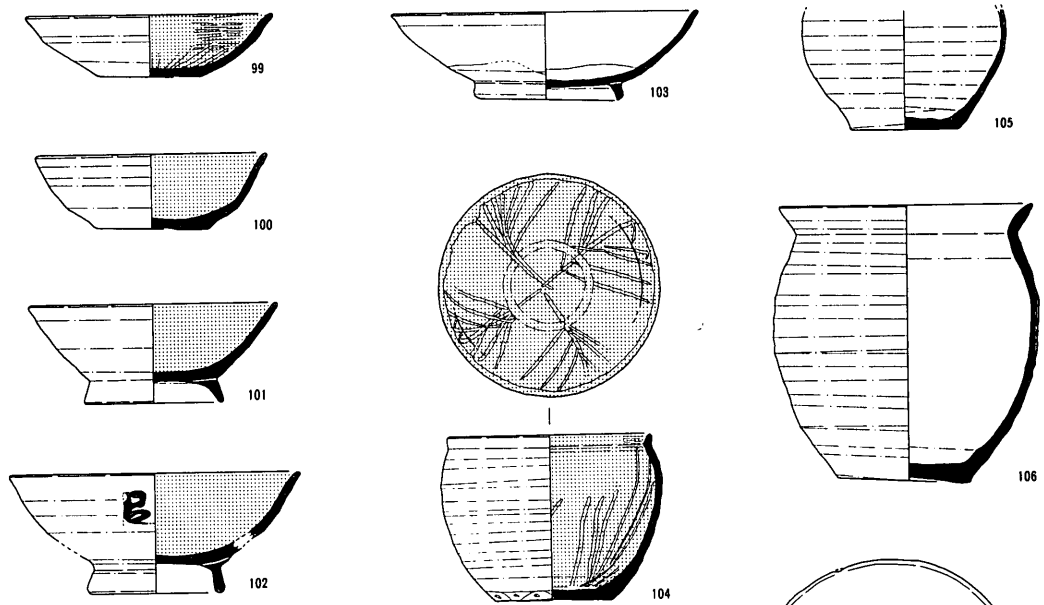
8号住居跡



12号住居跡



13号住居跡



竖穴 2

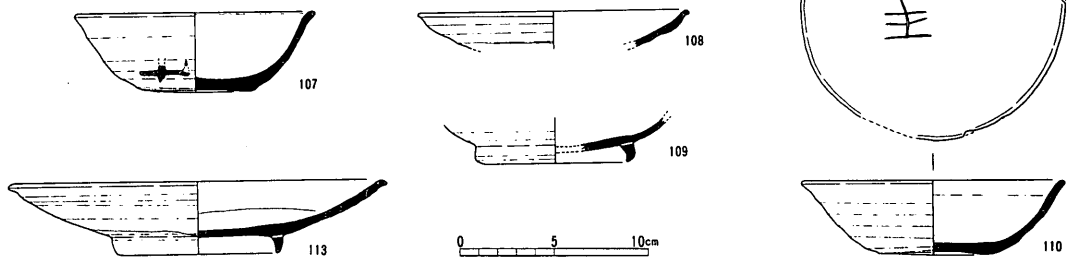


図94 平安時代土器実測図(1:4) (Kは灰釉陶器・Sは須恵器。113は灰釉陶器单独出土地点)

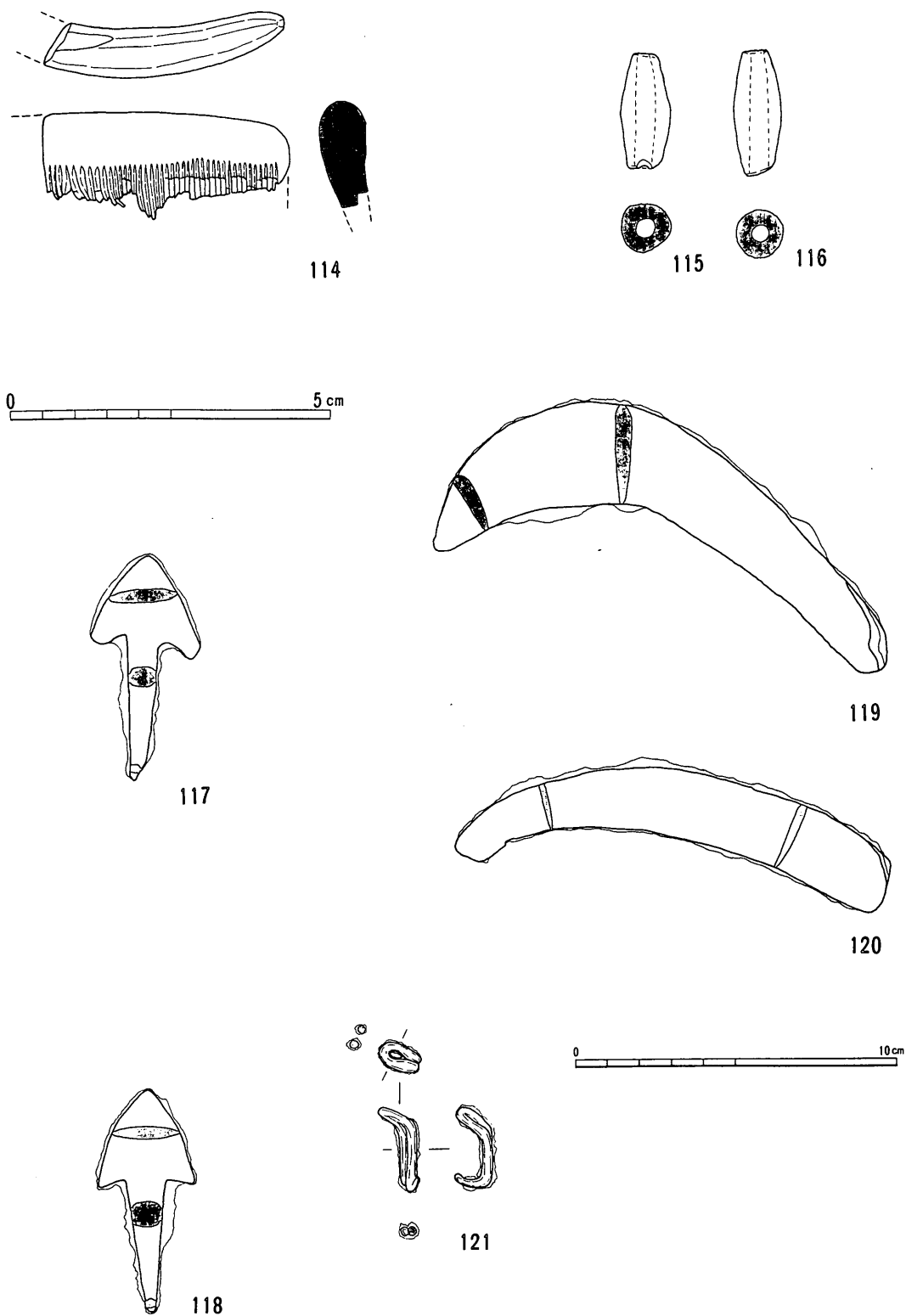


図95 平安時代木製品・土製品・鉄製品実測図（124は1：1，他は1：2）

<114は櫛（3住）、115・116は土錘（4住）、117（竪穴2）・118（平安集石）は鉄鏝、119（2住）。

120（11住北東）は鉄鎌、12は釣状鉄器（竪穴2）>

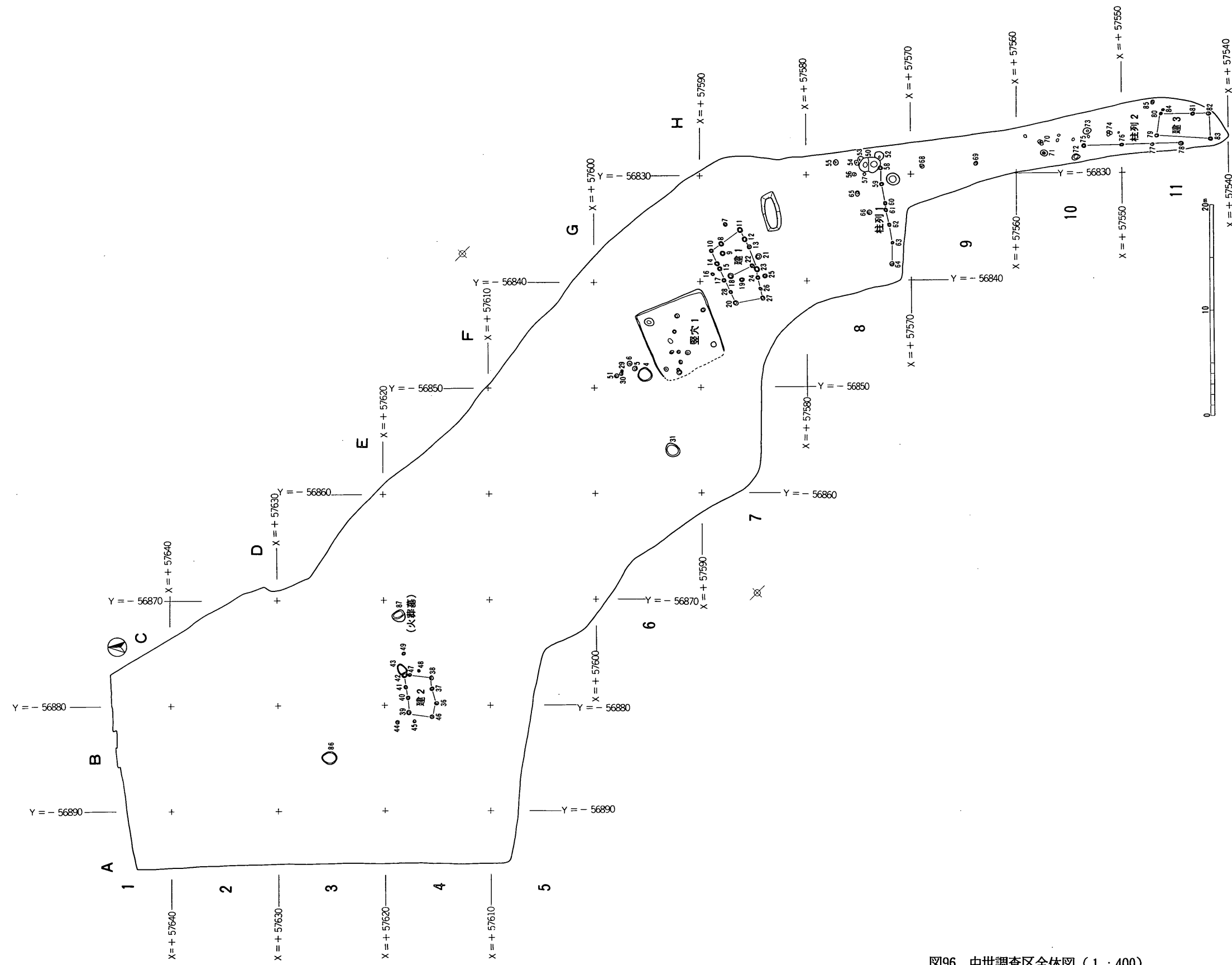


图96 中世調査区全体图 (1 : 400)

第6節 中世の遺構と遺物

竪穴1基（竪穴1）、建物跡3棟、柱列が2箇所、集石土壙（P50）1基、火葬墓（P87）、土壙（P4.31.67.86）、その他柱穴が25基が検出された。遺物は13～15世紀に属する遺物である。

1. 竪穴

(1) 竪穴1（図97, 写真38）

遺構 F-6～7区にかけて検出された。南側には建物跡1、北側にはP4～6、29・30・51がある。一辺6.8mの方形プランを呈する。西壁は、東～西への地形の傾斜があるため、検出できず、北壁も検出時に3号住居跡検出のため一部削ってしまった。床面は平坦で、やや堅い。床面からはP1～12の12ケのピットが検出された。ほとんど柱穴状のピットである。P11内には礫が4ケ入っていた。12ケのピットのうちどれが支柱穴であるかははっきりとしない。床面の所々からは炭が検出され、P7・9・10の上面にも炭の集中する部分が見られた。また、南壁のほぼ中央付近、壁に接して黄色粘土の固りが見られた。壁はやや傾斜をもって掘り込まれ、壁高は最高30cmを測る。中央部の北側には楕円形の平石があり、その上面南側にも黄色粘土が見られ、東側上面に接して砥石が、北側からは青磁の碗底部片が出土した。ピットの他には何の施設も検出できなかった。

遺物 回転糸切り底・ロクロ成形の土師器小皿3点（1～3）、やや緑的な色の釉の青磁碗（4）、瀬戸産と思われる瓶子の肩部（5）、砥石が出土している。北側壁外約2mのところ、鋏（15）、刀子片（16）の2点の鉄器が出土している。

2. 建物跡

やや小さく、深さも浅いピットが配列する建物跡が3棟検出された。

(1) 建物跡1（図98, 写真39）

遺構 F・G-8で検出され、P8・10～15・17～19・20・22～27の16ケのピットが6.4×3.6mの不整長方形に構成される建物跡と考えられる。周囲にあるP7・9・16・19・21・25の6ケのピットもこれに関係したピットと思われる。P10・17には柱痕状の土層が見られ、柱は径14cm前後の太さであったと考えられる。P14～16・19・22の柱穴内には黄色粘土が見られた。

遺物 P14内上部から、瀬戸系の皿片（7）、P15内上部から薄いブルーの釉の青磁片（8）、P-18周辺より、やや緑的な青色釉の青磁片（9）、ピット検出上面で砥石（10）が出土した。他に土師器小皿の小片、半月形の鉄器（17）が出土している。

(2) 建物跡2（図99, 写真39）

遺構 B・C-4区で検出された。P36～42・46・47の9ケのピットが、4×2.9mのやや不整形な長方形に構成される建物である。P43はP42に切られており、関係は不明であるが、P44・45・48・49の4ケの周

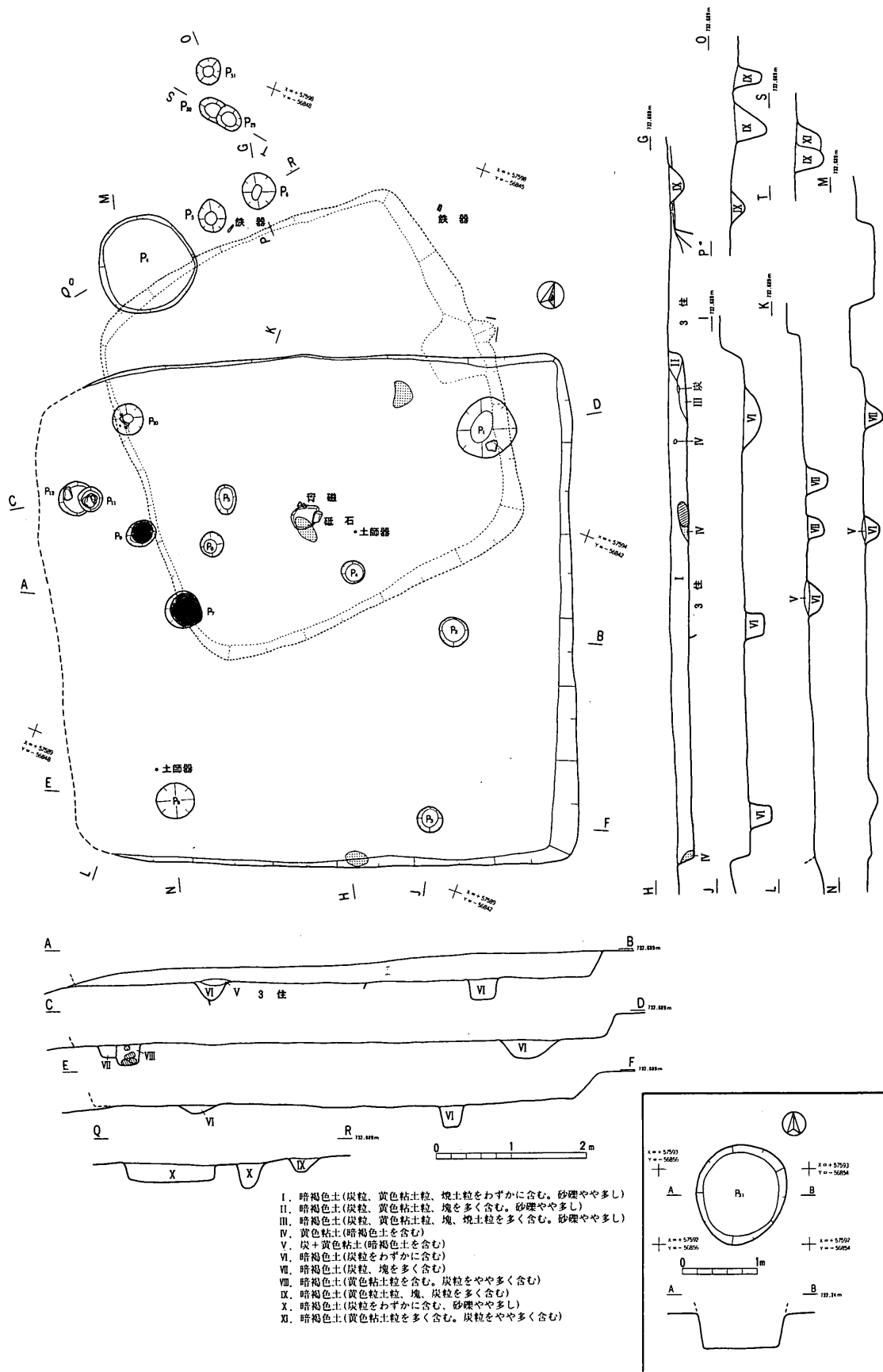


図97 竪穴1及び周辺ピット (P4~6・29~31・51) (1:80)

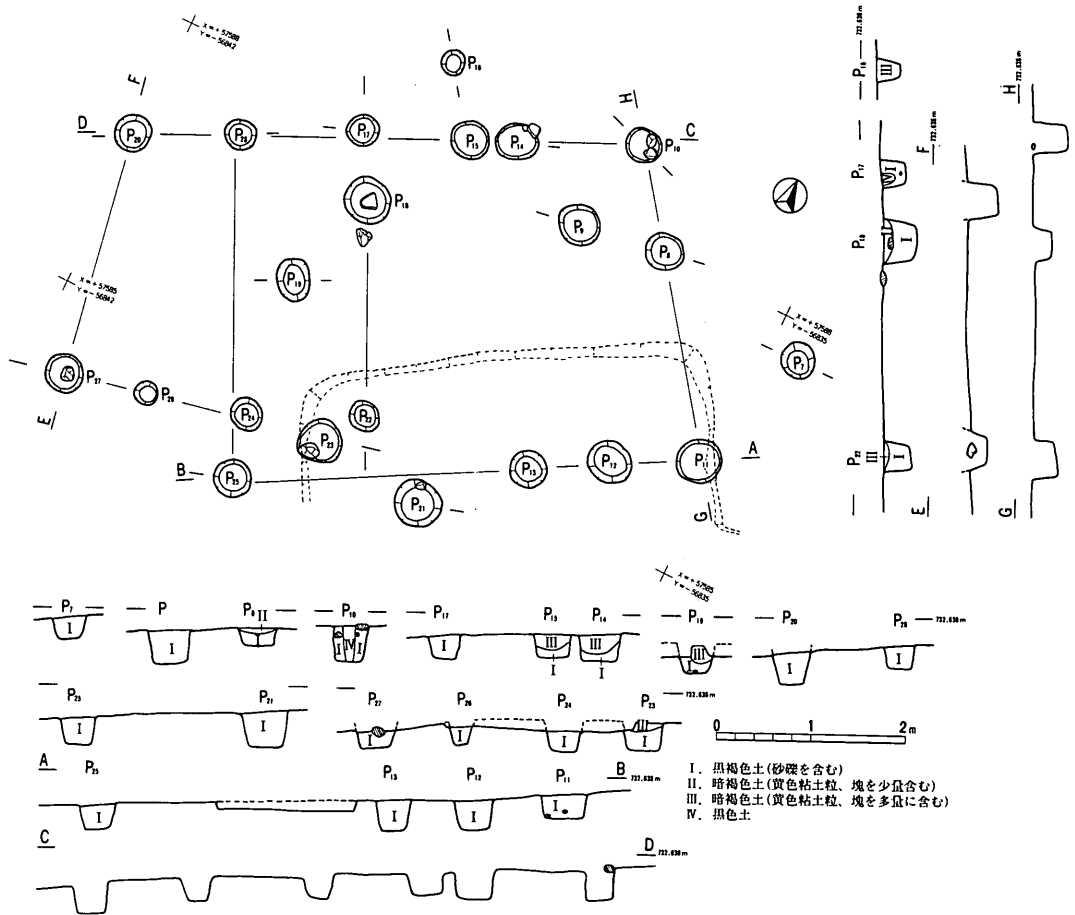


図98 建物跡1及び周辺ピット (1:80)

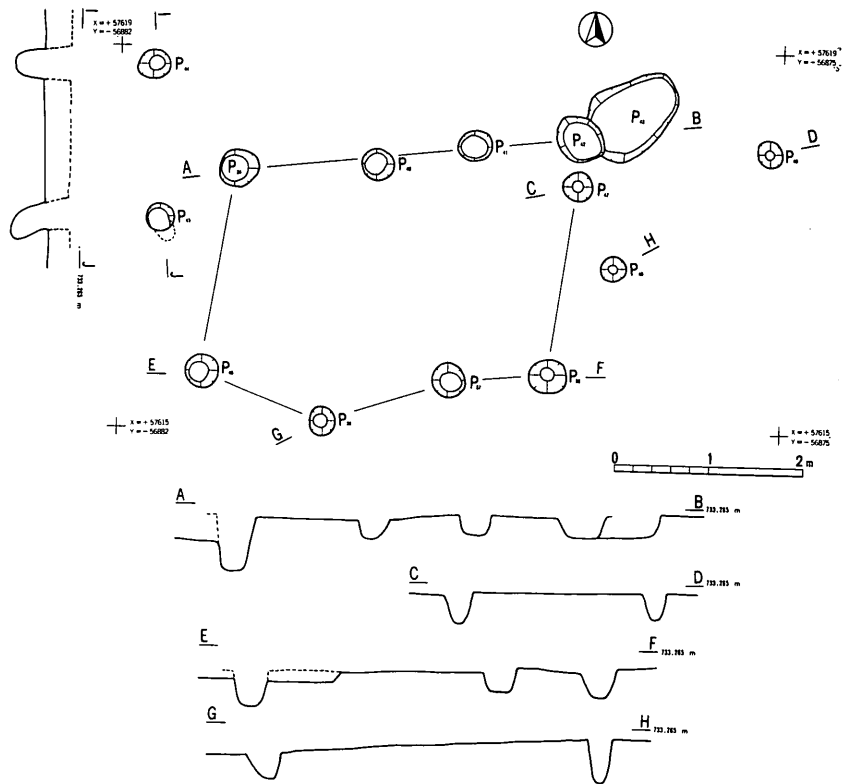


図99 建物跡2及び周辺ピット (1:80)

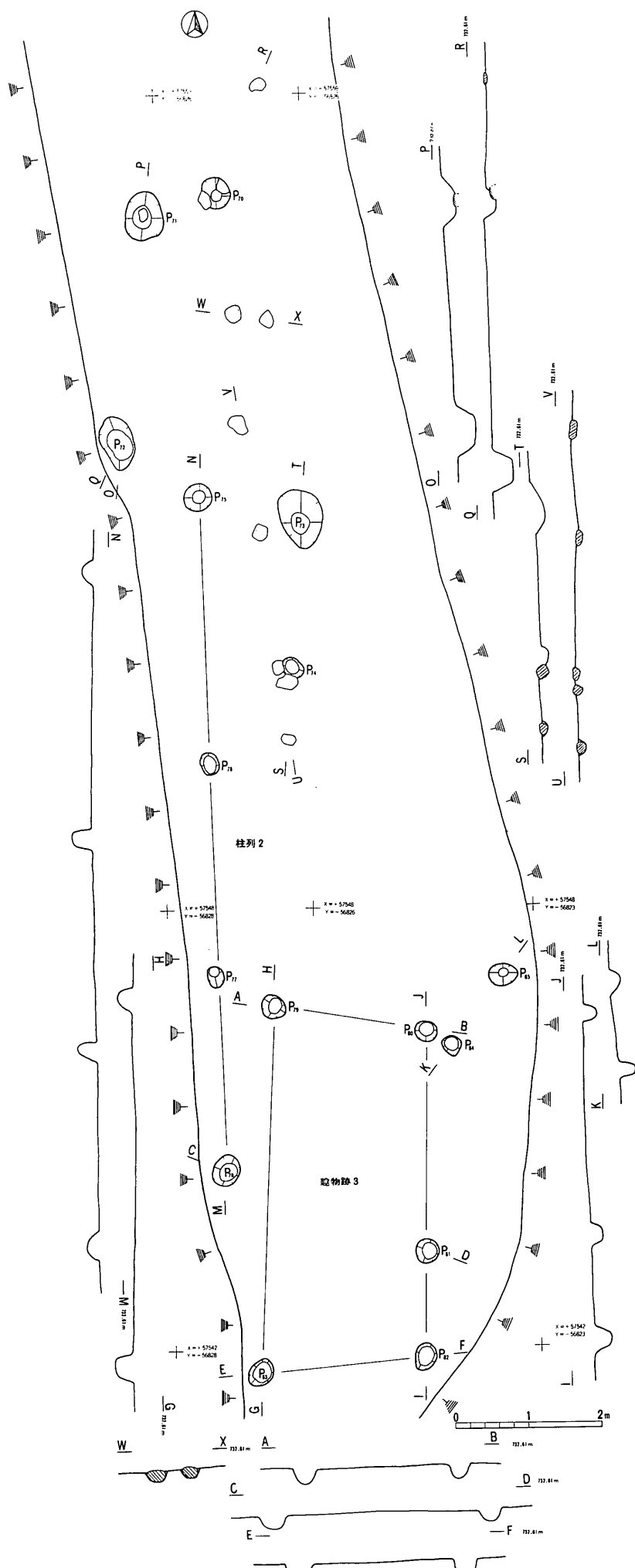


図100 建物跡3・柱列2及び周辺ピット (1 : 80)

囲にあるピットはこの建物跡に関係したピットと考えられる。埋土はすべて黒褐色土の単層であった。

遺物 検出面の上面より、内側に段のついた13世紀頃と思われる陶器片(11)が出土されている。

(3) 建物跡3(図100, 写真39・40)

遺構 H-11区で検出された。西側には、柱列2がある。P79~83の5ケのピットが、5.4×2.6mの長方形に構成される建物跡である。P80の南東隣にあるP84、東側にあるP85はこの建物跡に関係した柱穴と思われる。埋土はP83を除きすべて、黒褐色土の単層で、P83は黒褐色土であったが、灰白色粘土を多く含んだ土層であった。遺物は何も見られなかった。

3. 柱列

やや小さめ、深さも浅いピットが配列する柱列が2箇所で見出された。

(1) 柱列1(図101, 写真40)

遺構 G・H-8区で見出された。東端に接してP50があり、周辺からは他にP67(土壙)、柱穴状のピットP52~59・65・66・68の9ケのピットが見出されている。P58~64の7ケのピットが9.5mの列状に並ぶ。埋土はすべて黒褐色土の単層である。ほぼ等間隔に並ぶが、中央のP60と61では間隔が短い。

遺物 検出面の上面、本跡の周辺より、黒褐色の釉がかかった15世紀頃と思われる下ろし皿片が出土した。

(2) 柱列2(図100, 写真40)

遺構 H-10~11で見出された。北側の東隣には建物跡3がある。周辺には柱穴状のP71~74と、平石を地面に据えたものが5ケ見出された。平石を据えた遺構は建物の礎石とも思えるが、はっきりとせず性格については不明である。P75~78の4ケのピットがほぼ等間隔に9.6m並んでいる。周位の柱穴との関係ははっきりとしない。埋土はすべて黒褐色土の単層である。

遺物 直接には関係しないが、周辺の柱穴であるP72から、14世紀頃と思われるブルーの釉の青磁片(12)が出土している。

4. 集石土壙(P50)(図101, 写真41)

遺構 H-8区で見出された。2×1.4mの楕円形を呈し、深さ25cmを測る。底面は南北2箇所有り、丸底である。内部には、拳大~人頭大の礫76ケが北側に集中して集められている。埋土は、炭を多く含んだ黒褐色土であった。周囲にP52~54・57のピットがあるが関係ははっきりせず、柱列1のP58とも接しているが、柱列2との関係も不明であるが、切り合い関係もなく同時存在の可能性もある。

遺物 内部より、珠洲系陶器の播鉢片(13)が出土している。

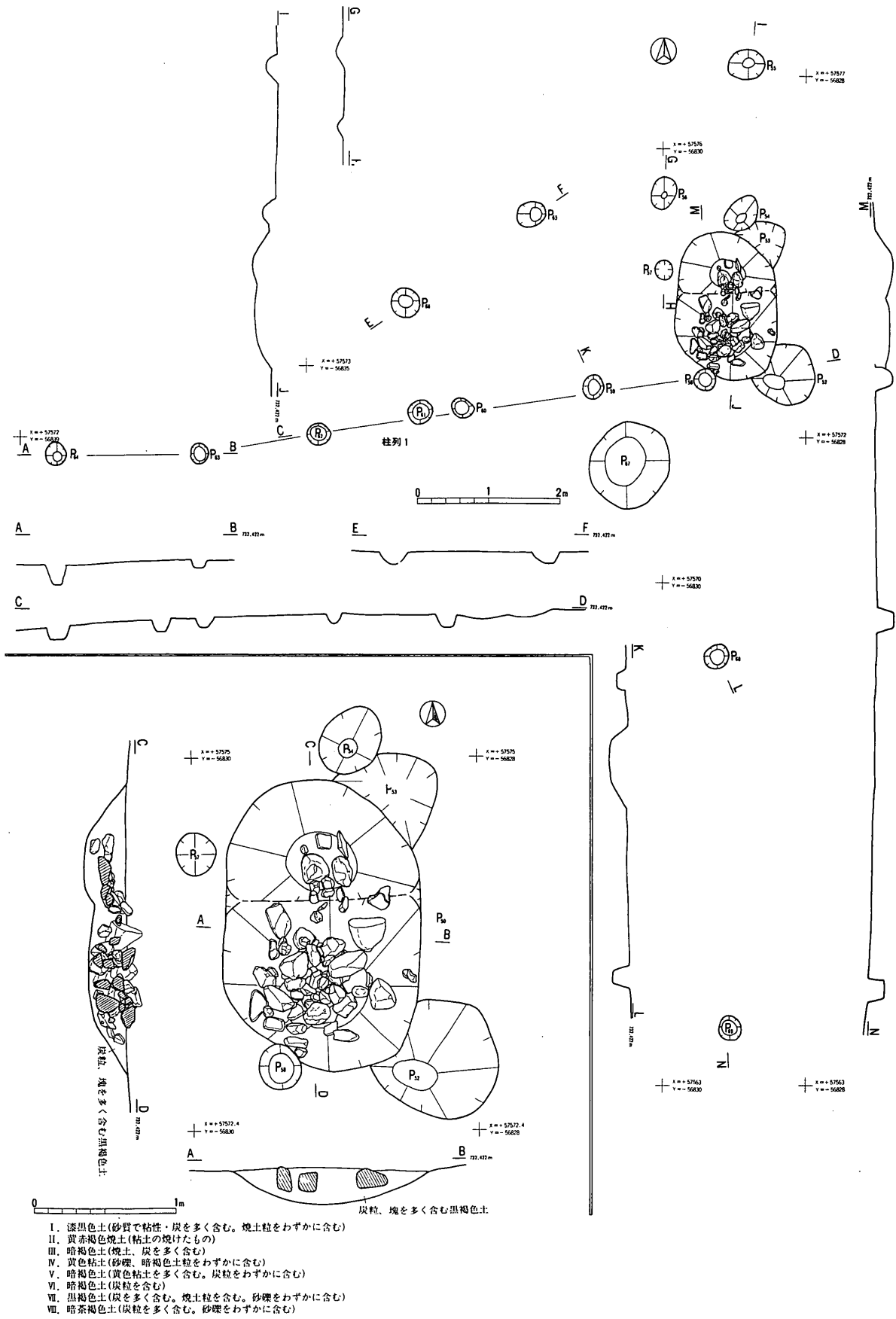


図101 柱列1・P50及び周辺ピット(1:80・左下は1:40)

5. 火葬墓 (P87) (図102, 写真42)

遺構 C-4区北東側で、弥生時代面に入る時点で底面が検出されたので、上部の壁は削ってしまったため深さは不明である。1.2×1mの不整楕円形を呈するプランで、全面に炭が見られ、東側の楕円形掘り方部分には焼土、炭化材の炭、焼けた骨が多く見られた。炭、焼土の存在から現地での火葬と考えられる。内部からは土師器小皿の小片が出土している。

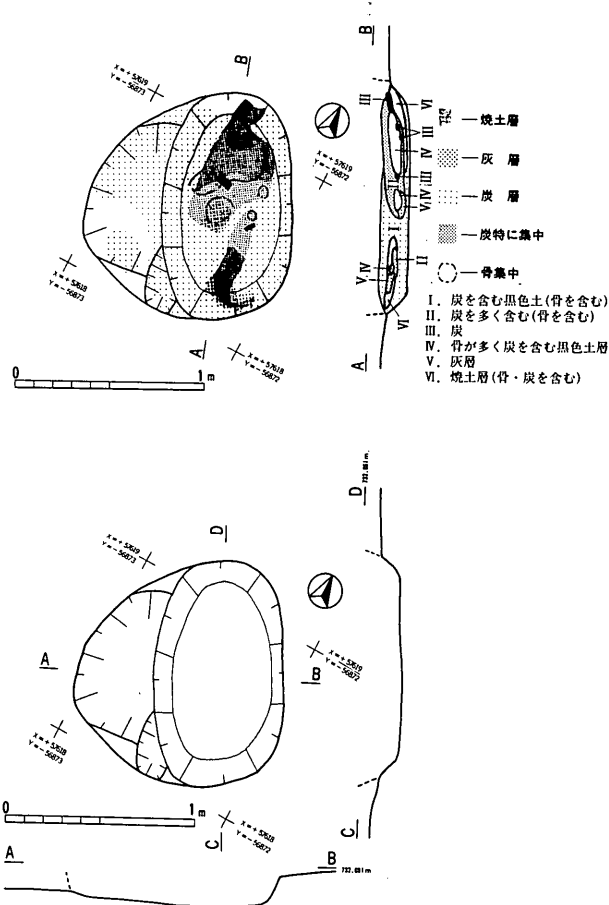
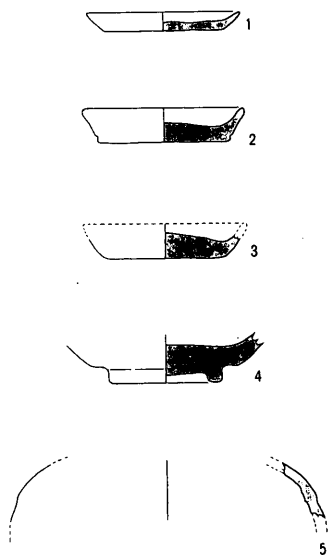


図102 火葬墓 (P87) (1 : 40)

6. 土壇 (図74・79・97・100, 写真23・27・38・40)

P 4・31・67・86の4基が有り、すべて円形のプランを呈する。性格については、貯蔵か墓壇かは不明である。

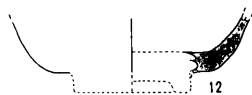
豎穴 1



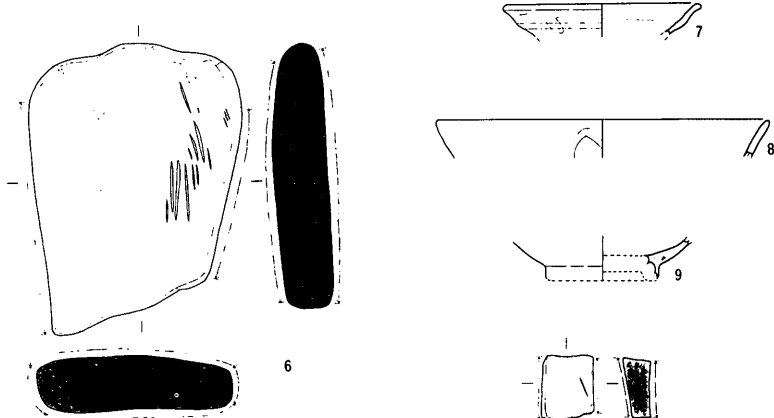
建物跡 2 周辺



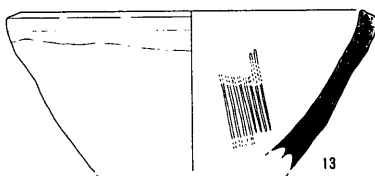
P. 72



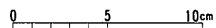
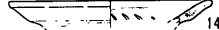
建物跡 1



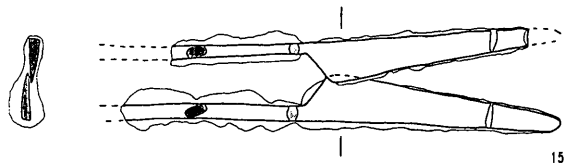
P. 50



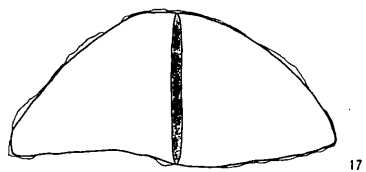
柱列 1 周辺



豎穴 1 周辺



建物跡 1 周辺



图中世出土遺物実測図（土器・石器 1 : 4、鉄器 1 : 2）

第7節 河川跡・その他の遺物

1. 河川跡 (図104, 写真14)

調査区東側にある細い河川跡は、土層で見るとかぎり古墳時代中～後期以後の後期中頃～奈良時代初期に流れたものである。中央に流れるやや幅広い河川は流れはじめが、弥生時代中期後半以降の弥生時代後期頃で古墳時代前期まで流れていたと考えられ、南北の2箇所西へ曲っている。弥生時代中期包含層の黒色土を切って中央部の河川から分水したと思われる小河川が3箇所に見られ、これは弥生時代後期の頃のものと考えられる。南端には東～西へ流れる河川も見られ、これは、弥生時代後期～古墳時代初期頃のものと考えられる。これら河川は水田に関係したものとも考えられ、特に小河川は堰状で幅40～60cm、深さ30～40cmであり、水田への水の取り入れとも考えられるが、水田的遺構は検出されていないので不明である。中央のやや幅広い河川の中間層から弥生時代後期の甕片 (図39, 22) が検出されている。

2. その他の遺物 (写真48)

H-10の砂礫層中より旧石器時代の石刃が検出された。磨滅も少なく、近くから砂礫と一緒に流れてきたものと思われ、近くに旧石器時代の包含層があるものと思われる。

(島田 哲 男)

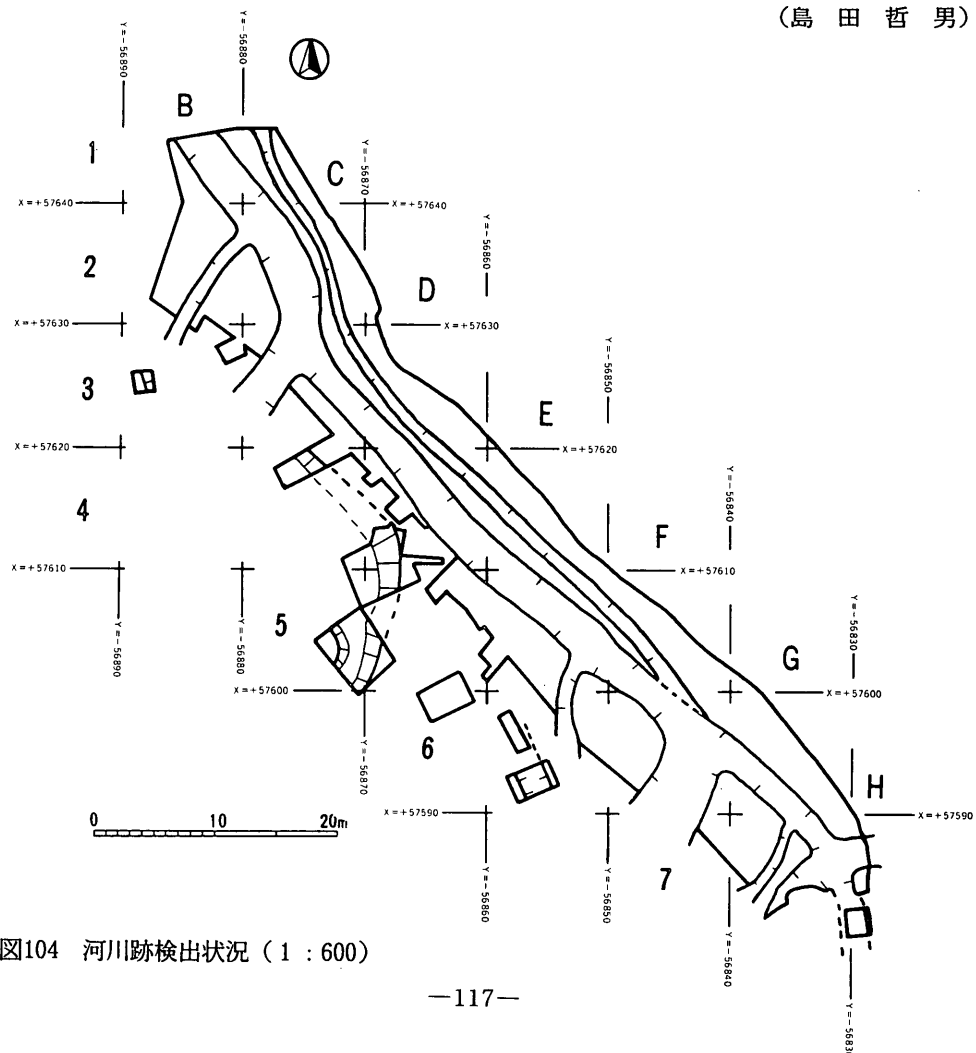


図104 河川跡検出状況 (1 : 600)

第8節 炭化物（炭化材）、骨等について

今回の調査では、多くの炭化物（炭化材）が得られた。これを時代別に、判別できた種類を記しておく。観察にはルーペと実体顕微鏡を用い20倍～40倍で木口面と柁目面を調べ決定した。

1. 弥生時代中期前半面出土炭化物及び骨類

炭化物としてはコナラ・クリ材が多く見られ、その他にヤマザクラ、樹種不明の落葉樹、クルミの実、トチの実が見られた。

骨類としては鳥、小型哺乳類が見られた。

2. 奈良・平安時代住居跡及び集石出土炭化物及び骨類

1住—コナラ材が見られた。砧はコナラ材である。

2住—コナラ材が最も多く、次にクリ・モミ材・クヌギ材であった。カマド内からは中型哺乳類の骨片が出土している。

3住—アカマツ材・ヤマナシ?材が見られた。

4住—クリ・カシワ材が見られた。

5住—コナラ・クヌギ・ヤマザクラ材が見られた。その他にクリの実が見られた。

7住—コナラ・クリ材が見られた。

8住—トチの果皮と思われる果皮が見られた。

11住—オニグルミ・コナラが多く見られた。住居外の北側で出土した曲物はヤナギである。

竪穴2—コナラ材が見られた。

平安時代集石—鳥の足の骨、シカの骨が見られた。

(森 義直)

第IV章 結 語

大町市三日町は、市の中心部から2 kmほど東北方に位置する集落で、もとは三ヶ村といい、大笹・来見原・分水の三地域から成っていた。ここは大町の枝村であったけれども、集落のある居谷里沢の小扇状地ほぼ全域が古代の遺跡で、縄文時代前期あたりから現在に至るまで、永い間人が住み続けた、いわば大町市のルーツのひとつとも言えるところである。ここに遺跡のあることは早くから知られ、さまざまな時代の遺物が採集されているが、そのほとんどは散逸してしまった。今回、圃場整備の事前の発掘調査が行なわれたところは、扇状地の末端段丘下であって、それまで人々がほとんど遺跡として意識していなかったところであり、近世以前に存在した集落としても、中心部から離れた周辺部、村はずれといったところであろう。またこの地域は大笹であるけれども、遺跡名としてはさきに調査の実施されたことのある、来見原遺跡とひとつの遺跡であるとの見解により、来見原遺跡と称することにした。

来見原遺跡の今回の調査で、最も意義深いことは、発掘地点の層位が縄文時代晩期後半から近世まで、弥生時代後期から古墳時代前期の間における居谷理沢の大氾濫による堆積層をはさみながらも、各時代の生活面が層序として明かに把握できたことであった。これまでの大町市域の調査では、このように層序が明瞭な遺跡にはめぐり会わなかったのである。ことに縄文時代晩期後半から弥生時代中期前半へという、このあたりの人々の狩猟採集の生活に、稲作が入ってきて、人の生活も社会の構造も微妙にゆらぎ始める姿を知る手がかりとなる資料が、検出された遺物や遺構の今後の研究によって得られるかも知れないという、可能性を持っている。

次にはこの遺跡全体から、各時代の人々の信仰の一面を物語るような遺物や遺構が検出されており、その内容については今後の検討にまつとしても、市内でこれほどの好資料が出土したことはなかった。

次は木製品の出土である。木製品のような有機質は、普通腐ってしまって姿を残さないのであるが、この場合はたまたま火にあいながら燃えつきることもなく、炭化状態となって形を保つことができたわけで、櫛・木槌・曲物がある。これもこの地方では初めてのことであった。

次の新しい知見は、中世の竪穴住居址が検出されたことである。この地方における一般庶民の住居は中世はじめまでは竪穴住居であったことが、これまでの調査で確認されていたが、ただ一軒だけの例であるとは言え検出されて、その存在を15世紀まで下げて考えられるようになった。15世紀といえば安曇は仁科氏の支配していた時代で、大塔合戦に仁科盛房が出かけて行ったり、霊松寺が開創されたりして、まだまだその勢威を保っていた。けれどもその軍事や文化を支えていた底辺の農民の家は、縄文以来の竪穴住居が残っていたわけである。16世紀後期に仁科氏は滅亡し、小笠原氏が安曇を支配するようになるのだが、天正11年(1583)にはこの遺跡のある大笹(大笹)の地が、はじめて文献に登場する。小笠原貞慶が大沢寺領の一部として大笹6貫文の地を寄進したのである。さらに天正15年(1587)には、小笠原氏の家老 溝口貞秀がここにあった浅野久右衛門尉の所領を検地して、その年貢を定めている。それによれば、ここには浅野の手作地とともに、その土地を耕作する源衛門 帯刀 又助 二助の百姓がおり、合計して24俵で25俵ほどの粃を年貢として納めることに定められていた。したがってこの地は大沢寺領と浅野領とが大体同じ程の割合で並立していたことが知られる。

最後になったが長期間この遺跡の調査に携わり、その後の整理もすませ、立派な報告書を刊行された大町市教育委員会と、協力された多くの皆さんの御努力と御苦心に対し、深い感謝を捧げるものである。

(調査団団長 篠崎健一郎)

1. 遠景（南方より）



2. 近景（南方より）



3. 遠景（発掘調査終了後、南方より）





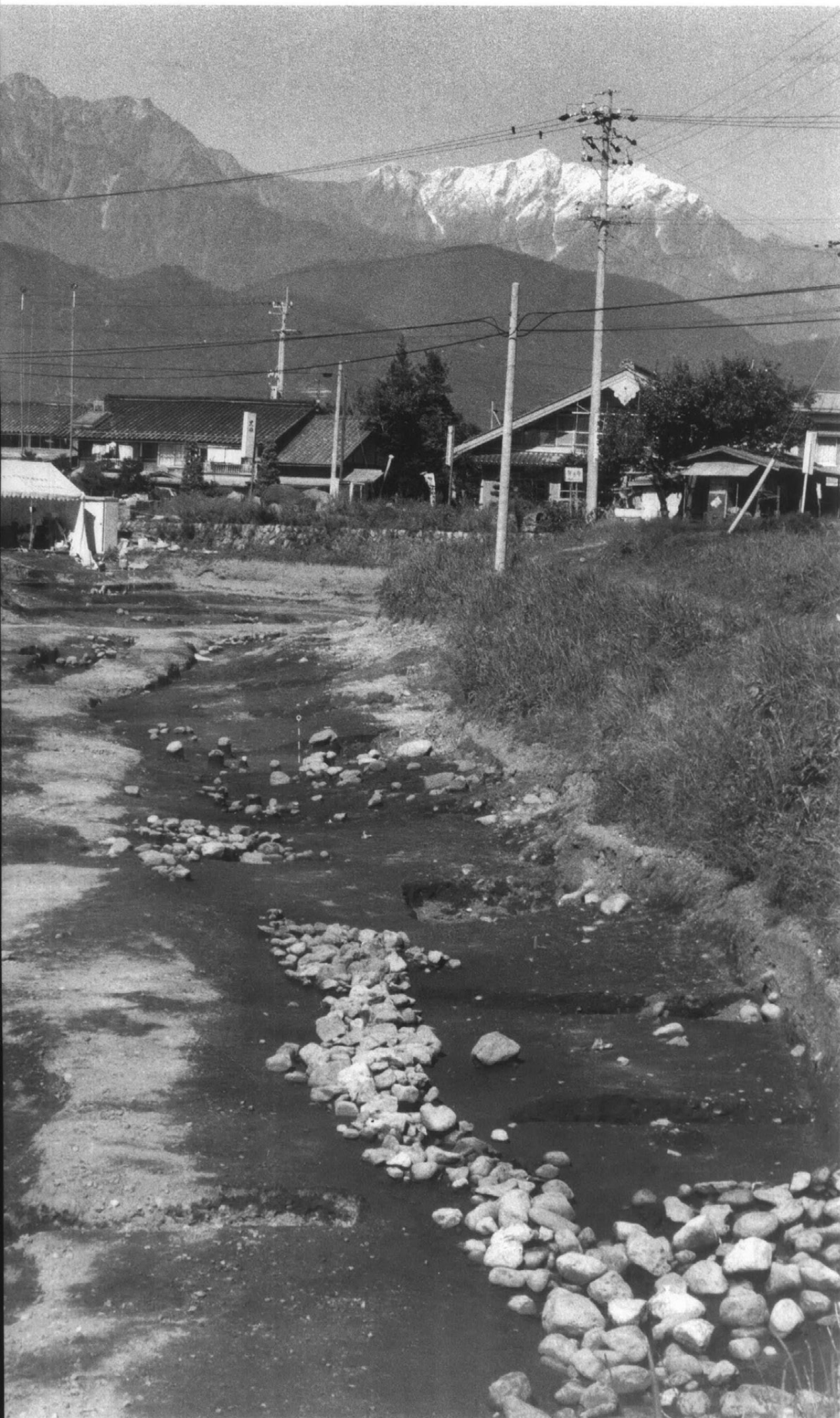
発掘区全景

(古墳時代~中世面調査時、北
方上空より、中部電力株式会社
協力)

発掘区全景

(古墳時代～中世面調査時、東
方上空より、中部電力株式会社
協力)





弥生時代中期前半調査
面全景（南方より）

1. 土層（北部）



2. 土層（南部）



3. 弥生時代中期前半
調査面全景（北方
より）





1. 調査面全景（北方より）

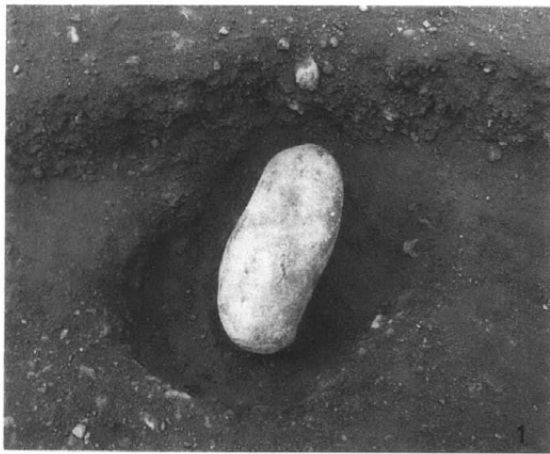


2. 調査面全景（北方より）



3. 調査面全景（南方より）

1. P89



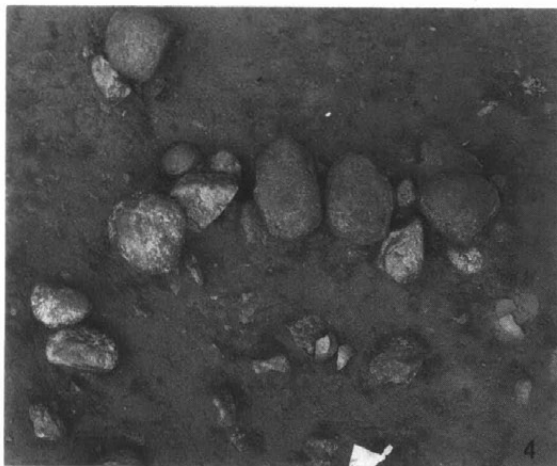
2. P90



3. 配石・焼土及び周辺全景（西方より）

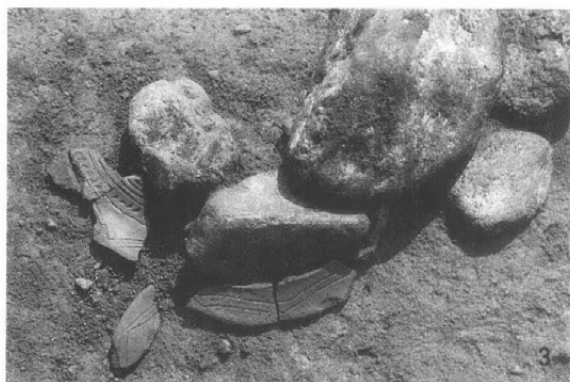
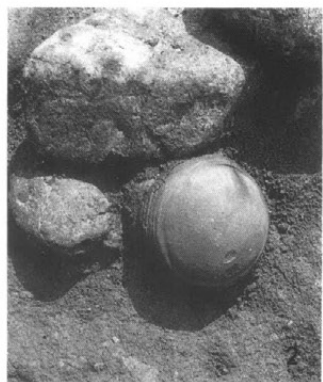


4. 5. 配石検出状況

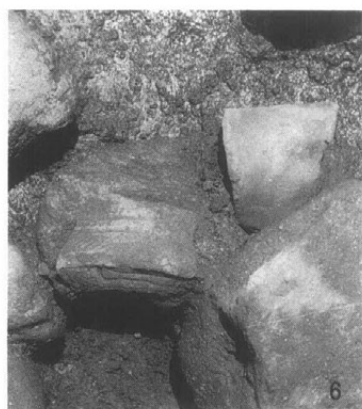
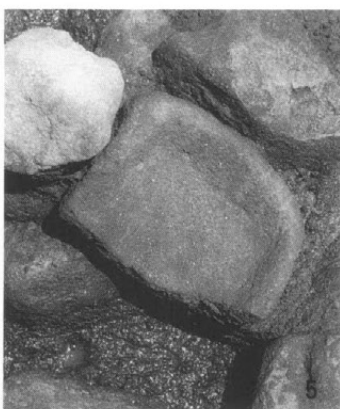


6. 7. 配石精査後



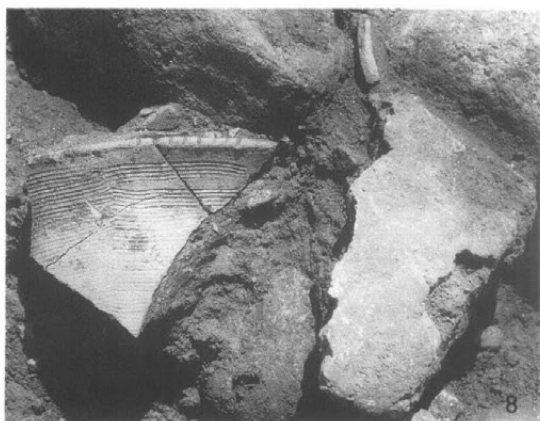
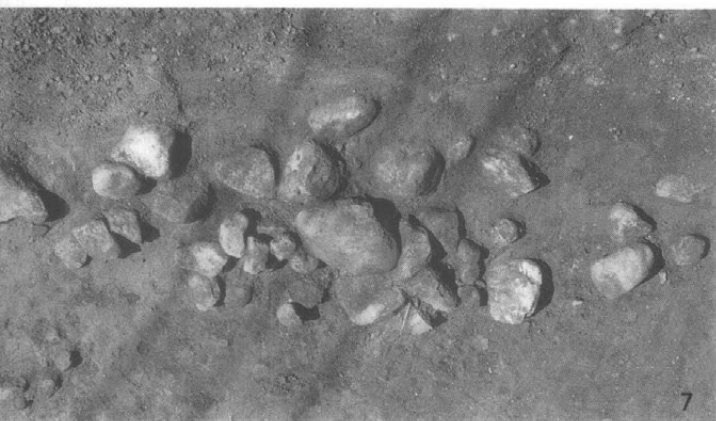


1. 2. 3. 配石周辺遺物出土状況



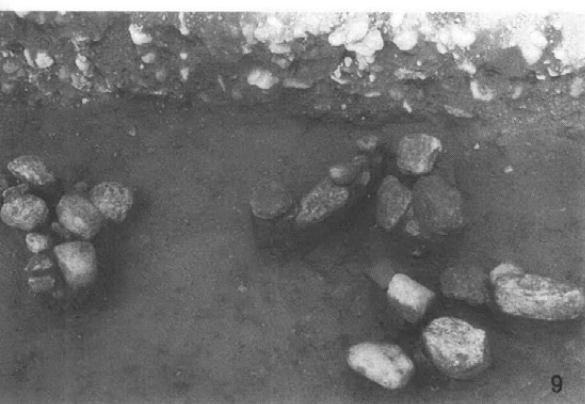
4. 集石 1

5. 6. 集石 1 遺物出土状況



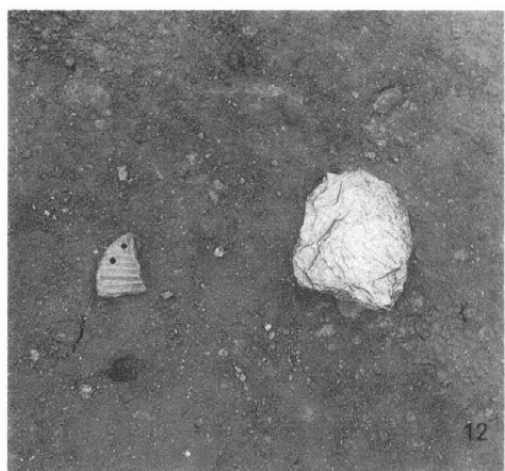
7. 集石 3

8. 集石 3 遺物出土状況



9. 集石 4

10. 集石 5



11. 12. 集石 5 周辺遺物出土状況

1. 集石 5 遺物出土状況



2. 集石 6



3. 4. 集石 8



5. 6. 列石 (西方より)





1. 列石 (南方より)



2



3



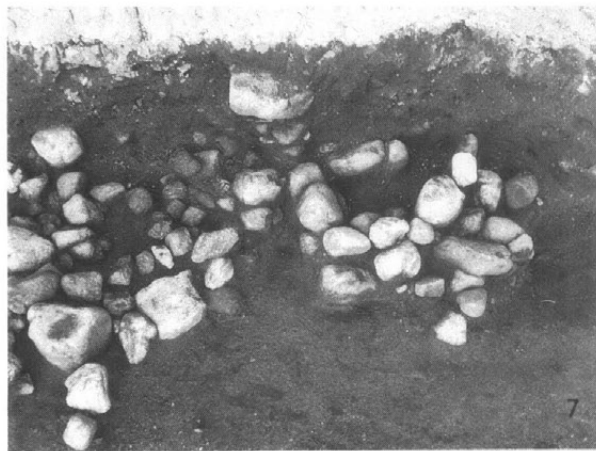
4



5



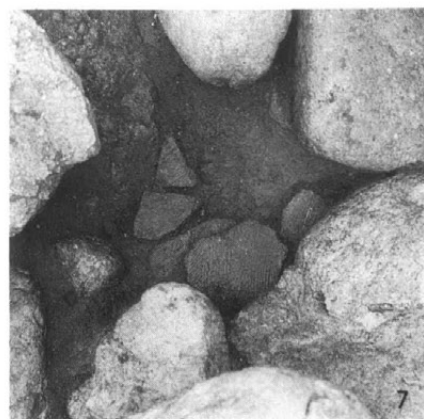
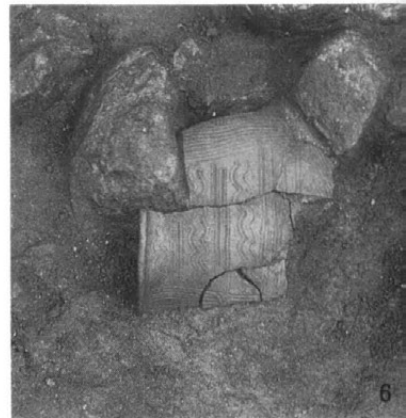
6



7

2~7. 列石細部

1～9. 列石遺物出土
状況

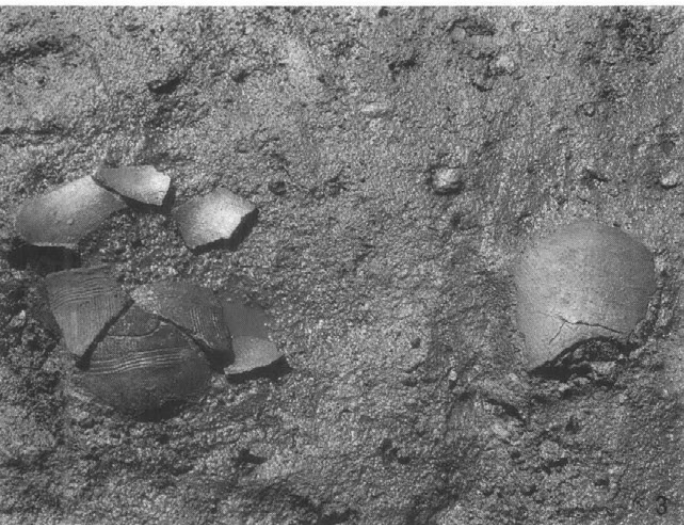


10. 弥生確認グリット
17P91. P92 (東
方より)

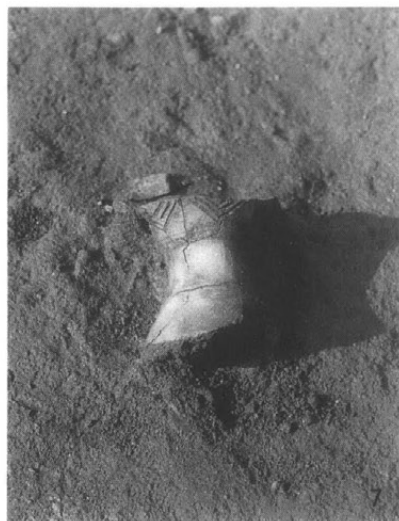




1. 縄文晩期土器出土状況



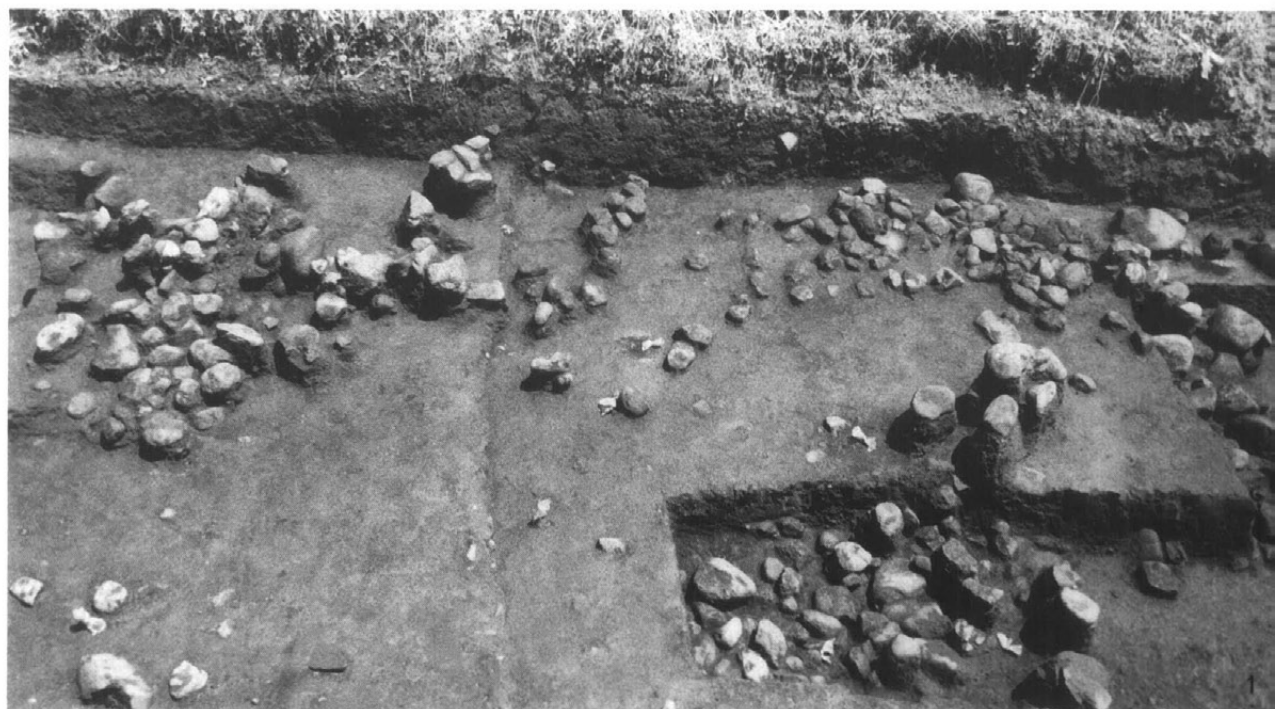
2~8. 弥生中期前半土器出土状況



9. 10. 弥生中期前半石器出土状況



1～3. 集石（弥生確
認グリット5. 西
方より）





1. 集石（弥生確認グリット5. 西方より）



2～4. 集石遺物出土状況



5. 6. 弥生後期～古墳時代前期河川跡断面

1. 集石群全景 (西方より)



2. 集石群南部全景 (西方より)



3. 集石群北部全景 (西方より)





1. 2. 古墳時代集石
群北部全景集石1.
3~6. 列石(北
方より)



2



3. 古墳時代列石. 集
石4(西方より)

1. 集石8周辺(西方より)



2. 集石1



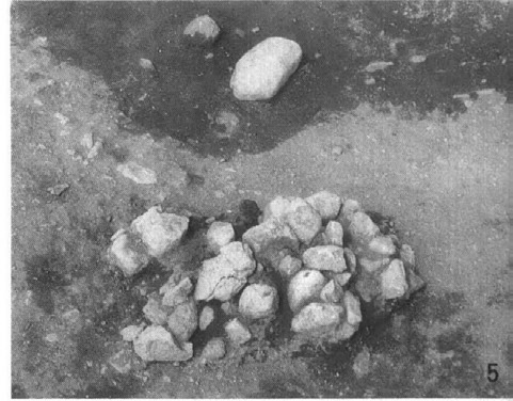
3. 集石2



4. 集石3



5. 集石5

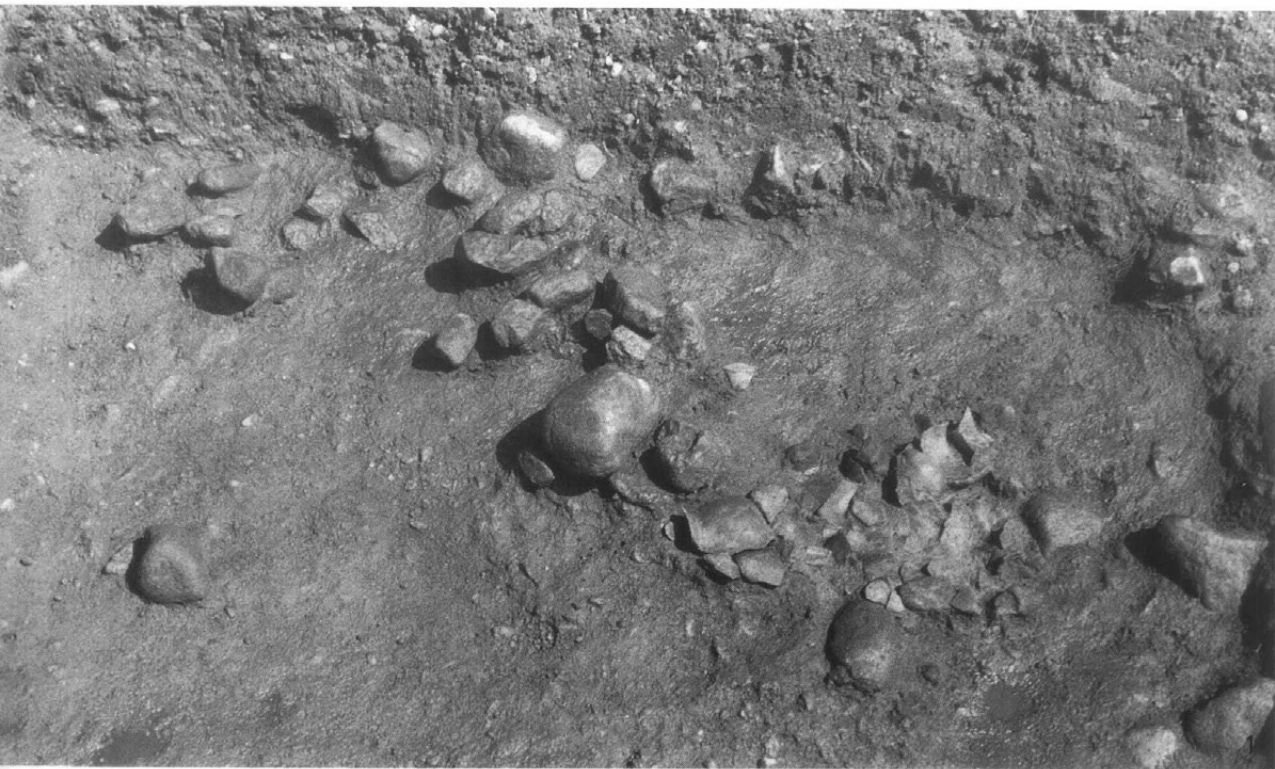


6. 集石6



7. 集石8



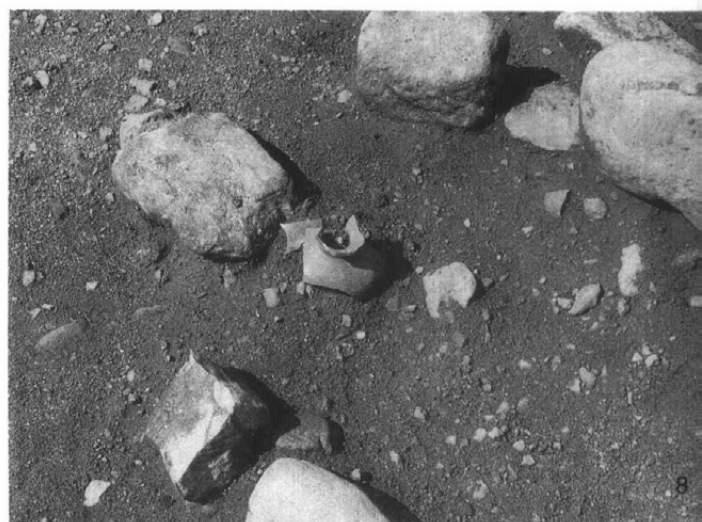
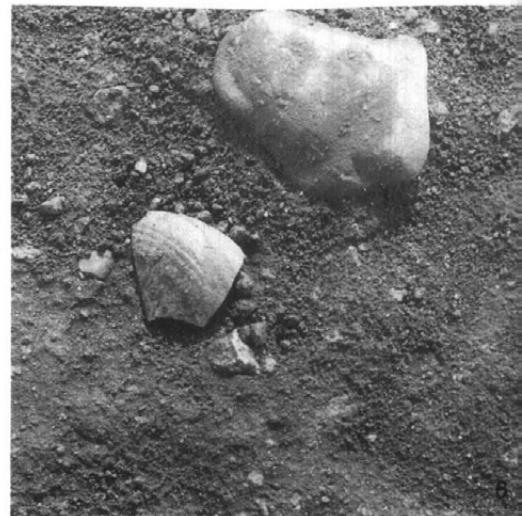
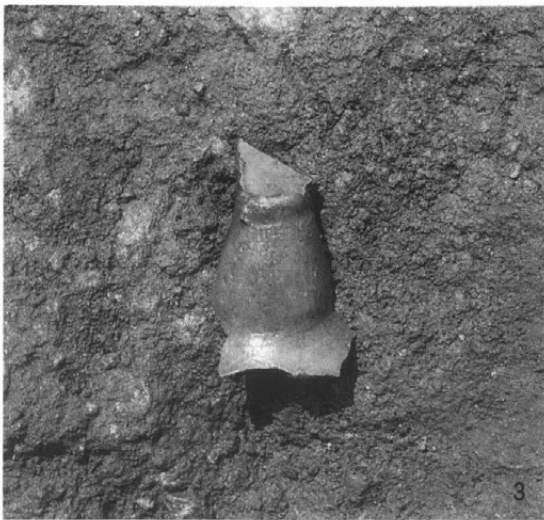


1. 2. 土器集中地点



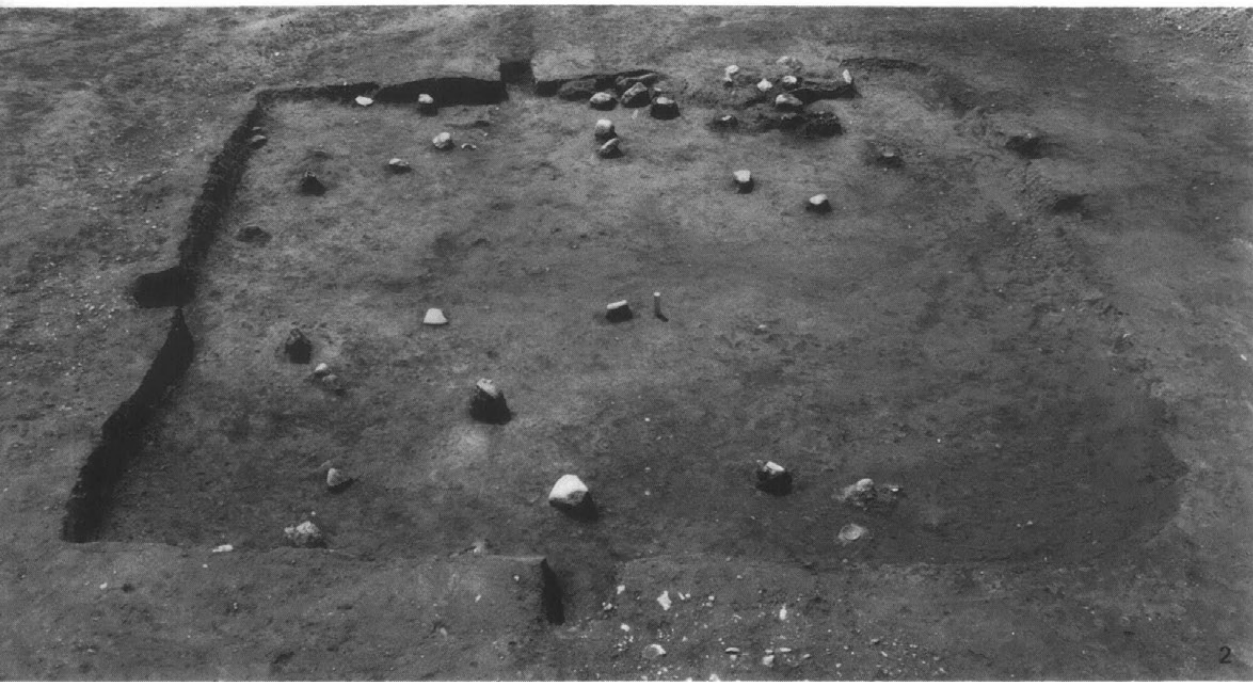
3. 4. 集石内土器出土状況

1～8. 集石内及び周
辺土器出土状況





1. 古墳時代～中世面
調査全景（調査風景・北方より）



2. 1号住居跡礫・遺物出土状態（北方より）



3. 1号住居跡（北方より）

1. 2. 1号住居跡カマド



3. 4. 1号住居跡カマド石組



5. 1号住居跡P2



6. 1号住居跡内P5



7. 1号住居跡砧出土状況

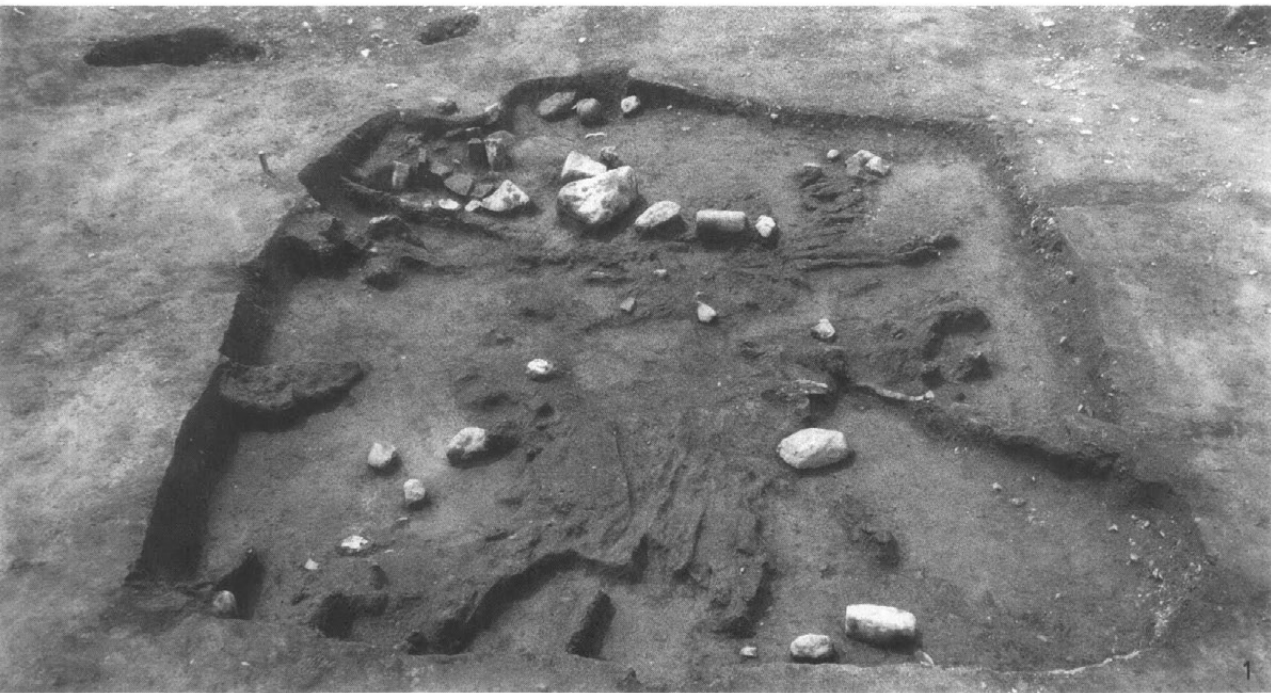


8. 1号住居跡土器出土状況



9. 1号住居跡カヤ状炭化物出土状況





1. 2. 2号住居跡炭化材出土状況（北方より）



2



3. 2号住居跡カマド
検出状況



4. 炭化材下鉄鎌出土
状況

- 1. 2号住居跡P1.
2. 30 (北方より)



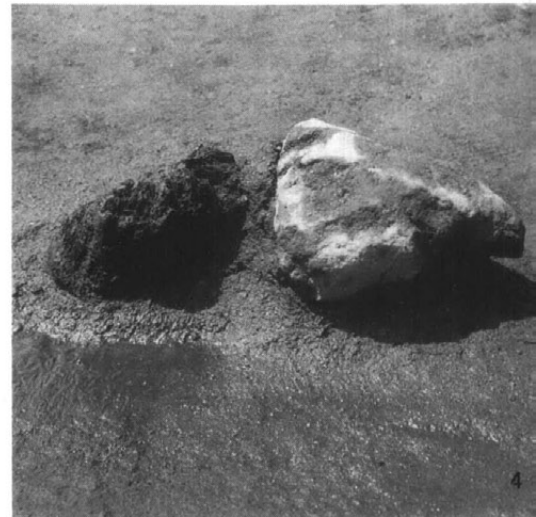
- 2. 2号住居跡・P88
(北方より)



- 3. 2号住居跡カマド
石組



- 4. 2号住居跡柱根





1. 3号住居跡礫・遺物出土状況（西方より）



2. 3号住居跡（西方より）



3. 3号住居跡カマド及び礫出土状況

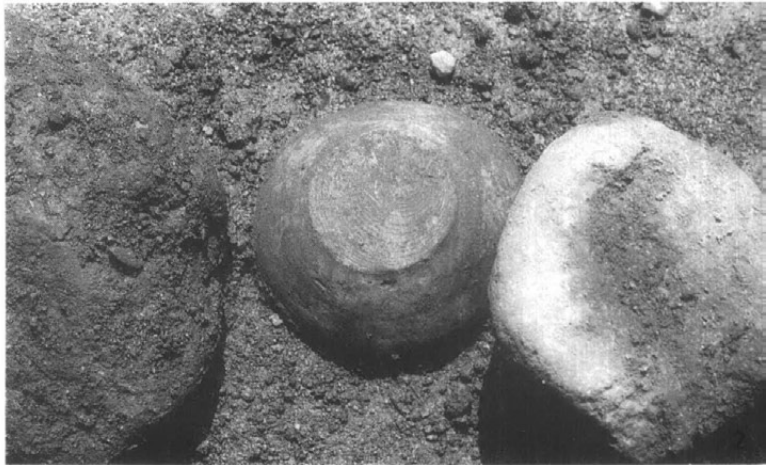


4. 5. 3号住居跡カマド

1. 3号住居跡櫛出土
状況



2. 3号住居墨書土器
出土状況

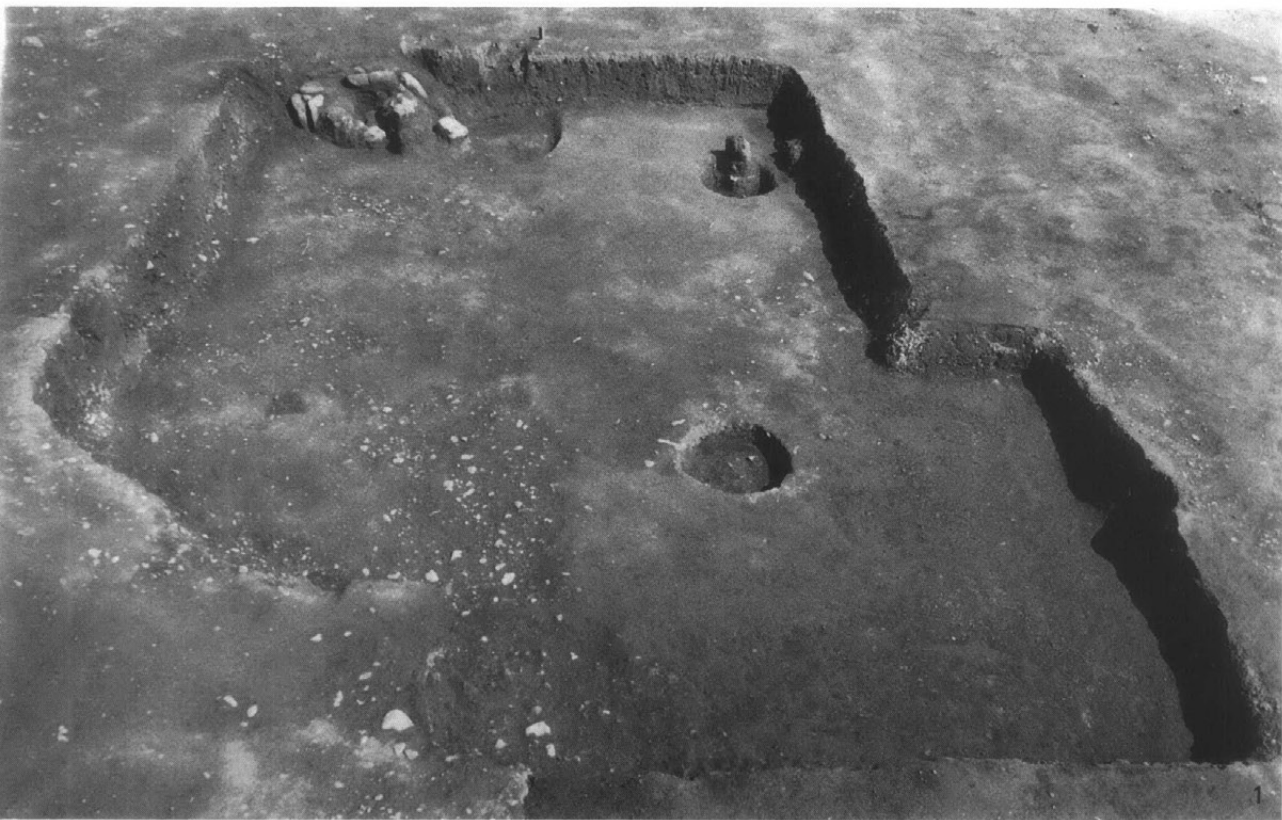


3. 4号住居跡礫・遺
物出土状況



4. 4号住居跡（北方
より）



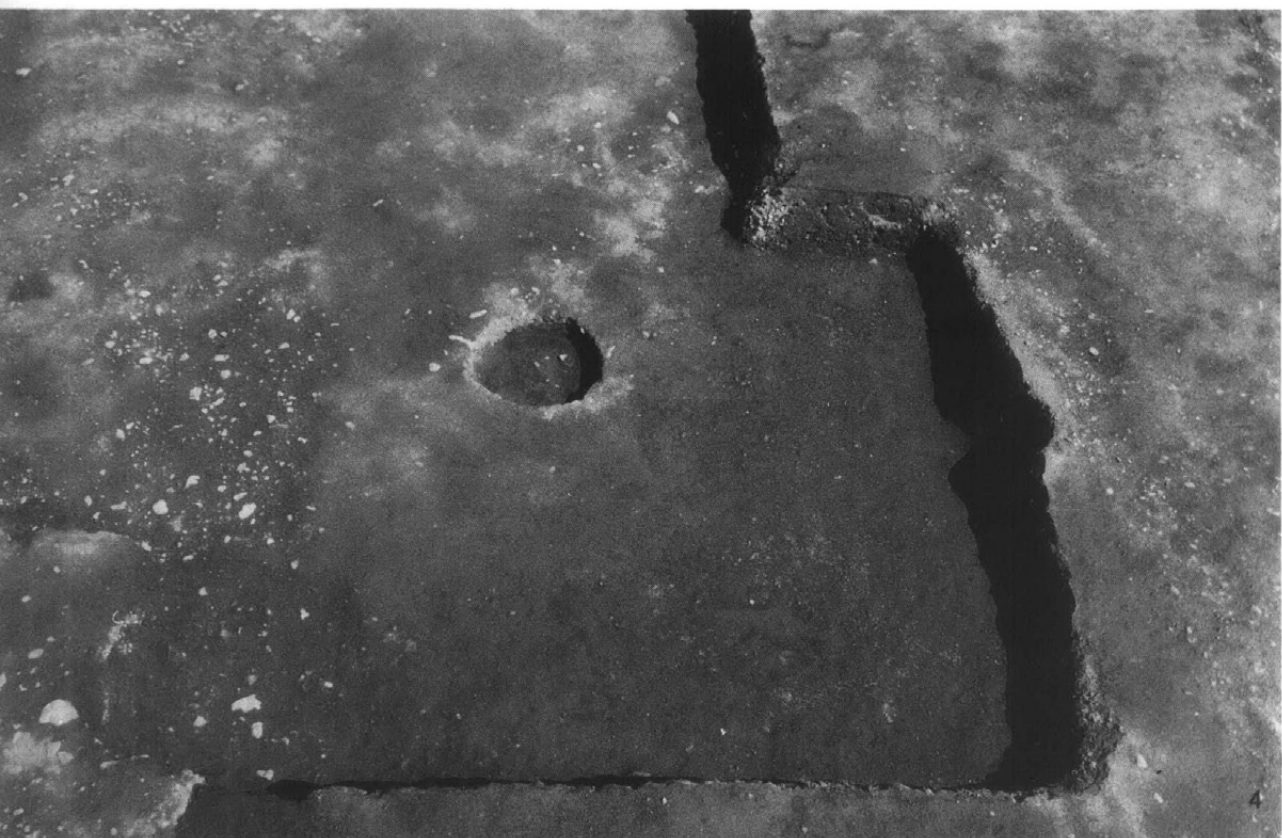


1. 4・9号住居跡
(北方より)



2. 4号住居跡カマド

3. カマド石組



4. 9号住居跡(北方より)